

漢詩人としての阪口五峰

二〇一四年三月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

田 春娟

# 目次

序章	本論文の概要	1
第一章	五峰と漢学・漢詩及び初期の詩	6
第一節	五峰と漢学・漢詩との因縁	6
第二節	初期上京時期の詩と上京回数	7
第三節	第三回帰郷以後の詩	20
第四節	まとめ	23
第二章	森春濤・茉莉吟社との関わり及びその門下としての五峰の詩	25
第一節	森春濤入門まで及び『新文詩』にデビューする詩	26
第二節	森春濤来滬時期の詩	31
第三節	森春濤門下としての詩	41
第四節	五峰と清詩	48
第五節	五峰の「禪」に関する詩	69
第六節	まとめ	89
第三章	森春濤没後の五峰及びその詩	91
第一節	「廢詩」について	91
第二節	『五峰遺稿』に見られる「憂」「愁」及び贈答詩・疊韻詩	109
第三節	田邊碧堂、国分青厓との関わり及びその詩	119
第四節	「竹」を題材とした詩	127
第五節	五峰の詩風形成及び明治・大正漢詩壇における位置付け	138

第六節 まとめ…… 140

終章 まとめと今後の課題……………

参考文献目録……………

初出一覧……………

謝辞……………

附1 明治漢詩壇と関わりのある吟社、雑誌リスト及び掲載詩作目録……………

附2 『新鴻才人詩』全二集について……………

附3 『五峰遺稿』目次……………

## 序章 本論文の概要

### 第一節 本論文の研究課題（研究着手の動機）

作家坂口安吾<sup>1</sup>に「石の思ひ」<sup>2</sup>、『光』昭二一（一九四六）年一月）という自伝的小説がある。主な内容は安吾の幼年時代の家や家族などについてのことである。安吾はその最初の部分で、父五峰<sup>3</sup>について次のように書いている。

私の父は二三流ぐらゐの政治家で、つまり田舎政治家とでも称する人種で、十ぺんぐらゐ代議士に当選して地方の支部長といふやうなもの、中央ではあまり名前の知られてゐない人物であつた。しかし、かういふ人物は極度に多忙なのであらう。家にゐるなどといふことはめつたにない。ところが私の親父は半面森春濤門下の漢詩人で晩年には「北越詩話」といふ本を三十年もかゝつて書いてをり、家にゐるときは書齋にこもつたきり顔をだすことがなく、私が父を見るのは墨をすらすられる時だけであつた。

安吾の思い出に現れた父親五峰は政治家というだけではなく、明治時代の代表的漢詩人の一人森春濤の門下の漢詩人でもあり、政治業務などの仕事に追いかける一方で、三〇年もかけて『北越詩話』を上梓するというような、漢詩と切っても切れない縁を持つ人物でもあつた。

坂口安吾は近代日本文学の代表的作家の一人として有名であるが、その父五峰と文学の関係については今日ほとんど顧みられることがない情況

にあつて、私は漢詩人としての五峰に深く興味を持ち、その詩人像を明らかにしたいと思ふに至つた。

### 第二節 先行研究と研究の目的

五峰の漢詩文については、坂口守二や岡村浩などによって研究が行われている。坂口守二の場合は、主に五峰の少年時代の漢学学習や文人との交流、五峰の日常などに注目し、分析している。岡村浩の場合は、主に五峰の印癖や遺墨などについて考察している。岡村は五峰が「政界に身を置きつつ多くの人物と交わりを結ぶ中で、生涯彼が漢詩を交流の媒体として片時も手離さなかつたことは特筆すべき」<sup>4</sup>であると指摘しているし、「五峰の詩の特徴として雄大なスケールである点が魅力的で、これ程の気概に満ちた内容は日本の規模の存在として誇つてもよいとの示教を専らより受けた」<sup>5</sup>とも指摘している。しかし、五峰の漢詩各々の内容については、これまでほとんど考察がなされていないのが現状である。

五峰の詩風についての言及は少なくない。それらは五峰の唯一の漢詩文集『五峰遺稿』の序文と跋文にそれぞれ見られる。『遺稿』の序では、二人の序文に現れている。その一人は日下勺水（一八五二〜一九二六・漢学者）であり、「五峯遺稿序」では以下のように撰している。

君則學淵識博達觀古今以經世之餘入作者之域意遠而思深語健而調高  
 瀾瀾乎治世之音可以黼黻盛世矣（君は則ち學淵く、識博く、古今を達觀し、經世の餘を以て、作者の域に入り、意遠くして思深し、語健して調べ高し、瀾瀾乎たり治世の音。以て盛世に黼黻す可し。）

と、五峰の博学多識を述べ、五峰の政治家としての能力を褒め、五峰の詩はその治世の余力であり、その詩意は闊達で、洗練されており、しかも、意味が深く、含蓄がある。その言語は逞しく健やかであり、しかも、風調は高いと評している。

もう一人は館森鴻（一八六三〜一九四二・漢詩人及び文章家）であり、その「序」を参看しよう。

嘗問詩於森春濤。春濤原以艷體名、而思道亦以巧麗勝。春濤以其乏沈鬱之致、傲之曰、子不可仿吾之所爲。思道乃徧覽唐宋諸作。晚年、與青厓相周旋涵濡蘊蓄、極其性分之所至。常執舊稿、刻意磨練、於是巧麗者盡化爲雄渾清雅矣（嘗て森春濤に於いて詩を問う。春濤は原と艷体を以て名あり、思道（五峰の字の一つ）亦た巧麗を以て勝る。春濤其の沈鬱の致に乏しきを以て、之をいましめて曰く、子は吾の所為に倣うべからずと。思道乃ち唐・宋の諸作を遍覧す。晩年、青厓と相い周旋・涵濡・蘊蓄し、其の性分の至る所を極む。常に旧稿を執り、刻意磨練す。是に於いて、巧麗なる者、盡く化して雄渾、清雅と爲る。）

館森の序文から見ると、五峰の詩風は最初に巧麗というものであった。春濤から自分の詩風に倣うなど戒められ、後、唐・宋の詩作を通覧し、晩年に国分青厓と研磨しあい、漸く五峰の性格に合う詩風となった。それは雄渾であり、清雅であるという。実際に五峰の詩風が上記のような変化をたどったかどうかについては、『五峰遺稿』を通覧し、検討する必要がある。

『五峰遺稿』の跋文として、三人の叙述が残っている。一人目は五峰の長男・獻吉であり、二人目は五峰が三十年間尽力し上梓した『北越詩

話』の編輯者の一人・歌川絢之（秋南）であり、三人目は五峰の生涯を貫く親友・市島春城である。以上の三人はそれぞれの立場から以下のように五峰の詩風について言及している。

五峰長男の獻吉は「先考五峰先生阪口府君行述」で、五峰の生涯を述べた上で、以下のように五峰の漢詩人としての姿を述懐している。

與日下勺水・國分青厓・館森袖海・田邊碧堂諸老創穆社、吟咏唱和自樂。其詩始學于森春濤、頗尚艷麗、春濤每謂五峰天分甚高、特帶豪健氣、尤不易及。自從政事、一時廢詩。於是又溫宿好、其詩一變爲雄渾高華。當時作家皆聳然斂衽（日下勺水、國分青厓、館森袖海、田邊碧堂諸老と與に、穆社を創し、吟咏し唱和し自ら樂にす。其の詩、始めて森春濤に學び、頗る艷麗を尚び、春濤毎に謂五峰天分甚だ高し、特に豪健の氣を帯ぶるは尤も及び易からず。政事に従うより一時詩を廢す。ここに於いて、又た宿好を温め、其の詩は一變して雄渾、高華と爲る。當時の作家皆な聳然として斂衽す。）

五峰は晩年、日下勺水、国分青厓、館森袖海、田邊碧堂と共に「穆社」を創り、その友人たちと詩の唱和をやり取りし、楽しんでいたという。五峰は詩を初めは森春濤に習った。春濤の詩風は艷麗であったが、春濤は常に五峰の天分の高さ、特に豪健の氣を帯びていることをほめていた。政事に携わってから一時的に詩をやめ、晩年に詩社を作り、詩を再び作り始めたが、詩風は雄渾かつ高華に変わったと語っている。

獻吉によると、五峰の詩風は詩を一旦辞めてから、再び詩を創作する時までに、変化があったという。それについては『五峰遺稿』を通して検証したい。

続いて、歌川絢之の「跋」を見よう。

五峯先生非詩人也。而其詩雄渾高華、不媿古作家。〔中略〕五峯夙抱經世志、練達事務、參畫大政三十年、忠孝惻怛之心、憂世傷時之思、一發之於詩。與彼笑傲風月・抽黃聯白自命詩人者迥異（五峯先生詩人に非らざるなり。而も其の詩は雄渾高華にして古き作家に媿じず。〔中略〕五峯夙に經世の志を抱き、事務に練達す。大政に參畫すること三十年、忠孝惻怛の心、憂世傷時の思は、之れを詩に一發するか、彼の笑傲風月・抽黃聯白、詩人と自ら命する者と迥に異なり。）

ここで、五峰はプロの詩人ではないと述べ、それにもかかわらず、五峰の詩風は雄渾かつ優雅で華美であり、五峰は經世の志を抱き、三十年間憂国の気持ちを詩に表し、他のゆつたりと自由な気持ちで作詩する詩人や対句の形式に拘る詩人などと、全く違うというように、五峰の詩風をまとめています。

最後に、市島春城の「跋」を参照しよう。

思道少壯卓犖不羈、喜讀書、尤精史學、至晚愈篤、又好作詩。清新雄麗、盡棄浮靡、而敦厚之意至矣。自德川季世以來、詩風大衰。迨明治中葉、一時致盛。未幾亦稍稍衰、濱于泯滅。能自奮拔、以追于古者、獨有青厓耳。思道從之、具爲商榷、拓開詩境。青厓常推重之。故其就世也。謂爲詩運之一厄當矣（思道は少壯に卓犖不羈なり。讀書を喜び、尤も史學に精し。晩に至り、愈よ篤し。又た作詩を好み、清新雄麗たり、盡く浮靡を棄て、而して敦厚の意至れり。徳川の季世より以來、詩風大衰し、明治中葉まで追ひ、一時に盛を致す。未だ幾くもならずして、亦た稍稍衰え、泯滅に濱す。能く自ら奮拔し、以つて、古を追ふ者は獨り青厓有るのみ。思道之に従ひ、具に商榷

を爲し、詩境を拓開す。青厓常に之を推重す。故に其の世を就<sup>お</sup>えるや、謂へらく詩運の一厄に當たると爲す。）

ここでは、五峰が少壯期には読書好きで、晩年になると歴史学にますます精通していったことを紹介し、作詩を好んでいたことも紹介した上で、五峰の詩風は清新・雄麗であり、美辞麗句を並べた内容のない浮華は見られず、落ち着きのある風格を持つていとまとめています。また、江戸末期から詩風は衰えており、明治半ばまで一時的に盛り返してきたが、間もなく又衰廢し、ほぼ消滅するに至り、自ら奮起し、その衰廢状態から抜け出し、古人を追う者は国分青厓一人だけであり、五峰は青厓に従い、詩の創作に関する議論をしあい、詩境を開いた、としている。更に、国分青厓から五峰の詩を高く評価していることにも言及している。以上の『五峰遺稿』における五人の序文と跋文の内容をまとめると、以下のようなになる。

一つ目は、日下は五峰の詩風について「意遠而思深語健而調高（意遠くして思深し、語健して調べ高し）」としている。  
二つ目は、館森は五峰が師・森春濤の詩風・艷体と違い、巧麗な詩風を呈し、春濤から戒められ、唐宋の詩を遍く読み、晩年、国分青厓と切磋琢磨し、それで、「巧麗者盡化爲雄渾清雅矣（巧麗なる者、盡く化して雄渾、清雅と爲る）」のように五峰の詩風が変化したと述べている。獻吉も館森と大体同じことを述べている。獻吉は五峰の詩風は「一變爲雄渾高華（一變して雄渾、高華と爲る）」であるとまとめていますが、春濤から「五峰天分甚高特帶豪健氣尤不易及（五峰天分甚だ高し、特に豪健の氣を帯ぶるは尤も及び易からず）」と言われたことに触れ、また、上記五人のうち獻吉だけは五峰が一時的に詩を廢したについて言及している。

三つ目は、歌川は「五峯先生非詩人也而其詩雄渾高華（五峯先生詩人に非らざるなり。而も其の詩は雄渾高華にして）」というような詩風を指摘していると同時に、五峰の詩は「忠孝惻怛之心憂世傷時之思一發之於詩（忠孝惻怛の心、憂世傷時の思は、之れを詩に一發するか）」であると述べ、更に五峰の詩風は「與彼笑傲風月抽黃聯白自命詩人者迥異（彼の笑傲風月・抽黃聯白、詩人と自ら命する者と迥に異なり）」とも述べている。

四つ目は、市島は「又好作詩清新雄麗盡棄浮靡而敦厚之意至矣（又た作詩を好み、清新雄麗たり、盡く浮靡を棄て、而して敦厚の意至れり）」と、晩年に国分青厓との斯界における交流があったことや二人の詩風が近いことについて触れている。

以上のように五峰の詩風について「意遠而思深語健而調高（意遠くして思深し、語健して調べ高し）」、「巧麗者盡化爲雄渾清雅矣（巧麗なる者、盡く化して雄渾、清雅と爲る）」、「一變爲雄渾高華（一變して雄渾、高華と爲る）」、「清新雄麗盡棄浮靡而敦厚之意至矣（清新雄麗たり、盡く浮靡を棄て、而して敦厚の意至れり）」と、序文・跋文でそれぞれ述べているが、明確に詩風の変化に言及しているのは、館森と長男獻吉である。本論文では、上記の通り五人により述べられている五峰詩風の特徴とその変遷に着目し、それに即し、その正確性を検証した上で、五峰の漢詩人像を明らかにしたい。

其の上で、五峰の明治漢詩壇における位置を探りたい。

### 第三節 本論文の構成

本学位論文では、今まで追究されることのなかった五峰の漢詩の内容について取り上げ、政治家である一方、漢詩人でもあった五峰について

考察しつつ、五峰の漢詩詩風及びその変遷、明治漢詩壇との関わり、特に森春濤・槐南父子という茉莉詩派との関係、明治・大正時代の清詩の流行に対する姿勢、田邊碧堂を通しての晩年の国分青厓との交流、他の文人との交友歴を探るものである。

研究対象として、取り扱う資料は主に『五峰遺稿』（上、中、下）とす。『五峰遺稿』目録によると、巻上に古今体詩一五三首、巻中に古今体詩一七九首、巻下一に古今体詩六〇首が収められており、合わせて、三九二首になる。他にも、『五峰遺稿』に収録されていなかった詩文も少数ながら存在している。それらも加えて五峰の漢詩を通覧することで、その特性、例えば、清詩との関わり、交友録、影響を受けた中国文献との比較、仏教・禅からの影響などについて明らかにしたい。また、上記の通り指摘された五峰の詩風である「雄渾」、「高華」、「清新」、「雄麗」という点に注目し、それらの指摘の正確性を検証したい。以上より五峰の明治漢詩壇における位置づけを明らかにしたい。

本論文では、第一章では、五峰と漢学・漢詩との接点を探るとともに、森春濤を知る以前の五峰の詩風・その初期にいかなる詩を書いていたのかを考察する。

第二章では、五峰と明治漢詩壇の詩派との関わり、師匠・春濤との情誼や詩における影響などに関する五峰の漢詩を分析した上で、五峰が森春濤との師弟関係をどのように結んでいったかを明らかにしたい。また、春濤門下としての五峰の詩風について考えてみる。

第三章では、森春濤が亡くなった後の、五峰の漢詩人としての姿を探ると同時に、その詩風を追究してみたい。『五峰遺稿』跋文の中、子息獻吉だけ言及している五峰の一次的に「廢詩」について、まず、その「廢詩」の期間を明らかにして、その原因を究明する。それから、「廢詩」ということを軸として、その前後の詩風の変化を解明する。また、春濤の

子・槐南（一八六三〜一九一一）の五峰の「廢詩」に関する詩を取り上げ、当時、「廢詩」前の五峰の明治漢詩壇における容姿を明らかにする。その上で五峰の明治三〇年代の漢詩壇に対する思考を考えたい。更に、晩年の五峰と田邊碧堂・国分青厓との関わりについて考究し、それとともに、五峰の詩風の変遷の考察を試みたい。五峰の詩風はどうなっているか、そこから五峰の明治漢詩壇における位置付を併せて検討したい。



## 第一章 五峰と漢学・漢詩及び初期の詩

### はじめに

序章で既に触れた作家坂口安吾の「石の思ひ」という自伝的小説の最初の部分で、父親五峰は政治家というだけではなく、明治時代の代表的漢詩人の一人森春濤門下の漢詩人でもあり、政治業務などの仕事に追いかける一方、三〇年もかけて『北越詩話』を上梓するというような、漢詩と切っても切れない縁を持つ人物でもあったという五峰像を描いているが、本章では、まず『北越詩話』・『明治大正北越偉人の片鱗』・『五峰餘影』などの文献に基づいて、五峰と漢学・漢詩との接点について説明しておきたい。その上で、『五峰遺稿』の詩作を手がかりとして、少年五峰の上京回数、時期などを確認しておく。それとともに、森春濤を知る以前の五峰の詩風、つまり、その初期にいかなる詩を書いていたのかについて言及したい。

### 第一節 五峰と漢学・漢詩との因縁

阪口五峰は明治四（一八七一）年一三歳で当時の聖籠村諏訪山、大野耻堂（一八〇七～一八八四）の私塾絆己楼に入学し、漢学を学んだ。漢詩を作り始めたのも、この塾においてである。

大野耻堂の教育は厳しいものであったらしく、この時の勉学体験について、『北越詩話』には以下のような五峰からの叙述がある。

近世、郷先生善く後進を教育するもの。上越に在りては藍澤南条

を推し。下越に在りては耻堂先生を推す。…尚記す予年甫めて十三、先生の門に入る。同舎毎月六次、詩會を開く。予始めて五絶一首を作る。先生叨に咨賞を加へ。數々同人の座に稱せらる。予童心私に喜び。益々力を詩に肆くす。今に至るまで四十餘年。名を藝苑の末に廁することを得しものは。實に先生鼓舞の賜なり。…塾舎名けて絆己楼といふ。樓屋宏壯。寓舎生恒に數十人。藩士及び隣里の子弟、朝に來り暮に去る者を加ふれば。多く百人に超ゆ。郡中、私學多しと雖も。能く絆己樓の盛に及ぶものなし。…先生白髯偉貌。色溫にして氣嚴なり。故に子弟皆な敬して而して之を畏る。塾則尤も嚴なり。亥に臥し寅に起きるを例と爲し。躬行以て之を率ぬ。風雨寒暑と雖も廢せず。毎早、中原復逐鹿<sup>マユ</sup>の詩を朗吟して塾舎に來る。子弟、唸聲を聞けば、衾を蹴て起ちて課に就く。課畢り始めて餐す。先生毎に子弟と飲食を同うす。其の書齋、塾舎の門口に當り。出入皆な坐して知るを得。誦讀の聲、間斷するときは。鐸を振うて之を警む。寒夜更深け燈殘し。子弟已に倦む。机に凭り昏昏眠らむと欲す。忽ち鐸聲の琤然たるを聞けば。瞿然として自ら醒め。琅琅の聲再び起る。今にして之を憶へば。恍として隔世の如し。…但だ髫歲從遊。僅に二年<sup>7</sup>。

大野耻堂の私塾絆己楼と大野耻堂本人について、上記のように五峰は語っている。五峰の本格的な勉学生活は、当時、新潟では屈指の私塾で行われた。大野耻堂は表情は優しいが、性格が厳しかったため、子弟たちは皆尊敬しつつも、怖がっていた。絆己楼の塾則は本当に厳しく、夜一〇時に就寝し、朝四時に起床という慣例を、先生は強風の時も強雨の時も寒い時も暑い時にも休まず、実践していた。毎朝、先生は「中原

還逐鹿（中原還た鹿を逐ふ）（この詩句は唐初の功臣の魏徵（五八〇）（六四三）の五言古詩「述懐」<sup>8</sup>）又の名「出關」の一句目であり、『唐詩選』の巻頭の詩であり、「人生感意氣（人生 意気に感ず）功名誰復論（功名誰か復た論ぜんや）」という、君主のために身を捧げようという意気込みを詠った詩として有名である。）と声高に唱えながら、塾舎に向かっていた。塾生たちはその朗吟する声を聞いて、すぐに掛け布団などを蹴り、起きて、日課の勉強を始めた。その勉強が終わって始めて朝食を食べることができた。先生もいつも塾生たちと飲食を共にしていた。五峰はこのように厳格な塾則の下で、凡そ二年間の塾生活を過ごした。同塾では毎月六回詩会を催し、塾生に研磨させることを慣例としていたが、そこで五峰の最初に作った五言絶句が大野耻堂から褒められたことが、五峰が生涯漢詩を作るきっかけとなった。このことについて、五峰自身が後年詠じている詩がある。

垂髻十三就外師 垂髻 十三 外師に就く

會筵始作五言詩 會筵 始めて作る 五言の詩

衆中叨被先生賞 衆中 叨みだりに先生の賞を被りかうぶ

終誤一生耽藻詞 終に誤って一生 藻詞に耽る<sup>9</sup>

（まだ一三歳という幼い時に、家の外の先生に就いて勉強した。詩会の席で初めて五言の詩を作った。多人数の中、先生の賞賛を承ったゆえに、結局、この一生を間違えて詩歌などに耽ってしまった。）

上記の『北越詩話』の五峰自身の叙述だけではなく、廣井一著『明治大正北越偉人の片鱗』<sup>10</sup>でも同じ証言が綴られている。つまり、五峰は大野耻堂の私塾絆己楼で、人生で初めての漢詩を作り、大野耻堂に褒め

られ、それをきっかけとして漢詩と切っても切れない縁を結んだのである。

また、大野耻堂の塾で詩についてどのようなものを学んだのかについて、五峰から以下のような回想が綴られている。

先生甚だ詩に工ならず。而して詩律に精し。門生、所業を呈すれば。多く斧削せずと雖も、朱批爛然、其の疵累を指摘して之を還す。改削して再び呈すれば、先生乃ち喜ぶ。古詩を學ばんと請へば、先づ武元登蒼マイの古詩韻範を讀ましむ。曰く、古詩は韻法を以て先と爲す。長短不定格、尤も曉り難し。初學濫りに指を染む可からず<sup>11</sup>。

上記の引用に言及されている「武元登蒼の古詩韻範」の『古詩韻範』は武元登蒼が著した古詩の韻法に関する書籍であり、中には、杜甫（七一〇〜七七〇）の「飲中八仙歌」、「丹青引贈曹將軍霸」、「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」や曹操（一五五〜二二〇）の「短歌行」や李白（七〇一〜七六二）の「山中答人」<sup>12</sup>と、五峰の詩の典拠が見える。絆己楼で勉学をする上では、この書に必ず目を通したことがうかがえる。五峰の叙述によれば、大野耻堂は、作詩はあまりに巧みではないが、詩の韻律には大変精通しているということである。大野耻堂の下で身に付けた漢詩技法が初期の詩にどのように反映しているかについては、以降に言及したい。

## 第二節 初期上京時期の詩と上京回数

五峰の大野耻堂の絆己楼での塾学生生活は、家庭の事情<sup>13</sup>により、明治

六（一八七三）年の春までで終わった。同年一月一日に玉井波磨子を娶ることとなった。しかし、まだ若い少年五峰は翌明治七（一八七四）年、家を飛び出し、上京した。その間、東京で面倒を見たのは大野耻堂の長男大野梅華<sup>14</sup>（二八三四〜一八八四）である<sup>15</sup>。この時を含め、五峰の上京回数については南義二郎・昆倉藏・山際操三人の証言がある。

それによれば、五峰は明治七年から明治八年八月まで、合わせて二回上京したと言及されているが、それに加えて『北越詩話』には「丙子秋、東京より歸る。年甫めて十八」<sup>16</sup>とあるように五峰自らの叙述があり、「丙子秋」は明治九（一八七六）年の秋のことであるから、明治九年の秋までに五峰は三度東京に居たことが推測できる。『五峰遺稿』には、明治九年の秋、東京に居る五峰の心境を表す漢詩は三首あり、また、その三度目の上京生活を終え、東京から新潟に帰る道中に詠じた詩作も見られる。

## 一、一回目の上京

五峰にとって、人生初の上京の心境を描いた漢詩がある。それは『五峰遺稿<sup>17</sup>』（巻上）の一首目の漢詩である。では、その詩作を引きつつ、五峰の初期の詩風を追究してみよう。

### 出門

落地蓬蒿十六秋	落地 蓬蒿 十六の秋
壯心未肯老荒陬	壯心 未だ荒陬に老ゆるを肯んぜず
仰天大笑出門去	天を仰ぎ大笑して門を出でて去る
滾滾長江萬里流	滾滾たる長江 万里流る

（生れてからずっとこの偏僻なところに十六年間いた。壮烈な心が辺鄙ないなかで未だ老いることを肯んじない。天を仰いで大いに笑いながら、門から出て行く。まるで滾滾と流れている長江の万里の流れの勢いだ。）

詩題にいう「出門」というのは、字面通り門を出ることであり、旅に出る意味である。五峰の場合は、自分から家を離れ、旅に出ようという意気込みを表している。旅を通して、世の中の見聞を広め、世間の辛苦や辛い経験などを味わい、豊かな人生を歩みたいという心境がうかがえる。本詩は平水韻下平の「十一尤」の「尤」にある「秋」「陬」「流」の韻を踏む。

本詩の起句と転句は、李白の詩「南陵別兒童入京（南陵 兒童に別れて京に入る）」<sup>18</sup>に「仰天大笑出門去（天を仰ぎ大笑して門を出て去る）我輩豈是蓬蒿人（我輩豈に是れ蓬蒿の人ならんや）」とあるのを踏まえている。

李白は天宝元（七四二）年道士呉筠の推薦により、長安に召されることになった。そこで、この七言古詩を詠じた。四十路が過ぎた李白がようやく不遇の運命と別れ、政治への抱負を直接に天子に助言できる機会に恵まれた喜びを表現している。五峰は人生初めての旅にこの李白の自負の心境を表す詩句を借り、大志を抱いていることを表していると考えられる。

次に、「出門」の結句「滾滾長江萬里流（滾滾たる長江 万里流る）」は、『唐詩選』に出ている張祜（七九二〜八五三）の詩「胡渭州」にある「寂寂長江萬里流（寂寂たる長江 万里に流る）」と杜甫の詩「登高」にある「不盡長江滾滾來（不盡の長江 滾滾として來る）」を融合させた句である。唐代の詩人張祜の七言絶句「胡渭州」にいう。

亭亭孤月照行舟 亭亭たる孤月 行舟を照らし

寂・寂・長江・萬里流 寂寂たる長江 万里に流る（傍点筆者）

郷國不知何處是 郷國は知らず 何れの処か 是なる

雲山漫漫使人愁 雲山漫漫として人をして愁えしむ

張祐の詩では、長江の流れを寂寂たる流れとして詠じている。五峰の詩では、全く逆の表現で、杜甫詩にある「滾滾」たる流れとして詠み、出門の勢いが盛んである心境を描いている。一六歳の少年が青雲の志を抱き、故郷を離れ、一人で頑張ろうという気持ちを明確に表している。

この詩は、詩として見た場合、『全唐詩』に収録している李白の詩句をそのままに用いたり、『唐詩選』に出ている張祐と杜甫の句を混ぜ合わせて用いる等、模倣的色彩の強い詩であり、未完成な若書きの段階にある詩と言っているであろう。

この第一回目の上京について、元阪口家の下男であった昆倉藏は、「明治七年若旦那様は十六歳の時東京へ出奔されましたが、その折東京へ連れ戻しの命を受けて出掛けましたのも私であります」<sup>19</sup>と語っている。

「若旦那様」とは、五峰のことである。この連れ戻しはそんなに容易なことではなかったらしい。「私は…東京と郷里の間を六偏往復しました、何時も若旦那様には叱られた上に金を取り上げられてすこと歸るの、村へ歸ると旦那様に叱られる六度目に漸くお進れして東京を出發しました。高崎近くまで来ると若旦那様が、『おれは疲れたから籠に乗る、

高崎の阪井屋に待つてゐるから貴様は後から歩いて来い』と言はれるので『ハイ』と言つて後から行つてみると阪井屋には居られず、…しかし此時は五六日おかれて若旦那様は歸村されました。」とある。

次の二首から、五峰の一回目の上京の経路がうかがえる。新潟から米沢を経由し、福島・栃木・埼玉を通じて、東京に向かっている。明治七年当時、新潟から上京するためには一般的に、三つの経路があった。一つ目は新潟の上越地方から長野・群馬・埼玉を経由して、東京に着くもの。二つ目は新潟の中越地方から群馬・埼玉を経由して、東京に着くもの。三つ目は新潟の下越地方から福島・栃木・埼玉を経由し、東京に着くもの。中でも、中越地方から群馬・埼玉を経由東京行きの経路が一番早いし、行きやすいと言われていた。しかし、五峰は初めて上京するに当たって、この三つの経路を避け、わざわざ、山形へ行き、玉川を通過し、山形県南部にある米沢の古跡を通つて行くという経路をとった。

#### 折嶺 越羽分界（嶺を折する 越羽の分界）

吾行方過玉川關 吾が行 方に玉川の関を過ぎんとす

落日西沈亂嶂間 落日 西のかた 乱峰の間に沈む

卻望白雲親舍遠 卻つて白雲を望めば 親舍遠し

低徊忍別故郷山 低徊 別れを忍ぶ 故郷の山

（私の旅はちょうど玉川の関を過ぎたところに来た。夕日が西の方、乱峰の間に沈む。振り返つて白雲の彼方を見ると、我が家とはずいぶん遠ざかった。いろいろと思いをめぐらしながら、故郷の山々との別れを忍ぶ。）

転句「卻望白雲親舍遠（卻つて白雲を望めば 親舍遠し）」にある「卻（卻）望」は、遠方を振り返って見るといふ意味である。「白雲親舍」は、『舊唐書』「狄仁傑傳」に「其親在河陽別業、仁傑赴并州、登太行山、南望見白雲孤飛、謂左右曰『吾親所居、在此雲下。』瞻望佇立久之、雲移乃行（其の親は河陽の別業に在り、仁傑は并州に赴き、太行山に登り、南のかた白雲の孤飛を望見し、左右に謂ひて曰く『吾が親の所居は、此の雲の下に在り。』瞻望し、佇立すること之れを久しうす、雲は移れば、乃ち行く）」とあるのを踏まえ、肉親を懐かしむ典故として使われている。結句にある「低徊」は、思案にふけりつつ行ったりもどつたりすることである。一六歳の少年にとつて、故郷と別れる辛さや切なさは想像するに余りある。大志を抱いて新潟を出たものの、その心境は複雑であつたであろう。

#### 米澤

亂山平野斷	亂山	平野	斷え
喬木古城雄	喬木	古城	雄なり
邑仿屯田制	邑は仿ふ	屯田の制	
民存擊壤風	民は存す	擊壤の風	
舊邦尊史籍	旧邦	史籍を尊び	
先世重兵戎	先世	兵戎を重んず	
今見農桑國	今見る	農桑の國	
謳歌惠政隆	謳歌す	惠政の隆んなるを	

（高低入り乱れて重なり合う多くの山々で平野は絶え、高い木々は古びた城を勇ましく見せる。国は屯田の制度に倣い、国民は安泰な世の中で生活している。建国のふるい国は歴史に関する書籍を尊重

し、その祖先たちは戦事を重んじた。今、農耕と養蚕の国になり、その仁政の盛んなことを、謳歌している。）

上記「米澤」と題する五言律詩では、米沢藩の政治やその城跡の今昔などに触れ、当時の「惠政」を歌っている。「屯田制」とは、もとは中国の土地制度であり、新領土や国有地に耕作者集団を投入して耕作させたものである。漢代に始まり、明清に至る。「擊壤」は、大地をたたいて歌を歌うことであり、太平の世の光景を指す。詩の起聯と前聯では、米沢城跡の自然風景を描いた上で、その政策と住民の安らかな暮らしや楽しく働く風土と人情を詠じている。後聯と結聯では、米沢藩の昔の武を重んじたことと、今の「農桑國」とを比較しつつ、明治維新後の新政策<sup>21</sup>を謳歌している。この詩から、少年五峰が政治に関心を強く抱いていることがうかがえるし、明治政府に大きな期待をかけていることもうかがえる。その期待は単なる気持ちではなく、積極的に参画しようと思つたまに、膨らんでいたと思われる。

『五峰遺稿』四首目の詩作にその意気込みが見られる。これは東京に到着してから作った詩であろう。

#### 九重

九重城闕五雲屯	九重の城闕	五雲	屯す
四海仰瞻天子尊	四海	仰瞻す	天子の尊きことを
唐室中興如日月	唐室中興	日月の如し	
漢家再造此乾坤	漢家	再造す	此の乾坤
笙歌徹曉令公宅	笙歌	徹曉す	令公の宅
桃李爭春狄相門	桃李	春を争う	狄相の門

我比賈生年更少 我 賈生に比して 年 更に少し  
治安一策共誰論 治安一策 誰と共に論ぜん

(重層的な皇居の周辺では瑞雲がたなびいて集まっている。全国各地から天皇を尊んで皇居まで追って慕う地方の人々は少なくないだろう。唐代の元和中興は恰も日と月のように盛んになってきた。漢の時代ではこのような天下を改めて創建した。笙の音に合わせて歌っている歌声は裴度の宅で一晩中漂っている。優秀な門弟は春に争い満開している花のように狄仁傑の門下に集まっている。私はあの前漢の賈誼よりずっと若いにもかかわらず、賈誼の『治安策』のような政策に関する議論を誰かと一緒に述べたい。)

本詩の首聯前半「九重城闕五雲屯(九重の城闕 五雲 屯す)」は、白居易(七七二〜八四六)「長恨歌」に「九重城闕煙塵生(九重の城闕 煙塵 生じ)千乘萬騎西南行(千乘 萬騎 西南の行)」とあるのを踏まえている。白居易の詩句は鉄騎が戦に赴く際に生じた砂塵の場面を描いているのに対し、五峰は五色の雲が皇居に集まっている瑞雲の様子を描いている。

頸聯前半「笙歌徹曉令公宅(笙歌 徹曉す 令公の宅)」の「令公」は、中書令の尊称であり、唐室・元和中興の功臣である裴度(七六五〜八三九)のことを指している。

頸聯後半「桃李争春狄相門(桃李 春を争う 狄相の門)」の「狄相」は、唐初の名臣である狄仁傑(六三〇〜七〇〇)のことを指している。「桃李」は、『資治通鑑』卷二〇七 唐紀三三「則天順聖皇后下」に「或謂仁傑曰、天下桃李、悉在公門矣(或は、仁傑に謂い、天下の桃李、悉く公門に在る。)」とあることに因んで、教えていた弟子や門弟という意味として使われている。

尾聯前半「我比賈生年更少(我 賈生に比して 年 更に少し)」にある「賈生」は、前漢の学者賈誼(前二〇〇〜前一六八)のことを指している。一八歳の賈誼は秀才とうたわれ、文帝の新政に抜擢されて最年少の博士から、更に太中大夫となった。本詩を作った時、五峰はまだ一六歳の若さで、自分自身は賈誼より若い、才能は賈誼に劣らないと自負している心境を表している。

尾聯後半「治安一策共誰論(治安一策 誰と共に論ぜん)」は、賈誼の『治安策』に因んだ詩句になる。漢朝にとつて、諸侯王国は大きな脅威となり、匈奴も辺境を侵略しつつあったといった国情を洞見した上で、賈誼は多様な社会問題に対し、対策を上奏している。賈誼のように政府に参加し、『治安策』のような献言を申し上げようという、五峰の政治への抱負が本詩にうかがわれる。『五峰遺稿』末尾にある歌川絢之の「跋」で、「五峯夙抱經世志、練達事務、參畫大政三十年(五峯は夙に經世の志を抱き、事務に練達し、大政に參畫すること三十年)」と語られているように、五峰は、一六歳という本詩創作の時期に、既に經世の志を抱いていたのである。それは、大野耻堂の私塾で培われたものであり、五峰の上京の動機であったであろう。

次に、『五峰遺稿』五首目の「碓氷山中看梅花寄東京故人(碓氷山<sup>2</sup>中、梅花を見て東京の故人に寄す)」を見よう。

昨飲東橋賣酒家 昨<sup>きのう</sup> 東橋<sup>23</sup>の酒を賣る家にて飲み

櫻雲低亞一隄霞 櫻雲 低く<sup>た</sup>亞<sup>24</sup>る 一隄の霞

今日笛吹川上路 今日 笛吹川の上の路  
春遲四落梅花 春 遅くして 四月 梅花落つ

碓氷古作笛吹

碓氷古く笛吹と作す。

山下一水即笛吹川

山下の一水、即ち笛吹川なり。

(昨日、私は東京の吾妻橋の橋元にある酒屋でお酒を飲んでみた。咲き続いて白雲のように見える桜が隅田川の堤防に霞のように低く垂れ込めていた。今日、私は東京から新潟へ帰る道中の笛吹川の上の道にいる。このあたりは春の到来が遅く、四月になったにもかかわらず、梅の花が散り始めているところだ。)

この詩はおそらく、下男の倉藏によつて東京から連れ戻されて、途中、高崎近くで別れ、一人碓氷峠に差し掛かった時の道中の風景を描写したものである。時期は四月、承句に「櫻雲低亞一隄霞（櫻雲 低く亞る一隄の霞）」とあるように、東京では桜が満開であったのが、結句の「春遅四月落梅花（春 遅くして 四月 梅花落つ）」にあるように、碓氷峠では春が遅く、まだ梅の花が散り始めているところだという、東京と碓氷峠の季節感の差が語られていて、以前の詩に見られたような政治への志は述べられていない。詩題「碓氷山中看梅花寄東京故人（碓氷山中、梅花を見て東京の故人に寄す）」にあるように東京にいる旧友を思い出して、詩を作ったわけである。「故人」は誰かについて、明確に綴っていないが、大野耻堂の長男大野梅華のことだと推知できよう。なぜなら、大野梅華の名前を本詩の詩題に潜ませているからである。本詩は五峰が新潟に連れ戻される道中の詩作のため、単に昨今の自分の居場所の違いと自然風景を描写するのにこだわっていて、前掲の「九重」詩に現れているような政治への関心は示されていない。それと同時に、東京から連れ戻されることに対する心境、新潟に帰郷したくない五峰の反抗的な心理を表現していると考えられる。

## 二、二回目の上京

『五峰餘影』にある「昆倉藏氏談（元阪口家下男）」によると、一回目の上京から帰郷した後、「ほんの一時で、二ヶ月もたゞぬうちに又二度目の出奔をされました」<sup>25</sup>と、五峰の二回目の上京について語っている。この二度目の上京についての言及は『五峰餘影』の「山際操氏談」からもうかがえる。

自分が阪口君と初めて逢つたのは同君二度目の脱走の時で、その頃は梅華先生が工部権大亟として東京にをられたので自分は最初先生の家に厄介になり暫くしてからごくその近所の下宿屋に居ました。さうして工部省の鑛山寮に勤務して居るうちに、九州に出張して歸つた直後に五峰君に逢つたのです。その當時同君は再度の脱走をして来て梅華先生の宅に居たがヤハリ國許から父君が追跡して來たので、先生がこの際宅に置いては工合が悪いから、しばらく山際のところへ行つてをれといふ申渡して、四五日間は自分の下宿に來てをられた。かうして先生から阪口翁に對して、折角息が發奮して上京して來たのであるから當分在學させるが得策だとしきりに説いた模様であるが、父君は頑として聞き入れず、遂に五峰君は又もや郷里に連れ戻された。（中略）これは丁度明治八年のことでした<sup>26</sup>。

以上のように二度目の出奔において、五峰は大野耻堂の子・梅華の宅にいた。上記「昆倉藏氏談（元阪口家下男）」に「此度は大旦那様自ら東京へ捜がしに行かれ…」<sup>27</sup>とあるように、五峰の父親は自ら東京へ探しに行き、大野梅華の説得を受け入れず、五峰を郷里に連れ戻した。この

間の新潟と東京との往復については、五峰の弟南義二郎が以下のように語っている。

此上京中阪口（筆者注・五峰のこと）は如何なる人に就て學び何を研究して居つたかと言ふに、當時福澤諭吉先生の慶應義塾と並び稱せられてあつた、中村敬宇先生の小石川江戸なる同人社に入り二ヶ月通學した、阪口がその位知つてゐたのはこれが爲めだ。又山中耕雲や長鹽純卿と交際したが後年森春濤の門に入つたことや史學に嗜好のあつたことは斯うした翰墨の因縁からである。（中略）東京から歸つて來た阪口は性格、態度全く別人の如く一變してゐた。其後祖母が重病になり明治八年八月に祖母は六十六歳で、長逝したのでそれらの混雑の後、阪口も家に落ち付く事になり遊學問題も一先づ段落を告げた<sup>288</sup>。

上記の回想談によれば、五峰は明治八年に、再び新潟から上京し、その間に中村敬宇の同人社に入り、二ヶ月通學するとともに、山際操や山中耕雲・長鹽純卿などと面識を持つようになった。山中耕雲は森春濤の弟子であり、五峰が森春濤と縁を結ぶことになつたきっかけは、この二回目の上京にあると考えられる。二回目の上京時期は一回目の時に作つた詩「碓氷山中看梅花寄東京故人」に「四月」とあり、その二か月後であつたとすれば、明治八年の六月上旬頃だと推測できる。その帰郷する時期は上記の証言によれば、明治八年八月だと推知できよう。その二回目の東京滞在期間は大変短く、およそ、二ヶ月ぐらいと考えられる。

### 三、三回目の上京

上記の『五峰餘影』では、五峰の実弟である南義二郎は二度目の出奔後、五峰が家にいるようになったと述べているが、実際は明治八年秋頃、五峰は三回目の上京を果したと考えられる。その証拠と言えるものは『五峰遺稿』六首目の詩「川中島懷古乙亥」にある。

亂山大野環四方	亂山 大野 四方を環す
關左形勝如荆襄	關左 形勝 荆襄の如し
二水中分川中島	二水 中分す 川中島 <sup>29</sup>
于今人說古戰場	今に 人は説く 古戰場を
越公雄邁本天授	越公 雄邁 本と天授
機山韜略旗鼓當	機山 <sup>30</sup> 韜略 旗鼓に當る
孫吳並世境壤接	孫吳 <sup>31</sup> 並世 境壤接す
一龍一虎相騰驤	一龍 一虎 <sup>32</sup> 相ひ騰驤
鷺湖秋風拂星墜	鷺湖 秋風 星を拂つて墜し
失箸大息好敵亡	失箸 大息す 好敵の亡ぶを
越公固爲仁義戰	越公 固とより 仁義の戰を爲す
鹽車不辭輸敵糧	鹽車は辭せず 敵に糧を輸ぶを
風義堂堂照簡冊	風義 堂堂たり 簡冊を照す
千載流芳名字光	千載 流芳 名字光る
我來此地弔遺迹	我 此地に來たりて 遺迹を弔ふ
英雄不見空彷徨	英雄は見えず 空しく彷徨す
春日之山青峯嶺	春日之山 青き峯嶺
北望臨風神爲傷	北を望み 風に臨めば 神 傷を爲す
明發立馬古城上	明に發し 馬を立す 古城の上
天寒日暮雲荒荒	天寒く 日暮れて 雲荒荒

（高低入り乱れて重なり合う多くの山とその山裾などに広がって



る広野が周囲を取り巻いている。関東地方のすぐれている地勢は三国時代の荆襄地域のような。二本の川である千曲川と犀川が川中島を真二つに分けている。今も人々はこの古い戦場について語っている。越後の武将である上杉謙信の性質が雄雄しくすぐれていることはもともと、その生まれつきの才能だ。武田信玄の兵法の極意を会得した実力は上杉謙信に匹敵する。恰も兵法書を著した春秋時代の孫子と戦国時代の呉子の二人が同時に存在しているようだ。彼らの所属している呉と魏の国境が繋がり、決戦になるように思える。「甲斐の龍」と言われる武田信玄と「越後の虎」と言われる上杉謙信は争って勢いよく戦場へと進んでいる。鷺湖（今の諏訪湖）の周辺に星を払い落としそうな秋風が吹いている。力量の均衡した相手が亡くなったことを聞いて、驚いてどうしてよいか分からず、大きなため息をついた。上杉謙信は本来、仁義の戦いしかしかない。そのため、塩を運送する車は休まずに敵陣に食料などを運んでいる。その行儀はいかめしく立派なことで、きつと史書に輝いている人物になるだろう。その名前もきつと千年も消えずに、後世まで長く残るだろう。私がおわびの場所に来た理由はこの遺跡を哀悼するためである。上杉謙信や武田信玄の英雄は既に見えなくて、たださまよっているだけだ。春日山が青々として高く険しい。北方を望んで、風に迎えて、心に哀傷を感じている。明日、この古城の上に馬を立たせ、出発しよう。今、天気は既に寒くなってきて、日も暗くなって、雲の動きも激しくなっている。風も強くなってきた。）

本詩は七言古詩であり、下平声の七陽の韻を踏んでいる。（韻字は以下の通りである。方・襄・場・當・驤・亡・糧・光・徨・傷・荒）本章第一節で触れているように、大野耻堂の絆己樓で漢学漢詩に関する啓蒙教

育を受けた時に、『古詩韻範』に基づいた厳しい指導の痕跡だと考えられる。

詩全体は二〇句で構成されているが、以下で、意味的に四句・一〇句・六句三つに分け、本詩を見よう。

まず、最初にある四句を検討してみよう。

亂山大野環四方	亂山	大野	四方を環す
關左形勝如荆襄	關左	形勝	荆襄の如し
二水中分川中島	二水	中分す	川中島
于今人説古戰場	今に	人は説く	古戰場を

詩人は自然風景の描写と地形の険要な表現を通して、本詩の主題である古戦場の「川中島」を導いている。この続きにある一〇句を見よう。

越公雄邁本天授	越公	雄邁	本と天授
機山韜略旗鼓當	機山	韜略	旗鼓に當る
孫吳並世境壤接	孫吳	並世	境壤接す
一龍一虎相騰驤	一龍	一虎	相ひ騰驤
鷺湖秋風拂星墜	鷺湖	秋風	星を拂つて墜し
失箸大息好敵亡	失箸	大息す	好き敵の亡ぶを
越公固爲仁義戰	越公	固とより	仁義の戦を爲す
鹽車不辭輸敵糧	鹽車	は辭せず	敵に糧を輸ぶを
風義堂堂照簡冊	風義	堂堂たり	簡冊を照す
千載流芳名字光	千載	流芳	名字光る

この詩句は「越公」上杉謙信（一五三〇～一五七八）と「機山」武田信玄（一五二一～一五七三）との戦いの場面を想像しつつ、その生き生きとしている様子を表している。また、上杉と武田のことを春秋時代・戦国時代の軍事家の孫子と呉子に擬え、川中島における具体的な熱戦状況まで連想させる仕組みを取っている。

「越公固爲仁義戰（越公 固とより 仁義の戦を爲す）鹽車不辭輸敵糧（鹽車は辭せず 敵に糧を輸ぶを）」とは、「敵に塩を送る」という上杉謙信に関する美談である。それは川中島の戦いの後、塩不足に悩む宿敵・武田信玄に塩を送って助けたという佳話であり、苦境にある敵を助けるという意味として使われている。五峰はここで「越公」の仁義を強調し、その風格や姿態の立派なことで、そのすばらしい名譽が後世まで長く広く伝わることを力説しているのがうかがえる。前四句は本詩の主題の下地であるのに対し、この一〇句は現実の明治時代から過去の戦国時代までを想像させる構造を成し、更に詩の本題まで展開している。

この次にある最後の六句を見よう。

我來此地弔遺迹	我	此地に來たりて	遺迹を弔ふ
英雄不見空彷徨	英雄は見え	空しく彷徨す	
春日之山青峯嶽	春日之山	青き峯嶽	
北望臨風神爲傷	北を望み	風に臨めば	神 傷を爲す
明發立馬古城上	明に發し	馬を立す	古城の上
天寒日暮雲荒荒	天寒く	日暮れて	雲荒荒

この詩句では、その前の詩句で表現している虚構の世界、あるいは想像の世界から現実に戻り、今の自分の行動に触れている。その英雄を追懐するために、この遺跡に來たのだが、今はその英雄の姿が見えず、色々

考えながら、ただ、さまよっている。上杉謙信の城址がある春日山まで描き、この遺跡を見学しつつ、風に向かい、英雄に会えないので少し悲しくなってきたが、天候が荒くなつて、日も暗くなってきたにもかかわらず、明日、この遺跡の上から旅を始め、上京するのだという活気の横溢を表現している。本詩全体はこの川中島に対する追想を以て、戦国時代の英雄の「義」を描き出すとともに、少年の立身出世の心境を表しているため、蒼古かつ豪健な趣を前面に推し出していると考えられる。

この詩作から見れば、三回目の上京の道は上越から出発し、長野にある川中島古跡を通つて、東京に行く経路だと推知できる。作詩時期は詩題にある「乙亥」から判断すれば、明治八年、五峰一七歳の時である。詩題は既に、著者五峰の作意を表している。川中島という武田信玄と上杉謙信の五回に及んだ激戦の戦場に対して懐かしく思う心情を詠じている。詩中にある「鶯湖秋風拂星墜（鶯湖 秋風 星を拂つて墜し）」から見ると、季節は秋だと推測できる。また、最後にある「天寒日暮雲荒荒（天寒く 日暮れて 雲荒荒）」から見れば、晩秋の冷たい風まで想像できるだろう。

本詩は『五峰遺稿』に二三首ある七言古詩の、一首目の詩である。前述した『五峰遺稿』にある長男猷吉の「先考五峰先生阪口府君行述」で、春濤から「五峰天分甚高特帶豪健氣尤不易及（五峰天分甚だ高し、特に豪健の氣を帯ぶるは尤も及び易からず）」と言われている五峰の天授の氣質がうかがえる。更に、一回目の上京と同じく、歴史遺跡に対する関心、特に上杉謙信と関わりのある米沢や川中島まで足を運んでいることが読み取れる。あるいは前掲した南義二郎の証言では、「又山中耕雲や長鹽純卿と交際したが後年森春濤の門に入つたことや史學に嗜好のあつたことは斯うした翰墨の因縁からである。」ということと関係があるのかもしれない。こういったことは大正八（一九一九）年に田邊碧堂に見せた「讀

史」と題する二三首五言古詩で結晶したと関連付けられる。次にある七言絶句は三回目の上京道中の作だと思われる。

舟中聽歌（舟中聽歌）

楓葉荻花江水波　　楓葉　荻花　江水の波  
琵琶愁聽白家歌　　琵琶　愁聽す白家の歌  
傷心何止潯陽夕　　傷心　何んぞ潯陽の夕に止まらんや  
自古青衫涕淚多　　古へ自り　青衫　涕淚多し  
（私は舟に乗って、紅葉した楓の葉や荻の花や川に立つ波を見ながら、白居易の「琵琶行」を憂えて聞いている。心をいためるのはただ潯陽の夕暮れのあの人に止まらず、昔から失意の人たちは涙を流すことが多い。）

この詩は全体的に白居易の「琵琶行」を踏まえている。初句は「琵琶行」に「楓葉荻花秋瑟瑟」とあるのを踏まえている。詩作の時期は詩中の「楓葉荻花江水波（楓葉　荻花　江水の波）」から見れば、その前の一首と同じく、秋である。詩題「舟中聽歌」から、五峰は乗船して、東京に向かっていているのだろう。親から立身出世の気持ちや上京することなどをなかなか理解してもらえないことに対する苦悩を表している。

この次にある七言律詩では、既に東京に滞在していることがうかがえる。

夜坐有懷次山中耕雲見寄韻　　時予病後止酒（夜坐、懷有り。山中

耕雲寄せ見る韻に次す　　時に予病後、酒を止むる）

夜坐懷人坐夜長	夜坐して　人を懷へば　坐る <small>ま</small> るに夜長く
愁來幾欲喚杯觥	愁來り　幾どか杯觥を喚ばんと欲す
生前身後難輕重	生前　身後　輕重難し
酒罰詩動漫較量	酒罰　詩動　漫 <small>みだ</small> りに較量す
雨過檐端殘雪墜	雨は檐端を過ぎて　殘雪　墜つ
月升梅杪宿禽驚	月は梅杪に升りて　宿禽　驚く
去年聯榻論文夕	去年　榻を聯ね　文を論ずる夕べ
爲典春衣醉一場	春衣を典す爲　醉うこと一場

尾聯前半「去年聯榻論文夕（去年　榻を聯ね　文を論ずる夕べ）」から、今年明治九年<sup>33</sup>、眼前の風景を描きつつ、前の年に山中耕雲と親交を結んだことを懐かしく想起したことを詠じている。『五峰餘影』で、山際操から山中耕雲に関して、「五峰君が最初上京中に知り合った間柄で<sup>34</sup>」あると叙述しているように、五峰は上京生活中に、山中耕雲という森春濤の弟子であり、後年、森春濤へ五峰などを紹介し、春濤が主宰している『新文詩』にデビューさせた極めて重要な人物と出会ったことになる。この次の七言律詩もこの山中耕雲と関連している。

過山中耕雲舊寓（山中耕雲の舊寓を過る）よ　丙子

耕雲游加州未歸。因憶去歲與耕雲同寓數月、臨別耕雲爲余題詩掛衣、乃次韻誌感。（耕雲加州に遊び、未だ歸らず。去歲、耕雲と同じく寓すること數月、別れに臨み耕雲余の爲掛衣に題詩

するを憶ふにより、乃ち韻に次し感を誌す。

小樓絲雨暗于塵 小樓 絲雨 塵に暗し

舊寓重來迹已陳 舊寓 重ねて來れば 迹 已に陳しふる

殘燭隔花空有影 殘燭 花を隔てて 空しく 影有り

疎簾如水更無人 疎簾 水の如くして 更に人無し

夢中聯榻猶前日 夢中 榻を聯ぬること 猶ほ前日のごとし

衣上題詩忽一春 衣上の題詩 忽ち 一春

尤憶祖筵通夕飲 尤も憶ふ 祖筵 通夕の飲を

斑斑袖角酒痕新 斑斑たる袖角 酒痕新し

本詩は明治九（一八七六）年の作である。詩題の後にある五峰の説明文によると、昨年、五峰は山中耕雲と一緒に同じ住まいで数ヶ月間過ごした。その別れの時に、山中耕雲は五峰のために衣類の上に題詩をした。今の五峰はその詩の韻に従って、友人山中耕雲に対する思いを詠じている。本詩の内容は前年の数ヶ月間の生活に対する回想と友人に対する思い出である。次の詩も三回目の上京、東京滞在中の作だと思われる。

墨水春興和諸橋漸庵韻（墨水<sup>35</sup>春興、諸橋漸庵の韻に和す）

繖影衣香水一涯 繖きぬかげの影 衣の香り 水一涯

女兒爭賽白鬚祠 女兒 争ひて賽す 白鬚の祠<sup>36</sup>

階前百度鳴神鐸 階前 百度 神鐸を鳴す

訴盡春愁知不知 春愁を訴へ盡す 知るや知らずや

水閣花飛酒易醒 水閣 花飛んで 酒 醒め易し

東風吹度夕陽汀 東風 吹き度る 夕陽の汀みぎわ

何人弔上王孫墓 何人なにびとか 王孫の墓へ弔し 上るたてまつ

滿路靡蕪一色青 滿路の靡蕪びぶ 一色の青

本詩二首は五峰が明治九年の春に東京の隅田川の堤防で花見をした時の作だと考えられる。詩題にある「墨水」は、隅田川の異称であり、東京都市街地東部を流れて東京湾に注ぐ川である。東岸の堤を隅田川堤（墨堤）と言ひ、古来、桜の名所になっている。詩題にある諸橋漸庵という人物の詳細は分からないが、詩題からは、本詩は諸橋漸庵の詩に対する和韻の作であることが分かる。

一首目は華やかな姿の女性たちの花見の様子を描き、白鬚神社の鈴を鳴らし、神様にその春愁を訴える様子が描かれている。二首目は桜の花びらが春一番で散り、花見のお酒も醒めてしまい、夕陽の落ちつつある水際を春風が吹き渡っている描写から始まる。梅若丸のお墓参りをする人がいないことを嘆き、道路に満ちている野草の一面の青色を描いている。

この二首目の詩は江戸後期の「江湖社中の随一の純情詩人」<sup>37</sup>と言われる柏木如亭（一七六三〜一八一九）の七言絶句「木母寺」に因んだ作だと考えられる。詩の本文は

隔柳香羅雜沓過 柳を隔てて香羅 雜沓して過ぐ

醒人來哭醉人歌

醒人は来りて哭し 醉人は歌う

黄昏一片靡蕪雨

黄昏 一片 靡蕪の雨

偏傍王孫墓上多

偏に王孫墓上に傍うて多し

で、これに対して、「江戸の木母寺に詣でて作った詩であるが、第三句の靡蕪は『おんなかずら』第四句の王孫は梅若である。夕暮に『おんなかずら』をしつとりと濡らすほどの一片の小雨がこと更に梅若塚のほとりに多く降りそそいでいるという。公卿の子でありながら、幼くして陸奥の盜賊に欺き伴われて、隅田川のほとりで病死したという薄倅な梅若丸の生涯は、後世の人々の同情をひき、江戸時代にも多くの詩人が木母寺の梅若塚のことをいろいろと歌っているが、それらのなかでこの如亭の詩は一頭地をぬいたものと言うことができるだろう」<sup>38</sup>と富士川英郎は述べている。如亭は一首の中に遊樂客の賑わいと梅若の墓の物寂しさを対照的に描いているが、五峰はそれを二首に分け、一首目で、墨堤における主に若い女性たちの華やかさと心情を描き出し、二首目では、それと対照的に、人のいない梅若の墓の付近の小雨の降る物寂しい情景を描いている。

『五峰遺稿』で、この次に位置する「清水嶺」という七言絶句は、三回目の上京生活を終え、新潟に帰る道中の作と思われる。

清水嶺（清水嶺）

浩浩天風捲袂寒

浩浩たる天風 袂を捲いて 寒し

陰厓八月雪猶殘

陰厓に 八月 雪猶ほ殘る

越山自古稱天險

越山 古へ自り 天險と稱ふ<sup>39</sup>

一路羊腸百八盤

一路 羊腸 百八に盤る<sup>40</sup>

（袖を巻き上がるほどの風はひゅうひゅうと吹いて、寒さは一層厳しくなる。八月になったにもかかわらず、日が当たらない崖には雪がまだ残っている。越後山脈は古くから天険と言われ、その山路は羊腸のように百八ヶ所ほど屈曲している。）

詩題の「清水嶺」は清水峠のことを指している。承句「陰厓八月雪猶殘（陰厓に 八月 雪猶ほ殘る）」から見れば、季節は八月である。『北越詩話』下巻に五峰本人は「丙子秋、東京より歸る。年甫めて十八」<sup>39</sup>と語っている。時あたかも本詩の時期である。清水峠とは、群馬と新潟県境、三国山脈の笠ヶ岳と七ツ小屋山の鞍部にある峠であり、標高一四四八メートルである。帰郷する時の道は東京から群馬へ向かい、天険と言われる清水峠を越えて、新潟に帰るといふ経路をとったようである。『五峰遺稿』で、この次にある五言古詩も五峰三回目の上京生活を終え、帰郷する道中の作である。

舟下魚野川（舟にて魚野川を下る）

解纜下急湍

解纜 急湍を下る<sup>40</sup>

水漲萬雷吼

水漲り 萬雷吼ゆ<sup>41</sup>

岸樹船共飛

岸樹 船 共に飛ぶ

群山悉倒走

群山 悉く倒走す<sup>42</sup>

船頭兩厓蹙

船頭 兩厓に蹙りせま

峭壁峙左右

峭壁 左右に 峙そばだつ

全溪如建瓴

全溪 建瓴の如く

約束注峽口

約束して 峽口に注ぐ

忽有一巨巖

忽ち 一巨巖有り

突兀壓艦首

突兀として 艦首を壓す

短篙避而轉

短き篙さお 避けて轉じ

回瞻在舳後

回瞻すれば舳へその後に在り

危哉六尺軀

危きかな 六尺の軀

托之長年子

之れを托す 長年の子

漸近川口村

漸く 近づく川口村

青帘高出柳

青帘 高く柳に出ず

登岸心則安

岸に登れば 心則ち安やすんず

去買孤店酒

去ゆきて買ふ 孤店の酒

詩題にある「魚野川<sup>41</sup>」は新潟県魚沼地方を流れる河川である。信濃川の支流の一つでもある。本詩の詩題「舟下魚野川（舟にて魚野川を下る）」から五峰の帰郷に当たった旅は、既に新潟県に入ったとうかがえる。

本詩は『五峰遺稿』に録する五言古詩の一首目であり、今までの五峰

の詩風と違い、動態的な場面を描いている。詩韻の面から見れば、近体詩は絶句、律詩を問わず、平韻を用いることが原則だが、本詩は五言古詩のため、平仄の仄声韻を踏んでいるのが見られる。つまり、「吼・走・右・口・首・後・柳・酒」といった平水韻上声二十五有の一韻到底、「子」のみそれから外れる。「子」は上声韻の四紙の韻を踏んでいる。最後の詩句では、韻を一回だけ変えた（換韻）と思われる。

詩首にある四句

解纜下急湍

解纜 急湍を下る

水漲萬雷吼

水漲り 萬雷吼ゆ

岸樹船共飛

岸樹 船 共に飛ぶ

群山悉倒走

群山 悉く倒走す

は、ともづなを解いて、流れの急な浅瀬を下る様子や川の兩岸にある樹木や山脈などの自然風景を視野に入れつつ、舟の速さを表現している。この次にある四句

船頭兩厓蹙

船頭 兩厓に蹙り

峭壁峙左右

峭壁 左右に 峙つ

全溪如建瓴

全溪 建瓴の如く

約束注峽口

約束して 峽口に注ぐ

とは、川の兩岸にある険しく峙った所が船のへさきに迫ってくるような場面や川水の流れる勢いの速さを表している。この次にある六句

忽有一巨巖 忽ち 一巨巖有り  
 突兀壓艦首 突兀として 艦首を壓す  
 短篙避而轉 短き篙 避けて轉じ  
 回瞻在舳後 回瞻すれば舳の後に在り  
 危哉六尺軀 危きかな 六尺の軀  
 托之長年子 之れを托す 長年の子

では、この船旅中の一つの危険な状態を描いている。それは河川の中、突然、一つの大きな岩が表れ、その聳え立っている様子は船に迫ってくる有様である。その危機一髪のところ、舵取りは素早くうまく対応し、危機を脱することができた。それは舵取りの長年にわたり、蓄積された経験のお蔭だと綴っている。

詩尾までの四句

漸近川口村 漸く 近づく川口村  
 青帘高出柳 青帘 高く柳に出ず  
 登岸心則安 岸に登れば 心則ち安ず  
 去買孤店酒 去きて買ふ 孤店の酒

にある「川口村」は川口町のことであり、以前、新潟県北魚沼郡に存在していた町である。二〇一〇年三月三十一日に、長岡市へ編入された。このことは新潟県内に到着したことを意味している。先の危機一髪の後、漸く故郷に近づいて、居酒屋の揺曳しているのれんが見えてきて、岸に上るとほっとしたと感じている。早速、その一つだけある店へ酒を買いに行こうと言って、この詩を終えている。

従来の五峰年譜では、その一六歳のところに「東京大野梅華の許に走る・再度上京」と、一七歳のところに、「東京より歸村」と、あるように五峰一〇代の上京回数を二回としているが<sup>42</sup>、『五峰遺稿』上巻の最初一二首の詩を以上のように紐解くことで、その上京回数は三回であることが判明する。それは以下のようにまとめることができる。

- 一回目の上京時期 明治七年秋（一八七四年九月頃）  
 歸郷時期 明治八年春（一八七五年四月頃）
- 二回目の上京時期 明治八年初夏（一八七五年六月上旬頃）  
 歸郷時期 明治八年夏（一八七五年八月上旬頃）
- 三回目の上京時期 明治八年秋（一八七五年九月頃）  
 歸郷時期 明治九年秋（一八七六年九月頃）

### 第三節 第三回歸郷以後の詩

『五峰遺稿』では、「舟下魚野川（舟にて魚野川を下る）」の次にある七言律詩は晩唐詩人杜牧（八〇三〜八五二）と関わっている。

讀方外交幽月新潟詩、依韻和之。予弱冠、已見二毛、故七八及之。（方外の幽月と交わす「新潟」詩を讀み、韻に依つて之れに和す。予弱冠、已に二毛を見、故に七八之れに及ぶ。）

萬戸風煙擁罌頭 萬戸の風煙 罌頭を擁す  
 虹橋不獨似揚州 虹橋 獨り揚州に似るのみならず  
 八千八水春人舫 八千八水 春人の舫  
 三十三身古佛樓 三十三身 古佛の樓

森森波濤涵落日  
森森たる波濤 落日を涵し

垂垂楊柳蔭長流  
垂垂たる楊柳 長流を蔭ふ

不堪重捲珠簾上  
重ねて珠簾を捲上ぐるに堪えず

薄倖樊川鬢欲秋  
薄倖の樊川 鬢秋ならんと欲す

詩題「讀方外交幽月新瀉詩、依韻和之。予弱冠、已見二毛、故七八及之（方外の幽月と交わす新瀉詩を讀み、韻に依つて之れに和す。予弱冠、已に二毛を見、故に七八之れに及ぶ）」にある「幽月」とは、人名であり、『北越詩話』下卷によると、「釋暇畊、名は幽月。新瀉泉性寺の僧なり。…書を善くし詩に長ず。予、新瀉に徙るの後。時時往來舊を談ず。而して暇畊已に寺を持し<sup>43</sup>」た人物である。当時の幽月は新瀉の泉性寺（現在、新潟市中央区西堀通にある真宗大谷派のお寺・泉性寺である。）の僧であり、また、少年時代に五峰と絆己樓時代の学友でもあった。五峰本人は新瀉に引越してから、幽月と断続的な往來があつたと説明している。つまり、明治一三（一八八〇）年八月以降<sup>44</sup>、二人は旧交を温めていたのだと考えられる。

この詩は幽月の詩を讀んで、その韻に従つて詠じたものになる。起聯の後半では、「揚州」という杜牧と縁が深い単語が見えるし、また、結聯の前半「不堪重捲珠簾上（重ねて珠簾を捲上ぐるに堪えず）」は、杜牧詩「贈別<sup>45</sup>」二首の一首目に「春風十里揚州路（春風 十里 揚州の路） 卷上珠簾總不如（珠簾を巻き上ぐるも總て如かず）」とあるのを踏まえている。

結聯の後半では、「薄倖」、「樊川」といった杜牧と関係する語も出現している。「薄倖」（浮気者）は、杜牧の「遣懷<sup>46</sup>」詩にある「贏得青樓薄

倖名（贏得得たり青樓 薄倖の名）」という詩語であるし、「樊川」とは、杜牧の号である。

前聯の前半にある「八千八水」という語は、柏木如亭「新瀉」と題する七言律詩に「八千八水歸新瀉（八千八水 新瀉に歸し）<sup>47</sup>」とあるのを踏まえている。五峰はこの詩の中で、自分自身を、揚州時代に妓楼に浮名を流した杜牧に擬していると考えられる。本詩は五峰の最初の艶体の詩である。

次の「幽月再寄竹枝。乃又和之。（幽月再び竹枝を寄す。乃ち又た之れに和す。）」と題する七言絶句は、『五峰遺稿』にある初めての竹枝になる。詩題では「竹枝」といった詩形用語を用いる唯一の詩作である。

花霧柳煙仙境開 花の霧 柳の煙り 仙境開き

玉人坐在好樓臺 玉人 好き樓臺に在りて坐る

弄簫何處天將夕 簫を弄ぶは 何處ぞ 天將に夕ならんとす

七十二橋春月來 七十二橋 春月 來る

（花にかかるもや、柳にかかるもやはあたかも仙境の世界のようだ。仙女のようなきれいな女性が楼台に座り込んでいる。簫を手にとって遊んでいるうちに、空模様が夕日になってきた。新瀉の多くの橋はまるで春の夜の薄ぼんやりした月のようだ。）

詩題にある「幽月」は、この前の詩題の「幽月」と同じ人物である。本詩の詩題にあるように幽月から五峰にまた一首の竹枝が送られたので、五峰はそれに応じて、本詩を作詩したわけである。

起句にある「柳煙」は、柳にかかるもやという意味である。杜牧詩「沐人舟行答張祜」に「一道帆檣畫柳煙（一道の帆檣 柳煙を畫す）」とある



のを踏まえている。

承句にある「玉人」(美人)や転句にある「弄簫」は、杜牧詩「寄揚州韓綽判官」に「玉人何處教吹簫」とあるのを踏まえている。

結句にある「七十二橋」は、前掲した柏木如亭詩「新瀉」に「七十二橋成六街(七十二橋 六街を成す)」とあるのを踏まえ、水郷・新瀉の橋の多さを描いている。

竹枝は、「竹枝詞」「竹枝曲」「竹枝歌」とも言い、唐代の巴渝(今の四川省東部)一帯の民歌に始まる形式の詩である。内容は、多くが巴山、蜀水の自然や風景、風土や習俗、男女の恋情を歌ったもので、形式は七言四句、言葉は自然で素朴、風格は清新で婉曲である。晩唐・五代の頃、それが発展して「詞」となり、詞牌の一つとなった<sup>48</sup>。日本では、近世後期、江湖詩社を結成した市河寛斎の『北里歌』、その門人である柏木如亭の『吉原詞』、菊池五山の『続吉原詞』、『深川竹枝(水東竹枝詞)』などの詩集が盛んに詠じられた<sup>49</sup>。

五峰本詩の詩風は語彙の面からは、柏木如亭詩「新瀉」と杜牧詩を取り入れたと思われる。花柳の巷の様子を「仙境」や「玉人」を以て描写し、如亭詩にある「七十二橋成六街(七十二橋 六街を成す)」から「七十二橋春月來(七十二橋 春月 來る)」まで、その春らしさと遊樂の楽しさを巧みに結合し、水郷・新瀉の春夜の艶麗な風景を表現している。

この次にある七言絶句は夏の末を描いている詩作である。

#### 雨後驟涼(雨後、驟かに涼し)

小閣黄昏一雨過 小閣 黄昏 一雨 過ぎ  
碧天如水夜如何 碧天は水の如し 夜は如何

藕絲衫子桃枝簾 藕絲くわし 衫子 桃枝の簾たかむしろ

已覺新秋氣味多 已に新秋の氣味 多きを覺ゆおぼ

(小さなたかどのから、夕暮れの一雨が降り出した。その後、澄んだ水のような青空が現れ、今夜の天気はいかがだろうか。蓮の糸のような薄い生地の夏着や桃の枝で作られたむしろはもういらないうらう。なぜならば、既に初秋の涼しさを感じているのだ。)

本詩は夕方に、雨が降り出して、空が現れたように青くなり、夜には雨になるのだろうかと心配している気持ちを表している。転句「藕絲衫子桃枝簾(藕絲 衫子 桃枝の簾)」では、白くて薄生地の夏着や竹の席という納涼用品に言及し、結句「已覺新秋氣味多(已に新秋の氣味 多きを覺ゆ)」では、それがもう冷たく感じられ、新秋の気配を感じていることを述べて歌い終えている。つまり、晩夏から秋への季節の変化を具体的な物がひんやりと冷たくなったことの中に敏感に感じ取ったことを描いた詩である。五峰の感覚の鋭敏さを表すとともに、和歌の中に繰り返し歌われてきた季節の変化を漢詩的に表現した詩と言えるであろう。この次にある五言律詩は五峰のもう一つの側面を表している。

#### 對酒(對酒)

對酒腸空熱 酒に對ひて 腸 空しく熱し  
登樓興奈何 登樓 興 奈何いかな  
北門須鎖鑰 北門 須らく 鎖鑰すべし

西海尚干戈 西海 尚ほ 干戈かんか  
澤國來鴻早 澤國 來鴻 早し  
關何落照多 關 何ぞ 落照 多きや  
野人憂不細 野人 憂ひ 細からず  
慷慨一高歌 慷慨す 一高歌

詩題「對酒」は三国の魏の始祖・曹操（二五五〜二二〇）の樂府「短歌行」に「對酒當歌（酒に對して當に歌うべし）人生幾何（人生幾何ぞ）」とあるのを踏まえている。

首聯「對酒腸空熱（酒に對ひて 腸 空しく熱し）登樓興奈何（登樓興 奈何）」は、酒を飲んでも、腹がむなしく熱くなるばかり。妓樓に上がっても遊興する気持ちは起らない、ということである。

頷聯「北門須鎖鑰（北門 須らく 鎖鑰すべし）西海尚干戈（西海 尚ほ 干戈）」は、世相を反映している。「北門須鎖鑰（北門 須らく 鎖鑰すべし）」は、ロシアに對しての備えを成すべきだということだろう。「西海尚干戈（西海 尚ほ 干戈）」とは、明治一〇（一八七七）年の西郷隆盛らの反乱・西南戦争のことを指している。この戦争は明治政府に對する不平士族の最大かつ最後の反乱である。ここでは、五峰の国情に對する高い関心が表されている。

頸聯前半「澤國來鴻早（澤國 來鴻 早し）」にある「澤國」は、水郷としての新潟のことを示している。明治時代、当時の新潟は水郷と言われていた。冬になって、新潟に白鳥がやってくることに言及している。頸聯後半「關何落照多（關 何ぞ 落照 多きや）」は、日本海側にある関所は、なぜ落日が多く見えるだろうかと嘆いている。

尾聯「野人憂不細（野人 憂ひ 細からず）慷慨一高歌（慷慨す 一高歌）」にある「慷慨一高歌（慷慨す 一高歌）」は、曹操の樂府「短歌行」に「慨當以慷（慨 慷を以て當る）憂思難忘（憂思忘れ難し）」とあるのを踏まえている。五峰は自分のことを「野人」（在野の人間）と称し、「野人」であっても国事に對する憂いは小さくはないと詠じている。曹操の「酒に對して當に歌うべし」に因んで、感情の高ぶるままに大いに嘆き、大声で歌うことでこの詩を詠じ終える。

この詩中、頷聯後半「西海尚干戈（西海 尚ほ 干戈）」では、明治一〇年の世間の様子を描いていると考えられる。ほぼ年代順で編集されている『五峰遺稿』では、この詩作について、明確な創作年代を解説していないが、本詩の内容から見れば、それは明治一〇年、五峰一九歳の作だと推知できよう。

#### 第四節 まとめ

以上、明治七年から明治一〇年までの五峰の漢詩を論じてきたが、詩形は五言絶句を除き、七言絶句（九首）、五言律詩（二首）、七言律詩（四首）、七言古詩（二首）、五言古詩（一首）と、全部の詩形が用いられているとともに、詩におけるジャンルも多様である。漢詩の平仄の規則も正確に守っているのがうかがえる。これは、韻律について、漢詩を創作する萌芽期に受けた、絆己樓での大野耻堂による厳格な教育と緊密に関係していると思われる。

「出門」、「折嶺」、「米澤」、「九重」、「川中島懷古」、「舟中聽歌」などの、東京への往復において詠じられた紀行詩では、少年五峰の城跡に對する関心の高さや政治に對する抱負などが描き出されている。詩句の典故から見れば、主に『唐詩選』や『白氏長慶集』などを参考にし、作詩

を模索しようとしているのがうかがえる。

特に、「九重」の詩風は、森春濤から指摘された「天性議論家で詩にもなく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びて<sup>50</sup>。」いるし、雄渾かつ優雅であると思われる。前述した『五峰遺稿』にある長男猷吉の「先考五峰先生阪口府君行述」では、春濤から「五峰天分甚高特带豪健氣尤不易及（五峰天分甚だ高し、特に豪健の氣を帯ぶるは尤も及び易からず）」と言われている五峰の天授の氣質もうかがえる。「川中島懷古」という『五峰遺稿』にある最初の七言古詩の詩風は、春濤から「五峰は理屈に長じてゐるから古詩大作にふさはしい<sup>51</sup>」というふうには指摘されている通りの展開を見せている。

「墨水春興和諸橋漸庵韻（墨水春興、諸橋漸庵の韻に和す）」と題する七言絶句二首では、江戸後期の詩人柏木如亭の詩にも関心を持っていることがうかがえる。

「舟下魚野川（舟にて魚野川を下る）」と題する詩作は『五峰遺稿』にある最初の五言古詩になる。それまでの五峰詩と違い、動態的な場面に注目しながら描くという詩風を呈している。また、本詩は平水韻上声二十五有の一韻到底、「子」のみそれから外れる。「子」は上声韻の四紙の韻を踏んでいる。最後の詩句では、韻を一回だけ変えた（換韻）と思われる。

「讀方外交幽月新潟詩 依韻和之 予弱冠 已見二毛、故七八及之。（方外の幽月と交わす「新潟」詩を讀み、韻に依つて之れに和す。予弱冠、已に二毛を見、故に七八之れに及ぶ。）」と題する詩作は『五峰遺稿』の中の最初の艶体詩になる。水郷・新潟の艶美な風景を描きつつ、自身のことを揚州時代、遊樂ばかりをしている杜牧に擬えていることがうかがえる。

「幽月再寄竹枝。乃又和之。（幽月再び竹枝を寄す。乃ち又た之れに和

す。）」と題する七言絶句は『五峰遺稿』にある初めての竹枝であり、詩題では「竹枝」といった詩形用語を用いる唯一の詩作である。五峰本詩は、柏木如亭詩「新潟」や杜牧詩の詩語を取り入れ、五峰なりの水郷・新潟の風土を艶麗に醸し出した一首だと思われる。

そのほか、「雨後驟涼（雨後、驟かに涼し）」と題する七言絶句では、季節の変化に対する繊細な感覚が現れている。初期五峰詩作の中で繊細な詩風で際立っている一首だと言える。

「對酒」という五言律詩は曹操の樂府「短歌行」を踏まえているが、五峰の政治に対する関心・憂いがうかがえる詩である。

## 第二章 森春濤・茉莉吟社との関わり及びその門下と

### しての五峰の詩

はじめに

序章で引用した通り、坂口安吾は「石の思ひ」<sup>52</sup>の中で、阪口五峰が森春濤門下の漢詩人であると記載している。しかし、その具体的なことについては触れていない。また、周知のように森春濤（文政二・一八一九年四月二日～明治二二・一八八九年一月二一日）は尾張一宮の出身である。新潟出身の阪口五峰（一八五九～一九三三）が森春濤と、いつ、どこで、どのように師弟関係を結んだのかを説明しておかないと、漢詩人としての五峰像を明らかにできないおそれがある。

五峰の実弟で『新文詩』や『新潟才人詩』にも、その漢詩が載せられている詩人である南義二郎が、森春濤の来潟後の新潟漢詩壇の詩風や森春濤の茉莉吟社と五峰をはじめ、新潟漢詩壇との関わりについて、以下のように語っている。

阪口（筆者注・五峰のこと）は當時既に下越では名聲があつたから阪口の紹介で正を春濤に請ふもの履常に戸外に満ち春濤一過、北越の詩は皆茉莉園派ならざるなしといふ有様で新文詩七十五六の兩集には北越人の詩を満載して世人の耳目を聳動させた。春濤は就正の人を同社というて門弟とはいはせなかつたが、小崎藍川は此時始めて社に参したけれど敏捷であつたから忽ち作者の域に入り阪口と雲龍追逐といふ状態であつた。柳隄は仕官の都合で詩壇を退き、武

者城川が替つて來り参したが槐南は以上三人を新斥調など言つて尾州調と並稱したことがあつた。（中略）しかし大體茉莉園派は流麗を崇尚するので多く近體に力を入れ豪健なる長篇大作は却つて顧みられぬ傾きがあるので畢竟は大方家の所爲ではない。阪口は春濤に従遊以後一時才名震爆といふべき状態であつたが一面から見れば規模が小さく門戸が狹隘になり、眞本領を失うたやうな感じがなくもなかつた。然るに明治も三十年を越して詩風は一變し競うて清朝人を學んだことも一夢となり、轉じて唐以上に着目するやうになつた。新文詩。新々文詩、新詩綜を見れば詩風の變化が分明である。<sup>53</sup>

と、あるように五峰は新潟漢詩壇と中央漢詩壇・茉莉吟社との仲介役、更に、新潟才人を中央漢詩壇に紹介する役を務めていると考えられる。五峰の詩風は森春濤の弟子になって以来、清詩を学び、スケールが小さくなり、五峰本来の詩風を失つたことになると指摘している。すなわち、清詩を知る前と後では五峰の詩風に画期的な變化のあつたことに言及している。しかし、南義二郎が言及している『新文詩』第七十五、六集に掲載されている五峰の詩作は『五峰遺稿』には未収録になっている。また、山田毅城は五峰詩風の変化について、以下のように語っている。

少年十三。始めて五言の詩を賦して其師に讚嘆の聲を放たしめて以来、先生は作詩を無上の趣味とした。爾來才名は追々と知られて來たが、森春濤翁に就て親しく雌黄を乞ふた頃には既に詩界に頭角を現はして其前途に注目を惹いてゐた。此の時代から三十四五歳頃にかけては春濤翁の影響を受けて先生の詩には其後の作風とは全く趣を異にしたいかにも粹な才士風の香奩體の作が多かつた。<sup>54</sup>

と、森春濤を知る前後の詩風の具体的な違いについて言及している。

更に、五峰晩年に親交の深かった同門・田邊碧堂から「一たび春濤翁の感化をうくるやその性情に反する艶體の詩に變じて一時はいはゆる時流に墜ちてしまつたといふ遺憾があつた<sup>55)</sup>。」という指摘もある。

以上三人の指摘をまとめると、森春濤門下としての五峰の詩風は「作詩のスケールが小さくなつたり、本当の自分の流儀が狭小になつたりしていた」清詩風な詩であり、「茉莉園派は流麗を崇尚する」ため、「多く近體に力を入れ」、五峰の「豪健なる長篇大作は却つて顧みられぬ傾きがあ」り、後の作風と違う才子風な香奩體、五峰の性情に反する艶體のよな詩作になつてしまつたことが言われているのである。

本章では、五峰の当時の実際の詩風はどのようになつていくか、或はそれらの意見が正確性を持つていくかどうか、『五峰遺稿』『新文詩』『新新文詩』などに掲載されている詩を分析し、五峰の森春濤門下としての詩風、すなわち五峰二〇代の詩風を考えてみる。

## 第一節 森春濤入門まで及び『新文詩』にデビューする詩

第一節では、まず、五峰の森春濤への入門までの状況などを把握し、それから、『五峰餘影』などの参考資料に基づいて、五峰の『新文詩』にデビューする作詩に注目し、五峰が森春濤との師弟関係をどのように結んでいたかを明らかにする。

### 一、森春濤への入門まで

山際操は、『北越詩話』の題字揮毫者であり、明治一〇（一八七七）年頃、新潟に居て五峰との関係が極めて親しかったと考えられる。拙稿<sup>56)</sup>。

で触れた五峰の「偶題」と題する七言絶句の病の話では、今までの五峰年譜には書かれていない五峰の明治一一、二（一八七八、一八七九）年頃の新潟病院への入院を証言した人物であり、また、当時の五峰の詩才について、以下のように語っている<sup>57)</sup>。

此時分の社中では水落鷗水（名は璋之助、柏崎の人、當時醫學校生徒）や小林二郎<sup>58)</sup>、丸岡南陵<sup>59)</sup>（佐渡の詩人で社中の大家、折々新潟へ來ては唱和した）諸橋田龍の諸家であつたが五峰君は廿歳か廿一歳の最年少者で、しかも詩には天才あり、すでに社中に頭角を現はしてゐました。そこで同人中の長老たる南陵翁もその詩才を嘆賞し新潟から特に五峰君の郷里に遊びその家に宿したとき

蕭間實比子雲盧。偏遍欄干心目舒。有好好家居應自足。稱眞才子豈其虛。

五峰競秀雲頭似。一水分流燕尾如。閑脚堪伸膝堪擁。厭聞故友漫吹虛。

と賦したくらゐりました。

この時代の五峰君は別に誰を師とするといふこともなく、唯難田松溪<sup>60)</sup>などの詩を幾らか賞揚する口吻があつたくらゐで、一體妄りに他に雷同することがなかつたが敢て私淑する人も無かつたらしく思はれます。

と、明治一一、二年の五峰は既に、当時の新潟にある詩社中では、その最年少の天才振りが著宿である丸岡南陔から注目され、その才能・詩風によつて可愛がられているにもかかわらず、若き漢詩人になつた五峰

は誰とも師弟の関係を持っていなかったとのことである。森春濤の門下に入る前に既に詩界に頭角を現して、地元新潟漢詩壇の衆人の注目を浴びていた。

この中で、丸岡南陔との関係は、上記の証言と『新潟才人詩』の評者と著者という関係にとどまらず、更に親しい関係を持つ。『五峰遺稿』巻上<sup>61</sup>に「送丸岡南陔歸佐渡 風月吟社席上作（丸岡南陔が佐渡に歸るを送る 風月吟社の席上に作す）」と題する七言律詩がある。

舟江楊柳野川楓 舟江 楊柳 野川の楓

前日見過予家

前日予の家を過ぎる

追逐歡場十日同 歡場を追逐すること 十日を同じくす

海上青山望故國 海上の青山 故國を望む

鏡中華髮感秋風 鏡中の華髮 秋風を感ず

本知風月歸閒者 本とより 風月を知るは 閑者に歸す

好去江湖號長翁 好く江湖を去りて 長翁と号せ

想見明朝挂帆興 想見す 明朝 帆を掛けて興つを

夕陽回首水雲中 夕陽 回首すれば 水雲の中

本詩の詩題や詩中にある詩人の自注から見れば、この詩は上記の山際操の回想で語られているように、丸岡南陔が五峰の郷里で遊んだ後、五峰が風月吟社の席上で作った丸岡への送別の詩だと思われる。

首聯「舟江楊柳野川楓（舟江 楊柳 野川の楓）追逐歡場十日同（歡場を追逐すること 十日を同じくす）」は、舟江・新潟の自然風景と丸岡南陔の新潟への来遊を以て詠い始めている。「舟江」は『新潟富史』に「新斥原一沙嘴、舊稱船江。（新斥は原と一沙嘴のみ。旧と船江と称す。）」とあるのを踏まえている。

頷聯「海上青山望故國（海上の青山 故國を望む） 鏡中華髮感秋風（鏡中の華髮 秋風を感ず）」は、「海上」と「鏡中」、「青山」と「華髮」、「望故國」と「感秋風」という巧みな対句関係になっているが、自然風景と感傷心境とを、それぞれ表現し、丸岡の常在地・佐渡島を詠い、鏡の中に映っている半白から秋の到来までを連想させることを詠じている。

頸聯前半「本知風月歸閒者（本とより 風月を知るは 閑者に歸す）」は、白居易の七言絶句「閒吟」に「每逢風月一閒吟（風月に逢う毎に一閒吟す）」とあるのを踏まえている。白居易の詩句は清風・明月といった良辰美景に接すると、自ずと吟唱するということであるが、五峰のこの句はそれを踏まえ、自然のすばらしさは閑吟の可能な者にしか分からないと語っている。

頸聯後半「好去江湖號長翁（好く江湖を去りて 長翁と号せ）」の「江湖」「長翁」とは、宋代の詩人陳造（一一三三〜一二〇三）の号である。『江湖長翁文集』四〇巻がある。この詩句は丸岡南陔を陳造に擬えて詠じている。「好去江湖（好く江湖を去りて）」の「好去」は別れの辞。世の中から離れ、陳造のような詩人になれと言っている。

尾聯「想見明朝挂帆興（想見す 明朝 帆を掛けて興つを）夕陽回首水雲中（夕陽 回首すれば 水雲の中）」は、丸岡が佐渡島に歸る道中の様子を描いている。「夕陽回首水雲中（夕陽 回首すれば 水雲の中）」は、夕日が西に沈む風景を表現して大変美しい。

本詩の創作時期は、ほぼ年代順で編集している『五峰遺稿』を参考にすれば、明治一二年頃、五峰二一歳の秋の詩作になる。この詩は風月吟社の友人或は詩友と言える丸岡の帰郷のため作詩した贈答詩だと言える。そのため、地元新潟と丸岡の本居地佐渡島との通路、水路や海上の風景に着眼し、筆致流麗な詩風を呈していると考えられる。この作詩の時点は森春濤の弟子山中耕雲との友人関係を結んだが、五峰のデビュー作は

明治一二年一二月の『新文詩』であることから、まだ『新文詩』に投稿していない頃であると推知できる。その詳しいことは次の部分で述べたい。

次に、五峰自注にある「風月吟社」について説明しておきたい。

『北越詩話』の「古山文静」の項に、「往年會津の人大庭松齋新潟に寓し。風月吟社を創し。數々同人を松風亭に會す。予時に年少、故里にあり。佐渡の丸山南陔成章と客員たり。<sup>62</sup>」と記してある。また、『五峰遺稿』には「贈大庭松齋并引」という七言律詩がある。その「引」の中に大庭松齋について紹介し、また、風月吟社についても触れている。「松齋名機稱恭平會津人夙負氣節梟足利尊氏木主于三條磧繫獄七年慶應末游越後浪士阪本平彌無行斫之水原酒樓今官新潟公餘創風月吟社時會松風亭詩酒自娛（松齋、名は機、恭平と稱す。會津の人。夙に氣節を負ひて、足利尊氏の木主を三條磧に梟し、獄に繋がること七年。慶應の末、越後に遊ぶ。浪士阪本平彌、無行、之を水原の酒樓に斫る。今、新潟に官し、公余、風月吟社を創り、時々松風亭に會し、詩酒をもつて自ら娛む。）」と書かれている。要するに、風月吟社は明治一一（一八七八）年頃、當時、新潟で判事を務めていた會津出身の大庭松齋<sup>63</sup>の公務の暇に創られ、時々松風亭で詩会を行われていたことがうかがえる。

上記の山際操の証言と『北越詩話』の言及によれば、五峰は明治七年から明治九年秋までの上京生活が終わって以来、当時あった「風月吟社」という新潟の詩社の同人になり、詩社の泰斗である丸岡南陔から愛され、新潟漢詩壇注視の的となっている。しかし、師弟の関係を誰とも持っていないかつたこともまた、うかがえる。

## 二、『新文詩』にデビューする詩

ここでは、『新文詩』にデビューすることになった経緯について、解明したい。前述した山際操の回想談に以下のような話がある。

明治十二年十月ごろ、加賀の金澤に新聞記者をしてゐる人で山中耕雲といふ春濤門下の詩人が新潟へ漫遊して來ましたが、この人は五峰君が最初上京中に知り合つた間柄で、無論五峰君は眞つ先にこの人と新潟に會した、そして自分をもよび迎へて三人一所語りました。（中略）

山中氏は二三日も滞在し、その間兩人はその宿所に會しては詩談を闘はしてゐました。そのとき山中氏は我々兩人に、詩は苟も師尚とするところがなければならぬと力説して、森春濤翁は詩界を一新する人であるから君等の詩を紹介するといふので詩を翁の許に送り初めてその斧正を得た結果、それが翁の主宰する詩の雑誌「新文詩」に載せられました。即ち五峰君も自分もその詩が中央の斯壇に現はれたのは、臍の緒切つてこれが最初であるのみならず、當時「新文詩」といへば唯一無二の漢詩雑誌として、これに載せられるは無上の光榮であつたのだから若年であつた兩人は實に有頂天になつて喜んだものです。（中略）

送友人遊新潟

五峰樵史 仁一郎

簾影燈光映綠潮。知君到日駐蘭橈。爲吾應訪珠娘宅。住在紅欄第二橋。

春濤曰好竹枝。明年予將遊新潟。以此詩爲記事珠。

雜感

柳堤釣人 操

燈紅酒碧記曾遊。其奈墜歡難拾何。重閱賡酬當日卷。麗詞多更暗愁多。

春山曰筆跡墨淡、饒有佳趣。春濤曰曾過墜歡、恰好文字。

之は何でも十二年の十二月であつたが、サアかうなるとますます面白くなり兩人とも春濤の門下として詩作に勵んだが、五峰君は天稟の詩才に加ふるに、初めて良師を得てズンくと進境を示したのでした。(中略)それが十四年度春濤翁の來遊によつて初めて師を得たと喜んだのですが、翁の來越も、事實五峰君が東道の主人であつたのです。<sup>64</sup>

上記の回想談から見ると、新潟に居る五峰は、上京時に知り合つた山中耕雲を通して、当時東京に居る森春濤へ自分の詩を送り、指導を受けたわけである。このことが契機となつて、五峰は中央漢詩壇にデビューした。上記の内容から当時の五峰の中央漢詩壇にデビューした喜びも垣間見ることが出来る。このように山中耕雲を通して、五峰は森春濤と師弟の關係を結び、明治一二年一二月、『新文詩』に漢詩を載せられた。斯界にデビューしたことになり、この時点で五峰は森春濤の弟子になるわけである。

次に、五峰の『新文詩』におけるデビュー作を検討してみよう。それは明治一二年一二月、『新文詩』第五十六集に掲載された五峰の東京詩壇へのデビュー作である。それは、五峰が初めて作つた竹枝であつた。

送友人遊新瀉(友人の新瀉に遊ぶを送る)

簾影燈光映緑潮 簾影 灯光 緑潮に映ず

知君到日駐蘭橈 君の着く日を知らば 蘭橈を駐めん

為吾應訪珠娘宅 吾が為 應に珠娘の宅を訪ぬべし

住在紅欄第二橋 紅欄 第二橋に住みて在り

(簾の影やもし火の光などが緑の水面に映っている。私はあなたが新瀉に着く日が分かれば、きれいな小船を停めておきましょう。それに乗つて私のいる遊郭を訪ねて下さい。私は紅い手すりの第二の橋のところに住んでおります。)

春濤曰好竹枝。明年予將游新瀉。以此詩為記事珠。(春濤曰く、好き竹枝なり。明年予將に新瀉に遊ばんとす。この詩を以つて記事珠と為す。)

詩の題から見れば、これは五峰からある友人への送別詩である。

起句「簾影燈光映緑潮(簾影 灯光 緑潮に映ず)」は、明治時代の水郷の名所である新瀉の町の風景を描いている。承句から結句まで比喩的に自分を女性に例え、友人を歓迎する意を表している。その承句「知君到日駐蘭橈(傍点筆者、以下同)」は、劉禹錫の七言絶句「竹枝詞九首 并引」四首目の承句「江頭蜀客駐蘭橈」を踏まえている。

また、結句「住在紅欄第二橋(紅欄 第二橋に住みて在り)」は、同じく上記の劉禹錫の竹枝の結句「住在成都萬里橋」を典拠にすると同時に、白居易の七言律詩「正月三日閒行」の領聯「緑浪東西南北水 紅欄三百九十橋」を踏まえていると考えられる。

劉禹錫は竹枝詞の集大成者であるため、五峰が竹枝を作る時に、劉の「竹枝詞九首 并引」を模範として参考にするのは当然だろう。白居易



の「正月三日閒行」と題する七言律詩は、『五峰遺稿』巻中<sup>67</sup>では、「新年招同天颺洪洲中洲山陰易水諸子過飲松風亭用白樂天正月三日閒行韵（新年、天颺（柏田天颺）、洪洲（松野洪洲）、中洲（青木中洲）、山陰（不明）、易水（湯原易水）、諸子を招同し、松風亭に過飲す。白樂天「正月三日閒行」の韵を用ふ）」と見える。白居易の詩は宝曆二（八二六）年正月に蘇州刺史に在任している頃の作だと見られる。蘇州は中国では有名な水郷の一つであり、「紅欄」とは、蘇州の最古の石橋であり、橋梁本体が紅色の烏鵲橋を指している。五峰本詩の詩風は形式から見れば、竹枝であり、その上、劉禹錫の竹枝詞の語彙を取り入れ、白居易の水郷描写も参照している。

上記の森春濤の評では、五峰の詩を好い竹枝だと褒めている。また、その翌年に春濤が新潟へ旅する予定を立てていると推測できる。「以此詩為記事珠」の「記事珠」とは、手で撫でれば、記憶を呼び起こすという不思議な宝珠のことである。この森春濤の評語は、五峰のこの詩を新潟への旅の記憶を呼び起こす珠に擬えている。

しかし、森春濤から好評だったこの五峰の東京漢詩壇へのデビューの詩は、五峰唯一の漢詩文集『五峰遺稿』には収録されていない。その理由として、『五峰遺稿』序に書かれている館森鴻（一八六三〜一九四二）からの序文を参看しよう。

嘗問詩於森春濤春濤原以艷體名而思道亦以巧麗勝春濤以其乏沈鬱之致傲之曰子不可仿吾之所爲思道乃徧覽唐宋諸作晚年與青厓相周旋涵濡蘊蓄極其性分之所至常執舊稿刻意磨練於是巧麗者盡化為雄渾清雅矣（嘗て森春濤に於いて詩を問う。春濤は原と艷体を以て名あり、思道（五峰の字の一つ）亦た巧麗を以て勝る。春濤其の沈鬱の致に乏しきを以つて、之をいまして曰く、子は吾の所為に倣うべから

ずと。思道乃ち唐・宋の諸作を遍覽す。晩年、青厓と相い周旋・涵濡・蘊蓄し、其の性分の至る所を極む。常に旧稿を執り、刻意磨鍊す。是に於いて、巧麗なる者、盡く化して雄渾、清雅と爲る。）

館森の序文から見ると、五峰の詩風は最初巧麗であった。春濤は「憂愁」の詩人として有名である。が、五峰が「沈鬱の致に乏し」いのを見た春濤から、吾が詩風に倣うなと戒められ、後、唐・宋の詩作を通覽し、晩年に国分青厓と研磨しあい、漸く五峰の性格に合う詩風になった。それは「雄渾」であり、「清雅」であった。

また、五峰の同門・田邊碧堂にも森春濤から直接に聞いた五峰の性格や詩風についての話がある。

自分が初めて五峰君の名を耳にしたのは明治十六年先師森春濤翁が自分の郷里備中の玉島に來られたときであつた。その二年前、春濤翁は新潟に遊んだので、玉島漫遊の際に、余は諸國を歴訪していたるところで若い詩人に接したが北越に阪口五峰あり、天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びてゐると語られて、さらに自分に對して君は素直な人物で物に凝滞せぬ性格であるから五峰とは一寸相反した趣をもつてゐる。東に五峰、西に碧堂、前途有望の好門下を獲て洵に嬉しい。元來君は絶句において長所を見る。絶句に貴ぶ所は神韻と風致にあるから君の如き性情の人には適するが五峰は理屈に長じてゐるから古詩大作にふさはしい、丁度芝居の女形と立役者が出來たやうなものだと、愉快さうに物語られた。

とあるように、五峰の天性は議論家であり、かつ意志の強い人間である

と森春濤は看破した。詩体の面から言うと、五峰のような理屈に強い人間は古詩大作に相応しい。その対照的な存在は田邊碧堂である。確かに森春濤の指摘の通り、田邊は絶句を善くして、「平素、人に説いて『絶句は最も邦人に適す。律詩・長篇に至つては、到底華人に及ぶものではない』として、絶句以外は一詩をも作らず、遂に技倆も古人を凌駕する域に達し、『絶句碧堂』の名をほしいままにした」<sup>70</sup>と言われた。

『五峰遺稿』には竹枝詞類の詩作の数は極めて少なく、ただ三首しかない。恩師である森春濤から見抜かれ、指摘された点は、五峰にとって、自分相応の詩風を形成するのに重要な要因であつたと思われる。

## 第二節 森春濤来瀉時期の詩

### 一、森春濤を迎える詩

まず、森春濤の来瀉の経緯について触れたい。なぜなら、森春濤「竹枝」作品群の中、作詩数最多（五四首）である「竹枝」は、新瀉の旅に因んだ「新瀉竹枝」だからである。その具体的な事情について、南義二郎の「その家計・その詩」では、以下のように五峰の文事を語って、そのことに触れている。

阪口は弱冠から四方に奔走して勉學の時を得なかつたので書卷は必ずしも多いといふほうではなかつたが、頭が善いので詩は一方の覇者であつたし、文章とて書けば書けるのであつた。春濤に従遊以

前、山中耕雲や長鹽純郷（長）の如く詩文共に手を着けて居た。明治十二

年阪口二十一歳の時、耕雲は加州よりの歸途越後に來遊した其時、

山際柳隄（長）などにも詩酒の交際があつた。當時耕雲のいふには師承する所がなければ固陋を免れぬ。諸大家の中に就て正を請ふが善からうといふので森春濤に紹介して呉れた。其頃東京には枕山、湖山、春濤等各詩壇に雄飛してゐたが春濤は才人絶句や新文詩を發行して文壇を賑はし、又其子に槐南といふ偉才があつたからでもあらう。

其年十二月の新文詩五十六集に阪口や柳隄（長）の詩が載せてあつた。阪口のは送友人遊新斥といふのであつたが春濤の評に予將遊新斥以此詩爲記事珠とあつた。これで春濤が北遊の志あるを知り阪口から小林二郎が東京へ仕入れに往く毎に春濤の門を叩かして之を促した。此時汽車や自動車の便が無く、百里の山河は六十三歳の春濤老人に困難であつたから、二郎（筆者注：小林二郎のこと、『新瀉才人詩』の編纂者）が東京戻りに同行して春濤もいよく北遊することとなり、阪口が上大川前の僑居に其旅装を装いた（中略）これは明治十四年七月で阪口が二十三歳の時であつた<sup>71</sup>。

とあるように、明治一二年一二月『新文詩』第五六集に掲載した「送友人遊新瀉（長）（友人の新瀉に遊ぶを送る）」と題する五峰の竹枝に対する森春濤の評から、五峰は森春濤の新瀉巡遊の意図に気づき、度々上京している小林二郎に頼んで、春濤の宅まで新瀉への出游を促してもらつたことがうかがえる<sup>72</sup>。

次に、『五峰遺稿<sup>73</sup>』にある森春濤を迎える七言律詩を見よう。

春濤先生見過。招同社友、小集書樓。山際柳堤有詩、乃次其韻。

時辛巳立秋前一夕也。(春濤先生過ぎらる。社友を招同し、書楼に小集す。山際柳堤<sup>74</sup>に詩有り、乃ち其の韻に次す。時に、辛巳の立秋の前の一夕なり。)

枉顧高軒十日留 高軒に枉顧し 十日 留り  
便開小讌一宵游 便ち 小宴を開きて 一宵 遊ぶ  
樓臨鷗渚爽宜夏 樓は 鷗渚に臨み 爽やかさ 夏に宜しく  
柳拂風漪涼欲秋 柳は 風漪を拂い 涼しさ 秋ならんと欲す  
執贄人皆尊宿老 執贄の人 皆 宿老を尊び  
著書何必爲窮愁 著書 何ぞ必ずしも窮愁の爲ならん

剪燈苦勸荷花酒 灯を剪み 苦りに荷の花の酒を勸む

落月依依遠浦頭 落月 依依として 浦頭に遠し  
(春濤先生のような尊貴のお客さんが来訪されたからには、長く留まっていたいただきたい。早速、自分が主催する酒宴を開いて、思う存分一晚遊んでいただく。書楼は鷗がいる水辺にあったので、爽やかに夏を過ごせる。柳は風に広がっている水の波紋を掠め、その涼しさが秋の近づいている感じである。お礼を持ってきた人は皆春濤先生のことを尊敬しているし、先生が著書を書くのは貧困愁苦のためではないだろう。蓮の花の酒をしきりに勧めながら、長時間にわたってお話を聞く。落ちていく月が浦頭と離れるに忍びないというように遠ざかっていく。)

詩の題目にある「辛巳立秋」から、時期は明治一四(一八八二)年立秋の前日(新暦八月六日・旧暦七月一二日)と推測できる。森春濤の来潟によって五峰は、初めて恩師である森春濤に会うことになる。本詩の

詩題から、五峰は積極的に森春濤の来潟の東道役を務めていることがうかがわれ、詩全体に、春濤を迎えた喜びの心情が表されている。では、五峰にとって、いくつかの初めてが重なっている心情をどのように詠じているか、具体的に検討しよう。

本詩首聯前半にある「十日留」という詩語は、明の大儒・政治家である王陽明(名は守仁。陽明は号。一四七二〜一五二八)詩「遊通天巖示鄒陳二子<sup>75</sup>」に「鄒陳二子皆好遊(鄒陳 二子 皆 好遊し)一往通天十日留(一往 通天 十日留)」とあるのを踏まえている。鄒陳二子は二人とも、交遊が好きのため、通天巖という名所に行くと、少なくとも十日間、滞在するという詩句に対し、恩師・春濤に長く新潟に滞在してもらいたいという五峰の心境がうかがえる。

また、首聯前半の「枉顧」とは、貴人が来訪する意味の尊敬語である。森春濤の行為を語る時に、尊敬語を使っている。しかも、本詩頸聯前半「執贄人皆尊宿老(執贄の人 皆 宿老を尊び)」にある「宿老」という語は、詩作に年功を積んだ老人の意味として使われているし、森春濤のことを大変尊敬していると考えられる。同時に、明治一〇年代頃、森春濤の知名度が東京漢詩壇だけではなく、既に地方まで響いていることがうかがえる。

頸聯後半「著書何必爲窮愁(著書 何ぞ必ずしも窮愁の爲ならん)」にある「著書」、「窮愁」は、『史記』「平原君虞卿列伝」に「然虞卿非窮愁、亦不能著書以自見於後世云(然れども虞卿窮愁に非ざりせば、亦た書を著して以て自ら後世に見はるること能はざりしならんと云う)」とあるのを踏まえている。既に知名度が高い森春濤は虞卿のように貧困愁苦のために書を著する必要がないことを詠じている。

頷聯「樓臨鷗渚爽宜夏(樓は 鷗渚に臨み 爽やかさ 夏に宜しく)柳拂風漪涼欲秋(柳は 風漪を拂い 涼しさ 秋ならんと欲す)」は、森

春濤の来潟の季節について描いている。まず、酒宴の場所を語っている。その酒楼は鴟が飛んでいる姿も見える渚にある所である。そのため、爽やかな風が通り、残暑を過ごしやすい。それから、視線は自然風景に移り、新潟の代表的な樹木である柳が風に靡いて、水面も風によつてその波紋が広がっている。その涼しさはまさに新秋の到来を感じられる。という大変快適な季節の到来を暗示している。詩題からも分かるように、立秋の前日である。これから、新秋を迎える季節まで連想させる。秋という季節は新潟にとつて、海の幸や山の幸を満喫できる季節になるわけであろう。初めて訪れてきた師・森春濤にこれからの新潟の快適な季節をアピールし、長く滞在してもらいたい気持ちを表している。

尾聯「剪燈苦勸荷花酒（灯を剪み 苦りに荷の花の酒を勧む） 落月 依依遠浦頭（落月 依依として 浦頭に遠し）」は、森春濤を迎える酒宴の様子を描いている。初めて、恩師と対面し、たくさんのお話を伺いたい。そのため、燃やした灯心を切り除き、もう一杯飲んでください、と春濤に勧めるだろう。落月が見える早朝まで恩師と飲み続けていることが想像できる。また、落月が名残を惜しみながら、浦頭と離れていくことを詠じて、自分の恩師と別れたくない名残が尽きない気持ちを表している。

本詩の詩風は首聯にある「十日留」が王陽明詩を踏まえていることや、頸聯にある「著書何必爲窮愁（著書 何ぞ必ずしも窮愁の爲ならん）」の「虞卿」の故事を取り入れることが、その詩語を「換骨奪胎」の形で活用している。その上、細緻な構成や巧みな修辭を呈している七言律詩になっている。森春濤に直接に会ったばかりのためか、当時の森春濤の得意としていた艶体詩風は見られない。更に尾聯後半「落月依依遠浦頭（落月 依依として 浦頭に遠し）」では、師・森春濤との別れさえも惜しんでいる気持ちを表現するために、落ちていく月が浦頭と離れるに忍びな

いようだという比喩的な手法を活用している。

## 二、森春濤新潟滞在中の詩

『五峰遺稿<sup>7</sup>』巻上に、「松風亭酒間戲賦呈春濤先生（松風亭酒の間に戯れに賦し、春濤先生に呈す）」と題する七言絶句三首連作がある。まず、一首目を見よう。

豈啻長髯美絶倫 豈に啻 長髯の美 絶倫ならんや  
烏紗白葛好丰神 烏紗 白葛 好き丰神

家家仿得放翁例 家々 倣い得たり 放翁の例

團扇應描春道人 团扇 應に春道人を描くべし

（ただ人並みはずれて美しいのは先生の長い髯だけだろうか。烏帽子をかぶり、潔白な夏服姿も大変素敵な風采である。家々では陸放翁の例に倣い、团扇に春濤先生の絵を描くだろう。）

上記の一首は森春濤の来潟する時の風貌を描いている。

承句にある「烏紗白葛」という表現は、北宋詩人・蘇軾（一〇三六～一一〇一）詩「病中游祖塔院（病中 祖塔院に遊ぶ）<sup>77</sup>」と題する七言律詩にも現れている。その首聯に「紫李黄瓜村路香（紫の李 黄の瓜 村路に香り）烏紗白葛道衣涼（烏紗 白葛 道衣 涼し）（傍点筆者、以下同）」とあるのを踏まえている。「祖塔院」とは、杭州南山にあるお寺のことである。熙寧六（一〇七三）年頃、蘇軾は杭州の通判に任命された。この詩は在任時の作だと言われる。

五峰は承句で重点的に春濤翁の装束を語っている。「烏紗白葛好丰神

（烏紗 白葛 好き丰神）にある「烏紗」は、中国では官吏が被っている帽子を指している。蘇軾は杭州にいる時に通判という宋初に始まる地方官を担当している。そのため、「烏紗白葛道衣涼（烏紗 白葛 道衣 涼し）」と詠じている。しかし、森春濤は官吏ではないのに、五峰本詩でも官吏用帽子である「烏紗」を使っている。それは五峰の恩師に対する褒め方の非写実性を表している。「白葛」は、白い麻の布を意味している。蘇軾詩にも五峰詩にも「白葛」を白い薄生地（薄生地）の夏着の意味として使われている。この詩句は、五峰が恩師・春濤の格好を北宋の大文豪の蘇軾の格好に擬え、恩師の傑出した洒脱な姿を現したい気持ちがかがえる。

五峰詩の転句と結句は、南宋詩人・陸游（一一二五～一二一〇）詩「六月二十四日夜分、夢范至能、李知几、以尤延之同集江亭。諸公請予賦詩、記江湖之樂。詩成而覺忘數字而已（六月二十四日夜分、范至能（范成大）、李知几（李石）、尤延之（尤袤）を以て、江亭に同く集める夢を見る。諸公予に詩を賦し、江湖の樂みを記さしむ。詩成り、而も數字を忘れるるを覚ゆるのみ）<sup>78</sup>」と題する七言律詩の尾聯「吳中近事君知否（吳中の近事 君 知るや否や）（團扇家家畫放翁（團扇 家々 放翁を畫く）を踏まえたと思われる。五峰は「團扇家家畫放翁」に倣い、「家家仿得放翁例 團扇應描春道人」に師・春濤先生のことを「春道人」と表現し、「團扇家家畫放翁」のように「今はまさに團扇に森春濤の像を描くだろう」と詠っている。春濤の新潟に来車する歓迎と歡喜の心境を十分に表している。

本詩では、五峰は非写実の表現を通して、師・春濤の姿と知名度を北宋の文豪・蘇軾と南宋の文豪・陸游にそれぞれ擬え、春濤のことを高く評価し、明治中央漢詩壇の重鎮の弟子となった喜びを表す詩である。同時に、この時点で、五峰は既に北宋や南宋などの詩人に触れていること

がうかがえる。五峰詩の美妙かつ華麗な詩風を呈している。

次に、其の二首目の詩を見よう。

彫花鏤玉患才多 花を彫し 玉を鏤し 才多きを患ふ

笑比文妖意奈何 笑って 文妖に比す 意いかん奈何

詞客苦遭風月累 詞客 風月の累に遭ふを苦しむ

白香山亦老詩魔 白香山 亦た 老いたる詩魔

（彫刻した花紋や鏤刻した玉のように文章や字句を推敲・修飾する才能が多すぎること悩んでいる先生を、私は冗談に、「文妖」に喩えたいと思いますが、どう思われますか。先生のような文人でも詩文の患いに苦しむこともあるでしょう。白居易も自分を年取った詩魔と自称しています。）

承句にある「文妖」は、封建社会では正統的な思想に違反する文章とそのような文人に対する蔑称として用いられているし、文章を以て、人心を誑かし惑わすという意味として使われている。

結句にある「詩魔」は、病みつきになるような詩興・詩情を刺激して、作詩に耽らせる神秘的な力、或は、そのような力を持つ人を意味する。

五峰詩の起句にある「患才多」と、承句にある「文妖」と、結句にある「詩魔」という語は、明治一三（一八八〇）年五月に刊行された『新文詩』第六十集の森春濤「詩魔自詠并引 録六」と題する七言絶句の連作と関連があると考えられる。その「引」の部分引用しよう<sup>79</sup>。

點頭如来目予為詩魔。昔者王常宗以文妖目揚鐵崖。盖以有竹枝續盃  
等作也。予亦喜香奩竹枝者。他日得文妖詩魔并稱。則一生情願了矣。  
若夫秀師呵責。固所不辭也。(點頭如来、予を目して詩魔と為す。昔  
し、王常宗、文妖を以て揚鐵崖を目す。盖し竹枝、續盃等の作有る  
を以てなり。予も亦た香奩、竹枝を喜ぶ者なり。他日、文妖詩魔と  
并稱さるを得れば則ち一生の情願了せり。かの秀師の呵責のごとき  
は固より辭せざる所なり。)

ここで春濤は、自分は香奩体や竹枝詞のような艶体詩を好む。それで、  
點頭如来などから詩魔と評されても気にしない。逆に、いつか文妖と詩  
魔を併せて呼ばれたら本望だと語っている。

それから、その七言絶句の連作を読んでみよう。

空中之語寫魂銷

空中の語 魂銷を写す

可見才人結習饒

見るべし 才人 結習の饒あまたなるを

永劫不磨脂粉氣

永劫 磨せず 脂粉の氣

詩魔頼得並文妖

詩魔 さひはひに文妖と並ぶを得たり

(架空の言語を用いて、魂が消え入るほどの深い感動を描き出す。  
才人の偏った習慣・煩惱の多いが分かるだろう。長い年月が経って  
も、詩における女性のお化粧のような脂粉の気を消さないことにす  
る。それによって、「詩魔」と「文妖」という呼び名を並びに呼ばれ  
たら、幸いだ。)

平生不必患才多

平生 必ずしも才多きを患わず

奈此芬芳悱惻何

此の芬芳 悱惻いかんを奈何せん

若準滄浪當日說

若し 滄浪 当日の說に準ぜば

情天教主是詩魔

情天の教主 是れ詩魔なり

(日頃より才能の多いことを思い苦しむ必要がない。このように鬱  
憤がたまっているのは仕方が無いだろう。若し、あの『滄浪詩話』  
にある詩説に準えれば、愛情の世界の教主は詩魔であるだろう。)

上記の一首目の結句では、「詩魔」と「文妖」と併稱されれば幸いだと  
する春濤の心境がうかがえる。五峰詩の「笑比文妖意奈何(笑つて文  
妖に比す 意 奈何)」は、この春濤の詩句を踏まえたことが明らかであ  
る。また、二首目の起句では、日頃から、詩才が多いことで悩む必要が  
ないと詠い、その結句では、人の情愛の心を司る教主(自分)は実は詩  
魔であると結んでいる。五峰詩の「彫花鏤玉患才多(花を彫し 玉を鏤  
し 才多きを患ふ)」や「白香山亦老詩魔(白香山 亦た 老いたる詩魔)」  
の「詩魔」とは、それぞれに右記の春濤詩を踏まえたと考えられる。

ところで、五峰詩の結句「白香山亦老詩魔(白香山 亦た 老いたる  
詩魔)」とは、中唐詩人・白居易(七七二〜八四六)の「與元九書」  
に「知我者以爲詩仙、不知我者以爲詩魔。何則。勞心靈、役聲氣、連朝  
接夕、不自知其苦、非魔而何。(傍点筆者、以下同)(我を知る者は以て  
詩仙と爲す。我を知らざる者は以て詩魔と爲す。何となれば則ち、心  
靈を勞し、聲氣を役し、連朝接夕、自ら其苦をしらず、魔に非ずして何  
ぞや)」とあるのに因んだものだとも考えられる。「與元九書」は、白居

易が元和一三（八一五）年冬、江州（今の江西省九江市）司馬に左遷された時、友人の元稹に送った手紙である。その内容は白居易の文学観を示す作として知られる。白居易の号は香山居士であるため、五峰はここでは、師・春濤のことを白居易に例え、春濤の詩才を白居易のように詩魔に魅入られた人として讃えているわけである。

また、上記の春濤詩「詩魔自詠」の二首目の転句では、「若準滄浪當日説（若し 滄浪 当日の説に準ぜば）」と詠じているが、その句から見れば、「滄浪」とは、宋の嚴羽（約一一九二〜一二四三）の『滄浪詩話』<sup>81</sup>のことを示していると思われる。『滄浪詩話』の「詩辨」では、

夫學詩者以識爲主…入門須正，立志須高；以漢魏晉盛唐爲師，不作開元天寶以下人物。若自退屈，即有下劣詩魔入其肺腑之間；由立志之不高也。（夫れ詩を學ぶ者は識を以て主と爲す。入門は須く正しかるべく、立志は須く高かるべし。漢魏晉盛唐を以て師と爲し、開元天寶以下の人物と作らず。若し自ら退屈すれば、即ち下劣の詩魔有りて其の肺腑之間に入る。立志の高からざるに由りて也。）<sup>82</sup>

（詩を習う人にとっては見識が第一。正門を入らなければいけないし、目は高い所につける必要がある。漢魏晉盛唐を模範にすべきで、開元天寶から下った時代の人たちと同化してはいけない。修業に際が出てくると低俗な詩の魔物が、体の中に入り込む危険が多く、これは目標の立て方が低い結果である。）

春濤に好まれている「竹枝」の集大成者である劉禹錫<sup>83</sup>にも、また、同じく春濤から好まれている『香奩集』の著者である韓偓<sup>84</sup>にも、「詩魔」という語が現れている。従って、春濤の「詩魔」を愛する傾向は誰から影響を受けたかを定めることができないが、兎に角、「詩魔」という

語を肯定的に用いている詩人を春濤は愛好していた。

五峰の本詩は師春濤の詩才を半分冗談としつつ、上記のような春濤自身の詩作や言論に因んで、春濤を白居易のような「詩魔」だと断じて詠っている。平易な詩風を唱えている白居易のことに對する興味がかがえる。詩風は前一首と違い、華麗な詞藻を使わず、森春濤の詩作などに基づいて、忠実に詠じている。

では、引き続き五峰の春濤を歓迎する七言絶句連作の三首目の詩を見よう。

中車畫舫日追隨 中車 畫舫 日に追隨す

授我張郎膏蜜卮 我に張郎の膏蜜の卮さかすきを授けよ

只恨肝腸難改易 ただ肝腸の改易し難きを恨むのみ  
背人偷飲杜陵詩 人に背きて 偷飲す 杜陵の詩を

（幌をかけた車や美しく飾った遊覧船などで毎日春濤先生の傍に付き従っている。春濤先生は私に張郎の蜜酒を授けたが、ただ私の内心はなかなか変えにくいことに悩んでいる。相変わらず、先生には知らせずにこっそりと杜甫の詩を読んでいる。）

本詩承句にある「授我張郎膏蜜卮（我に張郎の膏蜜の卮を授けよ）」と転句にある「只恨肝腸難改易（ただ肝腸の改易し難きを恨むのみ）」とは、『雲仙雜記』卷之七「焚杜甫詩飲以膏蜜」に「張籍取杜甫詩一帙焚取灰燼以膏蜜頻飲之曰令吾肝腸從此改易（張籍杜甫詩の一帙を取りて焚き、灰燼を取り、副ふるに膏蜜を以てす。頻りに之を飲みみて曰く、吾が肝腸を此れ従り改易せしむと。）<sup>85</sup>」とある話を踏まえている。張籍はいつも杜甫の詩を書いてある紙を燃やし、その灰を蜜と一緒に練り合わせて

飲み、これで自分の心を変えるんだと言っていた。張籍（七六七〜八三〇）は中唐の詩人である。特に中唐樂府運動の重要な担い手であり、白居易・元稹とともに平易な詩風を唱える「元和体」を形成した文人でもある。しかし、燃やした杜甫の詩文を飲んで、杜甫のような偉大な詩人になりたいと願っていたのである。

五峰は本詩で、清の詩人張船山のことも取り入れていると考えられる。明治になってから清詩が漢詩壇において急速に流行した。その背景に、五峰の師である森春濤が、明治一一（一八七八）年一〇月、『清廿四家詩』を出版し、また、同年一二月に、独自の編集による『清三家絶句』を出していることがある。上記からうかがえるように、春濤は清詩の影響を強く受けた漢詩人の一人である。

この『清三家絶句』では、三人の詩人・張船山（一六五首）、陳碧城（二〇〇首）、郭頻伽（二七四首）の絶句を収録している。明治一四年夏末の森春濤の来瀉の時点では、ちょうど清詩は明治漢詩壇における大流行の時期に当たる。張籍の逸話を通し、春濤先生から漢詩に関する伝授・清詩を授かっていたことと、自分は張籍のように「肝腸從此改易」にならないことを示していると考えられる。それとともに、張船山などの清人風の詩を書くことができないことも案じている。本詩結句にある「背人偷飲杜陵詩（人に背きて 偷飲す 杜陵の詩を）」の「杜陵詩」は、杜甫の詩の意味として使っていると思われる。周知のように、杜甫の別号として、「杜陵野老」と「杜陵布衣」とも呼ばれているからである。此の詩句から、五峰自身はひそかにどこかで杜甫の詩を読んでいると想像できる。つまり、五峰は、当時、明治漢詩壇を風靡していた清詩よりも杜甫の詩（唐詩）のほうに関心を持ち、恩師・春濤の指導を受けているにもかかわらず、その少年時代の漢詩作風がなかなか簡単に変わりそうに無いことを自覚して嘆いているのである。

### 三、森春濤に対する送別の詩

『五峰遺稿』巻上<sup>87</sup>に収録しているもう一首の森春濤と関連がある詩を見よう。それは春濤が新瀉の旅を終え、東京に帰る時に、五峰から春濤への送別の七言律詩である。

送春濤先生東歸（春濤先生の東帰すを送る）

白首遨游滯越城	白首	遊びて	越城に滯るを邀ふ
酒樓僧閣徧逢迎	酒樓	僧閣	徧く逢迎す
煙霞養性平生志	煙霞	性を養うは	平生の志
天地留詩不朽名	天地	詩を留めるは	不朽の名
寧害秀師嘖綺語	寧ぞ	秀師の綺語を嘖るを害とせん	
尤憐白傳有風情	尤も	憐れむ	白傳に風情有るを
送行青女秋披錦	送行の青女	秋	錦を披る
一路信山楓色明	一路の信山	楓色	明かなり

（白髪の春濤先生は新瀉まで漫遊し、滯在している。酒樓や寺院などでことごとく歓迎される。ぼんやりとかすんで見えている山や林の中で、性を養って平生の志を全うする。世の中に不朽の詩が長く残るだろう。むしろ秀師から綺語なんぞとしかかれても構わない。もつとも心の惹かれるのは白居易の「長恨歌」の趣だ。先生を送別するため、昨夜、霜が降り、この秋に錦を被らせるように霜といった白と紅葉の赤・黄色いとこの絢いあう彩りは華やかで美しくなり、お帰りの道中でも信州の山々や紅葉などの色が一層鮮明になるだろう。）



本詩の起聯「白首遨游滯越城（白首 遊びて 越城に滯るを邀ふ）酒樓僧閣偏逢迎（酒樓 僧閣 遍く逢迎す）」は、森春濤の新潟を遊歴することの全体について、まとめている。東京漢詩壇の重鎮のため、春濤は在潟する時に、ほぼ毎日文人墨客との酒宴に呼ばれていたことがうかがえる。

前聯「煙霞養性平生志（煙霞 性を養うは 平生の志）天地留詩不朽名（天地 詩を留めるは 不朽の名）」は、森春濤の人生の志と詩名について、言及している。「煙霞」は山水、山林といった自然風景を意味している。ここでは遊歴体験の豊富な春濤のそれまでの人生を語り、春濤の詩作は後世まで長く残るはずの名篇だと詠じている。

後聯前半にある「寧害秀師嘖綺語（寧ぞ 秀師の綺語を嘖るを害とせん）」は、前述した『新文詩』第六十集に掲載された森春濤「詩魔自詠並引」の「引」に「若夫秀師呵責」とあるのを踏まえている。

後聯後半にある「尤憐白傳有風情（尤も 憐れむ 白傳に風情有るを）」の「白傳」は、唐の詩人・白居易の別称である。晩年、太子少傅になつたため、「白傳」とも呼ばれる。「風情」は白居易「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十（拙詩を編集して、一十五卷と成し、因つて卷末に題して、戲れに元九（元稹）・李二十（李紳）に贈る）」に「一篇長恨有風情（一篇の長恨 風情有り）」とあるのを踏まえている。それは白居易の「長恨歌」に描かれている風情を示している。

結聯にある「送行青女秋披錦（送行の青女 秋 錦を披る）一路信山楓色明（一路の信山 楓色 明かなり）」の「青女」は、霜雪の女神である。森春濤の新潟から東京へ帰る時期の自然風景・霜と紅葉の白と赤との綯い合う色彩の鮮やかさやその東京へ帰る道中の自然風景について詠じている。

以上、森春濤の新潟漫遊を五峰詩五首から見ると、春濤の来潟に当たって五峰から甚大な協力を得たのは確かだろう。明治一四（一八八一）年七月から同年一〇月まで、この約四ヶ月の新潟を漫遊した経歴から、春濤にとって、重要な詩集『新潟竹枝』が誕生した。その『新潟竹枝』の発兌書肆は、越後新潟の人・小林二郎<sup>三〇</sup>である。そこには、五峰などの新潟の詩人による評が書かれていて、新潟の詩壇への春濤の影響が見て取れる。

#### 四、森春濤における新潟来遊に関する詩作及び『新文詩』に掲載している『五峰遺稿』に未収録詩作

本節の「三」に至り、『五峰遺稿』に収録されている春濤の来潟に関する詩作の全五首を通して、招聘側の五峰の心境が明らかになってきたが、その招聘に応じる春濤にはそれに関連する詩作は無いだろうか。『春濤詩鈔』巻一五に「抵新潟寓阪口五峰宅五峰有讀春濤詩鈔詩次韻（新潟に抵<sup>いた</sup>り阪口五峰の宅に寓す。五峰に『春濤詩鈔』を讀むの詩有り。次韻す。）」と題する七言律詩連作二首がある。入谷仙介は『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』『春濤詩鈔』の本詩の脚注で、『五峰遺稿』にこの時の春濤歓迎の詩五首を収めるが、「春濤詩鈔を讀む」は見えない。『春濤詩鈔』は明治十四年刊行。すなわち出版直後であった<sup>三〇</sup>。としていたが、『五峰遺稿』には未収録の詩「讀春濤詩鈔題其後（『春濤詩鈔』を讀み、其の後に題す）」という七言律詩が『新文詩』第七五集（明治一四年九月）にあるのを発見した。また、五峰詩の次に春濤詩「次五峯見贈韻（五峯贈らるる韻に次す）」がある。それは上記春濤の七言律詩二首連作の二首目に当たるものである。『新文詩』に収録している五峰と春濤の

それぞれの詩を検討し、五峰と春濤との師弟関係について考えたい。

讀春濤詩鈔題其後〔春濤詩鈔〕を讀み、其の後に題す

五峰樵史 恭

遊戯人間六十年 人間に遊戯して 六十年

細將詩句證情緣 細かに詩句を將つて 情緣を證す

慧心將伴拈花佛 慧心 將に拈花佛に伴わんとす

妙悟應同指月禪 妙悟 應に指月禪に同ずべし

綺語豈為名士累 綺語 豈に名士の累わすらい為らんや

新篇儘得美人憐 新篇 儘く美人の憐みを得たり

流傳不朽三千首 流傳して 朽ちず 三千首

誰識前生是樂天 誰か 前生は是れ樂天と識らんや

起聯「遊戯人間六十年（人間に遊戯して 六十年）細將詩句證情緣（細かに詩句を將つて 情緣を證す）」は、春濤の人生と『春濤詩鈔』（明治一四年、「三十六湾集」より「糸雨殘梅集」に至る八集四卷本、二冊）の特徴に触れている。明治一四年は春濤の六三歳の年である。詩句にある「六十年」は、概数である。世間に生きること六十年という意味である。

前聯前半「慧心將伴拈花佛（慧心 將に拈花佛に伴わんとす）」にある「慧心」は、仏語であり、仏教の悟りの心の意味をしている。「拈花」は、「拈花一笑」のことであり、「拈花微笑」ともいう。禅宗で、以心伝心・教外別伝の法系を主張するのに用いる語である。靈鷲山（りようじゆせん）で説法した釈尊が、華を拈んで大衆に示した時、摩訶迦葉だけがその意を悟って微笑し、それによって、正しい法は迦葉に伝えられたとい

う話である。悟りについては拈花微笑の釈迦佛に従うという詩句である。

前聯後半「妙悟應同指月禪（妙悟 應に指月禪に同ずべし）」にある「妙悟」は、嚴羽『滄浪詩話』に「大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟。（大抵禪道は惟だ妙悟にあり、詩の道も亦妙悟にあり。）」とある用語である。

悟りの意味として使われている。「指月」は、『楞嚴經』における用語であり、指を以て教えに例え、月を以て法に擬えるという意味である。詩に對する悟りは、その『楞嚴經』の「指月」という禪に對する悟りのようなものだと言っている。日野俊彦『森春濤の基礎的研究』では、春濤自身が選んだ『清三家絶句』所収の三人の一人張問陶（船山）の詩を取り上げ、春濤がどのような意図で選んだかについて考察し、結論としては、「張問陶の作詩觀」と「禅味への関心」といった二つの理由を挙げている。春濤の仏教・禪に對する関心が高いことが五峰は当時、既に読み取っていたことがうかがえる。

後聯前半にある「綺語豈為名士累（綺語 豈に名士の累い為らんや）」の「綺語」は、もと仏教用語で、眞実に背いて巧みに飾り立てた言葉であり、十悪の一を意味している。春濤の美辭麗句は名士を煩わすことにはならないだろう。後聯後半にある「新篇儘得美人憐（新篇 儘く美人の憐みを得たり）」は、春濤の新しい詩作はすべて人品の優れた人たちの賞賛を得たと詠じている。

結聯「流傳不朽三千首（流傳して 朽ちず 三千首）誰識前生是樂天（誰か 前生は是れ樂天と識らんや）」は、春濤は凡そ三千首の詩作を残しているが、これは、その前世が三千首の詩を作った白居易だったからだろうと詠じている。

本詩の評者二人の評語も一緒に見よう。「學海曰後聯春濤老人定評確不可易（依田）學海曰く、後聯は春濤老人の定評、確として易う可からず」湖山曰何唯後聯句々皆確評（小野）湖山曰く、何ぞ唯だ後聯のみならん

や。句句皆確評たり。と、あるように五峰本詩にある森春濤に関する言及は定評としてよいくらい的確だと評価している。五峰本詩は森春濤の詩作に看取した特色を忠実に表現していることになる。清人袁枚の「性靈詩説」で重んじられている「眞性情」を表す詩風を呈している。

次に、上記の詩作の次に掲載されている春濤の「次五峯見贈韻（五峯贈らるる韻に次す）」を見よう。

湖海君曹最妙年 湖海 君が曹 最も妙年

相逢一笑豈非縁 相ひ逢ひて一笑するは豈に縁に非らざらんや

言々詩有不言妙 言々 詩に有り 不言の妙

色々心參無色禪 色々 心は參ず 無色の禪

客裏感多秋易涙 客裏 感多く 秋 涙し易く

老来才減佛応憐 老来 才減じ 佛 応に憐れむべし

夕陽紅墜芙蓉水 夕陽 紅墜つ 芙蓉の水

蕭寺鐘聲欲雨天 蕭寺の鐘聲 雨ならんと欲する天

本詩起聯前半にある「湖海君曹最妙年（湖海 君が曹 最も妙年）」の「君曹」は君ら、五峰のことを指している<sup>9.1</sup>。その後半にある「相逢一笑豈非縁（相ひ逢ひて一笑するは豈に縁に非らざらんや）」は、五峰との出会いは縁でなくて何だろうかと反問し、五峰との師弟関係を結ぶのは運命的な出会いだと詠っている。

前聯前半に「言々詩有不言妙（言々 詩に有り 不言の妙）」とある「不言妙」とは、禪にある「不立文字」、「以心伝心」といった標語の意味として使っていると考えられる。悟りは文字・言説をもって伝えることができず、心から心へ伝えるものである。詩句にはその字面の意味があるが、その字面の言外・不言の意味もあるはずである。それは清人王士禎

が首唱している「神韻」詩説の主旨と一致している。今關天彭は、森春濤の詩は「香奩体と神韻派を一つにしたもの、清麗なる文辞、纏綿たる情緒、宛転たる音節に加ふるに清新なる感興があり、その間に俗情媚態の厭ふべきものがないとは云はぬが、何としても我国の有する一天才<sup>9.2</sup>」であると評している。揖斐高は「春濤が先駆的に紹介し、春濤自身の詩を特色づけるものとして大きな影響を受けたのは、清の王漁洋<sup>9.3</sup>の神韻説の詩論であつた<sup>9.4</sup>」と、今關天彭と同様に、神韻派の影響を強調している。神韻派とは、清詩の流派の一つであり、言外の余韻を重んずる説を唱え、清の王士禎が主張した詩説である。唐の王維・孟浩然の詩風を受け、限られた言葉のなかに無限の情緒を求め、自然と「我」が混然一体となる詩境を理想とした。

前聯後半に「色々心參無色禪（色々 心は參ず 無色の禪）」とある「無色」とは、仏教用語「無色界」を踏まえた詩句だと思われる。「無色禪」は無の境地に至る禅という解釈もある<sup>9.5</sup>。前聯二句は五峰の詩に「詩」に対する妙悟と「禪」に対する妙悟があることを述べている。『五峰遺稿』には「禪」に関する詩が一二首見られる。五峰の「禪」に関する詩作は本章第五節で述べたい。

後聯前半にある「客裏感多秋易涙（客裏 感多く 秋 涙し易く）」の「客裏」とは、郷里を離れている期間を意味している。ここでは、六三歳の春濤は他郷に居てその旅愁や郷愁などといった、感慨無量の心境を詠っている。

後聯後半にある「老来才減佛応憐（老来 才減じ 佛 応に憐れむべし）」は、年を取ってから、詩才が減ずることを感じて、仏様に年寄りに慈悲をかけてくれるようにと詠う。

結聯「夕陽紅墜芙蓉水（夕陽 紅墜つ 芙蓉の水）蕭寺鐘聲欲雨天（蕭寺の鐘聲 雨ならんと欲する天）」とは、当時の新潟の自然を描いている。

夕陽が西に沈んで、水中の蓮の花が赤く映じている風景や寺の鐘の鳴り響く音やそろそろ雨天になりそうな空模様を詠じている。

森春濤の本詩は、二つの主題を表していると考えられる。七言律詩の起聯と前聯四句は五峰との運命的な出会いを語り、その「詩」に対する妙悟と「禅」に対する妙悟に言及し、宋の嚴羽が述べている「大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟（大抵禪道は惟だ妙悟にあり、詩の道も亦妙悟にあり）」<sup>96</sup>。についてほのめかしている。後聯と結聯四句は春濤自身及び今回の旅先について詠じている。秋に異国にいる憂愁の心情を描き出し、新鴻の自然風景で歌い終えている。詩の後半には、春濤の特徴とされる「憂愁」が歌い込まれているが、これが五峰の詩と著しい対象をなす点である。

### 第三節 森春濤門下としての詩

#### 一、森春濤について

五峰の詩を述べる前に、まず、師である森春濤について、簡単に紹介しておく。

森春濤は一八一九年に尾張一宮（現愛知県一宮市）で生まれた。名は魯直で、春濤は号である。生家は代々医者であった。初めは尾張の鷲津益齋に師事した。同門に大沼枕山がおり、互いに詩作に切磋琢磨した。

一八五〇年に江戸に出て上野東叡山の惑学寮に仮住まいし、江戸に出た枕山と旧交を温め、詩作に耽ったが、生活難、及び病によりその年のうちに尾張に戻った。一八五六年に京都の梁川星巖門下に入り、関西の文人たちと交流し、評判を高めた。一八六三年名古屋に移り、桑三軒

吟社を開き、丹羽花南・奥田香雨・永坂石埭・神波即山などを教えたが、永井荷風の父、禾原も門下にいた。一八七三年、『岐阜雜詩』一卷を発行した。一八七四年に東京に移住、茉莉吟社を結成し、門人の養成を行った。一八七五年に『東京才人絶句』二巻を発行し、同年七月に明治初めての漢詩専門雜誌「新文詩」の刊行を始めた。徳山樗堂、橋本蓉塘、岩溪裳川等を門下とした。清詩の紹介を行ったりしたが、詩風は艷体詩を主体としていた<sup>97</sup>。

揖斐高は春濤の詩風について「春濤の詩風を特徴づける艷体の詩のなかで目立つのは、竹枝と香奩体<sup>98</sup>」であると述べている。近藤春雄による春濤の略歴では、その「詩風は艷体を主とし、絶句を第一」とした。そこで、春濤が劉禹錫の「竹枝詞」の形式（七言四句）と韓偓の「香奩」体詩（艷体詩）を綯い混ぜて歌い続けたと言えよう。森春濤の詩風を表す物として、小野湖山が春濤に贈った詩が有名である<sup>99</sup>。それは明治八年に小野湖山の「題森春濤蓮塘詩後<sup>100</sup>」と題する詩である。

千古香奩韓渥集 千古の香奩 韓偓集

繼之次也竹枝詞 之に繼いで 次なるは 竹枝詞

兩家以外推妍妙 兩家以外 妍妙を推せば

一種森髻艷體詞 一種 森髻の艷體詞

上記詩句の「千古香奩韓渥集（千古の香奩 韓偓集）」に触れている「香奩韓偓集」とは、唐の詩人・韓偓（八四二〜九二二）の詩集『香奩集<sup>101</sup>』のことを指している。『香奩集』は江戸末期（文化八年・一八一二）に翻刻され、流行した<sup>102</sup>。その『香奩集』には、宮廷生活を題材とした七

言の近体詩が多い<sup>103</sup>。また、それらの詩作が一種の詩風として「香奩体」と呼ばれている<sup>104</sup>。鈴木虎雄は、韓偓の「香奩体」はすなわち艶体詩であると概念付けている<sup>105</sup>。その形式は劉禹錫の「竹枝詞」の単一化と違い、多様でほぼすべての詩体が用いられている。以上のように森春濤は艶体詩の大家として知られていた。

## 二、五峰の艶体詩

『五峰遺稿』三九二首の詩のうち、題名に明確に「竹枝」という語を使った詩作は一首しかない。それは、本論文の第一章の第三節で述べた「幽月再寄竹枝乃又和之（幽月再び竹枝を寄す。乃ち又た之れに和す）」と題する七言絶句である。その時点で、五峰は既に森春濤の弟子山中耕雲と親交があり、彼を通じて東京漢詩壇の消息を知ったと考えられる。それでは、春濤の新潟来遊の後の五峰の詩作を検討し、五峰の詩風の変化を追究してみよう。

まず、『五峰遺稿』に載っている竹枝詞の詩作を掲げる。

### 新潟秋詞（新潟秋詞）二首

珠簾映水影新涼	珠簾	水に映じ	影	新涼
畫槳搖秋趁夕陽	畫槳	秋を揺らし	夕陽	を趁ふ
只怕風吹橋畔柳	只だ	風の	橋畔の柳	を吹くを怕れるのみ
落巢鳥亦箇中藏	落巢の鳥	亦た	箇の中に	藏す <small>かく</small>
樓臺宛在古江湄	樓臺	宛も古き江の湄	に在り	

暮笛吹愁入碧漪	暮笛	愁を吹ひて	碧漪に入る
欲往從之秋色遠	之に從つて	往かんと欲すれども	秋色 遠し
芙蓉花落白妃祠	芙蓉の花落つ	白妃の祠	

上記二首は「新斥秋詞」という詩題で七言絶句二首連作の形、明治一五（一八八二）年八、九月の『新文詩』第八六集に掲載されている。二首ともに字句における違い<sup>106</sup>がある。ほぼ年代順で編纂されている『五峰遺稿』によれば、本詩は明治一二（一八七九）年、五峰二一歳、山中耕雲を通して、春濤に詩を送り、指導を受けたものだとは推測できるが、前述した『新文詩』第五六集に掲載されている五峰のデビュー作の前後に当たり、まだ、春濤と面会をしていない時期だと推知できる。

本詩の詩題「新潟秋詞」から見れば、地元・新潟の初秋に関する竹枝である。詩句から見ると、二首ともに水郷・新潟の水風景に注目し、詠じている。一首目は新潟の「七十二橋成六街」のように無数の橋があるという風景をメインにし、綺麗な珠簾は水に映し、秋の初め頃の涼気や夕陽がまだ完全に沈んでいない内に舵を漕いで新秋の趣などを感じている。多数の橋の袂にある柳が新秋の風で靡いている。巢に帰る鳥はまたこの夕陽が沈んでいく風景の中に隠されている、という新潟をめぐる堀に架かる無数の橋の風景を描きつつ、夕陽が西に沈んでいく風景を詠じている。二首目は楼台が古い入り江に臨んでいる。夕暮れに誰か笛を吹いて、その秋の愁いを表している笛声や風と共に澄み切っている川水に入るような風景を描き出し、その漂っている笛声を追いかけてようとするところ、秋の気色がまだ遠くて、蓮の花が白妃の祠に落ちたばかりであるという本当の秋の到来が待ち遠しい心境・余韻を表している。

本詩の詩風は詩題「新潟秋詞」とはいえ、二首目の結句「芙蓉花落白妃祠（芙蓉の花落つ 白妃の祠）」とあるように、作詩時期は晩夏だと推

知できよう。それは晩夏の風景を描くより初秋の愁いを表現しようとする詩人の工夫だと言える。それは詩人の秋めいてきた晩夏を描くことを通して、本当の秋の到来を心待ちにしている気分を表現したいと考えられる。

次に、五峰の艶体詩を見よう。『五峰遺稿』の編集順から見れば、本詩は明治一六（一八八三）年、五峰二五歳の詩作であり、森春濤の来潟の後、春濤から面授を受けた後の作詩になる。

題舟江嬉春圖（舟江嬉春圖に題す）四首中の二首

酒旗風外佛幡飄ひるがえる

喧靜中分水一條 喧靜を 中分す 水一條

蝴蝶去來今綺夢 蝴蝶の去來 今の綺夢

鴛鴦七十二紅橋 鴛鴦 七十二紅橋

天開罨畫樓臺麗 天は罨畫を開きて 樓臺 麗し

節屆嬉春士女嬌 節は嬉春に届きて 士女 嬌し

我是三生香火客 我 是れ 三生 香火の客

慣從禪榻聽吹簫 禪榻より吹簫を聴くに慣れたり

（酒屋の看板としてたてた旗だけではなく、お寺の幡も翻っている。喧と静を一筋の川が真ん中から分けている。蝴蝶の去來は今綺麗な夢を見ているごとくである。鴛鴦が泳ぎ七十二の紅橋が川に架かっている。晴天の中、色の鮮やかな楼台が麗しく、その季節に至ると、春景色の中で楽しむ男女の姿が艶っぽく美しい。私の三生（過去、

現在、未来）はすなわち焼香をして旅する僧であるため、坐禅用の腰掛からこのような簫の音を聴くのに慣れている。）

起聯前半「酒旗風外佛幡飄（酒旗の風外 佛幡 飄る）」は、杜牧詩「江南春絶句」を、前聯後半「鴛鴦七十二紅橋（鴛鴦 七十二紅橋）」は、柏木如亭詩「新潟」を踏まえ、両者の詩の雰囲気を踏襲している。

結聯後半「慣從禪榻聽吹簫（禪榻より吹簫を聴くに慣れたり）」にある「禪榻」と「吹簫」は、清・陳維崧（一六二五～一六八二、著名詞人）「沁園春 贈別芝麓先生 即用其題『烏絲詞』」に「禪榻吹簫 妓堂説劍也算男兒意氣場」とあるのを踏まえている。『五峰遺稿』では「禪榻」という語彙を使用している詩作はもう一首がある。題名「鬢絲禪榻小影（鬢糸 禪榻の小影）」という七言律詩である。本章第五節で述べたい。

本詩の詩題「題舟江嬉春圖（舟江嬉春圖に題す）」から、この詩作は「舟江嬉春圖」という絵画に因んでそこに描かれている風景を詠じていると考えられる。五峰は本詩の一句目から六句目を通して、舟江・新潟の春らしい風景を呈している。その風、その水、その蝶々から、睦まじい鴛鴦とたくさんの紅色の橋との色彩の配合を工夫し、春爛漫の自然風景と女性たちの天真爛漫を一気呵成に詠じている。最後の七句目と八句目では、寺院に目を移し、自身のことを旅の僧に例え、そのような華やかな風景とは一線を画した境涯にある自分を演出している。本詩の詩風は、市井の春を楽しむ場面を生き活きと再現するとともに、対照的にその喧騒から離れた自分を描くことで終わる。動中の静を描く詩と言えよう。

畫舫搖搖盪碧波 畫舫 搖搖として 碧波を盪す

虹橋南畔訪春過 虹橋の南の畔を 春を訪れて 過ぐ

魚能比目難離水 魚 能く 比目して 水を離れ難し  
屋是銷金尚姓鍋 屋 是れ 銷金 尚ほ鍋と姓す

帘鞆一重紅杏雨 帘は鞆たれること一重 紅杏の雨

風香十里綠珠歌 風は香ること十里 綠珠の歌

此間題詠悉名士 此間 題詠 悉く名士  
不讓西湖佳話多 西湖佳話多きに譲らず

古街酒樓鍋茶屋尤有名 古町の酒樓、鍋茶屋尤も有名なり。

春翁竹枝所謂銷金鍋即是 春翁の「竹枝」にいわゆる銷金鍋、即ち是れ。

名士題詠甚多 名士の題詠甚だ多し。

(華麗に飾った遊覧船が揺ら揺らして澄み切っている川水を動かしている。虹の形の橋の南のほとりを過ぎるのは、春を楽しむためだ。魚は並び泳ぐことができて、水を離れがたい。屋は金箔を散らして飾っているし、更に、鍋と名づけている。酒屋の一重の暖簾が垂れ下がり、赤い杏の花が満開する時に雨が降り出している。風が香りを十里の所まで漂わせ、西晋の大富豪として有名な石崇の寵姫緑珠が歌った歌も聞こえるだろう。ここを題にして詠んだ歌はみんな有名な人の作ばかりであるため、『西湖佳話』にあるたぐさんの話より劣らない。古町の酒樓の中でも、鍋茶屋という店は最も有名である。春濤翁の『新瀉竹枝』の中に言及している「銷金鍋」は即ちこの鍋茶屋のことである。有名な人の題詠は大変多い。)

領聯後半「屋是銷金尚姓鍋(屋 是れ 銷金 尚ほ鍋と姓す)」と尾聯前半「此間題詠悉名士(此間 題詠 悉く名士)」は、尾聯最後にある五峰の自注「古街酒樓鍋茶屋、尤有名。春翁「竹枝」所謂銷金鍋、即是。名士題詠甚多。」から見れば、この詩句は師・森春濤の『新瀉竹枝』第

二三首に「銷金鍋底匿身來(銷金鍋底 身を匿し來るを)」とある詩句に因んだと考えられる。

尾聯後半「不讓西湖佳話多(西湖佳話多きに譲らず)」にある「西湖佳話」は、清初の短編小説集の名前である。その小説集の内容は水郷・杭州にある西湖の名所旧跡にまつわる人物たちの逸話や伝記などである。五峰はここでは、水郷・新瀉にまつわる逸話や題詠などはその有名な西湖より劣らないほど多いことを表現していると思われる。

本詩は前一首と同じ、「舟江嬉春圖」を詠じている。一句目から六句目まで、舟江と呼ばれる新瀉の豪華な舟や虹の形の橋や並んで泳いでいる魚や鍋茶屋という老舗、風で靡いている暖簾や春の雨などを通して、画面に描かれている風景をありのままに呈している。七句目と八句目は水郷新瀉を水郷杭州に比べ、名士たち題詠する話題になっている新瀉の話は杭州の西湖にまつわる『西湖佳話』の話より多いと詠い終える。本詩は、前一首と同じく絵画から現実を連想させる仕組みを取り、春らしさが満ちあふれている画面を再現している。

この詩は、前掲した五峰の実弟南義二郎の「春濤一過、北越の詩は皆茉莉園派ならざるなしといふ有様」という言葉を髣髴とさせる艶体詩となっている。

### 三、非艶体詩について

『五峰遺稿』に未収録の明治一四年一月の『新文詩』第七六集に載せられている五峰作「山中耕雲見似病中書感詩蓋次予近作韵也乃豊原韵却寄(山中耕雲「病中書感」詩を示さる。蓋し予が近作の韵に次するなり。乃ち原韵に疊し、却って、寄す)」と題する七言律詩一首を見よう。

断梗浮萍任去留 断梗浮萍 去留に任す

江湖何處續前遊 江湖 何處か 前遊に續けん

疎燈痕墜芙蕖水 疎燈 痕墜つ 芙蕖の水

遠笛聲殘楊柳秋 遠笛 聲殘る 楊柳の秋

至竟才人原善病 至竟 才人 原と 病に善し

由来名士是多愁 由来 名士 是れ 多愁

雲山有夢應相慰 雲山 夢有り 應に相ひ慰むべし

一樣飄零未白頭 一樣 飄零 未だ白頭にならず

(漂泊不定な断梗浮萍のように行くことと留まることは赴くままに

任せよう。世の中、どこが以前の遊びに続いているか。疎らな灯り

の影が水の中の蓮の花に投影している。遠くから聞こえる笛の音が

秋の楊柳に残っている。結局、才人は病気がちなものだ。もとより

世間によく名を知られた人はいつも憂鬱と哀愁のため心が沈んでい

るものだ。雲山の夢がある限り、お互いに慰めあうべきだ。私もあ

なたも同じ様に落ちぶれているが、未だに白髪頭にはなっていない

よ。)

本詩は五峰にとって、極めて重要な詩友山中耕雲に関する詩作である。

起聯前半「断梗浮萍任去留(断梗浮萍 去留に任す)」の「断梗浮萍」

は、漂泊不定、一定の住居または生業がなく、さまよい歩くことの意味

として使われている成語である。「任去留」は、陶淵明(三六五〜四二七)

「歸去來兮辞」に「曷不委心任去留(曷んぞ 心に委せ 去留に任せず

や)」とあるのを踏まえている。起聯後半「江湖何處續前遊(江湖 何處

か 前遊に續けん)」にある「何處續前遊」は、清・陸以湑(一八〇一〜

一八六五)『冷廬雜識』卷四「秋鴻館詞」に「人過北郭傷離別。待重逢、

何處續前遊。尋鴻跡」とあるのを踏まえている。起聯全体は世の中でさ

まよい歩くことは自由に任せ、また、どこかで邂逅になるだろうと詠じている。

前聯前半「疎燈痕墜芙蕖水(疎燈 痕墜つ 芙蕖の水)」は、前述した

森春濤「次五峯見贈韻(五峯の見贈の韻に次す)」詩の結聯前半「夕陽紅

墜芙蕖水(夕陽 紅墜つ 芙蕖の水)」を踏まえている。その後半「遠笛

聲殘楊柳秋(遠笛 聲殘る 楊柳の秋)」は、明の才女馮小青<sup>107</sup>の唯一

の詩文集『焚余稿』の「書信一封 與某夫人書」に「乃至遠笛哀秋、孤

燈聽雨」とあるのを踏まえている。前聯全体は詩人の孤独感を表してい

る。

後聯「至竟才人原善病(至竟 才人 原と 病に善し) 由来名士是多

愁(由来 名士 是れ 多愁)」は、山中耕雲から見せてもらった「病中

書感」詩が言及している「病」に触れ、名士の感傷的な氣質を詠じてい

る。

結聯「雲山有夢應相慰(雲山 夢有り 應に相ひ慰むべし) 一樣飄零

未白頭(一樣 飄零 未だ白頭にならず)」は、孤独な二人はお互いに優

しく接して、病から来たしている痛みや苦しみ、憂鬱と哀愁から来たし

ている悲しみなどを慰めつつ、幸いに頭にまだ白髪が出ていないという

慨嘆を詠い終える。

本詩について、小野湖山が「春濤一遊北地詩風大變於諸子唱和觀之(春

濤一遊して、北地の詩風大いに變ず、諸子の唱和に於て之を觀る)」とい

う評を下している。五峰の本詩は王士禎の神韻派のような詩作だと考え

られる。親友の病で弱がってきた心を慰めつつ、まだ若いよ、夢がある

限り、大志を抱き、諦めないで頑張りましょうというエールを積極的

に送っているという余韻が漂っていると思われる。清・王士禎の神韻説の

ような詩風を呈していると言えよう。

『五峰遺稿』卷上に「贈山際柳堤(山際柳堤に贈る)」<sup>108</sup>と題する七



言律詩がある。明治一五（一八八二）年二月、『新文詩』第八九集に掲載された詩作でもある。語彙の違いが多少ある。本詩も森春濤の来瀉した後の詩作である。

忽擲衣冠臥故廬 忽ち 衣冠を擲ち 故廬に臥す  
十年多事讀何書 十年 多事 何の書を読みりや  
文章於我終無用 文章 我に於いて 終に無用  
出處知君綽有餘 出處 知る 君に綽として餘有るを

舟合五湖追范蠡 舟は 合まひに五湖へ 范蠡を追ふべし

家徒四壁擬相如 家は 徒だ四壁のみ 相如に擬す

市樓沽酒同長嘯 市樓に酒を沽って 同じく長嘯す

一笑秋風鬢未疎 一笑す 秋風 鬢 未だ疎ならざるを

（急に官服と冠を捨て投げ、旧居に身を隠した。長い年月、仕事が多く、本を読む暇もなかった。文章というものは、私にとつて、結局、役に立たないことだ。出仕と野に退くことについては、君へ山際柳堤）のほうに余裕綽綽だ。船に乗って、五湖へ行った范蠡を追いかけるべきだろうし、家の中には何物も無く、周りにただ壁ばかりあることだけは司馬相如と似ている。酒樓でお酒を売り、声を長くひいて、詩や歌を吟ずることは同じであるが、秋風に吹かれる鬢がまだ抜け落ちていないのは笑える。）

山際柳堤は山際操のことであり、『五峰餘影』では五峰の遊学時代や青年時代や『新文詩』に投稿する事情などに詳しい証言を語っている人物でもある。本論文第一章の「第二節 初期上京時期の詩と上京回数」の「二回目の上京」では、五峰と山際との初会について触れた。また、本

章の「第一節 森春濤入門まで及び『新文詩』にデビューする詩」、及び「第二節 森春濤来瀉時期の詩」でも、五峰とともに『新文詩』第五六集に詩を載せられたことや、五峰の森春濤を迎える詩作はこの山際柳堤の詩に次韻したことに言及した。

本詩首聯前半「忽擲衣冠臥故廬（忽ち 衣冠を擲ち 故廬に臥す）」の「臥故廬」は、陸游の五言律詩「致仕後述懷」に「韋布還初服（韋布 初服に還す）蓬蒿臥故廬（蓬蒿 故廬に臥す）」とあるのを踏まえている。頸聯の前半「舟合五湖追范蠡（舟は 合まひに五湖へ 范蠡を追ふべし）」にある「范蠡」とは、春秋時代の越王・勾踐の功臣である。会稽の戦いに敗れた勾踐を助けて呉王夫差に復讐させた。のち官を退いて、船に乗って、五湖へ隠退した人物である。この詩句はこの故事を踏まえている。

頸聯の後半「家徒四壁擬相如（家は 徒だ四壁のみ 相如に擬す）」にある「相如」とは、司馬相如のことである。「家徒四壁」とは、『史記』の「司馬相如伝」の中の話である。司馬相如の家は極めて貧乏であり、家の中に家財がなく、ただ四方の壁だけが立っていることから、極めて貧しいことの喩えとして使われている。

尾聯前半「市樓沽酒同長嘯（市樓に酒を沽って 同じく長嘯す）」は、司馬相如が居酒屋の亭主として酒を売っていたことを典拠としている。

本詩の詩風は范蠡や司馬相如などの歴史人物の話借り、友人山際柳堤が、酒樓において吟唱してはいるが、笑って、秋風に吹かれた髪の毛はまだ疎らになっていないというふうにならしている。才子風な作詩とまでは言えないし、艶体詩でもない。ただし、最後にある一句「一笑秋風鬢未疎（一笑す 秋風 鬢 未だ疎ならざるを）」は、官を辞めた山際柳堤を励ます五峰の気持ち表現している。

本詩について、春濤が「聞柳堤近日罷官刻苦讀書蓋欲大有所示也秋風鬢未疎勉旃勉旃（聞くならく、柳堤近日官を罷め、讀書に刻苦す、と。

蓋し大いに示す所あらんと欲するなり。『秋風 鬢 未だ疎ならざるを』  
勉めよや、勉めよや」という評を下している。山際が官を辞め、文業に  
専念しようという気持ちを受け止め、その成果を期待しているし、五峰  
詩句にある「秋風鬢未疎（秋風 鬢 未だ疎ならざるを）」は、その刻苦  
勉励に対する激励の言葉として解釈できる。

『五峰遺稿』巻上に「新正三日書懷（新正三日 懷を書す）」と題する  
七言律詩がある。明治一六（一八八三）年四月、『新文詩』第九三集に掲  
載された詩でもある。語彙の違いが多少ある。本詩も春濤の来鴻後の作  
である。

新正三日書懷（新正三日 懷を書す）

淑氣先通鳥語邊 淑氣先ず通ず 鳥語の邊

辛盤接上誕辰筵 辛盤 接上す誕辰の筵

開春蕩蕩第三日 開春蕩蕩たり第三日

落地匆匆廿五年 落地匆匆たり二五年

慧業竟應從謝後 慧業は竟に謝の後に従ふべく

才名肯道愧盧前 才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道はん

蕭然丈室梅花下 蕭然たる丈室 梅花の下

笑署頭銜是病禪 笑ひて署す頭銜是れ病禪

（和やかな新春の雰囲気が先ず鳥の鳴き声のあたりに感じられる。

五辛盤<sup>10</sup>が私の誕生日の宴に次々と出てくる。新春のゆったりし  
たこの三日に私はこの世に生まれ出て、以来、あわただしく二五年  
を過ごしてきた。慧業はやはり謝（靈運）には及ばず、才名は盧（照  
鄰）の前にあることを愧じなければならない。物寂しい狭い居室は

梅の花の下にあり、若し仮に、署名をしなければならぬとすれば、  
笑つて、「病禪」と記すのである。）

本詩は「淑氣先通鳥語邊（淑氣先ず通ず 鳥語の邊）辛盤接上誕辰筵（辛  
盤 接上す誕辰の筵）」と始まり、和やかな誕生日の宴の様子が目の前  
に展開されている。頷聯の「開春蕩蕩第三日（開春蕩蕩たり第三日）落  
地匆匆廿五年（落地匆匆たり二五年）」からすれば、この詩は五峰の二五  
歳の誕生日の七言律詩だと推定できる。事実、五峰年表によると、誕生  
日は一月三日であり、この詩は誕生日に因んで作られたものである。  
新春の穏やかな三日目に生まれてから、あわただしく二五年の年月が経  
ってしまったという誕生日における感慨が表されている。

本詩の中で最初に注目したい言葉は、頷聯の冒頭の「慧業竟應從謝後  
（慧業は竟に謝の後に従ふべく）才名肯道愧盧前（才名は肯て盧の前  
にあるを愧ずと道はん）」という対句に登場する「慧業」である。この語句  
の典故は、『宋書<sup>11</sup>』の以下の叙述である。

太守孟顓事佛精懇、而為靈運所輕、嘗謂顓曰：「得道應須慧業文人、  
生天當在靈運前、成佛必在靈運後。」顓深恨此言。

大意は以下の通りである。太守である孟顓は仏教を信ずることが大変  
熱心なもの、（謝）靈運には軽視されていた。ある時謝靈運が孟顓に「悟  
りを会得するにはまさに教理に通じた文人であるべきだ。あなたが天に  
生まれたのはまさに靈運より前のことだったが、仏となるのはきつと私  
の後になるだろう」と言った。顓はこの言葉を深く憎んだ。

「慧業」という言葉は、本来仏の知恵に裏付けられた行為を、更には  
仏教の教理に通じていることを意味する。そう考えると、頷聯の前半で

ある「慧業竟應從謝後（慧業は竟に謝の後に従ふべく）」というのは、自分の仏教についての知識はついに謝靈運に及ばないだろうという意味になる。しかし、頸聯の後半「才名肯道愧盧前（才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道はん）」ということからすれば、「慧業」は、単に文業のことを言っているように見える。

次に、「盧前」という言葉であるが、これについては、『舊唐書<sup>111</sup>』に左のような記述がある。

烟與王勃、盧照鄰、駱賓王以文詞齊名、海內稱爲王楊盧駱、亦號爲「四傑」。烟聞之、謂人曰：「吾愧在盧前、恥居王後。」

楊炯は王勃、盧照鄰、駱賓王とともに文章や詞などで名を馳せていたが、世評は「王、楊、盧、駱」の順番で呼んでいた。楊炯がそれを聞いて、人に「私は盧（照鄰）の前に自分が位置づけられることを恥ずかしく思い、一方、王（勃）のような人物の後に自分が位置づけられるのも恥ずかしい」と嘆いた、ということである。後、上記の四人のことを「初唐の四傑」と称する。

この記述からすれば、前半の「慧業竟應從謝後」の「慧業」も、文業についてのことを比喩的に述べているのではないかと思われる。五峰が「新正三日書懷」において、自らを、智恵は無論、「謝」の後に従い、詩才が「盧」の前に出ることを恥じると述べたのは、先人に対する尊敬の気持ちと自分の作詩才能に対する謙遜の気持ちとが表現されたと見てよい。同時に、二五歳になったばかりの人物の言葉としてみれば、相当な自負心と自尊心との高さが感じられる。

本詩について、森春濤が「後來詩壇四傑以盈川自居者非吾五峯而誰也（後來、詩壇の四傑に盈川を以て自ら居る者は吾が五峯に非らずして、

誰ならん。）」という評を下している。「盈川」は、「初唐の四傑」の二人目である楊炯のことである。楊は晩年、盈川県の県令になったことに因んで、「楊盈川」とも呼ばれる。森春濤は五峰を将来の漢詩壇の四傑の一人楊炯に例え、五峰に対する膨大な期待を表している。楊炯の詩風は南北朝時代の「宮体詩」に反対し、気骨のある、剛健な作風を主張している。楊に詩篇は多くないが、「從軍行」などの辺塞詩がある。それらの詩篇は共に雄健な風格を表している。五峰の詩風は第一章でも、本章でも既に引用した森春濤の指摘の通り、剛健の気を帯びていることになるが、本詩に関する森春濤からの評語は、五峰が漢詩壇における楊炯のような雄渾な作風の持ち主だと称揚しているのである。

#### 第四節 五峰と清詩

阪口五峰の詩作は清詩を知る以前と以後では、傾向が変化したと言われている。本節では、五峰の漢詩文集『五峰遺稿』にある漢詩の中から清詩との関係が明確な詩を選択し、五峰がいつ頃から清詩と接点を持ち、どのような影響を受けたのかを探りたい。

##### 一、五峰と清詩との接点

まず、五峰と清詩との接点を考える。

江戸の享保年間から明治時代まで、清詩のアンソロジーは断続的に出版されていたが<sup>112</sup>、特に明治になってから清詩は漢詩壇において爆発的に流行した。神田喜一郎は、日本の江戸時代から大正時代まで清詩の流行について、次のように述べている。

江戸時代の末期から明治大正年代に至る約百年間における清詩の流行は、じつにすさまじいものがあつた。當時の漢詩人は、われいちに先を争つて清詩を讀んだものである。李・杜・韓・白の詩は讀まなくとも、厲樊榭だの黄仲則だの張船山だの陳碧城などといふものには、何をおいても飛びついた。<sup>113</sup>

五峰の漢詩の師である森春濤も、明治一（一八七八）年一〇月、『清廿四家詩』を出版し、また、同年一二月に、独自の編集による『清三家絶句<sup>114</sup>』を出していることからもうかがえるように、清詩の影響を強く受けた漢詩人の一人である。

今關天彭は、春濤の詩は「香奩体と神韻派を一つにしたもの、清麗なる文辞、纏綿たる情緒、宛転たる音節に加ふるに清新なる感興があり、その間に俗情媚態の厭ふべきものがないとは云はぬが、何としても我國の有する一天才<sup>115</sup>」であると評している。香奩体とは、唐の韓偓の『香奩集』に始まる宮媛・閨女などを詠じた艶麗な詩風であつて、このような艶体詩と清詩の神韻派の融合したものが春濤詩の特色であるとしているのである。揖斐高も春濤の詩風の特徴は艶体詩にあるとし、「春濤の詩風を特徴づける艶体の詩のなかで目立つのは、竹枝と香奩体<sup>116</sup>」であるとしている。竹枝は、「竹枝詞」「竹枝曲」「竹枝歌」とも言い、唐代の巴渝（今の四川省東部）一帯の民歌に始まる形式の詩である。内容は、多くが巴山、蜀水の自然や風景、風土や習俗、男女の恋情を歌つたもので、形式は七言四句、言葉は自然で素朴、風格は清新で婉曲である。晩唐・五代の頃、それが発展して「詞」となり、詞牌の一つとなつた<sup>117</sup>。日本では近世後期、江湖詩社を結成した市河寛齋の『北里歌』、その門人である柏木如亭の『吉原詞』、菊池五山の『続吉原詞』、深川竹枝（水東竹枝詞）などの詩集が盛んに詠じられた<sup>118</sup>。また揖斐高によれば、春

濤の清詩との関係については、「日本では十八世紀後半に山本北山によって紹介喧伝され、江戸後期の詩風に大きな影響を与えた」清の袁枚の性靈説は、「春濤の師星巖が所属した江湖詩社の詩人たちによって十九世紀の初頭に鼓吹され、春濤が活躍した幕末頃にはすでに一般化していた詩論」であるとし、春濤と性靈説との関係はあまり重要視する必要がなく、「春濤が先駆的に紹介し、春濤自身の詩を特色づけるものとして大きな影響を受けたのは、清の王漁洋<sup>119</sup>の神韻説の詩論であつた<sup>120</sup>」と、今關と同様に、神韻派の影響を強調している。神韻派とは、清詩の流派の一つであり、言外の余韻を重んずる説を唱え、清の王士禎が主張した詩説である。唐の王維・孟浩然の詩風を受け、限られた言葉のなかに無限の情緒を求め、自然と「我」が混然一体となる詩境を理想とした。

このように、今關天彭や揖斐高によつて、森春濤の詩は詩風としての香奩体、形式としての竹枝、詩論としての神韻説を特徴とするとして評されている。しかし、五峰と清詩の関係を考へる場合、春濤と性靈派との関係を無視するわけにはいかない。春濤が編纂した『清三家絶句』は、神韻説の詩人ではなく、性靈詩派に近い詩人である張船山（一六五首）、陳碧城（二〇〇首）、郭頻伽（一七四首）の絶句を収録しているし、その「序」において巖谷一六は、「春濤翁、選清張船山・陳碧城・郭頻伽三家絶句、上梓。其詩雋妙雅麗、讀之可以發揮性靈也。曩者、江湖社諸老、首唱宋詩、有范・楊・陸三家刊本。海内靡然、詩風一變。今斯選行世、余知騷壇俊英有所嚮往而眞性靈之詩出矣。（春濤翁、清の張船山・陳碧城・郭頻伽三家の絶句を選び上梓す。其の詩は雋妙雅麗にして、之を讀めば以て性靈を發揮すべきなり。曩者、江湖社諸老、宋詩を首唱し、范・楊・陸三家の刊本有り。海内靡然として、詩風一変す。今斯の選の世に行はるれば、余、騷壇俊英の嚮往して眞の性靈の詩の出づる所有るを知る。）」

と、この詩集によってむしろ性靈説が鼓吹されることを期待しているからである。

ほぼ年代順に編集されている『五峰遺稿』において、森春濤の来瀉以前の五峰の詩には、清詩と関連がある表現は見当たらない。『五峰遺稿』において初めて清詩と関わる詩は、春濤が新瀉を離れる時に作られた「送春濤先生東歸」と題する七言律詩の次に配置された「歳暮雜感」（明治四年）と題する七言律詩四首連作の二首目の詩である。そこには、「談到性靈詩未眞（談性靈に到るも詩未だ真ならず）」という詩句が見られ、性靈説を春濤から教えられたものの、いまだ自分の詩においてそれを実現するに至っていないという自覚が示されている。また、清人の詩に和韻した漢詩には「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」三首（二五歳作）がある。その他、詩句や詩の自注や引などの中に清詩と関わりが明確に示されている漢詩は以下の通りである。

- ・「去秋春濤先生見贈新刻詩鈔近日又獲湖山樓詩集枕山詩鈔率題七律四首」四首中の三首目（二四歳作）。「徒摹格調氣應死 能正性情詞乃葩」
- ・「消夏六詠用蔭山晚香韻」六首中の二首目（二五歳作）。「八體窮法則 萬卷資性靈」
- ・「和武者城川寒燈夜讀書屋原韻」六首中の三首目と五首目併せて二首（二五歳作）。イ、「奇才袁子才」ロ、「詩本不關學」
- ・「借忙吟 并引」（二六歳作）。「借病隨園意太奇」
- ・「還鄉卽事」九首中の七首目と九首目併せて二首（二八歳作）。イ、「我亦爲呼小笛漁（自注に「笛漁小稿」云々とある。）」、ロ、「不見朱家老釣師（自注に「謂朱朴堂也」云々とある。）」
- ・「北越詩話成作五絶句」五首中の五首目（六一歳作）。「工夫借病借忙餘（自注に「袁子才有『借病』詩云々とある。）」

最後の詩を除き、他のすべては五峰二〇代の頃の詩作であり、春濤を知って以後の作である。つまり、五峰は春濤の弟子山中耕雲や春濤本人を通して清詩を知ったと推測することができる。

五峰の周辺の人物の証言によれば、五峰の清詩との関係は、明治二二年の春濤門下の山中耕雲との交友に始まると言われる。山際操の回想談には、

明治十二年十月ごろ、加賀の金澤に新聞記者をしてゐる人で山中耕雲といふ春濤門下の詩人が新瀉へ漫遊して來ましたが、この人は五峰君が最初上京中に知り合つた間柄で、無論五峰君は眞つ先にこの人と新瀉に會した、そして自分をもよび迎へて三人一所に語りました。（中略）當時耕雲はわれくに對して詩を作るには從來のやうに李杜韓白もよろしいが清朝人の詩を見なければどうも村氣が去らなと思ふ、よろしく張船山などの作を見るべきだと勸めてゐたので、五峰君も自分も少からずこれに動かされるやうになつたのでした<sup>121</sup>。

とあり、この時、張船山を始めとする清詩が中央で流行していることを知ったと思われる。この直後、同年一二月には、春濤の主催する『新文詩』第五六集に、五峰の初めての艶体詩「送友人遊新瀉<sup>ママ</sup>（友人の新瀉に遊ぶを送る）」と題する七言絶句が載せられることになる。そして、その二年後の明治一四（一八八一）年の夏の末頃、森春濤が新瀉に來遊し、およそ二ヶ月以上五峰の宅に滞在した。五峰の実弟で『新文詩』や『新瀉才人詩』にもその漢詩が載せられている詩人である南義二郎<sup>122</sup>によると、「阪口（五峰）の紹介で正を春濤に請ふもの履常に戸外に滿ち春濤

一過、北越の詩は皆茉莉園派ならざるなしといふ有様で」あつた、とある。明治一四年一月の『新文詩』第七六集に載せられている五峰詩「山中耕雲見似病中書感詩盖次予近作韵也乃置原韵却寄（山中耕雲「病中書感」詩を示さる。盖し予が近作の韵に次するなり。乃ち原韵に置し、却つて、寄す）」と題する七言律詩一首（王士禎の神韻派のような詩）について、小野湖山が「春濤一遊北地詩風大變於諸子唱和觀之（春濤一遊して、北地の詩風大いに變ず、諸子の唱和に於て之を觀る）」という評を下しているところからも、五峰を初めとする新潟の漢詩壇が森春濤から大きな影響を受け、その中に清詩の影響が含まれていたことがうかがえる。

清詩の五峰への影響の痕跡は、明治一五（一八八二）年一月の五峰の詩「去秋春濤先生見贈新刻詩鈔近日又獲湖山樓詩集枕山詩鈔率題七律四首（去秋、春濤先生、新刻の『詩鈔』を贈らる。近日、又た『湖山樓詩集』『枕山詩鈔』を獲る。率ひて七律四首を題す）」四首中の三首目に、その明らかな痕跡を見ることが出来る。

不彫不琢絶浮華 彫ず 琢かず 浮華を絶す

秀骨天成蔑以加 秀骨 天成 以つて加うる蔑し

萬曆之間輕七子 萬曆の間 七子を輕んず

乾隆以後數三家 乾隆以後 三家を數う

徒摹格調氣應死 徒に 格調を摹せば 氣應に死ぬべし

能正性情詞乃葩 能く 性情を正せば 詞乃ち葩なり

大雅遺音誰會得 大雅の遺音 誰か會得せん

一言足蔽思無邪 一言 蔽ふに足る 思ひに邪無し

首聯において肯定的に述べられている「不彫不琢（彫ず 琢かず）」、「秀骨天成」が現れているような詩風と対比的に、頷聯前半において否定的に扱われている「萬曆之間輕七子（萬曆の間 七子を輕んず）」の「萬曆」は、明の万曆（一五七三〜一六二〇）年間のことである。「七子」は、明の前七子の「文必秦漢 詩必盛唐（文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐）」といった復古を唱えた文学的主張を継承した明の後七子、李攀竜・王世貞・徐中行・宗臣・梁有誉・吳国倫・謝榛のことである。（明の前七子は明の弘治・正徳（一四八八〜一五二一）年間に活躍した七人の文人、李夢陽・何景明・辺貢・徐禎卿・康海・王九思・王廷相である。<sup>123</sup>）

頷聯後半「乾隆以後數三家（乾隆以後 三家を數う）」の「三家」は、袁枚・趙翼・蔣士銓という乾隆の三大大家のことを指している。清新さを目指し、情の働きを重んずる性靈説の主唱者が肯定的に取り上げられているのである。

頷聯前半「徒摹格調氣應死（徒に 格調を摹せば 氣應に死ぬべし）」の「格調」は、沈徳潜の詩派「格調派」のことを指している。沈徳潜（一六七三〜一七六九）は、袁枚たちと同じ乾隆時代の詩壇の重鎮であり、性靈派の袁枚に対し、表現の様式や言語的音調など「詩の形式的外面的要素を重視する」<sup>124</sup>格調説を唱えた。ここでは、五峰の格調派に対する否定的な考えが示され、同時に、頷聯後半「能正性情詞乃葩（能く 性情を正せば 詞乃ち葩なり）」では、格調派と対極的關係として存在している性靈派に対する肯定的な観点が表されている。

尾聯前半「大雅遺音誰會得（大雅の遺音 誰か會得せん）」の「大雅」は『詩経』の一つの構成部分であり、尾聯後半は、孔子が『詩経』のあり方を述べた、「子曰、『詩』三百、一言以蔽之、曰思無邪（子の曰く、

『詩』三百、一言以てこれを蔽う、曰わく思よこしまい邪よこしまなし」<sup>125</sup>（『論語・爲政』とあるのを踏まえる。「思無邪」は邪心のない純粹な心のことである。このような孔子の詩に対する考え方に性靈説が結びついているという考えを、この詩から読み取ることができる。

この詩の原詩が明治一五年一月の『新文詩』第八八集に掲載されている。題名は「案上有春濤先生及枕湖二翁詩集率題四律亦瓣香私淑之意也（案上に春濤先生及び枕、湖二翁の詩集有り、率ひて四律を題す。亦、瓣香私淑の意なり。）」となっており、詩句にも多少違いがあるが、これに対する森槐南の評には「槐南曰、第三首、絶大眼孔、絶大議論。括盡一部隨園詩話。王漁洋・沈徳潜輩空架子。竟是架不成。枉惹人笑話。（槐南曰く、第三首は絶大なる眼孔、絶大なる議論なり。一部の『隨園詩話』を括盡す。王漁洋・沈徳潜輩の空架子、竟に是れ架成らず。いたづらに人を惹きて笑話せしむ。）」とあり、袁枚の性靈説を要約し、王漁洋の神韻説・沈徳潜の格調説を批判したものとされている。

上記の五峰の詩においては「徒摹格調氣應死（徒に格調を摹せば氣應に死ぬべし）」として沈徳潜の格調説が否定されるのに対し、「能正性情詞乃葩（能く性情を正せば詞乃ち葩なり）」と、性情・性靈を強調する袁枚の性靈説が肯定されている。春濤を通じての清詩の五峰への影響は、この詩から性靈説であったことが読み取ることができる。（明治一八（一八八五）年一二月に出版された『新潟才人詩』第二集の水落鷗水詩「柳橋酒樓別水野櫻雨<sup>126</sup>（柳橋酒樓にて水野櫻雨と別る）」に対しての五峰の評に「五峯曰風調絶佳王新城流派（五峯曰く、風調絶佳、王新城の流派なり）」と王新城すなわち王士禎<sup>127</sup>の詩風、すなわち、神韻派の詩風が肯定的な形で言及されており、五峰は神韻派も肯定的に捉えていたようであるが、槐南の前詩に対する評では、五峰が神韻派の王士

禎を否定的に捉えていたとしており、五峰と神韻派の関係については、別に追究したい。）

## 二、五峰と張船山（一七六四〜一八一四）

ここでは、前述のように神田喜一郎が明治時代に「これを學んだり次韻したりしてゐる者が少くない」と指摘し、五峰が次韻した唯一の清詩である張船山の詩「佛前飲酒浩然有得（仏前に酒を飲み、浩然として得る有り）」と五峰の詩を比較し、五峰の詩への張船山の影響を探ってみよう。

『清史稿』<sup>128</sup>には張船山について次のように記述されている。

張問陶、字は仲冶、遂寧の人、大學士鵬翮の玄孫。詩名・書畫を以て亦た俱に勝る。乾隆五十五年進士。檢討改御史由り、復た吏部郎中に改めらる。出でて萊州府の知となる。上官の意に忤い、遂に病を乞う。吳・越に遊び、未だ幾もならずして、蘇州において卒す。始て袁枚を見るに、枚曰く、「老いて死せざる所以の者は、未だ君の詩を讀まざるを以てのみ」。其の之を欽挹すること此の如し。著に船山集有り。（原文漢文）

（卷四八五列伝二七二文苑二）

また、胡伝淮による最新の『張問陶年譜』によれば、張船山の名は張問陶であり、四川省遂寧県の人である。大學士張鵬翮の玄孫であり、「詩人世家（詩人の代々の名門）」と言われるほどの家柄の持ち主である。詩を以て有名であっただけではなく、書畫にも優れていた。乾隆五五（一七九〇）年に進士となり、以後、翰林庶吉士、同檢討、江南道御史、吏

部郎中を歴任した後、山東省萊州知府となるが、上官との関係が悪く、嘉慶一七（一八一二）年に、その職を辞し、蘇州に居を定めた。同一九（一八一四）年に、五一歳で没している。夙に詩名は高く、袁枚をして「老いて死せざる所以の者は、未だ君の詩を読まざるを以てのみ。」と、張船山に対する敬意を表さしめている<sup>129</sup>。近藤光男は、張船山の詩は「生氣に富み骨力もあつて、袁枚をはじめ当時の諸名家とはまた異なつた一境界をひらいた<sup>130</sup>」と評している。

清代の「神韻」、「格調」、「性靈」、「肌理」などの詩説の中、最も影響力を示しているのは、復古を唱えた明の前後七子を批判する袁枚の「性靈」説であり、その詩風は『隨園詩話』に言う、「有性情而後真（性情有つて而して後真なり）」、「從性情而得者、如出水芙蓉、天然可愛（性情に従ひ而して得る者は、出水する芙蓉の如し、天然愛す可し）」というものである。例えば、袁枚の詩論に「作詩不可無我（作詩に我無かるべからず）」という主張があるが、張船山の詩もそれと同じ観点を有している。張詩「論文八首」その七に、「詩中無我不如刪（詩中に我無ければ刪るに如ず）」とあるように、詩中に「我」が無いような詩は削除したほうがいいとある。更に、「論詩十二絶句」その十に「模宋規唐徒自苦（宋を模し唐を規とするに徒に自ら苦しむ）古人已死不須争（古人已に死して争うを須いず）」とあり、「題屠琴隴論詩図」その三に「規唐摹宋苦支持（唐を規とし宋を模する 支持するに苦しむ）也似殘花放幾枝（也た殘花の幾枝を放るるに似たり）」とあるように、いたずらに唐宋の詩を模範とするのに反対し、明の七子におけるような典故の堆積を批判している<sup>131</sup>。しかし同時に、張船山自身は袁枚の性靈説を学んだことを否定している。自分の詩が袁枚に学んでいると言われ、彼は「頗有謂余詩學隨園者笑而賦此（頗る余の詩隨園に学ぶと謂う者有り、笑ひて此れに賦す）」と題する詩二首を作つて反論した。曰く、

詩成何必問淵源

詩の成るは何ぞ必ずしも淵源を問わん

放筆剛如所欲言

放筆剛まきに言はんと欲する所の如し

漢魏晉唐猶不學

漢魏晉唐猶お學ばず

誰能有意學隨園

誰か能く意有りて隨園に學ばん

また、

諸君刻意祖三唐

諸君刻意三唐を祖とす

譜系分明墨數行

譜系分明として墨數行

愧我性靈終是我

愧ず 我が性靈の終に是れ我なるを

不成李杜不張王

李（白）杜（甫）にも成らず 張（籍）王（建）にも成らず<sup>132</sup>

このように袁枚の「性靈」説の自身への影響を認めず、ただ性情を自由に発露することを求めた<sup>133</sup>。以上のように、張船山本人が袁枚から直接に影響を受けたことを認めないにもかかわらず、性靈説とほとんど一致している詩論を持っていた。そのため、張船山が袁枚から影響を受けたか否かにもかわならず、中国でも日本でも張船山は性靈詩派の詩人として認識されている。

次に、張船山の「佛前飲酒浩然有得」〔清廿四家詩〕による）と題する七言律詩四首連作に注目し、その詩への五峰の次韻した七言律詩三首連作「佛前飲酒浩然有得次張船山韻（仏前に酒を飲み、浩然として得る有り。張船山の韻に次す）」と比較しながら、五峰と張船山との詩風の共通点と相違点を探ってみよう。



張船山詩「佛前飲酒浩然有得」<sup>134</sup>の一首目

野鶴閑雲信所之 野鶴 閑雲 之く所に信す<sup>まか</sup>

百年随分強支持 百年 分に随い 強ひて支持す

地中人比骷髏少 地中の人は骷髏に比して少なし

眼底縁惟骨肉奇 眼底の縁は惟だ骨肉のみ奇なり

算我榮枯同草木 算するに我が榮枯は草木に同じ

勝他疑信亂著龜<sup>マ</sup> 他の疑信して著龜に乱るに勝れり

夜深鬼問開天事 夜深くして 鬼は問ふ 開天の事

大醉搖頭笑不知 大醉して 頭を揺らし 笑ひて知らず

(野原に遊ぶ鶴や静かに空に浮ぶ雲は、赴くままに任せよう。自分は一生涯を分に従って精一杯生きてゆくとしよう。世間に出た者でちゃんと墓地に埋葬されている人は、野ざらしになっている人より少ない。縁あるものうち本当に大事なものは骨肉の關係だけだ。占いにかけると私の榮枯は草木のように自然次第だと言われる。だがそれも他人のように占いの結果を信じたり疑ったりして心を乱すよりずっと良からう。深夜になると、鬼が天地開闢のことなど尋ねてくるが、しかし、私は大いに酒に酔ってしまい、頭を横に揺って、そんなことは知らないよと笑いながら答えるだけだ。)

この詩は庚戌(一七九〇)年、張船山二七歳で進士になった後<sup>135</sup>の作だと推定される。詩題の中では仏教的な表現と道家的な表現が結合されている。「仏前」とは、仏様の前、仏壇の前という意味で当然仏教的で

あるが、その次に出ている「浩然」とは、ゆったりとして俗事から解放された屈託のない心境を表す<sup>136</sup>。意味に使われる言葉であり、ここでは隱逸的傾向性を表す言葉と考えられる。「得る有り」は、『南史・隱逸傳上・陶潛』に「少來好書、偶愛閑靖、開卷有得、便欣然忘食(少來書を好み、偶ま閑靖を愛す。開卷得る有れば、便ち欣然として食を忘れる)」<sup>137</sup>とあるのを踏まえている。

鈴木虎雄は、袁枚の「性靈」詩説の大意に関して、『性情の流露するにまかせて自由に述べ凡ての形式法則の束縛を受けず。古人の糟粕を嘗めずして清新機巧を以て之を行る、是を眞の詩とす』といふに歸す、其の説、之を『性靈』の説と稱す。蓋し性情の靈妙なる活用を貴ぶに取れり<sup>138</sup>と指摘している。その特徴について、以下のような項目にまとめている。

イ、詩は「性情」に本づくべし

ロ、詩には我あるを要す

ハ、詩はたゞ工拙を論ずべし

ニ、詩談數則

曰く意を主とし辭彩を奴とす。

曰く意は精深、語は平淡

曰く材料を消化すべし丸呑みにすべからず。

曰く典故を用ふる痕迹なきを要す、僻典は用ふべからず

曰く、寫景は易く言情は難し<sup>139</sup>

また、前述した張船山の詩風とともに、上記の張の詩を照らし合わせれば、確かに張は自身の(イ)「性情」に基づいて詠じているし、「性靈」詩説の(ロ)「我ある」の詩風や、張の主張した「詩中無我不如刪」、

「寫出此身真閱歷」といった詩論を反映していると思われる。具体的にみると、詩の首聯後半「百年随分強支持（百年 分に随い 強ひて支持す）」や頸聯前半「算我榮枯同草木（算するに我が榮枯は草木に同じ）」は、詩人の自身の真情（仕途に対する感慨）や経歴（元官吏の父親の失脚で、十五歳から、最低基準の生活さえも保障されていなかったことなど、物心両面で大変苦勞していた。ほぼ七年間の受験生活を過ごし、漸く進士に合格した）を基にして詠じている。「百年随分強支持（百年 分に随い 強ひて支持す）」の「強ひて」には、自分の境遇に満足し切れていない心境が表わされており、「勝他疑信亂著龜（他の疑信して著龜に乱るに勝れり）」の「勝れり」には、強いて運命に満足している自分のほうが、じたばたしている他人よりはましだと言う他人との比較による自己満足がある。本当には満足しきれないのを酒で紛らわすことにしているのである。「大醉搖頭笑不知（大醉して 頭を揺らし 笑ひて知らず）」の「笑」という字は、そのような詩人の屈折した気分を表していると思われる。

次に、五峰の次韻詩を検討しよう。五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」<sup>140</sup>其一

快事眼前寧過之	快事	眼前	寧 <small>いずく</small> ぞ	之を過さん
蟹螯與酒手雙持	蟹螯と酒と	手に雙つながら持たん		
自拚塵世緣皆吝	塵世を拚 <small>はら</small> ひて自り	緣 皆 <small>やぶら</small> な吝 <small>か</small> なり		
不祭錢神癖亦奇	錢の神を祭らぬ癖	亦 <small>また</small> 奇 <small>あ</small> なり		
我豈無情同木偶	我 豈 <small>いか</small> に無情 <small>むじやう</small> にして	木偶 <small>ぼく</small> と同じからんや		

人誰有意解金龜 人 誰か意有りて 金龜を解かん  
 謫仙落托長安市 謫仙 落托す 長安の市  
 未遇風流賀監知 未だ風流の賀監知に遇わず  
 （愉快な物事が目前にあるのにそれをほっておいていいものか。珍味としての蟹のはさみも酒も両手に持って味わおう。この塵の世を払い落とそうとしてから人との縁は薄くなった。錢の神様に頭を下げない性向は世間では珍しい。しかし、この私にも人の心はあり、人形と同じではない。だれか賀知章のように金龜（高位の身分の者が着けた装身具）を酒に変えてともに楽しむ人がいないものか。「謫仙」と言われる李白が長安の町で落ちぶれている時に文雅な賀知章に会うことができたが、まだ私はそのような人に遇っていない。）」

首聯の後半「蟹螯與酒手雙持（蟹螯と酒と 手に雙つながら持たん）」は、『晋書・畢卓伝』に「卓嘗謂人曰：『得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣。（酒を得て數百斛船に満たし、四時（春夏秋冬）甘味を兩頭に置き、右手に酒杯を持ち、左手に蟹螯を持ち、酒船の中に拍浮すれば、便ち一生を了るに足る。）」とあるのを踏まえている。

頷聯の後半「不祭錢神癖亦奇（錢の神を祭らぬ 癖 亦た奇なり）」は、清・鮑康『泉選』に「我料浪仙応鼓掌（我 浪仙（中唐詩人・賈島の字）応に鼓掌すべきと料る）詩篇不祭錢神（詩篇を祭らず 錢の神を祭る）」とあるのに拠る。唐の馮贄の『雲仙雜記』に、「賈島は常に歳除を以て一年に得る所の詩を取り、祭るに酒脯を以てす。曰く、吾精神を勞り、是を以て之を補う、と<sup>141</sup>」とある。五峰は世人の金の神様を祭る「塵世」とは一線を画している自分の有り様を「奇」と意識しているのだろう。この五峰の自らを「奇」とする意識の有り様は、張船山からの影響が考

えられる。王英志は張船山が特に「奇氣」を重視したことに強調しているが<sup>142</sup>、ここでは、春濤が独自に編集した『清三家絶句』にある張船山の詩の中で、このような「奇氣」を表している詩を参看したい。

「酔後口占<sup>143</sup>」（乾隆五五（二七九〇）年、二七歳作）

錦衣玉帯雪中眠　　錦衣　玉帯　雪中に眠る

酔後詩魂欲上天　　酔後の詩魂　天に上らんと欲す

十二萬年無此樂　　十二萬年<sup>144</sup>　此の樂しみ　無し

大呼前輩李青蓮　　大呼す　前輩の李青蓮

（錦の衣服を着て、玉で飾った帯を身に付けて、酔っ払ったまま雪の中で眠る。酔った後の詩心は天に上ろうとする。天地開闢以来、このような楽しいことは無い。先人・李青蓮（李白）を大きな声で呼んでみる。）

「奇氣」とは、詩人自らの非凡な氣質を忌憚なく發揮し、ほしのままに振舞う態度を指している。『張問陶年譜』によると、張は二一歳から科挙の合格に努力し、父親の仕途上の変遷のため、いろいろな苦勞を経た後、二七歳の時に漸く進士に合格した。この詩作はちようど進士になったばかりの作である。その六年間に父親の元赴任先・漢陽から京城までの往来、また、故郷・遂寧から京城までの往来をおよそ三回繰り返し、大変な苦勞をして功名を求めた。本詩の張船山は身分の高さを表す「錦衣玉帯」を身に付けているが、酒を飲んで酔い、雪の中に寝てしまう。夢の中で彼の詩魂は天界まで上ってゆく。その空前の樂しみと喜びを、自分と同じように朝廷にありながら泥酔して詩を作った先人・李白を呼んで共に分かち合おうとする。宇宙開闢以来、このような喜びを知った

のは自分と李白だけだと豪語する詩である。このような「奇氣」の表現は、他の性靈詩派の詩人には見られない自己主張を含んでいる<sup>145</sup>。五峰の「不祭錢神癖亦奇（錢の神を祭らぬ　癖　亦た奇なり）」とする意識は、張船山の超俗的な「奇氣」と通ずるものがある。

第六、七、八句は、李白詩「對酒憶賀監二首　并序」の「序」に「太子賓客賀公、於長安紫極宮一見余、呼余爲謫仙人、因解金龜換酒爲樂、歿後對酒、悵然有懷、而作是詩。（太子賓客賀公、長安の紫極宮に於いて余を一見し、余を呼んで『謫仙人』と爲し、因って金龜を解いて酒に換え樂みを爲す。歿後に酒に對して、悵然として懐い有りて是詩を作る。）」とあるのに拠る。

詩の内容は張船山の原詩との関連性が薄いし、詩の全体から見ても、原詩と必ずしも同じではない。張船山の場合はその首聯では、「野鶴閑雲」は自然に従うが、自分は与えられた分に従い、人生を歩いていくと詠じ、その頷聯では、世の中では、骨肉の關係こそが重要な絆であることを確認している。その頸聯では、「算我榮枯同草木（算するに我が榮枯は草木に同じ）」と自分の運命が自然とともにあることを歌っている。最後の尾聯では、酔中の夢の中で、鬼から天地開闢のことを聞かれたことに対して、そんな大層なことは知らないよと笑いながら答える。全体として、張船山のこの詩は、道家的表現の背後に不満を隠しつつ、自らに与えられた運命に対する諦念を詠じていると言えよう。

一方、五峰の場合は詩の首聯「快事眼前寧過之（快事　眼前　寧んぞ之を過さん）蟹螯與酒手雙持（蟹螯と酒と　手に雙つながら持たん）」では、張の原詩と違い、真先に飲酒の場面を描いている。頷聯「自拚塵世緣皆各（塵世を拚ひて自り　縁　皆な各かなり）不祭錢神癖亦奇（錢の神を祭らぬ　癖　亦た奇なり）」は、自分が金錢に執着する俗世界と縁を切ってしまったって孤立していることを述べ、頸聯と尾聯では、自分を本当

に知ってくれる人と邂逅していない嘆きを、「李白と賀知章」の「金龜換酒」のような典故を使って連想させる形式を取っている。「我豈無情同木偶（我豈に無情にして木偶と同じからんや）人誰有意解金龜（人誰か意有りて金龜を解かん）謫仙落托長安市（謫仙落托す長安市の市）未遇風流賀監知（未だ風流の賀監知に遇わず）」という議論の中には、彼の風流世界への憧れが表現されているのである。恩師・春濤から指摘された五峰の「天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びて」<sup>146</sup>いるとあるように、議論の上からその天性・真情・性情が表れていると思われる。張船山の詩には屈託した心境が表われているのに対し、五峰の詩にはそのような屈託が感じられない。

張船山詩「佛前飲酒浩然有得」の二首目

虚舟随意触蓬萊 虚舟 随意に 蓬萊に触る  
此豈乘風破浪来 此れ豈に風に乘じ浪を破りて来るならんや  
天若有情猶識我 天 若し情有らば 猶ほ我を識る  
人如無命不須才 人 如し命無くんば才を須ひず  
誰傳死後詩千首 誰か傳へん 死後 詩千首  
莫放生前酒一杯 放す莫かれ 生前 酒一杯  
懶向嬈嬈驚臥犬 嬈嬈に向かひて 臥犬を驚かすに懶し

陶然沈醉亂書堆 陶然 沈醉 亂書堆し

（無人の船のような恬淡虚心たる心境にあれば、行こうと思えばいつでも蓬萊に行き着くことができる。それは決して風に乗る、荒波

を乗り越えて行くというようなものではない。天に若し情があれば、私を知って出世させるだろう。自分にもそのような運がなければ、才能を用いることなく野に居るだけのこと。誰か死後自分の千首の詩を後世に伝えてくれるものがあるだろうか。むしろ生きている間一杯の酒を手放さずにいるほうがいい。奇書をもとめて天帝の書庫がある所に行き、寝ている番犬をわざわざ起こすことはない。いい気持ちに酔っ払って、乱雑に積み上げた書物の中に埋もれているほうがいい。）

首聯の前半「虚舟随意触蓬萊（虚舟 随意に 蓬萊に触る）」は、『莊子・山木』に「方舟而濟於河、有虚船來觸舟、雖有偏心之人、不怒。（舟を方べて河を濟るに、虚船来りて舟に触るる有れば、偏心の人有りと雖ども怒らず。）」とあるのを踏まえている。恬淡虚心たる心境の比喩として用いる。その後半「乘風破浪」は、『宋書』「列伝凡六十卷 卷七六 列伝第三六 宗愨」に「愨年少時、炳問其志。愨曰：『願乘長風破萬里浪。』（愨年少の時、炳其の志を問ふ。愨曰く『願 長風に乗じ万里の浪を破らん』と。）」とあるのに拠る。

頸聯「誰傳死後詩千首（誰か傳へん 死後 詩千首）莫放生前酒一杯（放す莫かれ 生前 酒一杯）」は、杜甫詩「不見（原注：近無李白消息）」に「敏捷詩千首 飄零酒一杯」とあるのに拠る。

尾聯の後半の「陶然沈醉亂書堆（陶然 沈醉 亂書堆し）」の「陶然」は、陶淵明の詩『時運』の「揮茲一觴、陶然自樂」という用語に拠る。

この二首目の張船山の詩は一首目と同じく、進士になった後、翰林の庶吉士<sup>147</sup>に選ばれた時期の作である。翰林院で様々な知識を学んではから各種の職を授かるという時期になるわけである。首聯「虚舟随意触蓬萊（虚舟 随意に 蓬萊に触る）」 此豈乘風破浪来（此れ豈に風に乗じ

浪を破りて来るならんや」と頷聯「天若有情猶識我（天 若し情有らば猶ほ我を識る）人如無命不須才（人 如し命無くんば才を須ひず）」からは、張船山が当時の六年間の浪人生活を辛抱し、抱負を抱いて科挙にやっと合格し、翰林院に選ばれたけれども、実際、翰林院に入ると、その才を發揮することができないという実態を経験した時の、その登竜門前後の格差の大きさに対する不満や失望などの心境が読み取れる。そのため、頸聯「誰傳死後詩千首（誰か傳へん 死後 詩千首）莫放生前酒一杯（放す莫かれ 生前 酒一杯）」と尾聯「懶向嬋嬋驚臥犬（嬋嬋に向かひて 臥犬を驚かすに懶し）陶然沈醉亂書堆（陶然 沈醉 亂書堆し）」において、その才を發揮できないことから妥協的な態度を取ることになったことがうかがえる。首聯の前半の「虚舟」によって、道家的な「無為自然」を表面的には装っているが、内心の屈託を「沈酔」のなかに紛らしているのが感じられる。張の「論文八首」（『船山詩草』卷九）に「詩中無我不如刪」、「論詩十二絶句」（『船山詩草』卷一一）に「寫出此身真閱歷」と主張しているように、「有我之境」を表現する詩であると思われる。

五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」其二

百年賤辱老蒿萊	百年の賤辱 老蒿萊
面目唯能保本來	面目 唯だ能く本来を保つ
舉世驚猜真怪物	舉世 驚き猜う 眞の怪物かと
受人憐惜豈奇才	人に憐惜を受くるは 豈に奇才ならんや
禪追蘇晋逃于酒	禪は蘇晋を追いて酒に逃げ
詩仿長江祭以杯	詩は長江に仿いて祭るに杯を以てす
債鬼滿前齊叩首	債鬼 前に満ちてみな叩首す

先生笑坐亂書堆 先生 笑ひて坐る 乱書の堆  
（一生涯低い身分のまま偏僻なところで年取ったが、本来の面目だけは保つことができた。世の中の人は皆驚いて本物の怪物かと疑った。しかし人から憐み惜しまれるのは、決して奇才の持ち主とは言えないだろう。「禪」は、蘇晋のように酒に逃れ入り、「詩」は、賈島のように酒杯を以って祭ろう。債鬼たちはみな目の前で頭を地につけて借金を払ってくれと拝むだろうが、当の先生は笑いながら散乱している本の山の中に坐っているだけ。）

第一句の「百年賤辱老蒿萊（百年の賤辱 老蒿萊）」の「百年」は、張船山の原詩一首目にある「百年随分強支持（百年 分に随い 強ひて支持す）」の「百年」と同じく、大体「百年」を以って、自分の生涯に例えているのだろう。その後の異なる結語によって、それぞれの心境も表している。五峰の場合は身分が低いことについて触れているのに対し、張船山のほうはその生涯をどのように生きていくかという人生を直視する態度を表している。

第二句は、「本来の面目」という禪語を用いている。『六祖壇經・行由品』には「不思議、不思議、正與麼時、那箇是明上本来面目」とあり、また、『正法眼蔵』（辨道話）に「大解脱地を証し、本来の面目を現ずるとき」とある。「本来の面目」は「各人が本来備えているありのままの姿」を言う。

この首聯二句をまとめてみると、張船山は「虚舟随意触蓬萊（虚舟 随意に 蓬萊に触る）」のように目的を持たずに運命に任せ、自分の人生を歩んでいくと覚悟している（悟る）のに対し、五峰は人生の中で、老蒿萊のように様々な賤辱の経験を経たとしても、本来の面目だけは頑固に保ってゆくことを考えている。つまり、張船山は受動的に己を天に任せ

ようとするのに対し、五峰のほうは能動的に本来の己の姿を維持しようと考えているのである。

第五句<sup>148</sup>は、杜甫詩「飲中八仙歌」に「蘇晋長齋繡佛前（蘇晋は長齋繡佛の前）醉中往往愛逃禪（醉中往往にして逃禪を愛す）」とあるのを踏まえている。

第六句は、中唐詩人・賈島<sup>149</sup>（七七九〜八四三）長江県（今の四川省）の主簿となつたところから「賈長江」と言われる。先に言及したように、『雲仙雜記』に「賈島は常に歳除を以て一年に得る所の詩を取り、祭るに酒脯を以てす<sup>150</sup>」とあるのに拠る。

第七句「債鬼満前叩首（債鬼 前に満ちてみな叩首す）」の「債鬼」は、借金・掛金の返済を強く催促する人の意味であるが、五峰の実際の生活状況を反映しているわけではない。

第八句「先生笑坐亂書堆（先生 笑ひて坐る 乱書の堆）」は、張船山原詩の「陶然沈醉亂書堆（陶然 沈醉 亂書堆し）」の韻に従い、詠じているが、張の「陶然沈醉」を「先生笑坐」に変じ、前句と関連して、五峰の債鬼を歯牙にもかけない悠然たる態度を表している。

張船山の原詩二首目の頸聯「誰傳死後詩千首（誰か傳へん 死後 詩千首）莫放生前酒一杯（放す莫かれ 生前 酒一杯）」では、「詩」と「酒」というように対になっているのに対して、五峰の二首目の頸聯では「禪」追蘇晋逃于酒（禪は蘇晋を追いて酒に逃げ）詩仿長江祭以杯（詩は長江に仿いて祭るに杯を以てす）とあるように「禪」と「詩」とが対となっているが、この両者が酒によって結びついているのである。拙稿「漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」では、それについて、五峰の「禪」は、「禪」それ自体を求めているというよりも、詩を創作する境地への希求であると結論付けた<sup>151</sup>。それは「神韻」説を唱えている王士禎の「嚴滄浪禪を以て詩に喩う、余深く其説を契す」、「筏

を捨て岸に登る、禪家は以て悟境と爲す、詩家は以て化境と爲す、詩禪一致、等しく差別無し」（『帶經堂詩話』の卷三・微喻類）という説と一致している。

五峰本詩の詩風は、一首目と同じく、「逃禪」の蘇晋や「祭詩」の賈島などの典拠を取り入れ、自分の人生の本質を失わないことと、世の中から「怪物」や「奇才」などと言われても、自分の本来の在り方を変えず、泰然たる姿勢を保つことを描くことの中に現れている。そこに、五峰の意志の強さや剛健な氣風が感じられる。張船山の詩に見られるような鬱屈した鬱悶気はない。

#### 張船山詩「佛前飲酒浩然有得」の四首目

便将奇壽敵鴻荒 便たへ 奇き壽を將て 鴻荒に敵すも

轉眼終須到北邙 轉眼 終に須らく北邙に到るべし

佛老看空聊縱酒 佛老 空を看て 聊か酒を縦にす

海天遊遍且思鄉 海天 遊遍して 且つ 郷を思ふ

竟逢知己何妨死 竟に知己に逢はば 何ぞ死を妨げん

未遇傾城不肯狂 未だ傾城に遇はざれば 狂がえんを肯ぜず

夢蹈翠虛陪上帝 夢に 翠虚を蹈み 上帝に陪ふ

笑看傀儡競登場 笑ひ看る 傀儡の 競ひて登場するを

（たとえ珍しいほどの長寿によつて、人は死ぬという太古からの習いに抵抗しようとしても、結局、最後は墓場に行く。お釈迦様と老子とは、すべてが空であるという真理を見抜いて、心行くまで痛飲している。海と天の果てまで回つて遊覧していても、死という帰る

べき郷里のことが思われる。自分のことをよく分かってくれる人に  
出会ったら、死んでもいい。いまだに城を傾けるような美人と会っ  
ていないので、狂っていないだけのことである。しかし、夢の中  
は、既に天空に登って、天の神様に付き添い、人形どもが登場しよ  
うと争うのを笑いながら見ている。)

張船山の原詩四首目では、人間がいくらこの世でじたばたと長生きし  
ても、結局は墓場に行くのだという宿命感と諦念を語っている。仏教や  
道家的な思想が酒と結び付けられているのは、五峰の前詩に通じ、また、  
知己に会ったら、死んでも構わないというのは五峰詩の「未遇風流賀監  
知(未だ風流の賀監知に遇わず)」に通じているであろう。尾聯後半「笑  
看傀儡競登場(笑ひ看る 傀儡の 競ひて登場するを)」からは、張船山  
の官海を遊弋する時に、上役に阿諛迎合する人たちに対する諷刺が読み  
取れる。当時、乾隆時代の後期から、奸臣和珅が乾隆帝の寵愛を一身に  
集め、収賄などで政治を壟断していた。そのため、大志を抱いて、朝廷  
に貢献しようと思う秀才たちは才能を發揮できなかった。張船山のこの  
詩も、当時の朝廷に蔓延している腐敗現象に逆らうこともできず、阿諛  
迎合して時流に投ずることもできない無力感を表していると考えられる。  
「笑ひ看る」とはあるが、それは苦い笑いであろう。

五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」其三

人生人死自鴻荒 人の生れ 人の死するは 鴻荒よ自りす

萬古銷沈向北邙 万古 銷沈して 北邙に向かう

誰遣我來爲過客 誰か我を遣わして来たたりて過客をらしむ

直須命盡始還郷 直ちに須らく命尽きて始めて還郷すべし  
與其將法點頭聽 其の法を點頭して聴かんよりは  
孰若把杯披髮狂 杯を取りて 披髮して 狂ふにいずれぞ  
一笑眞禪能解脫 一笑 眞禪 能く解脫す  
不妨遊戲醉千場 遊戯して千場に酔うを妨げず  
(人の生死は大昔から自然のまま。死ぬ時が来れば、消沈して、墓  
場に向かう。誰か私をこの世に旅人として送り込んだのか。運命が  
尽きればいずれは故郷に帰るように死ぬだろう。説法など聞いてわ  
かったふりをして領くよりは、寧ろ杯を取り、髪を振り乱して狂酔  
したほうがよい。ただ一笑するだけで眞の禪は現世の苦惱から解放  
してくれる。だから遊び戯れて千回酔っても構わないのだ。)

第二句にある「萬古」は、死ぬことの曖昧な表現として使われている。  
「北邙」は、北邙山のことである。中国河南省洛陽の北方にある丘陵の  
総称である。漢・魏・晋・唐の歴代皇帝陵などが多くあったことに因ん  
で、「北邙」は墓場の意味として使われている。杜牧七絶「登樂遊原」に  
「長空澹澹孤鳥没(長空澹澹として孤鳥没す) 萬古銷沈向北中(萬古銷  
沈して此中に向う)」とあるのを踏まえる。

第三句にある「過客」は、李白詩「擬古十二首」其九に「生者爲過客  
(生者過客爲り)」とあるのを踏まえ、第四句の「歸郷」は同「死者爲歸  
人(死者歸人爲り)」を踏まえる。

第七、八句は、徐鉉(九一六〜九九一)詩「拋毬樂辭二首」の其一に  
「一笑千場醉(一笑千場酔う) 浮生任白頭(浮生白頭に任す)」とあるの  
を踏まえる。

五峰はこの詩を通して次のように言う。生死は運命であり、人間の力  
で左右できないものである。知らないうちに自分は運命の中の一人の過

客となっていて、命運が尽きれば帰郷するように死んでしまう。静かに説経を聴いて、分かったふりをしてるよりは、思う存分酒を飲むほうがよっぽどいい。真の禪とは一笑するだけで悟ることができて、苦悩から解放されるものだ。酔って遊んで暮らして構わないのだ。

本詩は前二首と変わらず、杜牧や李白などの典拠を取り入れ、人間の生死や運命などを議論しつつ、五峰の豪放磊落な気概を表現していると同時に、「與其將法點頭聽（其の法を點頭して聴かんよりは）孰若把杯披髮狂（杯を取りて披髮して狂ふにいずれぞ）」と詠じているように、従来張船山詩「酔後口占」の「奇氣」のような詩風を呈していると思われるし、特に尾聯「一笑眞禪能解脫（一笑 眞禪 能く解脫す）不妨遊戯醉千場（遊戯して千場に酔うを妨げず）」は俗世界から風流世界への解放・憧憬を表し、張船山原詩に見られる道家的な傾向すらうかがえる。

### 三、五峰の詩論について

『五峰遺稿<sup>1.5.2</sup>』に「治園」と題する五言古詩が二首ある。それは明治一七年、五峰二六歳の作詩だと推知できる。「一」で引用した『五峰餘影』の各人の回想によると、明治一二年一〇月頃、山中耕雲から「清朝人の詩を見なければどうも村氣が去らない。張船山などの作を見るべきだ」と勧められた。同年一二月には『新文詩』第五六集に漢詩を載せられた。また、明治一四年七月から秋まで師・森春濤が来瀉する。以上のように、漢詩人の五峰にとって、極めて重要な出来事があった後の作詩に関する漢詩である。では、その第二首を引く。

治園如作詩 園を治むるは 作詩の如し

先要氣體全	先ず 気体の全うを要す
松檜三五樹	松と檜 三五に樹え
錯落刃摩天	錯落たる刃 天を摩す
布置已不煩	布置 已に 煩わず
局勢自渾淪	局勢 自から 渾淪
配石參章法	石を配すには 章法を參す
互互後又前	互り互ひに 後 又た 前
細花與幽草	細花と 幽草と
點綴亦便妍	點綴 亦た 便妍
古梅持高韻	古梅 高韻を持し
不下魏晉人	魏晉の人に下らず
修竹尤瀟灑	修竹 尤も 瀟灑
如見唐宋賢	唐宋の賢を見る如し
流泉節奏妙	流泉 節奏 妙に
青苔色采鮮	青苔 色采 鮮なり
一逕乃線索	一逕 乃ち 線索
草蛇勢斷連	草蛇 勢 斷ち連なる
要之千變態	要之 <sup>ようするにこれ</sup> 千變の態
一氣所廻旋	一氣の 廻旋する所
大小皆我意	大小 皆な我が意
譬水於方圓	譬えば 水の方圓に於けるがごとし
常見富貴家	常見に見る 富貴の家
奇巧爭鑿鐫	奇巧 鑿鐫を争ふ
疊石築假山	石を疊んで 假山を築き
引笕懸飛泉	笕を引いて 飛泉を懸く



何異王李徒 何ぞ王李<sup>153</sup>の徒と異ならんや

擬古誇高篇 擬古 高篇を誇る

優孟衣冠儼 優孟衣冠<sup>154</sup> 儼し

不值一笑嗎 一笑嗎に値せず

作詩尚真趣 作詩 尚ほ 真趣

治園何不然 園を治むる 何ぞ然らずや

（庭を作ることは詩を作ると同様である。まず、庭の氣勢と風格の全きことを求める。松と檜は間隔を置いてまばらに植える。入り混じっている樹木の先は刃のように天に聳え立つようにする。配置にはあまり拘らない。庭の構造は自ら混沌としたありさまとなる。石を配置する方法は文章の組み立て方を参照し、常に互いに前後する。小さな花と奥深く静かな草むらは程よく取り合わされて、この上なく綺麗だ。古い梅の樹は高雅な趣を保っているが、それは詩の世界で言うと、古詩の高韻が魏晉の建安体の詩風に劣らないものだ。長く伸びた竹林は瀟灑なさまを呈しているが、まるで唐宋の賢人に会うような雰囲気である。流れている泉水の音の調子は甚だ巧みであり、苔の色はとても鮮やかである。一筋の小道は即ち庭の道筋になっいて、草叢は湾曲し起伏し切れたり、繋がったりしている。要するにこの庭の千変万化する姿は一氣が展開したものである。細大漏らさずすべて私の意にしたがっており、水が方円の器に随うようである。

富も身分もある家の庭を見ると、常に珍しくて上手な細工を施すことを競い合っている。石を積み重ねて築山を作り、篋を引いて滝を架けたりする。このやり方は詩の世界でいうと、明の王世貞、李攀龍のような輩のしたことである。王世貞、李攀龍は擬古の詩文を作って、その格調の高いことを自慢している。彼らのことは、まる

で優孟が孫叔敖の衣冠を身に着けてなりすますようなもので、一笑にも値しない。作詩にも真趣が必要であるが、庭を作ることも同じことである。）

上記のように、五峰は「治園」を通し、作詩方法の二つの焦点を語っている。その一つは、全体像についてである。庭園を整備することと同じように詩を作る時にも、その全体の姿や風格を整えなければいけない。その上、樹木の位置や石の配置や花と草などの種類や位置などを考えねばならない。しかし、それぞれの組み立て方はばらばらであっても、自然の秩序に従えばいい。全体の流れの一体性を保てばいいのである。もう一つは、趣致についてである。庭園を治めることと、作詩することは、自分なりの「新しい」考え・「新しい」視点などを求められるということである。つまり、庭園を治めることも作詩することも、様々な細部「千變態（千變の態）」が「一氣所廻旋（一氣の廻旋する所）」即ち、自分の意、心中の「真」から発し、展開したものでなければならぬのである。明の王世貞、李攀龍の擬古文は、ただの物真似作業に過ぎないと、五峰は批判している。主張しているのは「我意」「真趣」、即ち、自らの性情の真率な表現である。このことは後に検討する袁枚の「性靈説」と通じるところがあるであろう。当時の五峰の作詩に対する考えが充分にうかがえる。

#### 四、五峰詩「借忙吟」と袁枚（一七一六～一七九七）詩「借病」

『五峰遺稿』において、清詩との関わりが明確に見られる一二首の詩の中には、「性靈詩」や「袁子才」や「隨園」などといった、袁枚に関連する表現が多数ある。五峰が袁枚に対して、どのように考えていたかを

追究したい。

『清史稿』<sup>155</sup>卷四八五列伝二七二文苑二にある袁枚の条を引用する。

袁枚、字は子才。錢塘の人なり。幼きに異稟有り。年一二にして、縣學生の補となり。弱冠、叔父に省て、廣西の幕に撫き、巡撫・金鉞は見て之と異なり、「銅鼓賦」を以つて試す。立ちに就く。甚だ瑰麗たり。ちようど博學鴻詞科を開く。遂に疏んに之を薦む。時に海内の擧者二百人餘り、枚は年最も少なり、試の報せは罷む。乾隆四年、進士と成り。庶吉士に選ばれり。知縣の江南に改め、溧水を歴り、江浦、沐陽、劇に江寧に調べ、時に尹繼善は總督と爲す。枚の才を知り、枚亦た遇事し、其の能を盡せり。市人は至るまで判事らるを以つて、歌曲を作り、刻し、四方まで行く。枚吏を以つて能く自喜せず。既而、疾を引き、家に居す。再起し陝西を發す。父憂に丁つて、歸す。遂に養母を牒に請う。江寧の小倉山に卜築す。隨園と號す。池館を崇飾す。自らはれ其の中で優游する者は五十年なり。時に佳き山水を出游す。終に復び仕せず。盡く其の才を以つて文辭と詩歌に爲す。名流は造請し、虚日無し、詼諧し誅蕩たり。人人の意が滿つ。後生の少年の一言の美しきがあれば、之を稱えて口に容ず。友誼に篤し。編修の程晉芳が死り、借券の五千金を擧げ、之を焚き、且つ其の孤を恤む。

天才、穎異たり。詩を論ずるに主に性靈を抒寫す。他人の意は出さうと欲する所は、達せざる者は悉く之に達せしに爲す。士多く其の體に效ふ。『隨園集』を著す。凡そ三十餘り種。上は公卿より、下は市井や負販に至り、皆な其の名を知る。海外琉球に其の書を求めに來る者有り。然るに枚は聲色を喜む。其の所作は亦た頗る滑易を以つて世の譏を獲る。卒に年は八十二。(原文漢文)

袁枚は、字を子才といい、浙江省錢塘県の人である。幼い頃から、超凡な素質を見せた。巡撫・金鉞により、博學鴻詞に最も年少で推薦されたが及第はできず、乾隆四年に進士となり、翰林院庶吉士、散館で江南の知県に改められ、江寧県知県として民に慕われた。その詩論は清新であり、情のはたらきを重んずる性靈説を主唱する。近藤光男『清詩選<sup>156</sup>』によれば、性靈を説いたその詩説は、彼の隨園詩話十六卷補遺十巻を通じてうかがうことができる。

『五峰遺稿』に袁枚と明確な関連性がある詩作が存在する。

まず、五峰詩「借忙吟 并引<sup>157</sup>（借忙の吟 並びに引）」を引く。

予忙人也。嘗謂袁子才有借病吟。病已可借、忙何獨不可借。一日小坐思詩、忽聞剝啄。乃使童子謝、云主人方有公事不得見客矣。客唯唯而去。作借忙吟。(予忙人なり。嘗て謂えらく、袁子才に「借病吟」有り、病は既に借りる可くして、忙何ぞ独り借りるべからざらんや。一日、小坐し、詩を思へば、忽ち剝啄を聞く。即ち童子をして謝せしむ。主人方に公事有り、客を見るを得ずと。客唯唯として去る。「借忙吟」を作る。) (原文の句読点は筆者によるもの。)

借病隨園意太奇 借病 隨園 意 太だ奇なり

閉門正字又何癡 閉門 正字 又た何ぞ痴かなるや

忙人卻有便宜處 忙人卻つて便宜の処有り

時亦借忙閒作詩 時に 亦た 忙を借りて 閑に作詩す

(袁隨園の病を借りるといふ考えは大變面白い。門を閉じて家にこ

もって詩作に集中する陳正字はまたなんと愚かなことか。多忙な人間が逆に都合のよいことがある。時に忙しいのを口実にして暇の間に詩を作れるからだ。)

この七言絶句は『五峰遺稿』の編集次第によれば、明治一七年(一八八四)五峰二六歳(満二五歳)の作だと推知できよう。本詩の「引」では、袁枚の「借病吟」について、具体的な内容に触れ、本詩を起稿する経緯についても叙述している。即ち、五峰は袁枚の「借病」詩からヒントを与えられ、本詩「借忙吟」を完成したわけである。

起句の「隨園」は、袁枚の号である。五峰が袁枚の「借病」詩を大変気に入っていることがうかがえる。それだけではなく、袁枚には『隨園詩話』という著作があるように、五峰には『北越詩話』という三十年間尽力し、完成した著作がある。その上、『北越詩話』例言に以下のような記述がある。

清人多く一郡一邑の詩を輯せし者あり。(中略)而して當時獲る所未だ多からず。因て隨園詩話の例に倣ひ。手に信せて編次し、辛卯より壬辰に至る間、新潟新聞に登載す。(中略)偶々全閩詩話を讀み、其の體例先づ我意を獲たるを喜び。<sup>158</sup>

とあるように、五峰は大作・『北越詩話』を編集する際に袁枚の『隨園詩話』を手本にしたのである。その後、『全閩詩話』に出会い、編集方針は『隨園』から『全閩』に変えたということである。要するに、『全閩』と出会うまでに『隨園』を模範としていたと考えられる。

承句の「閉門正字」は、金の詩人である元好問(一一九〇～一二五七)の「論詩三十首」と題する七言絶句連作の第二九首の詩に「池塘春草謝

家春 萬古千秋五字新 傳語閉門陳正字(傍点筆者) 可憐無補費精神」とあるのを踏まえる。

陳正字は、(一〇五三～一一〇二)北宋の詩人である。その「閉門正字」の話については、以下のような説明がある。「陳師道字无己、官秘書省正字。平日每有詩兴、就閉門拥被、有时几天不起的在思索。」<sup>159</sup>承句では、陳正字の故事を挙げ、その推敲、苦吟する姿を示している。

転句「忙人卻有便宜處(忙人卻って便宜の処有り)」では、「忙人」とは、五峰自身のことを指すと同時に、袁枚「借病」詩に出現している語彙とも関係があると考えられる。前述した通り、五峰は二〇歳の時から郡會議員になり、二二歳の時に新潟米商会所頭取代理となったが、同年、一二月の『新文詩』第五六集に始めて詩を載せられ、漢詩人としてもデビューした。本詩の制作年である明治一七年には、二六歳の五峰は、県會議員に当選した。今までの仕事のほか、公事が急速に増えてくる状況にあった。

結句「時亦借忙閒作詩(時に 亦た 忙を借りて 閑に作詩す)」では、忙しいことを口実にして好きな詩作に耽るということを述べている。『新文詩』に詩が継続的に掲載されるようになったが、しかし、県會議員に当選し、予想外に多忙になり、静かな場所で作詩に耽ることができなくなったことは想像に難くない。本詩は、このような作詩することができない時間、空間などを求めている五峰の心境を描いている。五峰は袁枚の「性靈」説を主唱する『隨園詩話』について、引にも詩中にも一言も触れていないし、「性靈」詩説にも言及していない。五峰が本詩で関心を持ったのは「性靈」詩説に関するのではなく、袁枚の「借病」という発想についてだと思われる。五峰の本詩の詩風はやはり、森春濤から看取された「議論」的特徴を持ちつつ、「性靈」詩説の「著我」という観点を

取り入れていると考えられる。

次に、袁枚<sup>160</sup>の「借病」詩を見よう。

『小倉山房詩文集』卷三に袁枚詩「借病」<sup>161</sup>と題する五言律詩は次の通りである。

嫌忙翻愛病

忙を嫌ひ 翻<sup>かえ</sup>て病を愛し

借病好吟詩

病を借りて 好く吟詩す

細雨苔三徑

細雨 苔 三徑

春愁笛一枝

春愁 笛 一枝

日長衙放早

日長く 衙 放つこと早く

官嬾吏來遲

官 嬾にして 吏 來ること遅し

看見閒中物

看見す 閒中の物

遊絲及地時

遊絲 地に及ぶの時

（忙しいのがいやになって、かえって病気になることを好み、その病を口実にして、詩を作ることにする。小雨の中、苔のなかに三筋の小道がある。春の物憂い気持ちの中、笛を吹いて一曲を奏でる。春の日が長くなって役所の仕事は早めに終わらせる。役人は怠けて、来るのも遅い。用事がないので、ぼんやりと、漂っている蜘蛛の糸が地面まで落ちてくるのを眺めている。）

『小倉山房詩文集』卷三の巻頭に「壬戌癸亥」と記してある。「壬戌」は乾隆七（一七四二）年、「癸亥」は乾隆八（一七四三）年のことである。袁枚の年譜によれば、二六、二七歳「江南做知縣（江南へ知縣を做す）」時期の作詩である。「知縣」は「知縣事」の略であり、県知事に当たる。

当然のことであるが、この仕事を司る時期は、袁枚にとってそれまでの生活とは違い、想像し難いほど多忙な時期であっただろう。

袁枚の原詩・頷聯では、「細雨」や「春愁」といった自然現象と人間心理を用い、春が訪れる時の物憂い感傷的な気持ちを表している。「三徑」は、東晋詩人・陶淵明（三六五〜四二七）『歸去來辭』に「三徑就荒 松竹猶存」とあるのを踏まえているのだろう。意味として、庭園内の三筋のこみちであるが、転じて、隠者の門内の庭または住居という意味にもなる。

原詩の頷聯では、役所の役人たちのゆったりとした仕事振りなどを示している。

原詩の尾聯では、更に役所の役人として働いている用事が無い時の袁枚ののんびりとしている様子を表している。役所の仕事振りをスケッチするといったような描写になっている。

かたや、前掲の五峰詩「借忙吟」には、袁枚詩「借病」にあるような自然風景や人間心理などが表現されていない。五峰の気に入ったのは、その「引」でも語っている通り、袁枚が忙しさから逃げ、作詩の時間を作るために、病を口実にしたということである。五峰自身はそれに倣い、多忙を口実にしたのである。五峰の「借忙吟」は袁枚「借病」から「借」という発想を受け入れ、五峰の多忙中における作詩をしたという本音を吐露している。ここでは、袁枚の性靈説の「詩難其真也、有性情而後真、否則敷衍成文矣。（詩難しきは其の真なり、性情有りて後、真なり、否らざれば則ち敷衍して文に成れり。）」という詩論が五峰により、具現化されている。更に、前掲している五峰詩「治園」に「作詩尚真趣（作詩 尚ほ 真趣）治園何不然（園を治むる 何ぞ然らずや）」とあるような考えと通じていると思われる。ちなみに、『五峰遺稿』では、「借忙吟」の次の詩作は「治園」である。

しかし、「借忙吟」と「借病」とは、詩体において、明確に異なっている。前者は七言絶句、後者は五言律詩である。その上、明らかに異なる詩風を呈している。五峰詩は袁枚詩より議論性が強く感じられ、隨園や陳正字などの典故を取り込んでいて、袁枚の詩のように自然描写や、抒情的な字句が見られない。ただし、「借忙吟」を通して、五峰自身のことを述べるという主旨は「性靈」詩説の「著我」と通じるところだと思われる。また、張船山の「論文八首」(『船山詩草』卷九)に「詩中無我不如刪」や「寫出此身真閱歷」と主張しているように、「有我之境」に達していると考えられる。

『五峰遺稿』には、「借忙吟」詩より一年早く作られた関連作もある。五峰詩「和武者城川寒燈夜讀書屋原韵」<sup>162</sup>(武者城川の寒燈夜讀書屋の原韵に和す)「五言絶句連作六首の其三

奇才袁子才 奇才 袁子才

客來借病謝 客來るに 病を借りて謝す

不作絶交書 絶交書を作らず

懶于嵇叔夜 嵇叔夜より懶なり

(世にも珍しい優れた才能を持っていた袁子才は、訪問してくる人が来ると、病にかかったということをお口実にして、面会を謝絶した。

袁子才が「絶交書」を書いていないのは嵇叔夜より怠け者のためだろう。)

承句の「客來借病謝(客來るに 病を借りて謝す)」が、袁枚の詩「起早<sup>163</sup>」に「借病常辭客 知非又改詩」とあるのに拠るのは明らかである。ここでは、五峰が袁枚を奇才と呼んでいる点に注目したい。前掲・五峰詩「借忙吟」の起句「借病隨園意太奇(借病 隨園 意 太だ奇な

り)」と言うのも、袁枚を奇才と見る意識に発している。張船山詩に対する五峰の次韻詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」の其二の頷聯「舉世驚猜真怪物(舉世 驚き猜う 真の怪物かと) 受人憐惜豈奇才(人に憐惜を受くるは 豈に奇才ならんや)(傍点筆者)」とあるように、五峰は自分のことを「人から憐み惜まれる」ので、奇才ではないと謙遜している。それは袁枚のような「奇才」に憧憬していると考えられる。

転句の「絶交書」と結句の「嵇叔夜」とは、嵇康(二二三〜二六二)に関することである。嵇康とは、三国の魏の人で、字は叔夜、竹林の七賢の一人である。官は中散大夫で、老荘の学を好み、琴を弾き、詩を詠じて楽しんだ。気心の知れた少数の人々と、清談<sup>164</sup>と呼ばれる哲学論議を交わし名利を求めないことにしたが、竹林七賢の友人の一人・山濤(二〇五〜二八三、字は巨源)が自分の後任として、嵇康を吏部郎に推薦した時には、「與山巨源絶交書(山巨源に与える絶交の書)」と題する文書を書いて、自分自身の「七不堪」<sup>165</sup>、「二不可」<sup>166</sup>を述べ、その推薦を拒んでいた。山濤との絶交を申し渡し、それまで通りの生活を送った。ただし、嵇康は死の直前に、息子の嵇紹を山濤に託しているように、この絶交書は文字通りのものではなく、自らの生き方を表明するために書かれたものである。「七不堪」については、子息坂口安吾の「石の思ひ」という自伝的小説で、以下のようなことが書かれている。

父は客間に「七不堪」といふ額をかけて愛してゐたが、誰だか中国人の書いたもので、七の字が七と読めずに長の字に見え、誰でも「長く堪へず」と読む。客がさう読んで長居をされるからをかしいので父は面白がつてゐた(後略)

上記の安吾の回想によると、この「七不堪」は、多忙の父親五峰の長座をする来客を追い払わせる方法として使われている。「借忙吟」の趣旨のまた別の表現になるわけである。このように上記の詩にも袁枚や竹林七賢の一人嵇康の故事を引用し、五峰なりの議論に長じる詩風を現している。

同詩題である五峰詩「和武者城川寒燈夜讀書屋原韵」連作六首の其五の詩作でも、袁枚との関わりが見られる。

詩本不關學 詩 本と 學と関せざるも  
不學亦空疎 学ばざれば 亦た 空疎なり  
所以少陵叟 所以 少陵の叟  
讀破萬卷書 讀破す 万卷の書を

起句の「詩本不關學（詩 本と 學と関せざるも）」は、袁枚の『統詩品三十二首有序<sup>167</sup>』の「博習」に「萬卷山積、一篇吟成。：不從糟粕、安得精英？曰『不關學』、終非正聲。（萬卷が山と積りて、一篇が吟じ成れり。：糟粕に従せずして、安くんぞ精英を得んや？ 曰く『學と關せず』、終に正聲に非らず。）」とあるのを踏まえる。その大意は万卷の書籍を読んでこそ、一篇の詩作が出来るのだ。先人の詩篇などを真似るだけで、どのようにその精華を得られようか。「学問と関係しない」と言ったが、結局、それは優雅で純粹な詩篇ではない。『統詩品』は袁枚が晩唐の詩人・司空図（八三七〜九〇八）の『二十四詩品』に因んで創作した作詩に関するものである。詩才はもとより学問などとは関係がないのであると先に述べている。

承句の「不學亦空疎（学ばざれば 亦た 空疎なり）」では、学ばず讀書をしなければ、中身が空疎になると述べている。

転句と結句「所以少陵叟（所以 少陵の叟）讀破萬卷書（讀破す 万卷の書を）」は、学識と作詩との関連性を重要視すべき理由として、杜甫詩「奉贈韋左丞丈二十二韻」にある有名な「讀書破萬卷 下筆如有神」を取り上げ、読書と作詩との繋がりの重要性を最後にまとめている。袁枚の『統詩品』の「曰『不關學』、終非正聲」の解釈になるわけである。ここからも、また五峰の清詩の受容の片鱗が読める。

最後に、『五峰遺稿』下巻にある五峰詩「北越詩話成作五絶句<sup>168</sup>」連作五首の其五を引く。

蒼葭編成鬢欲疎 蒼葭 編成 鬢 疎にならんと欲す  
工夫借病借忙餘 工夫 借病 借忙の餘り  
卅年仰屋窮愁客 卅年 仰屋 窮愁の客  
卻著人間無用書 卻つて人間 無用の書を著す

袁子才有借病詩 袁子才に借病詩有り、  
余嘗仿之作借忙詩 余嘗て之に倣い借忙詩を作る。

（資料をあちこちから取り集め、ようやく『北越詩話』が出来上がると、私の鬢が疎らになろうとしている。病や多忙などを理由にして、仕事を断った暇な時間を利用してこの書を作った。三十年間、私は考えをあれこれと働かせ、ずいぶん悩み苦しんでいたが、結局世間には無用な書物を作ってしまった。）

上記の詩作は大正八（一九一九）年、『北越詩話』を上梓した際に、六一歳の五峰が詠じたものである。承句「工夫借病借忙餘（工夫 借病 借忙の餘り）」は、袁枚「借病」詩と自身の「借忙吟」に因んだ詩句である。また、結句の自注に「袁子才有借病詩余嘗仿之作借忙詩（袁子才に借病

詩有り、余嘗て之に倣い借忙詩を作る。」とあるように、五峰は六〇歳になっても、袁枚の「借病」詩を忘れず、『北越詩話』の著述が借病と借忙によってなされたことを思いつつ、かつ、自らが二〇代の頃に袁枚の借病詩に倣って借忙詩を作ったことを思い出している。

五峰の本詩でも、袁枚詩「借病」との深い関わりを表しているし、三十年間『北越詩話』を編集する閱歴を語った上、結局、「人間無用書」を作ってしまったと謙遜して、『北越詩話』に関する編集話をまとめている。これも「性靈」説を重んじる「性情」を取り入れ、自身の議論と結合し、五峰の「性情」を露出する詩風を形成していると考えられる。

以上のように五峰は袁枚詩「借病」の趣旨を積極的に取り入れ、「性靈」詩説の「性情」と自身の特徴と融合的に結合している。ここから清詩の受容の一斑がうかがえるのである。

## 結びにかえて

五峰が清詩を知るに至ったのは、その知人の証言、及び、『五峰遺稿』の詩の配置から考えて、森春濤の弟子山中耕雲や森春濤本人との接触を通してであったと考えられる。そこから張船山の詩を知るようになり、その影響を受けたと考えられるが、本節、取り上げた張船山詩と五峰のそれへの次韻詩を見れば、張船山の五峰への影響は限定的であり、内容や用語に共通する面はあるが、詩風・詩境においては、必ずしも同一ではないことが判明する。

自らを「奇」と意識することについては、五峰は張船山の「奇気」の影響を受けた事が考えられる。張船山の原詩三首は、表面的には道家的な無為自然・任天という心境を表現して超俗的であり、その点から見れば、張船山は五峰<sup>169</sup>と同じ好尚を持っており、五峰にとっては、

少なくとも表面的には、最も受け入れやすい清代の詩人であっただろう。その詩は、「じたばたせず運命に随順してゆこうとする心境を詠じる。諦観と言っても良いような穏やかさがそこにはある<sup>170</sup>。」と評されるような表現を用いているが、しかし、その背後には鬱屈した心情が隠されている。それに対して、五峰の次韻詩には、張船山の原詩に見られるような鬱屈は感じられず、あくまでも剛健で磊落である。五峰の一首目は自分の数奇な運命を嘆いてはいても、風流世界の知己に邂逅するのを期待する気持ちを表している。五峰の二首目は「本来の面目」という禅語を用い、何があっても、自分自身の本来のあり方は変えないという強い精神力と樂觀的な考え方を呈している。五峰の三首目は張船山に倣って人間の生死は免れがたい運命であるという見方を示しつつも、飲酒によって「禪」の奥義を悟る道に導かれるのだという逆説を豪胆に吐露している。前二首では、それぞれ「李白と賀知章」の「金龜換酒」という典故、「逃禪」の蘇晋や「祭詩」の賈島などの典拠を取り入れ、人生や運命などを議論した。三首目では、李白の「擬古十二首」其九「生者為過客死者為歸人」とあるのを踏まえ、人間の生死や運命などを論じている。これらの詩には、森春濤から「天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びてゐる」<sup>171</sup>と指摘されているような特色が現れているが、張船山のような心情の屈折は表れていない。そこに両者の相違が見られる。

また、五峰詩「借忙吟」と袁枚詩「借病」を通じ、五峰は二〇代から六〇代の晩年まで、袁枚の独創的な「借病」作詩觀念に深い関心を持ち続けた。その受容として、二六歳に詠じた「借忙吟」に結晶し、著作『北越詩話』にまで及んでいるのだからうかがえる。「性靈」説を重んじる「性情」と自身の議論の強い作風とが結合し、「借忙吟」詩は、袁枚に対する議論の上で、五峰の「性情」を露出する詩風を形成していると考えられ

る。袁枚の性靈説の「詩難其真也、有性情而後真、否則敷衍成文矣。」という詩論は、五峰詩「治園」に「作詩尚真趣（作詩 尚ほ 真趣） 治園何不然（園を治むる 何ぞ然らずや）」とあるような考えと通じていると思われる。清人・張船山と袁枚といった「性靈」詩派の詩人の作風を、五峰はそのまま、そのすべてを受け入れるわけではなく、自分と共通趣向がある清の詩人に注目し、自分なりの取捨選択を行い、その結果、五峰なりの詩風の結晶になったということが明らかになった。

## 第五節 五峰の「禪」に関する詩

五峰は二〇代頃、「禪」という文字を使用している詩を集中的に作詩している。『五峰遺稿』には、「禪」字を含む語句の出現する詩が一二首にのぼる。その詩の題とともに語句を挙げてみると、以下の通りである。

- 「逃禪」（「偶題」、一一〇歳）
  - 「病禪」（「歲暮雜感」、一二三歳）
  - 「病禪」（「新正三日書懷」、一二五歳）
  - 「禪榻」（「題舟江嬉春圖」、一二五歳）
  - 「竹林禪」（「寄居村舍雜詠次藍川養病詩屋原韻」、一二五歳）
  - 「不在禪」（「消夏六詠用蔭山晚香韻」、一二五歳）
  - 「參禪」（「題玉峰小稿後四首 折二」、一二五歳）
  - 「禪追蘇晋」（「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」、一二五歳）
  - 「真禪」（「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」<sup>172</sup>、一二五歳）
  - 「問禪」（「贈立阿師」、二八歳）
  - 「通禪」（「鬢絲禪榻小影」、三五歳）
  - 「談禪」（「清河陳中即事」、四六歳）
- 他、遺墨中に一首（「通禪」、四〇歳）、また、五峰研究にとって、極め

て重要な文献資料の一つである『五峰餘影』にも一首（「不解禪」、年齢不詳）がある。市島謙吉の「五峰君の絶作」では、

（前略）君は幼少の頃父母の言ひつけに毎朝必ず普門品を讀めと言はれ盛に讀んだものだけれど、君は「自分は禪を解しない人間で父母の歿後は觀音のお詣りもせず詩の佛さんばかりをお詣りしてナム賈島佛々とばかり言つてゐた」と言はれた。之にも一詩がある。

爺孃禱子大慈前。 兒也生來不解禪。（傍点筆者）

除夕還修祭詩典。 南無島佛一年々。

父母禱子觀音大士而生予以故先子在日每朝必誦普門品蓋家世屬真宗其誦普門品異例也<sup>173</sup>。

と、五峰と禪との関係について言及している。

右の詩が発見された時期<sup>174</sup>は既に五峰没後のことであるし、いつ作詩されたかを確認することは容易ではない。それにしても、この詩で五峰自身は「不解禪（禪を理解しない）」と言っているが、『五峰遺稿』に使われている「禪」に関する詩を探してみると、前掲のように「逃禪」、「病禪」、「通禪」など多彩な語句を用いた詩があり、五峰の禪に対する興味は浅くなく、実は多彩である。

そこで本節では、五峰の漢詩に出てくる「禪」に関する詩中、「逃禪」、「病禪」、「半通禪」、「已通禪」に限定したうえで、漢詩人である五峰が「禪」を通して、如何なる境地を表現したかったのかについて分析を進めたい。



一、五峰詩「偶題」と杜甫詩「飲中八仙歌」にみる「逃禪」

『五峰遺稿(上)』中「偶題<sup>175</sup>」と題する詩を取り上げる。

病來未斷酒因縁 病み來るも未だ酒の因縁を断たず

尚誦長齋繡佛篇 尚お誦す長齋繡佛の篇

明日提壺與僧醉 明日は壺を提げて僧と與に酔はん

風流蘇晋是逃禪 風流蘇晋の是れ逃禪

(病にかかっても、酒との因縁を断つことができない。即ち、禁酒することができない。心中では、依然として杜甫の「長齋繡佛」という詩篇を誦している。気持ちとしては、明日、酒壺を持って行き、和尚さんと一緒に酔って、風雅を楽しむ蘇晋のように禪の世界に逃げたいものだ。)

起句の「病來未斷酒因縁」を検討しよう。この詩は『五峰遺稿』の収録位置からすると、五峰二〇歳(明治一二年)のものだと推測できるが、しかし、詩中に出ている「病」に関する話題は、五峰年譜には見えない。『五峰餘影』の「山際操氏談」には

私は明治十年頃新潟に居ましたが、その頃五峰君は阿賀浦村から突然自分を新潟に來訪し、その後屢々往來して互に作詩の唱和を試みると言ふ間柄となりました。十一、二年頃でしたか五峰君がさう重くない病氣で一、二ヶ月新潟病院へ入院したことがありましたが當時自分は閑屋に住んでゐてほど遠からぬことでもあり始終訪ねては詩文の交はりをしてゐました。

此時分の社中では水落鷗水(名は璋之助、柏崎の人、當時醫學校

生徒)や小林二郎、丸岡南陵(佐渡の詩人で社中の大家、折々新潟へ來ては唱和した)諸橋田龍の諸家であつたが五峰君は廿歳か廿一歳の最年少者で、しかも詩には天才あり、すでに社中に頭角を現はしてゐました<sup>176</sup>。(後略)

という証言がある。そうすると、五峰の「偶題」詩に言及されている「病」はちよつど、「偶題」詩を作ったのと同じ明治一二年、五峰があまり重くない病氣で、一、二ヶ月ぐらい新潟病院に入院し、治療を受けたことを指すのだろう。同じく年譜によると、二〇歳頃の五峰は既に郡會議員である。その上、引用した山際操の証言から見れば、当時の五峰は政界に頭角を現しただけではなく、詩社でも才氣がある若手詩人と見られていた。

この七言絶句の全体觀を把握すると、最後に、「風流蘇晋是逃禪」と詠い、自分のことを蘇晋になぞらえ、蘇晋のように酔っ払い、禪の世界に逃げようと言つて、結ばれている。古人を通して、自己の理想を告白しているのが興味深い。

問題は、二句目の「尚誦長齋繡佛篇」という承句であるが、これは杜甫(七一二年〜七七〇年)の「飲中八仙歌<sup>177</sup>」を典拠として思われる。この二句目の真意を解釈すべく、杜甫詩と比較してみたい。文字通り「飲中八仙歌」に酒仙として登場する人物八人中、五人目の蘇晋の名が五峰詩に使われている。この蘇晋についての「飲中八仙歌」中の詩句は、

蘇晋長齋繡佛前。

醉中往往愛逃禪。

蘇晋は長齋繡佛の前

醉中往往にして逃禪を愛す

となっていて、この部分から、五峰詩「偶題」の「尚誦長齋繡佛篇」「風流蘇晋是逃禪」が、「飲中八仙歌」を典拠とすることが明らかになる。つまり五峰は、病にかかっているにもかかわらず、酒を止めることができない自分を、「飲中八仙歌」の蘇晋になぞらえていたのである。転句である「明日提壺與僧醉」というのは、五峰の願望だろう。「長齋繡佛」といった詩文を諷んでいるうちに、蘇晋のような飲酒に憧れたのかもしれない。酒を飲む相手の「僧」が誰なのかは不明であるが、とにかく、一般に厳肅な社会的立場の僧侶を引き合いに登場させたのは、五峰のオリジナルな作文である。そして、最後に結句では「風流蘇晋是逃禪」と、自分の飲酒をかゝる酒仙・蘇晋の逃禪になぞらえて詠いおさめている。

次に、五峰が意識した「逃禪<sup>178</sup>」の語句の意味合いを掘り下げてみたい。『杜詩叢刊』<sup>179</sup>に収められた「飲中八仙歌」の諸注釈の中には、「醉中往往愛逃禪」について、「禪から逃げて酒に浸る」<sup>180</sup>という解釈と「酒を飲むことで禪に逃げる」<sup>181</sup>という両様の解釈がある。

また、五峰が師事した森春濤の子・槐南の『杜詩講義 下巻』には、「逃禪」について以下のような説明が書かれている。

其次は蘇晋、是は戸部侍郎と云ふ様な官に登りました人でありませうけれども、平生極めて酒を愛して居つた人でありまして、世の中の蒼蠅いことは打遣つて置いて、何時でも佛前で酒を飲んで楽しんで居られたと云ふことであります。長齋と云ふのは。佛前に居るのでありますから、肴は食べませぬ、唯だ酒ばかり飲んで居るのであります。逃禪と申しますのは、解釋が二様ありまして、或る説に據りますと、禪を逃れると云ふので、佛前で物忌みをして御座るけれども、酒を飲むから、此處ばかりは破戒をする、斯う云ふ意味であると云

ふのでありますが、併し逃禪を破戒と云ふのは、餘程可笑な解釋でありまして、矢張り禪に逃れると云ふ方に解きまして、醉中でありながら、佛を信じて居られるものであるから、佛前に行つて、一切の世事を打ち棄て、唯だ酒を飲んで楽しんで居られる、と云ふ方が宜しいと思ひます<sup>182</sup>。

この森槐南の解釈によれば、「逃禪」は禪に逃げることであり、同時に、酒に逃げることもある。仏前に行つて、全ての俗世間のことを投げ捨て、酒を飲んで楽しむのが、禪の境地でもあると言っているのである。これに倣い、五峰は杜甫の「逃禪」を、酒を飲んで「禪に逃げる」と解釈し、それを自らの詩に用いたと考えられる。このことは、二五歳に作詩した「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」と題する詩中に用いられた類似の詩句からも明らかになる。その頸聯に、

禪・追蘇晋・逃于酒 禪は蘇晋を追いて酒に逃げ

詩・仿長江祭・以杯 詩は長江に仿いて祭るに杯を以てす(傍点筆者、以下同)

とあり、その前半は「禪については蘇晋に倣つて酒に逃げよう」というのであるから、「逃禪」は禪から逃げるのではなく、酒を飲んで禪に逃げることであり、その明らかなのである。

では、五峰が酒を飲みつつ禪の世界に逃れ入るのは何故か。再び、五峰七言律詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」の頸聯に注目する。

禪・追蘇晋・逃于酒 禪は蘇晋を追いて酒に逃げ

詩・仿長江祭以杯 詩は長江に仿いて祭るに杯を以てす

この対句は、蘇晋の「逃禪」と、中唐詩人賈島<sup>183</sup>（七七九〜八四三）長江県（今の四川省）の主簿となつたところから「賈長江」と言う。）の「祭詩」との話を借り、「禪」と「詩」との関係を語っている。先述した蘇晋「逃禪」の例は、杜甫詩「飲中八仙歌」が出典であつたが、賈島の「祭詩」の話は、『雲仙雜記』に「賈島常以歲除、取一年所得詩、祭以酒脯、曰、勞吾精神、以是補之<sup>184</sup>」と記してある。すなわち、賈島は常に大晦日に自分のその年の詩を、酒と肴を以つて祭り、自分で自分を激励したのである。また、「禪」、「詩」、「賈島」に関連ある詩が五峰にはある。本節の巻頭で紹介した「不解禪」についての七言絶句を振り返つて見よう。

爺嬢禱子大慈前。 爺嬢 子を禱る 大慈の前。

兒也生來不解禪。 兒也 生來 禪を解さず。

除夕還修祭詩典。 除夕 還た修す 祭詩の典。

南無島佛一年々。 南無島佛 一年々。

「島佛」は五峰自ら「詩の佛さんばかりをお詣りしてナム賈島佛々とばかり言つてゐた」と語っていることから分かるように、賈島のことを指している。五峰にとつて、賈島は詩の仏のような存在であつたと考えられる<sup>185</sup>。

ここでもう一度、五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」に戻り、その頸聯の大意は、「禪」は、蘇晋のように酒に逃れ入り、「詩」は、賈島のように酒を以つて祭ろうということである。すなわち、これは、詩禪

酒一致の境地の表現だと思われる。

前述したように五峰の禪についての関心は、これらの詩以前から存在していたと思われる。というのは、禪とかかわりの深い『維摩詰所説經』に言及する詩句が、二〇歳以前の五峰の漢詩に早くも散見されるからである。「梅花丈室歌」と題するその詩を次に取り上げる。

## 二、『維摩詰所説經』と道家と詩作―「梅花丈室歌」

この詩は『五峰遺稿』の編集順からすると、先に触れた二〇歳作「偶題」より早く、すなわち一九歳頃に作詩されたと推測される。

梅花丈室歌

梅花丈室の歌

十笏之室生虚白

十笏之室虚白を生ず

靈芬直欲浄吟魄

靈芬直ちに吟魄を浄せんと欲す

四邊環植萬梅花

四辺環植す萬梅花

春來滿地暖雪積

春來りて地を満たして暖雪積る

夜月玲瓏藥珠宮

夜月玲瓏たり蕊珠宮

繁花穠蕊衆香國

繁華穠蕊衆香國

道人林下開道場

道人林下に道場を開く

左右纈祭書滿牀

左右纈祭書床に滿つ

手持游戲一枝筆

手に持ち遊戲す一枝の筆

咳唾成珠千百章

咳唾珠を成す千百の章

有時閉門不敢出

時有て閉門して敢えて出でず

經營慘澹日抱膝

經營慘澹 日に抱膝す

混沌七竅苦鑿開

混沌の七竅鑿開に苦しむ

夢見文殊來問疾 夢に見る文殊の疾を問いに來たるを  
豈知道人詩通神 豈に道人の詩の神に通ずるを知らんや

妙想彌漫六合間 妙想彌漫す六合の間  
無物無事不網羅 物として事として網羅せざる無く

悉入詩中別有天 悉く詩中に入りて 別に天有り

譬諸維摩居士淨明室咫尺 諸を譬えん維摩居士が淨明室の咫尺  
收容八萬由旬須彌山 八万由旬の須彌山を收容するに

道人亦存廣長舌 道人亦た廣長舌を存す

如何方門向人說 如何が方門人に向かいて説かん

興旺現出匡鼎身 興旺に現出す匡鼎の身

解頤自驚太妙絕 解頤して自ら驚く太妙絶

諸天縹縹春雲開 諸天縹縹として春雲開く

百千諸佛安在哉 百千の諸仏いづくに在らんや

香南雪北不知處 香南雪北処を知らず

髣髴散花天女來 髣髴す花を散らして天女來たるを

（狭い部屋の中にと純白の心<sup>187</sup>が生ずる。優れたよい梅の香りは、直ちに詩歌を作る心を浄化しようとする。その部屋の周囲には、数え切れぬほどの梅の花が植えてある。春が来て地面いっぱい暖かい雪へのような梅の花びら<sup>188</sup>が積っている。夜の月が玲瓏と輝いて仙宮のようであり、沢山の花が乱れ咲いて衆香國のようである。道人は林下に道場を開いた。左右には獼祭のように寝台が書籍で一杯である。手に筆を持って遊べば、片言隻語が悉く珠玉の章句と成る。ある時、門を閉ざし、敢えて外に出ず、あれやこれやと思案をめぐらして、日々、ひざをかかえて、混沌の七竅<sup>189</sup>を彫るのに苦しむようにしていたら、夢に文殊菩薩が見舞いに來た。どうして道人の詩が神に通じたのか、妙想は天地四方の間に広がり、あり

とあらゆる事が残らずそこに包含され、悉く詩の中に入って別天地が出現した。例えば維摩居士の狭い淨明室の中に、八万由旬<sup>189</sup>の広大な須彌山<sup>190</sup>を收容するようなもの。道人も釈迦のように勝れた弁舌を持っていても、方便をいかに人に向かって説くべきか。匡鼎<sup>191</sup>の身が勢いよく出現し、破顔一笑その大妙絶に自ら驚く。もろもろの天上界では縹渺として春の雲が開き、大勢の仏様達はどこにいるのか。天竺の香醉山の南、大雪山の北、いたるところ、花をまきちらしながら天女がやってくるようである。）

はじめに本詩における仏教の『維摩詰所説經<sup>192</sup>』（以下『維摩經』と呼ぶ。）の影響を記述する。五峰詩「梅花丈室歌」の語彙・構成から見れば、『維摩經』と道家思想との関わりが深い。例えば、最初の句は「十笏之室生虚白」であるが、この「十笏<sup>193</sup>之室」というのは、維摩居士の部屋を指すのに用いられた言葉である<sup>194</sup>。また、これと対になっている言葉「虚白」は『莊子・人間世』の「瞻彼闕者、虚室生白、吉祥止止」を典故とする。また、「夜月玲瓏藥珠宮」の「藥珠宮」は仙宮であり、「繁花穠蕊衆香國」の「衆香國」は、『維摩經』の「香積佛品第十」<sup>195</sup>に典故がある。

「夢見文殊來問疾」という詩句は、『維摩經』の「文殊師利問疾品第五」で、維摩の病を仏の命により、文殊が見舞う話から來ている。（爾時佛告文殊師利。汝行詣維摩詰問疾。」<sup>196</sup>）夢に文殊が現れたのが、維摩に文殊が現れたようだと言うのであろう。この後の詩句「譬諸維摩居士淨明室咫尺 收容八萬由旬須彌山」では、直接に「維摩居士」のことに触れている。これも『維摩經』の「不思議品第六」<sup>197</sup>にある以下のような經文を典故としている。

(前略) 東方度三十六恒河沙國有世界。名須彌相。其佛號須彌燈王。今現在。彼佛身長八萬四千由旬。其師子座高八萬四千由旬嚴飾第一。於是長者維摩詰。現神通力。即時彼佛遣三萬二千師子座高廣嚴淨。來入維摩詰室。(後略) 198。

上記経文のように維摩居士の十笏しかない丈室に、八万由旬の須弥山が入られた。五峰は文殊が夢に現れたのを描いた後、四句をもって、詩作の世界を描く。この「梅花丈室歌」の最後を締めくくる「香南雪北不知處 髣髴散花天女來」の詩句の中の「香南雪北」「散花天女」という言葉は、仏教と関係ある語彙である。例えば、『景德傳燈録<sup>199</sup>』に、「(前略) 問金粟如來爲什麼却降釋迦會裏。師曰。香山南雪山北。(後略)」とあり、「香山南雪山北」というのは、天竺の香醉山の南、大雪山の北という意味である。また、『維摩経』「觀衆生品第七」<sup>200</sup>には、以下のように天女が菩薩らの頭上に花を撒く話がある。

(前略) 時維摩詰室有一天女。見諸大人聞所說法便現其身。即以天華散諸菩薩大弟子上。華至諸菩薩即皆墮落。至大弟子便著不墮。一切弟子神力去華不能令去。爾時天女問舍利弗。何故去華。答曰。此華不如法是以去之天曰勿謂此華爲不如法。所以者何。是華無所分別。仁者自生分別想耳。若於佛法出家有所分別爲不如法。若無所分別是則如法。觀諸菩薩華不著者。已斷一切分別想故。(後略)

これを読めば、五峰詩「梅花丈室歌」の最後の一句「髣髴散花天女來」も、『維摩経』に由来したものであることは明らかであろう。

五峰詩「梅花丈室歌」には、作詩に関する語句がいくつかある。まず冒頭二句目を再掲する。

十笏之室生虚白  
靈芬直欲淨吟魄

「梅花丈室」である「十笏之室」にいと精神は純粹になり、「梅花」の香りは五峰の「吟魄」詩精神をただちに浄化してくれる。次の詩句に出ている「麝珠宮」や「衆香國」も、全て「梅花丈室」のことを描写している。

四邊環植萬梅花  
春來滿地暖雪積  
夜月玲瓏麝珠宮  
繁花穠蕊衆香國

(傍点筆者)

この六句は、五峰が作詩時において求めている環境・雰囲気をうかがわせる。

次の四句も詩作の心境に関係する。

道人林下開道場  
左右懶祭書滿牀  
手持游戲一枝筆  
咳唾成珠千百章

道人とは「神仙の道を得た人」、「道家の法を修める者」、「仏法に歸依する人」、「俗世間をのがれた人」など<sup>201</sup>を意味するが、ここでいう「道

人」は、書籍を寝台の上に満たし、珠玉の名文をたくさん作っていることからすれば、主として詩人を意味していると思われる。「咳唾成珠」は『莊子』「秋水」を典拠とする言葉であり、後、文詞の優美を形容する言葉として用いられることになった。

次の二句、

有時閉門不敢出

經營慘澹日抱膝

は、詩人五峰の苦吟の有様を表現している。「經營慘澹」は、杜甫詩「丹青引 贈曹將軍霸」にある詩句で、次に、杜詩を紹介する。

詔謂將軍拂絹素

詔みことのりして將軍に謂ふ絹素を拂へと

意匠慘澹經營中

意匠慘澹たり經營の中

斯須九重真龍出

斯須九重真龍出づ

一洗萬古凡馬空

万古の凡馬を一洗して空し

杜甫詩「丹青引」は、曹霸という將軍の人物伝記について描かれた七言古詩である。曹將軍は馬を描くのが得意であるため、ある日、玄宗皇帝は、曹將軍に玉花驄と称す馬を写生して見よと命じた。將軍はこう描こうか、ああ描こうかと、いろいろ考え、工夫を凝らし、絹素に描いた馬はまるで九重の真龍（駿馬の意味）のように出現し、外の凡馬は一洗され、周辺はただ空しくなるばかりであった<sup>202</sup>。

五峰の「經營慘澹日抱膝」の「經營慘澹」も、杜甫詩にある「慘澹經營」のような努力をし、詩作に尽力している様子を描いていると思われる

る。

五峰の詩作姿勢については、山田毅城の「懐かしき第二の父<sup>203</sup>」を参看したい。

（前略）其少壮時代に在つては或は席上直ちに作を成すと言つた側でもあつたらうが、其後の先生は文字が豊富になればなる程一字一句苟もせず、寧ろ遅吟、苦吟、沈吟の詩人となつた斯うして漸く出来上がつても尚ほ推敲に時日を費して定稿とする迄には容易でなかつた。多忙であつた先生は、縣内の各地を旅行中、山村水郭を人車にゆられながら過ぐる際に、静かに途上の風光を見て詩興を動かすことが最も多いと聞いたので「然らば汽車中は如何です」と問ふた處、「いや汽車は人が混雑して詩作に適せぬ。併し徒然だから眼を閉ぢて將棋の詰手を考へてゐる」と答へられたものであつた。（後略）

右の山田の回想からは、五峰は少壮期に席上で詩を即吟することができたが、勉強を重ね、知識を蓄積すればするほど、たやすく作詩することができなくなり、苦吟するようになったと書かれているが、一九歳での作「梅花丈室歌」の「有時閉門不敢出 經營慘澹日抱膝」という詩句が事実を表しているとすれば、五峰の詩作は少壮期から既に、「遅吟」「苦吟」「沈吟」であつたことになる。

これに続く詩句は「混沌七竅苦鑿開 夢見文殊來問疾」であり、詩作において、『莊子』の「應帝王<sup>204</sup>」の中の渾沌についての挿話と維摩居士を文殊菩薩が見舞つた話に触れている。すなわち詩作の背景を道家思想と『維摩經』の世界の二つの世界が融合したものとして語っているのである。注目すべきは、次の四句である。

豈知道人詩通神  
妙想彌漫六合間  
無物無事不網羅  
悉入詩中別有天

ここに再び「道人」という言葉が使われている。「道人」の詩は神に通じ、また、その「妙想」は天地の間に広がり、その詩的世界には、あらゆる物事が網羅され、別天地が形成される。この広大なイメージは仏教的であるが、しかし、最後に用いられている「別有天」という言葉は、李白詩『山中問答』の「桃花流水窅然去，別有天地非人間。」を踏まえていることからすれば、その世界は道家・道教的な仙境を意味するものでもある。

最後の四句、

諸天縹縹春雲開  
百千諸佛安在哉  
香南雪北不知處  
髣髴散花天女來

は、したがって、一見絢爛たる『維摩經』的イメージの世界のようであるが、実は仏教的な悟りの世界を表現しているわけではない。詩の境地を表すイメージとして結実しているのである。

このように、五峰は『維摩經』と道家・道教の語彙を用い、自らの詩作を道家の思想や維摩の悟りと重ね合わせて表現しているが、それは道家的思想自体を、また、『維摩經』的悟り自体を求めていたからではない。あくまで求められているのは詩作における「妙想」であって、自らの詩

の世界の中で、道家的隱逸思想と『維摩經』的悟りの融合することが求められているのである。このことは以前拙稿<sup>205</sup>で論じた、五峰の仙境或は隱逸の世界への憧れへと繋がっていくと思われる。

五峰詩「梅花丈室歌」では「禪」という文字は使われてはいないが、それは『維摩經』の語彙とイメージによって五峰なりの表現として結晶しているのである。五峰は杜甫詩「飲中八仙歌」の「醉中往往逃禪を愛し」て飲酒と禪を一致させた蘇晋に我が身をなぞらえ、『維摩經』をわがものとして自らの詩の世界を『維摩經』の壮大華麗なイメージを用いて描き、維摩の法を説く方便としての仮病を「病禪」と称して、自らを維摩になぞらえたのである。

### 三、「病禪」―五峰「歳暮雜感」、「新正三日書懷」

次に、「病禪」という言葉について考えてみたい。この言葉は『五峰遺稿』には二回使われている。最初は『五峰遺稿』上巻の「歳暮雜感」においてであり、もう一箇所は同じ上巻の「新正三日書懷」の詩中である。まず、最初に使われた「歳暮雜感」を見よう。『五峰遺稿』の編集順から推測すれば、五峰二三歳の作詩である。

綈袍恥受故人憐　　綈袍　恥じて受く　故人の憐み  
忍凍空齋夜不眠　　凍を忍ぶ空齋　夜眠らず  
散逸圖書歸故主　　圖書遭盜近日皆返　　散逸の凶書故主に帰る

　　閨寥燈火照殘年　　閨寥たる灯火　殘年を照らす  
　　誰知范叔眞寒士　　誰か知らん范叔が眞の寒士なるを  
　　自笑維摩是病禪　　自ら笑う　維摩の是れ病禪なりと

戸隙繽紛飛雪入　戸の隙に繽紛として飛雪入る  
居然身坐散花前　居然として身　散花の前に坐る

（恥ずかしいことに綿入れの着物を友人からもらった。がらんとした部屋で寒さに耐え、夜になっても眠れない。先日、盗難に遭って散逸した図書が自分の手元に帰ってきた。物寂しく静かなともしい火が残りの年を照らしている。一体、誰が范叔のことを本当に貧しい人物だと思うだろうか。これは維摩居士の病禪のようなもののだと思いい、自ら笑う。戸の隙間から雪が繽紛と入ってくるが、安らかな気持ちで花のように散る雪の前に坐っている。）

この七言律詩の起聯の前半、「綈袍恥受故人憐」に出てくる「綈袍」という語句の典拠は、『司馬遷の』史記』、『范睢蔡澤列伝第一九』である。そこには、「(前略)以綈袍繼繼、有故人之意(後略)」と書かれている。あらましを記すと、戦国の魏の人である范睢(字叔)が先に魏の大臣・須賈に仕えた。ある時、范叔が須賈とともに、魏の使者として斉国に行った。斉の襄王が范叔の才能のことを聞いて、金銭と酒を范叔に賜った。須賈がそのことを耳にして怒り、范叔が魏を裏切ったのではないかと疑った。魏に帰国した後、須賈が斉でのことを魏の相に報告すると、魏の相は怒り、范叔に罰を加えた。范叔は魏を逃げ、秦に入って相となり、重用される。魏は范叔を死んだと思っていた。ある日、魏の使者として、須賈が秦に入り、范叔がそれを聞いて、襤褸の服を着替え、細民の格好で須賈に会いに行った。須賈は驚き、范叔の貧しい身なりを見て、哀れに思い、自分の綈袍を范叔に与えた。この後、須賈が秦の相「張祿」に会い、「張祿」が「范叔」のことだと分かり、その場で、范叔に謝罪する。范叔は「あなたには罪が三つあるけれども、先日、旧友の情けから綈袍をくれた。それで、あなたの罪を追及しないことにする。」と言った。

五峰詩の「綈袍恥受故人憐」は、『史記』のこの記事を踏まえたものである。即ち、范叔が宰相の身でありながら、貧寒の人に身をやつし「范叔一寒如此哉!」、旧友の須賈から一枚の綈袍をもらったという故事である。五峰も友人から綿入れの着物をもらって、起聯の後半「忍凍空齋夜不眠(凍を忍ぶ空齋　夜眠らず)」に描かれているように寒さを何とか凌いでいるが、本来の自分は范叔同様、単なる貧乏人ではないという気概がこの詩句にこめられているだろう。

次の前聯は、「散逸圖書歸故主(散逸の図書　故主に帰る)　閨寥燈火照殘年(閨寥たる灯火　殘年を照らす)」という対句になっている。詩中の注釈が語っているように、盗難に遭った図書が先日、全部帰ってきた。詩人・文人の五峰にとつては、喜ぶべきことである。もし火が「殘年」を照らしている。「殘年」は年末を意味し、また、人生の晩年を意味する言葉であるが、ここではまさに一年が尽きようとしているという意味にとるべきであろう。後聯を見よう。

誰知范叔眞寒士  
自笑維摩是病禪(傍点筆者)

「寒士」とは、貧しいが人格高潔である人物を指す語として使われているが、同時に雪国新潟の年末の寒さに耐えている自分を現す表現だと考えられる。

ここに、「病禪」という語句が登場する。「梅花丈室歌」で述べたように、『維摩經』では文殊菩薩が病気の維摩居士を見舞いに行くことになっているが、実は、維摩居士は本当に病気になったわけではない。『維摩經』ではこのことを、「其れは方便を以って身に病あるを現ず」「方便品」第



(二)と書いている。それは法を解くための方便であり、維摩は見舞いに来た客に法を説いたのである。「病禪」とは、あまり用いられた例のない言葉であり、五峰の造語かと思われるが、病を方便とした維摩の禪を指すのであろう。自らを、なかば冗談のように、維摩居士の「病禪」になぞらえているのである。

五峰は一八歳の時に、既に地租改正のため、奔走し、また、二〇歳の年に、既に郡会の議員になり、更に、明治一二年即ち五峰二一歳の時に、新潟米商会所（今の米穀取引所前身）頭取の代理となっている<sup>207</sup>。社会人になったばかりの五峰が、実際に仏門に入るわけにはいかないだろう。その気持ちがあるとしても、実現できないわけである。

### 戸隙繽紛飛雪入 居然身坐散花前

これはこの七言律詩の結聯である。右記の雪国の話とともに見れば、雪が戸の隙間から舞い入り、乱れ落ちて来た風景を描いている。吹雪さながらの世界を讀者の目の前に展開しているだろう。結聯の後半では、「散花」という言葉が使われている。雪の乱れ入る情景を比喩的に描いていると考えられるが、前述した五峰詩「梅花丈室歌」の最後の一句である「髻髻散花天女來」をも連想させ、更に『維摩經』の「散花天女」まで連想させるだろう。天女から撒いた花のように降り注ぐ雪の中、じつと坐っている身は禅僧の座禅中の姿のようにも見える。体を動かさず心も動かさず、安らかに静かにずつと座り込む五峰の年末における心境が、このイメージによって表されている。

次に「病禪」という語句が出てくる詩は、「新正三日書懷」である。

### 新正三日書懷（新正三日 懷を書す）

淑氣先通鳥語邊	淑氣先ず通ず 鳥語の邊
辛盤接上誕辰筵	辛盤 接上す誕辰の筵
開春蕩蕩第三日	開春蕩蕩たり第三日
落地匆匆廿五年	落地匆匆たり二五年
慧業竟應從謝後	慧業は竟に謝の後に從ふべく
才名肯道愧盧前	才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道はん
蕭然丈室梅花下	蕭然たる丈室 梅花の下
笑署頭銜是病禪	笑ひて署す頭銜是れ病禪

（和やかな新春の秀困気が先ず鳥の鳴き声のあたりに感じられる。五辛盤<sup>208</sup>が私の誕生日の宴に次々と出てくる。新春のゆつたりしたこの三日に私はこの世に生まれ出て、以来、あわただしく二五年を過ごしてきた。慧業はやはり謝（靈運）には及ばず、才名は盧（照鄰）の前にあることを愧じなければならない。物寂しい狭い居室は梅の花の下にあり、若し仮に、署名をしなければならぬとすれば、笑って、「病禪」と記すのである。）

本詩の中で最初に注目したい言葉は、頸聯の冒頭の「慧業竟應從謝後才名肯道愧盧前」という対句に登場する「慧業」である。この語句の典故は、『宋書<sup>209</sup>』の以下の叙述である。

太守孟顓事佛精懇、而為靈運所輕、嘗謂顓曰：「得道應須慧業文人、生天當在靈運前、成佛必在靈運後。」顓深恨此言。（大意：太守である孟顓は仏教に仕えるのが大変熱心なも

の、(謝) 靈運には軽視されていた。ある時(謝靈運が)孟顛に「悟りを会得するにはまさに教理に通じた文人であるべきだ。あなたが天に生まれたのはまさに靈運より前のことだったが、仏となるのはきつと私の後になるだろう。」と言った。顛はこの言葉を深く憎んだ。

「慧業」という言葉は、本来仏の知恵に裏付けられた行為を、更には仏教の教理に通じていることを意味する。そう考えると、頸聯の前半である「慧業竟應從謝後(慧業は竟に謝の後に従ふべく)」というのは、自分の仏教についての知識はついに謝靈運に及ばないだろうという意味になる。しかし、頸聯の後半「才名肯道愧盧前(才名は肯て盧の前にあるを愧ずと道はん)」ということからすれば、「慧業」は、単に文業のことを言っているように見える。

次に、「盧前」という言葉であるが、これについては、『舊唐書<sup>210</sup>』に左のような記述が見える。

炯與王勃、盧照鄰、駱賓王以文詞齊名、海內稱為王楊盧駱、亦號為「四傑」。炯聞之、謂人曰：「吾愧在盧前、恥居王後。」

楊炯は王勃、盧照鄰、駱賓王とともに文章や詞などで名を馳せていたが、世評は「王、楊、盧、駱」の順番で呼んでいた。楊炯がそれを聞いて、人に「私は盧(照鄰)の前に自分が位置づけられることを恥ずかしく思い、一方、王(勃)のような人物の後に自分が位置づけられるのも恥ずかしい。」と嘆いた、とこのことである。

この記述からすれば、前半の「慧業竟應從謝後」の「慧業」も、文業についてのことを比喩的に述べているのではないかと思われる。「梅花丈室歌」においても、自らを維摩に喩え、「道人」と称しながらも、仏教のことを述べているのではなく、詩作のことを言っていたことが参考になる。五峰が「新正三日書懷」において、自らを、智恵は無論、「謝」の後に従い、詩才が「盧」の前に出ることを恥じると述べたのは、先人に対する尊敬の気持ちと自分の作詩才能に対する謙遜の気持ちが表示されたと見てよい。同時に、二五歳になったばかりの人物の言葉としてみれば、相当な自負心と自尊心との高さが感じられる。五峰の漢詩は、二一歳の時、明治詩壇を一新した森春濤の「新文詩」に初めて掲載された。当時「新文詩」といえば、唯一無二の漢詩雑誌だった<sup>211</sup>。更に二五歳の時には、清人・王治本(一八三五〜一九〇七)の詩集『舟江雜詩』を編輯し、注をつけて出版した。清末の在日文人の中でも、三〇年間という滞在期間最長の人物である<sup>212</sup>。王の著作は極めて少なく、この『舟江雜詩』は、王にとっては唯一の刊行資料になる。三〇年間にわたる、詩の評点や詩集の序や題詞・題詩などが、大量に残されたにもかかわらず、唯一の詩集が五峰の手で出版されたのは、ただの偶然ではないと考えられる。この業績に対して五峰の抱いた自負心と自尊心は、想像に難くない。詩の頸聯からうかがわれるのは、特別な五峰の青年期の客気である。

最後に、注目したいのは、「丈室梅花」という言葉である。「新正三日書懷」の尾聯は、

蕭然丈室梅花下  
笑署頭銜是病禪

となっていて、その前半に、「丈室梅花」という言葉が出てくる。この「丈室梅花」という言葉は、先述した五峰の「梅花丈室歌」と題する別詩を連想させるだろう。その「梅花丈室歌」には、『維摩經』の「衆香國」や「文殊問疾」や「八萬由旬須彌山」や「天女散花」などの仏語が用いられ、五峰の『維摩經』に対する関心の深さを表すとともに、五峰の部屋が維摩の「丈室」になぞらえられていた。この尾聯の後半に、「歳暮雜感」で用いられていた「病禪」という言葉が再び登場する。「笑ひて署す頭銜是れ病禪」。「歳暮雜感」では「病禪」は維摩の方便としての病という意味で用いられていたが、基本的には同じ意味で用いられていると考えてよいであろう。「頭銜」は一般に官職名を言うが、ここでは自称というくらいの意味であろう。冗談半分に自らを、「病禪」すなわち仮病を使って道を説いた維摩に擬しているのである。「歳暮雜感」の「自笑維摩是病禪」（自ら笑う 維摩の是れ病禪）という詩句と、それから一年余りがたった二五歳の誕生日の「笑署頭銜是病禪」（笑ひて署す頭銜是れ病禪）という詩句は、句の構造自体類似しているが、自らを病を方便として禪を説く維摩になぞらえるという内容自体は変化していない。「病禪」とは言うものの、仏教の教理や悟りを意味しているのではなく、「梅花丈室歌」の用例と同様、詩の境地を表現しているものと考えられる。

#### 四、「半通禪」と「已通禪」

事实上、五峰には、二五歳の「新正三日書懷」の「病禪」から、一〇年たち、「半通禪」という表現が現れ、また、その五年後、「已通禪」という表現も現れる。次いで、その「半通禪」、「已通禪」に注目し、「禪」に対して深化した五峰の心境などについて検討を試みたい。

『五峰遺稿』にある「鬢絲禪榻小影（鬢糸 禪榻の小影）」と題する七

言律詩にいう。

茶煙輕颺夕陽天	茶煙 輕く颺る	夕陽の天
愁鬢相欺卅五年	愁鬢 相欺く	三十五年
到手千金容易散	手に到る千金	容易に散じ
撐腸萬稿若爲傳	腸に撐 <small>み</small> てる萬稿	若 <small>なんすれ</small> 為ぞ傳わらん
傲應徹骨白雲瘞	傲りは	まさに骨の 白雲の瘞 <small>うす</small> むに徹すべし
奇不妨才紅粉憐	奇は	才の 紅粉の憐むを妨げず
誰與牧之嗟薄倖	誰か牧之とともに	薄倖を嘆かん
風流一榻半通禪	風流 一榻	半ば禪に通ず

（茶を煮る煙が軽やかにのぼる中、夕日がぼんやりと見える。両鬢に糸のような白髪が既に現れ、知らぬ間に三十五歳になった。手に入る金は、すぐになくなるが、頭の中に充滿する文章は後世にどうして伝わろうか。傲骨は全部漂っている白雲に埋めればよい。奇才は美人に愛されることを妨げない。誰が牧之とともに薄倖を嘆こうか。風流の寝台は、半ば禪に通じている。）

「通禪」という表現が現れる五峰の肉筆もある。五峰が自書した掛け軸の中では、以下のような表題無しの七言律詩が伝世する。

茶煙輕颺夕陽天	茶煙 輕く颺る	夕陽の天
愁鬢相欺四十年	愁鬢 相欺く	四十年
到手千金容易散	手に到る千金	容易に散じ
撐腸萬卷若爲傳	腸に撐 <small>み</small> てる萬卷	若 <small>なんすれ</small> 為ぞ傳わらん

寒予看合白雲瘞  
如此才唯紅粉憐  
不與牧之嗟薄倖  
風流一榻已通禪

寒き予の 合に白雲の瘞むを見る  
此の如きの才 唯だ紅粉のみ憐れむ  
牧之とともに薄倖を嘆かず  
風流 一榻 已に禪に通ず

五峰樵客醉題

まず、「半通禪」と「已通禪」との共通性を見よう。

(一)「茶煙」と「愁鬢」

上記の五峰の漢詩二首は、それぞれの起聯の後半から見れば、五峰三五才の作と四〇才の作だと分かる。起聯の前半は同じく「茶煙輕颺夕陽天(茶煙 輕く颺る 夕陽の天)」と歌われている。「茶煙」に関わる先人の作から見ると、以下のような杜牧の「題禪院(禪院に題す)」<sup>213</sup>と題する七言絶句にいう。

舩船一櫂百分空 舩船一櫂すれば 百分空し  
十歳青春不負公 十歳の青春 公に負かず  
今日鬢絲禪榻畔 今日 鬢糸 禪榻の畔  
茶煙輕颺落花風 茶煙輕く颺る 落花の風<sup>214</sup> (傍点筆者、以下

同)  
(百斛の舩についだ酒も一挙に飲み干し、年少の頃は血気が盛んで人にひけを取ることはなく十年も遊んでしまった。今は鬢は白いものが多く禪榻に凭り、花を散らす風を前にして茶を煮る煙が軽く上

がって来るといった生活振りである。)

この作は杜牧の四十九才の時、銘茶の産地である湖州(今の浙江省)の刺史に在任中の作だと推測される。この絶句の起句と承句とは、杜牧の痛飲と青春時代の回想について、詠われている。その転句と結句とは、今の杜牧のことに、茶を煮る時に揚がり登っている湯気・煙から人生の感慨について歌われている。「時は晩春の午後だと考えられ、場所は禪寺の前、傍に桃か梨の樹、鬢のあたりに白髪が目立つ中年の詩人、寺院の中で茶を煎る煙が、時おり花びらを散らして吹く風にゆらゆら立ち上がるのを、目で追っている、という光景」<sup>215</sup>を描き出している。また、石川忠久は以下のように述べている。

ここでのポイントは、言うまでもなく「茶煙」だ。(中略)この詩に於いては、青春のほろにがさを茶の煙にとらえたと言おうか。そもそも茶は唐代になつて一般的な飲物になり(陸羽『茶経』が七六〇年頃に撰せられる)、徳宗の建中年間(七八〇〜八三)に課税の對象となつている。詩の世界ではやはり中唐以後にあらわれる。劉禹錫の「秋日過鴻舉法師寺院便送歸江陵」<sup>216</sup>、白居易の「即事」<sup>217</sup>があるが、これらは目あたらしくはあるが、單に平面的なとらえかたに過ぎない。漸く詩に入ってきたこの題材をたくみに活用して人生を詠じた杜牧である。そのセンスには、ほとほと感じ入る。この句によつて「茶煙鬢絲の感」なる語も生まれたほどで、後世への影響は大きい。蘇軾<sup>218</sup>の「鬢絲強理茶烟中」や、虞集<sup>219</sup>の「茶烟輕颺鬢絲風」などの追隨作も出た。<sup>220</sup>

一方、日本では、明治初期の東京漢詩壇の「詩人の隊長」<sup>221</sup>といわ

れる大沼枕山（一八一八〜一八九一）に、以下のような「茶煙」と「禪榻」と関する詩作がある。例えば「松影空壇濕 茶煙禪榻清」（『房山集』「宿吉祥院」）、「時中艱虞遊人罕 一榻茶烟寒秘靜」（『枕山詩鈔二編』卷之中）、「二月十一日同夢香翁寬庭師鏡湖樂山遊新梅莊得月字」）、「茶榻自今春寂寞 落花風冷一絲煙」（『枕山詩鈔三編』卷之上「詠近世節女二首」第二首）、「夢醒時作登仙想 一榻茶煙似白雲」（『枕山詩鈔三編』卷之上「夏日睡起」）などがある。<sup>222</sup>玉池吟社を代表する第二の詩人の小野湖山（一八一四〜一九一〇）にも「茶煙禪榻」が使用される詩がある。「鎌倉雜感十二首」と題する作の中の「惜春詞」と題する七言律詩の尾聯に「詞客從來多薄命（詞客 從來 薄命多し）茶煙禪榻了生涯（茶煙 禪榻 生涯を了す）」<sup>223</sup>という詩句もある。

また、五峰の恩師の森春濤にも「禪榻茶煙」<sup>224</sup>と題する七言絶句がある。その転句と結句には「風裏落花吹不定 鬢絲參照美人禪」とある。其の弟子である五峰の詩作中には、杜牧の本首の起句と承句とは取り入れられず、その転句を題「鬢絲禪榻小影」にし、「鬢絲」を使わず、「愁鬢」としてわが身を愁えている。また、杜牧の結句の「茶煙輕颺」を起聯の前半に取り入れているが、「落花風」ではなく、「夕陽天」に変えている。この部分は漢詩人・五峰の人生の感慨を表していると考えられる。『五峰遺稿』巻上の「同僧鏡雨過永明寺看花戊寅」と題する七言絶句に言う。

一夢揚州感歲華 一夢 揚州 歲華を感ず  
清晨來乞野僧茶 清晨 來たりて乞う 野僧の茶  
鬢絲欲簡情先老 鬢絲簡を欲して 情先に老い  
移榻綠陰看落花 綠陰に榻を移して 落花を見る  
（杜牧の）揚州一夢のように、私は歲月の経つのを実感している。

清らかに晴れた朝に、田舎の僧侶が入れたお茶を飲みに来た。鬢にある白髪を抜こうと思うが、感情が先に年取った。こしかけを青葉の茂った陰に移し、花が散り落ちるのを見る。）

題名の「戊寅」という年号から見れば、明治一一（一八七八）年、数え年二〇歳の漢詩である。この詩の転句、結句にそれぞれ出てくる「鬢絲」、「落花」という語彙は、前述した杜牧詩「題禪院」を連想させるが、その起句に使用されている「一夢」、「揚州」という語句も、杜牧詩「遣懷（懐いを遣る）」の「十年一覺揚州夢 贏得青樓薄倖名」を典故としていることは明らかである。

## （二）「千金」と「撐腸」

「半通禪」に関する五峰の漢詩では、「到手千金容易散 撐腸萬稿若爲傳」という頷聯があり、「已通禪」に関する五峰の漢詩では、「到手千金容易散 撐腸萬卷若爲傳」という頷聯になっている。まず、「千金」については、「偶題」と題する七言絶句にいう。

麟閣功名志未灰 麟閣 功名 志未だ灰にならず  
時清無地試吾才 時清く 吾の才を試すに地無し  
美人笑勸長安酒 美人 笑いて勸む長安の酒  
散盡千金歸去來 千金散じ尽くして いざ帰りなん  
（麟閣<sup>225</sup>（麟閣の略語）にのぼるような功名は未だに果していない。なぜならば、時勢が穏やかで、吾が才能を試すところが無いからだ。美人から長安の酒<sup>226</sup>を笑って勧められるような遊樂生活をして、有り金を全部使い果たして、帰るとしよう）

上記の五峰詩の結句の「散盡千金歸去來」は、李白の詩「將進酒 鼓吹曲辭」にある「天生我材必有用 千金散盡還復來」また、「歸去來」は陶淵明の「歸去來辭」からきている。ここで、五峰は未だ二十歳になつたばかりであるが、時勢は青年客気を晴らすに由無く、遊興に耽るしかない心境を描いている。

次に、「撐腸」という語彙に注目したい。『五峰遺稿』巻上では、「消夏六詠用蔭山晚香韻」と題する詩にいう。

我憶玉川子 我 玉川子を憶ふ

五千卷撐腸 五千の巻 腸に撐<sup>み</sup>てり

長日時思詩 長日 時に詩を思ふ

紗帽對茶牀 紗帽 茶牀に對し

清風吹不斷 清風 吹いて断まず

習習兩腋涼 習習として 兩腋 涼し

煎茶 煎茶 茶を煎る

上記の作詩は『五峰遺稿』の編集順番によると、明治一六（一八八三）年、五峰二五才の漢詩だと推測できる。作中の「玉川子」は中唐の詩人である盧仝（約七九五〜八三五）の号である。玉川子には茶の効用を詠じた「走筆謝孟諫議寄新茶<sup>227</sup>」と題する古詩があり、その中に、「三碗搜枯腸 唯有文字五千卷」という詩句のほかに、「碧雲引風吹不斷」「唯覺兩腋習習清風生」という五峰の詩に使われている語を使用した詩句がある。

### （三）「白雲」と「紅粉」

上記の五峰の漢詩二首、それぞれの頸聯、三五才の作では、「傲應徹骨白雲瘞 奇不妨才紅粉憐」と、四〇才の作では、「寒予看合白雲瘞 如此才唯紅粉憐」と詠われている。このように「白雲」と「紅粉」が對句になっている杜牧の作がある。「春日茶山病不飲酒因呈賓客（春日の茶山にて 病みて酒を飲まず 因りて賓客に呈す）」と題する五言律詩にいう。

笙歌登畫船 笙歌 画船に登る

十日清明前 十日 清明の前

山秀白雲膩 山秀でて白雲膩かに

溪光紅粉鮮 溪光りて紅粉鮮かなり

欲開未開花 開かんと欲して未だ開かざる花

半陰半晴天 半ば陰り 半ば晴れたる天

誰知病太守 誰か知らん病太守も

猶得作茶仙 猶お茶仙となるを得たり<sup>228</sup>

この詩について、石川<sup>229</sup>は「(前略)中四句は茶山の好風景。末二句、酒が飲めないによつて茶仙となるという、おどけた調子。詩としてどうというものではないが、茶に親しむ杜牧晩年の心境をうかがうに足る。」と言及している。この詩の中では、「白雲」も「紅粉」も自然風景の描写になっているが、他方、五峰詩の「白雲」と「紅粉」とはどういう意味として使われているか検討する必要がある。「白雲」という詩語は、隠逸的な表象や禅仏教的な象徴だと認識されている<sup>230</sup>。そのため、五峰詩にある「白雲」とは、自然現象から仙境のような俗世間を脱した境地ま

でを含んでいる『五峰遺稿』では、「白雲」を含む詩が一〇首にのぼる。他、遺墨中に一首がある。合わせて一一首にのぼる。五峰における「白雲」の全体像は別の機会に述べたい。「紅粉」という単語は、べにとおしろい、脂粉、化粧という意味として、一般的に使われているが、宋代以降、「美女」の意味にも使われるようになった。五峰詩中に出てきた「紅粉」がその次にある尾聯「誰與牧之嗟薄倖（誰か牧之とともに薄倖を嘆かん）」（三五才の作）、「不與牧之嗟薄倖（牧之とともに薄倖を嘆かず）」（四〇才の作）から見れば、この「紅粉」は美人の意味で用いられている。

#### （四）「薄倖」

上記の五峰の漢詩二首は、それぞれの尾聯の前半に、「誰與牧之嗟薄倖（誰か牧之とともに薄倖を嘆かん）」（三五才の作）、「不與牧之嗟薄倖（牧之とともに薄倖を嘆かず）」（四〇才の作）と歌われているが、「牧之」と「薄倖」とは緊密に繋がっているようである。「牧之」とは、晩唐詩人、杜牧の字である。杜牧には「薄倖」を使つた「遣懷（懐いを遣る）」<sup>231</sup>と題する七言絶句がある。

落魄江南載酒行 江南に落魄し 酒を載せて行く

楚腰腸斷掌中輕 楚腰腸斷 掌中に軽し

十年一覺揚州夢 十年 一たび覺む 揚州の夢

贏得青樓薄倖名 贏ち得たり 青樓 薄倖の名

（江南の地にうらぶれて酒を飲み歩いていた頃、まるで楚王の宮から出てきたかと思われる細腰の美人が人の心をかきむしるばかり。漢の成帝の寵妃趙飛燕の再来か、体の軽さは手のひらの上で舞いも

できそうな気がした。当時の揚州の歓楽の夢がさめた今日、もう十年の年月が経ってしまったて、後まで残ったのは妓楼の遊蕩児という名だけである。<sup>232</sup>)

杜牧は揚州在任の三年間、ほぼ毎晩青樓（妓楼・女郎屋のこと）に通い、酒を飲みながら、女郎たちと遊んでいた、風流の限りを尽くしたと言われる。この詩は揚州在任生活の回想にあたるし、「甘酸っぱい憂愁が漂つ<sup>233</sup>」ている<sup>234</sup>。また、「揚州」、「夢」といった詩語は、前述した五峰の詩「同僧鏡雨過永明寺看花戊寅」では換骨奪胎され、「一夢揚州感歳華（一夢 揚州 歳華を感ず）」と表現されている。五峰は杜牧の揚州時代の生活・人生に高い関心を持つていたらしい。なぜなら、「薄倖」という語彙が現れる五峰詩はこれだけではなく、本論文の第一章の第三節で、触れている「讀方外交幽月新瀉詩依韻和之予弱冠已見二毛故七八及之（方外の幽月と交わす「新瀉」詩を讀み、韻に依つて之れに和す。予弱冠、已に二毛を見、故に七八之れに及ぶ。）<sup>235</sup>」と題する詩には次のように使われている。

萬戸風煙擁罽頭 万戸の風煙 罽頭を擁す

虹橋不獨似揚州 虹橋 独り揚州に似るのみならず

八千八水春人舫 八千八水 春人の舫

三十三身古佛樓 三十三身 古佛の樓

森森波濤涵落日 森森たる波濤 落日を涵し

垂垂楊柳蔭長流 垂垂たる楊柳 長流を蔭ふ

不堪重捲珠簾上 重ねて珠簾を捲上ぐるに堪えず

薄倖樊川鬢欲秋 薄倖の樊川 鬢秋ならんと欲す

起聯の後半では「揚州」という杜牧と縁が深い単語が見えるし、また、結聯の後半では「薄倖」、「樊川」といった杜牧と関係が深い語も出現している。「薄倖」は杜牧の「遣懷」詩の詩語であるし、「樊川」とは、杜牧の号である。五峰はこの詩の中で、自分自身を揚州時代の杜牧に擬していると考えられる。更に、ただ「薄倖」に対する関心を持っていただけでなく、大沼枕山のように杜牧の揚州時代の別の姿にも注目していたと思われる。

内田賢治は「大沼枕山と杜牧」で、以下のような指摘している。「杜牧・枕山の両者は、下級官吏と遊歴詩人という境遇の違いこそあれ、共通するものがあるように思われる。<sup>236</sup>」枕山が注目した揚州時代の杜牧は、「薄倖」の名を残し、遊興に夢中になっている一面ではなく、憂国者の一面である。枕山に『歴代詠史百律<sup>237</sup>』と題する詠史詩集がある。「杜牧」と題する作にいう。

憂國其如得志難 分司御史亦閒官  
上書澤潞何曾達 載酒江湖且自寬  
當日李山分氣脈 異時韓海接波瀾  
絶佳詩筆終無用 霜葉如花帶感看（傍点筆者、以下同）

内田は枕山詩「杜牧」を具体的に分析した上で、「揚州時代の杜牧は「遣懷」詩に描かれる遊興とは裏腹に、藩鎮の横行を憂いて「罪言」を上奏した憂国者であり、枕山の描く杜牧像は、憂国者としての杜牧であったといえる<sup>238</sup>」と結論付けている。

明治初期、『清廿四家詩』（明治一一年八月）という詩集が北川雲沼・鷺津毅堂・成島柳北・森春濤など二四人によって選別され、明治大正に

わたって大いに読まれた詩集<sup>239</sup>だと言われている。その巻中に、袁簡齋の詩が収録されている。選者は大沼枕山である。袁簡齋（一七一六～一七七七）は清の詩人・袁枚のことであり、簡齋はその号である。袁枚の「杜牧墓（杜牧の墓）」と題する七言律詩にいう。

蕭郎白馬遠從軍 落日樊川弔紫雲  
客裡鶯花逢杜曲 唐朝春恨屬司勳  
高談澤潞兵三萬 論定揚州月二分  
手折芙蓉來酌酒 有人風骨類夫君

その一方、『五峰遺稿』巻中では、「分韻得庚<sup>240</sup>（分韻し庚を得る）」と題する七言絶句にいう。

一醉高談澤潞兵 一醉澤潞の兵を高談す  
揚州杜牧是前生 揚州の杜牧 是 前生  
自拚落拓江湖老 自ら拚す 落拓して江湖に老ゆ  
不諱青樓薄倖名 青樓薄倖の名を諱まず  
（一旦、酔うと、澤潞<sup>241</sup>の兵のことを大いに論ずる。揚州時代の杜牧は我が前生だ。自ら命がけでこの世で頑張っても、結局落ちぶれて年取った感じである。それにしても、杜牧のように妓楼での遊蕩児という名を諱むことはない。）

『五峰遺稿』の編集順番から見れば、この一首は明治三七（一九〇四）年、五峰四六歳（数え年）の作だと考えられる。五峰の詩は、酒を飲んで酔い、朝廷への不満をわめきちらす、あの揚州にいた杜牧は自分の前



生であり、独りで命がけで政治家<sup>2,4,2</sup>としても漢詩人<sup>2,4,3</sup>としても、心身を使い果たして年を取り、政治における道では順風満帆でなくても、人生の喜怒哀楽を味わいながら、やはり、歓楽街の遊蕩児という名前を避けはしないと、これまでの人生を顧みる感慨の詩である。

次に、「半通禪」と「已通禪」との相違性を見よう。

最初、「通禪」という語に注目したい。『全唐詩』では、中唐詩人・姚合（七七五〜八五四）「送僧默然」と題する詩にいう。

出家侍母前。至孝自通禪。  
伏日江頭別。秋風檣下眠。  
鳥聲猿更促。石色樹相連。  
此路多如此。師行亦有緣。

また、姚合「送僧棲眞歸杭州天竺寺」と題する詩にいう。

吏事日紛然。無因到佛前。  
勞師相借問。知我亦通禪。  
古寺杉松出。殘陽鐘磬連。  
草菴盤石上。歸此是因緣。

『全唐詩』では、貫休（八三二〜九一一）「酬王相公見贈」と題する詩にいう。

孤拙將來豈偶然 不能爲漏滴青蓮  
一從麟筆題牆後 常祇冥心古像前  
九德陶鎔空有跡 六窗清淨始通禪  
今朝幸捧瓊瑤贈 始見玄中更有玄

貫休は唐末五代の僧であり、禪月大師といわれる禪僧である。夢幻的な作風の詩を作り、詩集に『禪月集』がある。

姚合の「通禪」と貫休の「通禪」は、単純に禪仏教の「禪」に通じるという意味に使われているが、五峰詩の「半通禪」「已通禪」はどういう意味で用いられているだろうか。これらの詩語は七言律詩の最後に置かれているので、まず、その前に置かれている詩句を検討してみよう。

### その一、「萬稿」と「萬卷」との違い

五峰の三五歳の詩、「鬢絲禪榻小影」の頷聯の後半にある「撐腸萬稿若爲傳（腸に撐てる萬稿 若為ぞ傳わらん）」の「萬稿」とは、三十数年後に上梓することになる『北越詩話』の原稿のことを示唆している。「萬稿」というのは、まだ、定稿にいたっていない原稿・草稿のことであろう。明治二五（一八九二）年の一月五日から一〇月三〇日まで、三三歳の五峰は七松山人という名義で『新潟新聞』に「越人詩話」を百七回にわたって連載した。郷土の漢詩人たちの人となりと作品を紹介・集成しようという試みで、後の『北越詩話』の原型だといえるものである。これ以後、五峰はその資料博搜・精査などを続ける<sup>2,4,4</sup>。詩中の「萬稿」はこの博搜・精査の段階にあたる原稿のことを示していると考えられる。

五峰の四〇歳の詩、肉筆の掛け軸にある七言律詩の頷聯の後半には、

「撐腸萬卷若爲傳」とある。「萬卷」というのは、「萬稿」より少しまとめた形の書籍を指していると思われる。また、不惑になった五峰にとっては、五年間の資料収集などの作業を通して、少しずつ自信が付き、万巻とまでいえるぐらい大部の書籍の原形が既に構築されていたと想像される。これが「萬稿」と「萬卷」との違いである。

### その二、後聯の違い

三五歳の作では、「傲應徹骨白雲瘞 奇不妨才紅粉憐」と表現されているが、傲骨は白雲に埋もれようとも、政治の途<sup>245</sup>で不運なことがあっても、不撓不屈の精神を持って『北越詩話』の資料を収集し、いかなる困難にあってもその志を貫くのを諦めないという決心を表している。このような世に珍しい優れた才能は、美人たちからも愛されている。

ところで、四〇歳の作では、「寒予看合白雲瘞 如此才唯紅粉憐」となっている。二三歳の五峰自作「歲暮雜感」四首の三首目の頸聯に、「誰知范叔眞寒士（誰か知らん范叔が眞の寒士なるを） 自笑維摩是病禪（自ら笑う 維摩の是れ病禪なりと）」と詠じているが、右記の四〇歳の詩作の「寒」は、この二三歳の詩の「寒士」から来た詩語であると考えられる。「寒」とは、貧乏。貧しい。「寒士」とは、貧しいが人格高潔である人物を指す語として使われているが、ここでは、寒士のような自分が白雲が漂う仙境に埋もれているのを見守っている心情を語っている。このような人だからこそ、美人たちから愛されると、樓閣の美女さえも寒士のような人間を愛していることを物語っている。

三五歳の作では、若くて意気込みが盛んな五峰の客気を表現しているのに対して、四〇歳の作では、多くの苦しみや困難を味わって中年男性・

不惑になった政治家の心境が表されている。

### その三、「半通禪」と「已通禪」との違い

合山林太郎<sup>246</sup>の「幕末明治期の艶体漢詩——森春濤・槐南一派の詩風をめぐって——」では、春濤一派の艶体詩の特徴を以下のような二点にまとめている。その一は、仏教的色彩を帯びた艶体表現である。その二は、不遇な女性への関心である。また、合山がその一の特徴を「仏教、とくに禅的な言葉と色事、情事とを結び付けた表現が多く見られる点」と指摘している。論中、森春濤の「風裏落花吹不定（風裏の落花 吹き定まらず） 鬢絲参照美人禪（鬢絲もて 美人の禪を参照す）（傍点筆者、以下同）」<sup>247</sup>と橋本蓉塘の「薄幸不為名士累（薄幸 名士の累と為さず） 多情好伴美人禪（多情 好し伴はん 美人の禪）」<sup>248</sup>を取り上げ、「色事への執着や女性の美しさそれ自体が、仏教の言葉によつて詠われている<sup>249</sup>」と説明している。春濤詩の「鬢絲」、蓉塘詩の「薄幸」は五峰詩の二首でも使われている。五峰は「美人禪」のような表現はせず、「半通禪」、「已通禪」といった類似の表現を用いているが、五峰の内面では、艶体詩を一部取り入れつつ、自身の経験や経歴に基づいて、今まで、歩んできた人生に対する「茶煙鬢絲の感」のような感慨を示している。「風流一榻」からわかるように、それまでの人生を振り返っているが、そこで美人たちは「奇不妨才紅粉憐」、自分の才能を理解しているのである。

更に、本節で取り上げた三五歳の詩では、

誰與牧之嗟薄倖 誰か牧之とともに薄倖を嘆かん

風流一榻半通禪 風流 一榻 半ば禪に通ず

誰か揚州での粹で洒脱な生活を送った牧之と共に放蕩を嘆こうか、風流は半ば禪に通じているのだと歌っているが、四〇歳の詩では、

不與牧之嗟薄倖 牧之とともに薄倖を嘆かず  
風流一榻已通禪 風流 一榻 已に禪に通ず

揚州での粹で洒脱な生活を送った牧之と共に放蕩を嘆くことはしない。そのような風流は、既に禪に通じているのだと歌っている。

宋の嚴羽(約一一九二〜一二四三)『滄浪詩話』「詩辨」では、

(前略) 大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟。(中略) 然悟有淺深、有分限、有透徹之悟、有但得一知半解之悟。(後略)

(前略) 大抵禪道は惟だ妙悟にあり、詩の道も亦妙悟にあり。(中略) 然れども悟に淺深あり、分限あり。透徹の悟あり、但一知半解の悟を得るあり。(後略)

と述べている。嚴羽の作詩に対する理論によると、「一知半解之悟」とは、いまだ生分かりの境地であり、その「透徹之悟」とは、詩の到達するところのできる究極の境地という意味であり、参禪と作詩とによって会得された究極の境地は、結局は同じであるということである。

若い頃の五峰は、仏教の経文や『維摩詰所説經』・禅思想などに深い関心を持って精読したが、それは禅の「妙悟」と詩の「妙悟」が一致する境地を求めていたためである<sup>250</sup>。五峰詩の「半通禪」は上記の「一知

半解之悟」にあたるし、「已通禪」は上記の「透徹之悟」にあたると思えられる。三五歳の時は、いまだ、志している大作模索の初期段階であり、うまくゆくかどうか分からない不安を抱えており、そのため、「誰與牧之嗟薄倖」と歌ったが、その五年後、大作の完成が目に見えてきたと思うようになったので、「不與牧之嗟薄倖」と断じて詠んだものであろう。不惑の年になって、人生の道を悟ったと同時に詩の道を悟った<sup>251</sup>といえるだろう。

## 結びにかえて

本節では、「逃禪」、「病禪」(二首)、「半通禪」、「已通禪」という語句が出てくる漢詩五首と、維摩居士と関係する「梅花丈室歌」に注目し、典拠などを通じて、五峰の漢詩と禅仏教の関係を分析した。その結果として、五峰が杜甫詩「飲中八仙歌」の「逃禪」に注目した訳も、維摩の「病禪」を語った理由も、嚴羽(約一一九二〜一二四三)の『滄浪詩話』「禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟」に見られるような、禅の「妙悟」と詩の「妙悟」が一致する境地を求めていたことがうかがわれた。五峰の「半通禪」、「已通禪」といった禅についての漢詩七言律詩二首では、杜牧の「題禪院」と題する七言絶句の転、結句と、「遣懷」と題する七言絶句の転、結句を、五峰七言律詩の起聯と結聯の部分にさぐり、盧仝の茶の効用を詠じた「走筆謝孟諫議寄新茶」と題する古詩の「三碗搜枯腸 唯有文字五千卷」に因んで、晩年に上梓した著作『北越詩話』まで連想させ、結聯の部分に出てきた「半通禪」、「已通禪」は、宋の嚴羽『滄浪詩話』「詩辨」中の「一知半解之悟」や「透徹之悟」と通ずる境地を表しており、また、詩の道だけではなく、大沼枕山や恩師である森春濤などの「茶煙鬢絲の感」のように、不惑になった五峰自身の人生の悟りまで表した

表現だと考えられる。五峰の「禪」に関する詩風は師森春濤の「美人禪」といった艶体詩の表現と違っている。

## 第六節 まとめ

本章では、『五峰遺稿』に収録している詩作や『五峰遺稿』に未収録の『新文詩』の詩作など、全三四首（七言律詩一七首、七言絶句一二首、七言古詩一首、五言絶句二首、五言古詩二首）の詩作を紐解いて、五峰の森春濤門下としての詩風、五峰の二〇代の詩風を明らかにした。

第一節では、まず、『新文詩』に投稿する前の七言律詩一首を取り上げたが、この詩は当時、新潟にある風月吟社の重鎮とも言える詩友丸岡南陔への送別詩であり、地元新潟と丸岡の本居地佐渡島との通路、水路や海上の風景に着眼し、筆致流麗な詩風を呈していると考えられる。次に、五峰の『新文詩』へのデビューの七言絶句一首について検討したが、その詩風は形式から見れば、竹枝であり、その上、劉禹錫の竹枝詞の語彙を取り入れ、白居易の水郷描写も参照していると思われる。

第二節では、『五峰遺稿』にある、森春濤が明治一四年に来潟した時に因んだ、五峰の七言律詩二首と七言絶句三首全五首の詩作を選択し、『新文詩』にある七言律詩一首を加え、五峰の人生初めての詩に関する恩師に言及している詩作を通して、当時は以下のような詩風であったと、まとめた。

最初にある「春濤先生見過。招同社友、小集書樓。山際柳堤有詩、乃次其韻。時辛巳立秋前一夕也。（春濤先生過ぎらる。社友を招同し、書樓に小集す。山際柳堤に詩有り、乃ち其の韻に次す。時に、辛巳の立秋の前の一夕なり。）」と題する春濤を迎える歓迎の意を表す七言律詩は、春濤来潟時の新潟は快適な気候であると述べ、森春濤にいつまでも一緒に

居てもらいたい五峰の心境を表している。

次は「松風亭酒間戲賦呈春濤先生（松風亭酒の間に戯れに賦し、春濤先生に呈す）」と題する七言絶句三首連作に関するものである。一首目では春濤の姿を北宋の大文豪・蘇軾になぞらえ、森春濤の知名度を南宋の大文豪・陸游に例え、師森春濤の外観も学識も立派なことを表している。この時点では、五峰は既に北宋や南宋などの詩人や文献などに触れたことがうかがえる。

その二首目は森春濤の自作「詩魔自詠並引」を踏まえ、春濤を「白香山亦老詩魔（白香山 亦た 老いたる詩魔）」とあるように白居易に例え、森春濤の詩才の優れを表現している。

その三首目は新潟に滞在している森春濤の傍について、春濤から「張郎膏蜜卮（張郎の膏蜜の卮）」のような詩文についての指導を受けたが、結局、「只恨肝腸難改易（ただ肝腸の改易し難きを恨むのみ）」「背人偷飲杜陵詩（人に背きて 偷飲す 杜陵の詩を）」となり、杜甫詩をひそかに読んでいることを表している。注目すべき点は本詩の「張郎」である。それは一見して、『雲仙雜記』にある張籍の逸話のようであるが、その裏には明治漢詩壇を風靡している清詩の一人の詩人・張船山のことを指している。ということは、森春濤から張船山などの清人の詩を勧められたが、五峰は自身の性格や詩風に合わない婉曲的に拒否していると考えられる。

最後にある森春濤を送別する七言律詩では、春濤の今回の来遊をまとめた上で、森春濤「詩魔自詠並引」や白居易「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十（拙詩を編集して、一十五卷と成し、因って卷末に題して、戯れに元九（元稹）・李二十（李紳）に贈る）」などを踏まえ、春濤の傑出している風流な流儀を褒め称える心境を描きつつ、東京に帰る道中の錦秋の風景まで想像させている。

『新文詩』第七五集(明治一四年九月)にある「讀春濤詩鈔題其後(春濤詩鈔)を讀み、其の後に題す」という七言律詩(『五峰遺稿』に未収録する詩作)を取り上げ、五峰本詩の詩風は看取した森春濤の詩作における特色を、忠実に表現している。つまり、春濤の詩作を的確に詠じている。清・袁枚の性靈詩説で重んじている「眞性情」のような詩風を呈している。

第三節では、『五峰遺稿』にある七言絶句二首、七言律詩四首、『新文詩』にある七言律詩一首全七首を選択し、南義二郎や山田穀城や田邊碧堂から指摘されている五峰の作風について、春濤の影響を受ける前後の違いが表れているかどうかを考察した。その結果として、五峰は竹枝詩風な詩は三首しか書いていないし、艷体詩のような詩作は、殆ど書いていない。清・王士禎の神韻派のような詩風を呈している点を論じた。

第四節では、『五峰遺稿』にある七言律詩四首、七言絶句二首、五言絶句二首、五言古詩一首計九首の詩作を選択し、五峰と清詩とのかわりを考察した。五峰が清詩を知るに至ったのは、その知人の証言、および、『五峰遺稿』の詩の配置から考えて、森春濤の弟子・山中耕雲や森春濤本人との接触を通してであったと考えられる。そこから張船山の詩を知りようになり、その影響を受けたと考えられるが、本節で取り上げた張船山詩と五峰のそれへの次韻詩を見れば、張船山の五峰への影響は限定されており、内容や用語に共通する面はあるが、詩風・詩境においては、必ずしも同一ではないことが判明する。五峰詩「借忙吟」と袁枚詩「借病」を通じ、五峰は二〇代から六〇代の晩年まで、袁枚の独創的な「借病」作詩觀念に深い関心を持ち続け、受容した結果、二六歳に詠じた「借忙吟」に結晶し、著作『北越詩話』まで及んでいるのだとかがえる。「性靈」説を重んじる「性情」と自身の議論の強い作風とが結合し、「借忙吟」詩は、袁枚に対する議論の上で、五峰の「性情」を露出する詩風

を形成していると考えられる。袁枚の性靈説の「詩難其真也、有性情而後真、否則敷衍成文矣。(詩難しきは其の真なり、性情有りて後、真なり、否らざれば則ち敷衍して文に成れり。)」という詩論は、五峰詩「治園」に「作詩尚真趣 治園何不然」とあるような考えと通じていると思われる。清人・張船山と袁枚といった「性靈」詩派の詩人の作風を、五峰はそのまま、そのすべてを受け入れるわけではなく、自分と共通趣向がある清の詩人に注目し、自分なりの取捨選択を行い、その結果、五峰なりの詩風の結晶になったということが指摘できた。

第五節では、『五峰遺稿』にある七言絶句三首、七言律詩三首、七言古詩一首、五言古詩一首と『五峰餘影』にある七言絶句一首と五峰の肉筆七言律詩一首計一〇首の詩作を選択し、五峰の「禪」に関する詩について、典拠などを通じて、五峰の漢詩と禪仏教の関係を分析した。その結果として、五峰が杜甫詩「飲中八仙歌」の「逃禪」に注目した訳も、維摩の「病禪」を語った理由も、嚴羽『滄浪詩話』「禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟」に見られるような、禪の「妙悟」と詩の「妙悟」が一致する境地を求めていたことがわかれた。「半通禪」、「已通禪」は、同じ『滄浪詩話』「詩辨」中の「一知半解之悟」や「透徹之悟」と通ずる境地を表しており、その上、詩の道だけではなく、大沼枕山や恩師である森春濤などの「茶煙鬢絲の感」のように、五峰自身の人生の悟りまで表した表現だと考えられる。五峰の「禪」に関する詩風は師森春濤の艷体詩で表現している「美人禪」といった表現の「禪」と異なっていたことが明らかになった。

### 第三章 森春濤没後の五峰及びその詩

#### はじめに

前章では、五峰と森春濤の茉莉吟社との関わりや五峰の春濤門下としての詩風について、検討を進めた。五峰と森春濤との師弟関係を簡潔にまとめると、明治一二（一八七九）年一二月に、五峰は中央漢詩壇にデビューし、明治一四（一八八一）年の初秋、森春濤が来瀆し、同年一〇月、森春濤の『新瀆竹枝』が世に出て、五峰がその詩集の解説などを書いた。この時以来、五峰は『新文詩』<sup>252</sup>にその終刊に至るまで投稿し続けた。その詩風は当時、森春濤が主唱していた清詩風を呈しつつ、五峰独特の議論に長じる詩風も現れている。五峰にとって、この師弟関係は明治二二（一八八九）年一月春濤が亡くなるまで及んだ。

本章では、森春濤が亡くなった後の、五峰の漢詩人としての姿を探ると同時に、その詩風を追究してみたい。

#### 第一節 「廢詩」について

本論文の序章で触れたように、五峰の長男献吉は、五峰が「自從政事一時廢詩（政事に従うより一時詩を廢）したと言っているが、しかし、五峰と同時代の詩人には別な理由を挙げた証言があり、本節では、春濤の子森槐南（一八六三〜一九一一）や同時代の詩人の証言や『北越詩話』にある五峰自身の言及に触れつつ、従来の五峰年譜を参考にしながら、その実態を明らかにするとともに、『五峰遺稿』・『新詩綜』に掲載されている詩作を手がかりにし、五峰の「廢詩」前後の詩風に変化があるかどうかを探りたい。

うかを探りたい。その上で、明治三六（一九〇三）年八月五日にある『新瀆新聞』の記事一篇を通して、五峰の明治三〇年代の漢詩壇に対する考え方やその姿勢についても討究してみたい。

#### 一、『槐南集』<sup>253</sup>から

五峰と師森春濤の子息森槐南<sup>254</sup>との交友は『槐南集』に基づいてたどることができる。『槐南集』に五峰と関連がある一〇首（うち一首五峰実弟南義二郎宛）の詩が見られる。その一覧は以下の通りである。

- 卷五 越後阪口秋山「義」寓余茉莉巷者浹旬今将帰去倉卒賦此作餞 明治一八年 槐南二三歳 五峰二七歳
- 同上 喜阪口五峰「恭」過訪賦贈 同上
- 同上 偶感似五峰 同上
- 卷一二 阪口五峰来京招同古梅錦山石埭青厓諸人会飲柳橋酒樓用其唱和詩韻爲贈 二首 明治二三年 槐南二八歳 五峰三二歳
- 卷二一 又分韻得元阪口五峰有自笑香山是再生之句戲反其意而贈之 明治三五年 槐南四〇歳 五峰四四歳
- 卷二五 新瀆松風亭雅醺阪口五峰出示先君舊題因用原韻志感 明治三九年 槐南四四歳 五峰四八歳
- 同上 柳絲郷接五峰詩電知其有謝公東山之興戲和 同上
- 卷二六 阪口五峰招飲八百松樓即景口占 明治四〇年 槐南四五歳 五峰四九歳
- 卷二八 詞 前調「用前韻簡阪口五峰高野竹隱索和」不明

以上の一覧から見れば、五峰と槐南との交流は少なくとも、明治一四

年、春濤の来瀉以後、明治一八（一八八五）年からだと推知できよう。

では、上記の『槐南集』から巻一二の一首に注目したい。本詩を通して、槐南が詩人としての五峰をどう考えているかを明らかにしたい。その上で、五峰の「廢詩」はいつ頃から始まったのかについて考えたい。

まず、『槐南集』にある「阪口五峰来京招同古梅錦山石埭青厓諸人会飲柳橋酒樓用其唱和詩韻爲贈（阪口五峰来京す。古梅（巖谷修）、錦山（矢土勝之）、石埭（永坂周）、青厓（国分青厓）諸人を招同し、柳橋酒樓にて会飲し、其の唱和の詩の韻を用ひ、贈と爲す）」と題する七言律詩二首の一首目を見よう。

偶撥青琴寫麗思

偶々 青琴を撥きて 麗思を寫せば

手生荊棘已多時

手に荊棘の生ゆること 已に多時

猶然高興難忘酒

猶然として高興 酒を忘れ難し

如此才人可廢詩

此の如き才人 詩を廢すべきや

匱巾紅花春夢醒

匱巾の紅花 春夢 醒め

芋眠碧草客愁知

芋眠の碧草 客愁 知る

相逢殊愧吟情澹

相ひ逢へば 殊に吟情 澹きを愧ぜず

褪盡江郎筆一枝

褪盡す 江郎の筆一枝

（たまたま琴を弾じて思いを描き出そうとしても、それを弾く技量が落ちて、すでに久しい。それでも愉快な思いをすれば酒は手放せない。あなたのような才人に詩作をやめることができるのか。周りを取り囲む赤い花に、春の夜の夢が覚める。繁茂する緑の草に、旅愁が身にしみる。再会しても、詩を吟じる心持が薄くなったのが殊に恥ずかしい。あの江淹のようにうまい詩を書く才能は、すでに褪せ尽きてしまった。）

本詩は明治二三（一八九〇）年、五峰三二歳、槐南二八歳の七言律詩である。作詩時期は四月だ<sup>2.5.5</sup>と推測できる。

詩の題名「阪口五峰来京招同古梅錦山石埭青厓諸人会飲柳橋酒樓用其唱和詩韻爲贈（阪口五峰京に來り、古梅（巖谷修）、錦山（矢土勝之）、石埭（永坂周）、青厓（国分青厓）諸人を招同し、柳橋酒樓にて会飲し、其の唱和の詩の韻を用ひ、贈と爲す）」から見れば、当時の星社<sup>2.5.6</sup>の顔ぶれがうかがえる。「用其唱和詩韻爲贈」とあるように、本詩は槐南が五峰の唱和する詩の韻に従い、詠じて五峰に贈るものであるが、『五峰遺稿』では、それに関連する詩は見当たらない。

首聯「偶撥青琴寫麗思（偶々 青琴を撥きて 麗思を寫せば）手生荊棘已多時（手に荊棘の生ゆること 已に多時）」は、曹雪芹『紅樓夢』八六回に「這果眞是三日不彈、手生荊棘」とあるのを踏まえている。森槐南にとっては、本詩は父親森春濤が明治二二（一八八九）年一月に亡くなって、まだ一年に経たない中の作になる。この二句は肉親への哀悼の意思が深く、なかなかその悲しみから脱却することができず、琴を弾く練習さえもできないので、その技能も落ちたと語っている。この「撥青琴」は詩を作ることに對する隱喩表現だろう。

頷聯後半「如此才人可廢詩（此の如き才人 詩を廢すべきや）」は、五峰に關係する資料の中では、「廢詩」に關する最初の言及になると考えられる。また、森槐南から五峰が「才人」と呼ばれている点に注目すべきだろう。この詩句は反問の形で、五峰の作詩をやめることに對する驚きを表していると同時に理解できない気持ちもうかがえる。

尾聯後半「褪盡江郎筆一枝（褪盡す 江郎の筆一枝）」にある「江郎」は、江淹（四四四～五〇五、南朝の文人）のことである。「江郎才尽」或は「江淹才尽」という成語がある。鍾嶸『詩品』「梁光祿江淹詩」に「初、淹罷宣城郡、遂宿冶亭、夢一美丈夫、自稱郭璞、謂淹曰「吾有筆在卿處

多年矣、可以見還。淹探懷中、得一五色筆以授之。爾後為詩、不復成語、故世傳江淹才盡<sup>257</sup>。(初め、淹宣城郡を罷め、遂に冶亭に宿す。一美丈夫を夢む。自ら郭璞と稱す。淹に謂て曰く、吾に筆有りて卿の處に在ること多年なり、以て還さる可し。淹懷中を探れば、一の五色筆を得、以て之に授く。爾後詩を為るも、復た語を成す可からず、故に世に傳えて、江淹才盡くとす。)とあるのを踏まえている。江淹は若い頃、才名が高かったが、ある時夢に郭璞が現れ、自分の筆を返してほしいと言うので持っていた五色の筆を返すと、以後詩が作れなくなって、世人から才が尽きたと言われたという逸話である。この詩句はそれを踏まえ、五峰を「江淹」になぞらえているし、五峰が作詩をやめた後、作詩才能は衰退していることを詠っているが、「廢詩」前の五峰は明治漢詩壇の「江郎」のような存在であったことがうかがえる。

## 二、「廢詩」期の直前の詩

五峰は明治二二年二月『新詩府』の初集に「戲詠筆頭菜（戯れに筆頭菜を詠ず）」と題する七言絶句一首を発表した。それは『五峰遺稿』の一五七首目の詩「有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶（人有り、筆頭菜の圖を以てて詩を索む。戯れに一絶を題す）」にあたる。これにより、五峰の「廢詩」期間は少なくとも、明治二二年二月の『新詩府』にこの詩が掲載された時まで遡ることができよう。

では、「廢詩」期の直前の上記の詩を読んでみよう。

有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶（人有り、筆頭菜の圖を以てて詩を索む。戯れに一絶を題す）

抽芽秀穎兔尖如 抽芽 秀穎 兔尖如たり  
天錫嘉名果不虛 天錫 嘉名 果して虚ならず  
清世本應無怪事 清世 本と應に怪事無かるべし  
向空咄咄欲何書 空に向き 咄咄として 何を書かんと欲すや  
（優れて芽生えることは毛筆の先のようなものだ。神様から与った素敵な名前は本当だ。太平の世には、もとより奇怪な事件なんか無いはずだろう。空を向いて、咄咄と何を書きたいのであろうか。）

本詩は明治二二年五峰三一歳の作だと推知できる。詩の題名「有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶（人有り、筆頭菜の圖を以てて詩を索む。戯れに一絶を題す）」から見れば、筆頭菜（土筆の漢名）を題材としている書画に基づいて、本詩を詠じたのだろう。

起句では、筆頭菜の毛筆の先端のような外観を歌い、承句では、その名に恥じない確実性と素晴らしさを持つことについて詠じている。転句では、平安な世の中で怪しいことがありえないことを語り、結句では、転句の内容に関連し、反問的な語調を用い、書画に描かれている筆頭菜の咄咄とした様子は何を書こうとしているのかという諧謔で詠い終える。本詩の詩風は詩の題名にある「戲題」のように五峰のユーモアを醸し出す自由なスタイルの一首だと言えるし、土筆の外観と文房具の筆の外観とを巧みに融合させた一首だとも言える。いかにも漢詩人五峰が作詩に練熟し、縦横無尽に力量を駆使する姿がうかがえる。

## 三、再び森槐南からの「廢詩」に関する言及及び同時代人の証言

この部分では、五峰の詩風を探ることから少し離れ、その「廢詩」の開始の原因やいつ頃までに終了したかなどを明らかにしたい。当時の五



峰の心境について考えたい。

実のところ、森槐南からの「廢詩」に関する言及は上記『槐南集』の七言律詩に止まらない。明治三二（一八九九）年五月、『新詩綜』二集に五峰の「松風亭贈韓人黃治祖和蝶守」（二首）という詩篇（『五峰遺稿』に未収録）の前文（導入文）に、左記のような説明が綴られている。

五峰早日詩名傾動京國才雄氣厚不作浮響有故中廢一時無不惜其才者故予贈詩有如此才人可廢詩之句（五峰早日、詩名京國を傾動し、才雄氣厚にして、浮響を作さず。故有りて、一時に中廢す。其の才を惜しまぬ者無し。故に予の贈る詩に「如此才人可廢詩」の句有り。）

と、あるように五峰は以前、詩名が当時の東京まで轟いていた。その才気や詩風などを紹介した上で、「有故中廢一時（故有りて、一時に中廢す）」と語っているが、その「故」の具体的な内容については触れていない。

続いて、同時代の詩人からの「廢詩」に関する証言に触れたい。それは田邊碧堂の証言である。（碧堂と五峰との出会いに関する詳細は、本章第三節で触れる。）碧堂は五峰の「廢詩」について、「君がその後暫く作詩に遠ざかつて北越詩話の著述に没頭してからのこと<sup>258</sup>。」と言って、五峰が作詩から遠ざかっていたのは、『北越詩話』を著すことに専心していたのが理由であると述べている。田邊の言う「作詩に遠ざか」ったことが、上記の槐南の詩では、「廢詩」と表現されているのである。

では、『北越詩話』はいつ頃から執筆されたのだろうか。

『五峰餘影』にある五峰年譜によると、明治二四（一八九一）年、三三歳、「六月新潟新聞社長・八月吉田氏朝子を娶る・越人詩話を執筆す」とあるように、明治二四年八月頃、『北越詩話』の原型だといわれる『越

人詩話』が執筆されている。

上記の年譜は田邊碧堂の叙述の証になるが、森槐南からの証言である、明治二二年と時間上に二年間のずれが生じている。再び、五峰従来の年譜を見よう。明治二三（一八九〇）年、三三歳、「三月縣會改選當選・四月解散縣會議員を辭す」とある。明治二三年五月から五峰は県會議員ではなくなくなった。これは献吉の「自從政事一時廢詩（政事に従うより一時詩を廢す）」と相違する。また、五峰の政治生涯を探れば、

明治九年 地租改正に奔走  
明治一一年 郡會議員  
明治一七年 一二月補缺選舉にて縣會議員に當選  
明治一九年 二月縣會改選當選  
明治二一年 一月縣會改選當選

と、あるように、五峰は夙に地方の政界に身を投じている。この期間明治九年から明治二一年までは、前二章で述べたとおり、五峰の初期作詩時期にあたり、五峰は春濤との師弟の縁を結び、詩作の指導を受けた上、継続的に『新文詩』や『新新文詩』に投稿している時期にあたる。

以上のように、五峰が作詩をやめた原因は田邊の言うような『北越詩話』に没頭したという理由だけではないし、子息献吉の言う「政事」に忙しかったと言う理由だけでもない。一体何だろうか。

それは詩に関する師春濤や五峰最初の妻と関連があると思われる。春濤は明治二二年一月に亡くなった。五峰一人目の妻波磨子も同年同月に亡くなった。五峰にとって、一人は詩の世界に関わる唯一の恩師であり、一人は一五歳から夫婦になっていつも傍に伴っていた妻である。最も親しい身内だと言っても過言ではないほどの二人が、ほぼ同じ時期に

不帰の客となることは、五峰にとつて、想像も付かないショックを受けたに違いない。明治三二年二月に『新詩府』の初集に「戲詠筆頭菜（戯れに筆頭菜を詠ず）」と題する七言絶句を積極的に発表した。同年一月に恩師と妻二人の死が、槐南の「有故」という表現になる所以であろう。「有故」は非常のことが起こったとの意味である。それを契機として、五峰の「廢詩」期が始まったと推測することができよう。これは明治三二年、五峰三十一歳の時である。

以上の要因をまとめると、五峰は縣會議員に当選して以来多忙であったが、その後、妻と春濤二人の死にショックを受け、一時的に詩をやめ、その後、『北越詩話』の資料を集めると同時に、政事に関する活動を行い、作詩をする余裕がなくなったと考えられる。つまり、五峰は明治三二年二月の『新詩府』に「戲詠筆頭菜（戯れに筆頭菜を詠ず）」を投稿してから「廢詩」したのである。

引き続き、この「廢詩」期はいつ終止符を打ったのかも追究してみよう。

前述した明治三二年五月『新詩綜』二集に五峰詩篇を掲載する前文（導入文）の槐南の解説では、以下のような説明も綴られている。

近年再理舊業雖不多作作必驚人（近年、再び舊業を理し、多く作らずと雖も、作せば必ず人を驚かす）

この文によれば、明治三二年の数年頃、五峰は再び「舊業」（作詩）に携わり始めたことがうかがえる。それと関連ある事情は『北越詩話』にある「廢詩」に関する五峰自身の叙述にも表れている。

勝間田蝶夢、鷗鷺会を創し。一時の文人、先を争うて盟に參す。舟江詩社の盛、此時を最と爲す。丁酉春、宮城より新潟に轉ず。（中略）官暇詩を嗜み。毎に韻士を延きて一唱一和以て樂と爲す。其の任に新潟に蒞むや。適々中秋月明。蝶夢、袁簡齋淮上中秋の韻を次ぎ、折簡して和を予に屬す。時に予詩を廢する久し。勉強之に酬ゆ。<sup>259</sup>

これは「丁酉春」明治三〇（一八九七）年の春に新潟県知事として赴任してきた勝間田蝶夢により結社された「鷗鷺会」の集会での作詩に関する叙述である。その時期、新潟の吟社・「鷗鷺会」は最盛期だと考えられる。当時、五峰は三九歳である。

つまり、五峰の「廢詩」期間は、五峰三十一歳の明治三二年二月、『新詩府』に詩が掲載された後から、五峰三九歳の明治三〇年、勝間田知事が赴任先新潟で「鷗鷺会」を結社するまでとなる。

#### 四、「廢詩」期の終了以後の詩

まず、五峰の「廢詩」期間終了直後の詩「次蝶夢太守對月有感韻賦呈（蝶夢太守「對月感有り」の韻に次し、賦して呈す）」を見よう。本詩は『五峰遺稿』二二一首目の作にあたる。『北越詩話』に引用している詩と字句の違いが多少ある。

碧天雲散笛聲殘	碧天	雲散じて	笛の聲	残り
皓月光流瑪瑙盤	皓月	光は流れる	瑪瑙の盤	
良夜誰趨官長飲	良夜	誰か	官長に趨 <small>おもむ</small> き	飲まん

當年曾在戰場看 當年 曾て 戰場に在りて 看る

重來南國畫熊壯 重ねて南國に來たり 雄壯を畫く

一去大江沈鐵寒 一たび大江を去りて 沈鐵 寒し

卻憶荒村如亂後 卻て憶ふ 荒村 亂後の如きを

漲痕引夢上檐端 漲痕 夢を引き 檐端に上る

(青空に雲がちりぢりになり、笛の聲が残っている。明月は瑤瑤で作ったお皿のように明るい。中秋の名月の夜に太守に従って飲むものは誰か。往年、かつて戦闘の行われる場所において見た風景である。再び南国に来て、雄大で壮観なことを描こうと思う。一度、大川を離れば、沈む鐵が寒いものだ。却って辺鄙で荒涼としている村を思うと、その散乱の状態はまるで紛乱した後の痕跡だ。その川の水位が上がった痕跡は夢を檐の端まで導いて上らせる。)

本詩の創作背景は詩の題名「次蝶夢太守對月有感韻賦呈(蝶夢太守「對月感有」の韻に次し、賦して呈す)」からも、また『北越詩話』に「蝶夢、袁簡齋淮上中秋の韻を次ぎ、折簡して和を予に屬す。時に予詩を廢する久し。勉強之に酬ゆ。」とあるように、勝間田蝶夢という当時の新渥の知事の詩に次韻した作になる。

本詩起聯後半「皓月光流瑤瑤盤(皓月 光は流れる 瑤瑤の盤)」の「瑤瑤盤」は、杜甫詩「韋諷録事宅觀曹將軍畫馬圖引(韋諷録事の宅にて、曹將軍の畫馬の圖を觀る引)」に「内府殷紅瑤瑤盤(内府 殷紅 瑤瑤の盤)」とあるのと同じ詩語であるが、杜甫詩の「瑤瑤盤」は瑤瑤で作られた皿の意味をしているに對し、五峰本詩の「瑤瑤盤」は明るく光っている中秋の名月の比喩的な表現として使われている。

結聯後半「漲痕引夢上檐端(漲痕 夢を引き 檐端に上る)」の「漲痕」は、蘇軾「書李世南所畫秋景(李世南、秋景を畫かるに書す)」と題する七言絶句二首の一首目に「野水參差落漲痕(野水 參差として 漲痕を落とす)」とあるのと同じ用語であるが、蘇軾詩句は単に野にある水の起伏した痕・静止状態を描くだけに対し、五峰本詩の「漲痕」は静止状態から檐の端まで夢を導く役割をなしている。静止場面から動態的な場面までの勢いの強さを表現している。

勝間田の原詩は分からないが、その淵源の袁簡齋(袁枚)詩「淮上中秋對月」と題する七言律詩を参考にしよう。それは『小倉山房詩集』卷三「借病」(本論文の第二章の「第四節 五峰と清詩」で論じた)詩の二首目の作である。

長淮波冷碧雲殘	長淮	波冷たく	碧雲	残り
皎皎當空白玉盤	皎皎として	空に當たる	白玉の盤	
四海共傳斯夕好	四海	共に傳ふ	斯の夕べの好きを	
八年不在故鄉看	八年	故郷に在りて	看ず	
銀河有影秋心老	銀河	影有り	秋心	老ゆ
仙露無聲雁背寒	仙露	聲無し	雁背	寒し
建業風情京國夢	建業の風情	京國の夢		
一時和酒上眉端	一時	和酒	眉端に上る	

本詩は五峰詩にある「碧天雲散笛聲殘(碧天 雲散じて 笛の聲 残り)」という音声を表す聴覚的な詩語が使われていない。単なる中秋の名月自体を詠じ、望郷の思いを描き出し、感傷的な詩風を呈している。一方、五峰詩では、「長官」という相手を表す詩語が使われ、名月自体も詠

じているが、その前聯後半にある「當年曾在戰場看（當年 曾て 戰場に在りて 看る）」や後聯前半にある「重來南國畫熊壯（重ねて南國に來たり 雄壯を畫く）」や結聯後半にある「漲痕引夢上檐端（漲痕 夢を引き 檐端に上る）」を詠い、筆鋒を一転させ、雄渾な筆力がうかがえる。五峰における袁枚の本詩に関する言及はこれだけではなく、春濤來瀉の後、明治一六年九月二三日『新瀉新聞』、当時、新瀉に滞在している清人・王黍園の詩に対する評に袁隨園「淮上中秋對月」の前聯「四海共傳斯夕好（四海 共に傳ふ 斯の夕べの好きを）」八年不在故郷看（八年 故郷に在りて 看ず）」に触れている。そういうことは「廢詩」期間の終了から一番気になる詩・馴染んでいる詩から作詩を復活したといえる。

次に、上記の詩より二年後れ、前述した『新詩綜』に掲載している五峰の詩壇復帰二年後の作を検討してみたい。

五峰は明治三二（一八九九）年九月、『新詩綜』第六集に、「狹門雜詩」と題する七言律詩五首を投稿している。ここでは、『新詩綜』について、少し触れたい。

『新詩綜』は明治三二（一八九九）年四月に、森槐南の主宰、上村賣劍の編輯で、創刊された雑誌である。毎月一回五日発行、槐南の杜詩諺解を付録としていた。明治三四（一九〇一）年四月第一三集までで廃刊になった<sup>260</sup>。五峰の詩は合わせて一二首にのぼる。掲載時期は明治三二（一八九九）年五月〜明治三三（一九〇〇）年九月である。

では、上記『新詩綜』第六集及び『五峰遺稿』に収録している詩（字句の違いがある）を見よう。

「狹門雜詩九首 節五」（狹門雜詩九首 節五）その一首目

峭帆朝挂狹門東	似駕扶搖九萬風	山勢低昂分大小	濤頭起伏判雌雄	千櫓雨霽飛鴉外	一笛秋生落日中	笑我朗吟涉滄海	更無豪語繼鵬翁
峭帆 朝に挂く 狹門の東	駕するに似たり 扶搖 九萬の風に	山勢 低昂 大小を分ち	濤頭 起伏 雌雄を判つ	千櫓 雨 霽る 飛鴉の外	一笛 秋 生ず 落日の中	我が 朗吟の滄海を渉るも	更に 豪語の鵬翁に繼ぐ無きを笑ふ

佐渡古云狹門

佐渡古く狹門と云ふ。

島中山脈兩斷稱大佐渡小佐渡

島中を山脈兩斷し、大佐渡・小佐渡と稱す。

對峙海中宛然狹門也

海中に對峙し、宛も狹門のごとくなり。

龜田鵬齋佐渡詩語太豪壯

龜田鵬齋の佐渡の詩語はなほだ豪壯たり、

一時膾炙人口

一時に人口に膾炙す。

（聳えている帆は朝に狹門の東に掛けられている。あたかも九萬里へと揚がるつむじ風に乗っているようだ。山姿の高低によって大佐渡・小佐渡を見分けられる。潮の波頭が高くなったり低くなったりする様子でその違いを見分ける。雨上がりの後、鴉が多く帆柱の向こうで飛んでいる。笛声が聞こえ、秋の気配が落日の中から生まれる。自分の詩を朗詠する声がこの青々とした海を渡って行くのを聞くが、そこに（龜田）鵬齋翁の詩のような豪壯な趣の無いのが恥ずかしい。）

本詩は明治三二年九月発表されているので、五峰四一歳の作だと推知できよう。

起聯後半「似駕扶搖九萬風（駕するに似たり 扶搖 九萬の風に）」は『莊子・逍遙游』に「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里（鵬の南冥を徙るや、三千里を水撃し、扶搖を搏し、而して上る者は九萬里なり。）」とあるのを踏まえている。新潟から佐渡島へ渡る道中の海のみなぎっている氣勢を表現している。

本詩の前半は佐渡島へ渡る道中の海の様子や佐渡島の山の姿と浪の姿を雄渾な筆致で描き出し、その後半は秋雨上がり風の風景を描写し、自身のこの詩は先人亀田鵬齋の詩句<sup>261</sup>に及ばないという謙遜を表している。

「狹門雜詩九首 節五」その二首目

扁舟百里破滄溟 扁舟 百里 滄溟を破る  
來宿津樓酒始醒 來りて津樓に宿し 酒始めて醒む  
島市鹹煙千竈白 島市の鹹煙 千竈白く  
浦橋漁笛一燈青 浦橋の漁笛 一燈青し  
蘋香涼動鴨湖水 蘋香 涼動す 鴨湖の水  
海氣秋吹龍窟腥 海氣 秋 龍窟を吹いて 腥し  
我有新詩無客和 我に新詩有るも 客の和する無く  
夜深吟與大魚聽 夜深くして吟じて大魚に聴かす

夷港兩邑連接

夷港兩邑連接す。

界以一橋曰兩津

界は一橋を以て兩津と曰う。

後瀨鴨湖前臨夷灣

後は鴨湖瀨し、前は夷灣に臨み、

遠望龍王崑于海中

龍王崑を海中に遠望す。

（私に乗っている小さい舟は百里のあおあおとした海を過ぎて、渡し場付近の高殿に泊りに来て、そのとき、ようやく酒から目が覚めた。島の街のあちこちにかまどの白い煙が漂っている。浦の橋から

聞こえる漁船の笛声は青色の灯の中に漂っている。浮き草の香りは涼しくて鴨湖の水を動かしている。海の気配が秋風のように竜宮を生臭く吹く。私には新しい詩作ができたが、私の詩作の韻に答えて詩歌を作る人はいないため、深夜に大きな魚に詠って、聞かせる。）

本詩起聯「扁舟百里破滄溟（扁舟 百里 滄溟を破る）來宿津樓酒始醒（來りて津樓に宿し 酒始めて醒む）」は、新潟から佐渡島に行く乗船道中の風景と佐渡島に到着後の様子を描いている。

前聯「島市鹹煙千竈白（島市の鹹煙 千竈白く）浦橋漁笛一燈青（浦橋の漁笛 一燈青し）」は、もやもやとしている白煙と灯の光の青、伝わってきた漁船の笛の声とを対照的に描いて、島の全体から局部まで、遠近法的に佐渡島の町風景を描いている。

後聯「蘋香涼動鴨湖水（蘋香 涼動す 鴨湖の水）海氣秋吹龍窟腥（海氣 秋 龍窟を吹いて 腥し）」は、島の二つの地名（鴨湖・龍王岩）にちなんで、湖と海上の秋風が襲来する様子を詠じている。

結聯「我有新詩無客和（我に新詩有るも 客の和する無く）夜深吟與大魚聽（夜深くして吟じて大魚に聴かす）」は、詩人の唱和する相手がないことに対する孤独と哀愁を表現している。

前一首と同じく、描かれた風景は佐渡島の秋であることがうかがえるし、違うところは詩の末尾であり、前一首の結聯「笑我朗吟涉滄海（我が朗吟 滄海を渉るを笑ふ）更無豪語繼鵬翁（更に 豪語無き 鵬翁に繼ぐ）」という詩人の高吟が鵬齋詩翁に及ばないという謙遜の気持ちを表しているのに対し、後一首の結聯「我有新詩無客和（我に新詩有るも 客の和する無く）夜深吟與大魚聽（夜深くして吟じて大魚に聴かす）」という詩人の吟唱する相手がないことに対する寂寥感を表現している詩風を呈している。

『新詩綜』では、この「狹門雜詩」連作に関する評語は以下のように綴られている。

五峰有狹門雜詩十篇凡三易稿而就可見用功之苦茲錄其半他如積翠壓墟煙市小洪濤撼地郡城寒雙巖浦近千帆落三郡山開萬瓦明月明珠迸鮫人淚仙夢鷗隨海客船暮雨鴻川殘柳影秋風荻浦夜漁聲亦皆積健返虛足推高響（五峰に「狹門雜詩」十篇有り、凡そ三たび、稿を易え而して就す。用功の苦を見る可し。茲に其の半を録す。他の「積翠 墟を壓え 煙市 小し 洪濤 地を撼し 郡城 寒し 雙巖の浦 近づき 千帆 落つ 三郡の山 開きて 萬瓦 明らかなり 月明 珠迸る 鮫人の涙 仙夢 鷗隨ふ 海客の船 暮雨 鴻川に 柳影残り 秋風 荻浦 夜漁の聲」の如きは、亦た皆積健、返虛、高響を推す足る）

上記の評語によれば、五峰は「狹門雜詩」と題する詩篇は十作があり、詩人はそれを何回も推敲し、詩句の最善に努めているとうかがえる。また、上記の評語の中にはもう一首「狹門雜詩」を掲載している。以下、その評語で紹介している五峰のもう一首「狹門雜詩」を分析しよう。本詩は『五峰遺稿』に未収録である。

積翠壓墟煙市小	積翠	墟を壓え	煙市	小し
洪濤撼地郡城寒	洪濤	地を撼し	郡城	寒し
雙巖浦近千帆落	雙巖の浦	近づき	千帆	落つ
三郡山開萬瓦明	三郡の山	開きて	萬瓦	明らかなり
月明珠迸鮫人淚	月明	珠迸る	鮫人の涙	

仙夢鷗隨海客船 仙夢 鷗隨ふ 海客の船  
暮雨鴻川殘柳影 暮雨 鴻川に 柳影残り  
秋風荻浦夜漁聲 秋風 荻浦 夜漁の聲  
（盛んに茂っている草木が荒れ果てた跡に覆いかぶさり、煙が漂っている町は小さい。大きな波が土地を揺るがし、郡城が寒々として居る。雙巖の浦に近づいて、たくさんの帆船の帆が落とされる。三郡の山が開いて、多くの家の華やかな夜景がたいへん明るく見える。明るい月の光の中、波が鮫人の涙で作られた真珠のように勢いよく飛び散る。仙人の夢のように、鷗が客船に随いてくる。夕方の雨が鴻川に降り注ぎ、優美に動く柳の影が川水に映っている。秋風が荻の生えている水辺での夜に魚を捕る声を運んでくる。）

本詩は船に乗って両津港に入つてゆくときの情景を描いていると思われる。

後聯前半「月明珠迸鮫人淚（月明 珠迸り 鮫人の涙）」は、『搜神記』卷一二、『博物志』卷二、任昉『述異記』卷下に「南海外、有鮫人。水居如魚、不廢織績。其眼泣、即能出珠。（南海の外に、鮫人有り。水に居ること、魚の如し。織績を廢せず。其の眼は泣けば、即ち能く珠を出す。）<sup>262</sup>と、『洞冥記』に「吠勒國人乘象入海底取宝、宿於鮫人之舍、得泪珠。則鮫所泣之珠也。亦曰泣珠。（吠勒國の人、宝を取るに象に乗つて、海底に入る。鮫人の舍に宿し、泪の珠を得る。則ち鮫泣く所の珠なり。亦泣珠と曰う。）」とあるのを踏まえている。後、「鮫人泣珠」という四字熟語として使われている。ここでは波頭の泡の比喻であるう。

結聯後半「秋風荻浦夜漁聲（秋風 荻の浦 夜漁の聲）」は、李中（約九二〇～九七四）「秋雨二首」の二首目に「竹窗秋睡美（竹の窗 秋睡 美

わし) 荻浦夜漁寒(荻浦 夜漁 寒し)とあるのを踏まえている。李中の詩句は秋雨の寒さという季節感を描いているに對し、五峰の詩句は秋風索漠の寂しさを詠じているのがうかがえる。

評語の趣旨は「亦皆積健返虛足推高響(亦た皆積健、返虛、高響を推す足る)」と言及している。その中の「積健」、「返虛」は、晚唐詩人、詩論家の司空圖(八三七〜九〇八)の『二十四詩品』で詩境・詩趣を分類する用語として使われている語彙である。その第一詩品「雄渾」に「返虛入渾、積健爲雄(虚に返れば渾に入り、健を積めば雄を爲す)」とある。「返虛入渾」とは、「必須復還空虛、纔得入於渾然之境<sup>263</sup>」(必ず虚しい状態・老莊一派の虚無のような世界に復元しなければならぬ。それによつて、円満で欠点のない境地に達することができる)。「積健爲雄」とは、「這不是可以一朝襲取的、必積強健之氣纔成爲雄<sup>264</sup>」(これは一朝だけでは手に取ることができないので、強健な気・学識を蓄積しなければならぬ。それによつて、剛直な境地に達することができる)。

上記五峰の佐渡島に関する三首連作の詩風をまとめると、三首の各々の前四句(起聯と前聯)では、一首目にある「九萬風」・二首目にある「千竈白」・三首目にある「千帆落」、「萬瓦明」といった詩語を通し、佐渡島の自然風景を広大な氣勢で表現している。三首のそれぞれの後四句(後聯と結聯)では、一首目にある「笑我朗吟涉滄海 更無豪語繼鵬翁」を通し、自分自身の詩作はまだ、未熟であるという謙遜を詠じているが、一方、「廢詩」終了から、復帰したばかりの不安・自信不足の心境を表している。二首目にある「我有新詩無客和 夜深吟與大魚聽」を通し、詩人の寂寞の感を禁じえない様を表現している。三首目にある「暮雨鴻川殘柳影 秋風荻浦夜漁聲」を通し、佐渡島の夜の寂寞を破る音声を描き出し、対照的にその静寂を一層深いこととしてかもし出している。詩全体は本論文第一章で見られた五峰初期の詩風・雄渾であることがうかが

える。

## 五、『五峰遺稿』に見られる「廢詩」

『五峰遺稿』には「廢詩」という言及は二ヶ所しか見られない。その一箇所は『五峰遺稿』の二四二首目・「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す)」と題する七言律詩であり、もう一箇所は『五峰遺稿』の三〇九首目・「雙龍園詩次小野湖山翁韻 并引(雙龍園)詩、小野湖山翁の韻に次す ならびに引」と題する五言律詩四首の引の中である。では、どのように触れているかを検討してみよう。それとともに、「廢詩」終了後の詩風を追究してみよう。

まず、『五峰遺稿』二四二首目の「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す)」を引きつつ、その詳細を見よう。

手撫圓銅有所思	手	圓銅を撫で	所思有り
吾生已及二毛時	吾が生	已に二毛の時に及ぶ	
涓埃無補猶憂國	涓埃	補う無けれども	猶ほ 國を憂ふすべし
風月多情可廢詩	風月	多情	詩を廢す可し
烽警頻傳鄰境急	烽警	頻りに鄰境の急を傳う	

廟謨未許野人知 びょうぼ 廟謨 未だ野人の知るを許さず

愁來且買紅樓酒 愁來れば 且く紅樓の酒を買ひ

醉見新裙舞柘枝 醉ひて 新裙 柘枝を舞うを見ん

(丸い銅製の鏡を撫でながら、思うところがある。我が生命は既に白髪混じりの髪の毛の時期になってきた。この身はしづくとちりのような卑小な存在であるが、それでもなお憂国の情はある。風月を

眺めて楽しむだけのような詩は止めよう。戦争の烽火は頻りに隣国との境にある切迫した状況を伝えてくる。政府の対策は野にいる私には知ることができない。憂国の情が襲って来たら、しばらく妓楼で酒を飲み、酔って、新人の柘枝の舞を見ることにしよう。

本詩は明治三四（一九〇二）年、五峰四三歳の詩作だと推知できよう。「廢詩」期間が過ぎた後の作になる。

起聯「手撫圓銅有所思（手 圓銅を撫で 所思有り）吾生已及二毛時（吾が生 已に二毛の時に及ぶ）」は、銅鏡の中の自分を眺めながら、白髪が見えることから、自分の人生は不惑になった中年に向かつていくことについて嘆いている。

前聯「涓埃無補猶憂國（涓埃 補う無けれども 猶ほ 國を憂ふすべし）風月多情可廢詩（風月 多情 詩を廢す可し）」は、自身は微力でありながら、国家の安危を心配していることを表現する同時に、詩文などはただ風雅を楽しむだけなら、やめたほうがいいという憂国の情を詩よりも優先する考えを表している。本論文の序章で引用している『五峰遺稿』詩文集の末尾にある歌川絢之の「跋」に「憂世傷時之思一發之於詩與彼笑傲風月抽黃聯白自命詩人者迥異（憂世傷時の思は、之れを詩に一發するか、彼の笑傲風月・抽黃聯白、詩人と自ら命する者と迥に異なり）」とあるように、五峰はただ風月を吟弄するだけの作詩に飽き足らなく思う傾向が現れていると思われる。これは上記のように明らかにになった「廢詩」期間・およそ九年の間に五峰の深く考えた結果だとも考えられる。

後聯前半「烽警頻傳鄰境急（烽警 頻りに鄰境の急を傳う）」の「烽警」は、いくさの警報の比喻表現であり、明治三七（一九〇四）～三八（一九〇五）年に発生した日露戦争の初期に当たる時期のことを暗示している。「頻傳」や「急」といった詩語は如何にも詩人の国境の安危に対する

痛切な気持ちがかがえる。

後聯後半「廟謨未許野人知（廟謨 未だ野人に知るを許さず）」の「廟謨」は、廟堂すなわち朝廷のはかりごとという意味であるが、作詩時点から見れば、明治三四年は五峰がまだ衆議院議員になっていない時期である。「野人」という在野の人間を意味する語を用い、政治に直接に携わることがまだできないことを表している。ここで注目したい字句は「未許」という詩語である。後聯前半の「頻傳」や「急」といった詩語に対し、後半の「未許」は地方議員に過ぎず、直接に国策に関わらないという歯がゆい思いを十分に表している。参画できないことが分かっているにもかかわらず、微力ながら、国家の安危を憂え案じている情を表現している前聯前半「涓埃無補猶憂國（涓埃 補う無けれども 猶ほ 國を憂ふべし）」と繋がっている。

結聯前半「愁來且買紅樓酒（愁來れば 且く紅樓の酒を買ひ）」の「愁」は、前聯前半「涓埃無補猶憂國（涓埃 補う無けれども 猶ほ 國を憂ふべし）」の「憂」や後聯前半「烽警頻傳鄰境急（烽警 頻りに鄰境の急を傳う）」の「急」やその後半「廟謨未許野人知（廟謨 未だ野人に知るを許さず）」の「未許」といった詩語から昇華してきた憂愁（士大夫の憂愁）に違いない。自分が直接政治に携わることができないという「愁」が襲って来たら、取りあえず、妓楼のお酒に紛らわし、その「愁」を取り除こうという心境がかがえる。

結聯後半「醉見新裙舞柘枝（酔ひて 新裙 柘枝を舞うを見る）」の「新裙舞柘枝」は、白居易「看常州柘枝贈賈使君（常州の柘枝を見て賈使君に贈る）」に「莫惜新衣舞柘枝（新き衣にて柘枝を舞ふを惜むこと莫れ）」とあるのを踏まえている。「柘枝」とは、「柘枝舞」の略称である。白居易の詩では、新しい衣服を惜しまず、それを着て、柘枝舞を踊るという客観的に描写する詩句であるに対し、本詩では、ぼんやりと酔った目で



新しい衣服を着ている舞姫の踊りを見ようというふうには「愁」の解消に努めている姿がうかがえる。

本詩は時事に関して、その実況を述べながら、詩人の国家の安危を憂えて何もできない身でいる憂国の気持ちを表す士大夫的詩風を呈している。

次に、「廢詩」に関する『五峰遺稿』にある言及の二箇所目を見よう。それは「雙龍園詩次小野湖山翁韻 并引」と題する五言律詩四首の引の部分の中に見られる。

湖山詩翁買園于洛東靈山下以爲游息所園有老松二大樹因以雙龍爲號梨堂相公爲贈匾額題曰高臥東山翁乃以四字爲韻與同人唱和哀然成卷遂附劖劖以頌同好眞藝苑之佳話也余雖廢詩久今亦見惠一本豈得無一壽詞哉：（湖山詩翁、洛東の靈山の下に園を買ひ、之を以て游息する所と爲す。園に老松二大樹有り、因つて雙龍を以て號と爲す。梨堂（三条実美の号）相公、匾額を贈と爲す。題に曰く高臥東山と。翁乃ち四字を以て韻と爲し、同人とともに唱和す。哀めて巻と成し、遂に劖劖に附す。以つて同好に頌く。眞に藝苑の佳話なり。余詩を廢すること久しと雖も、今、亦た一本を惠まる。豈に一壽詞無きを得んや：）

本詩の執筆時期は明治三八（一九〇五）年、五峰四七歳である。久しく「廢詩」していたが、明治一五年<sup>265</sup>から付き合っている小野湖山詩翁の雙龍園のため、作詩をしたことがうかがえる。

## 六、「詩風一變の徵」という『新潟新聞』の記事

明治三六（一九〇三）年八月五日の『新潟新聞』では、五峰が聽濤山人という名で、「詩風一變の徵」という題名で、評論一篇を發表した。以下では、その全文を引きつつ、五峰は何を語っているのか、その具体的なことを追究してみよう。

### 詩風一變の徵

聽濤山人

勢窮まれば必らず變ず、詩に於ても亦た然らざるを得ず、而して今や正に其一變の徵あるを見る

五六月の交なりし、余の京に在るや一日往て森槐南を訪ふ、槐南云く『近日都下宋詩を唱ふるもの漸く多し蓋し唐詩極盛の域に達し將に一變せんとするの時なり』と、因つて『宋詩は蘇黄か范陸か』と問ふ、槐南又た云く『范陸あり蘇黄あり而して蘇黄中又た専ら東坡を唱ふるものあり山谷を唱ふるものあり』と、既にして野口寧齋の『百花欄』六集を得て、槐南の七古一篇を讀み、始めて其『山谷を唱ふ』といふもの即ち夫子自道の語たりしを悟れり、其詩は題して『讀吳辟彊啓孫詩本偶獲一篇即書其後還之』といふ、詞に云く

韓歐王蘇數大家。讀盡縹湘三萬軸。三才萬象雖牢籠。詩唯老杜爲歸宿。豈知眞成學杜者。前有玉溪後山谷。有明諸公美捧心。反令識者皆颯蹷。剩馥殘膏不復存。虎皮羊質空刺促。正法眼藏二百年。一在桐城一常熟。豫章骨法撐榱桷。樊南膏腴透肌肉。寸心得失漫較量。要還少陵眞面目。今讀吳郎一卷詩。排風毛質穿楊鏃。祖燈心印惜抱軒。萬牛誰媿麟角獨。悔予少小喜西崑。無題碧城傷麗縛。二憑宋旨亦未窺。何況江西氣森肅。行思改轍從執鞭。霜空直與鷹鷂逐。句不驚人死不休。他生免落泥犁獄。

試に初學の爲めに大意を略叙せんか、韓退之歐永叔王荊公蘇東坡の數大家學は三才萬象を牢籠すると雖ども、其詩は一に老杜を以て歸宿と爲ざるを得ず、蓋し老杜は能く古今を奄有して其大成せるものなればなり、然れども此數公は善く老杜を學べるものにあらず、其善く老杜を學べるものは、唐に在ては李玉溪、宋に在ては黃山谷あるのみ、明の七子の如き、徒らに西施の捧心を美として之に倣ふも、反て識者をして顰蹙せしむるに過ぎず、幸にして後二百年、滿清の朝に至り、正法眼藏を得るものあり、一は桐城の姚姬傳と爲し、一は常熟の憑默庵憑鈍吟兄弟と爲す、姚は豫章山谷の骨法を傳へ、二憑は樊南玉溪の膏腴を傳へて、同じく老杜の遺法を得たり、而して今や吳郎辟疆亦た能く桐城の傳燈を得たるは多とするに堪へたり、予は少小より西崑玉溪の詩體を喜びて其麗縉に倣へるも、未だ江西山谷の詩派の宗旨を窺はず、吳郎の詩を讀みて始めて自ら悔を知れり、願くは今より轍を改めて江西に就き以て從來綺語の習を一洗せん、或は秀師の呵責を免かれて、泥犁獄に落ちざるを得んかといふなり、一大詩論、之を一百九十六言中に寓す、而して學力識力俱に時流に卓抜するを見る、詩中の惜抱軒は姚姬傳の別號、無題碧城は玉溪集中の詩、而して吳辟疆啓孫は吳摯甫汝給ママの孫、去年王父に從て來朝せしものなり

摯甫は桐城の人にして其學亦た桐城を宗とす、其來朝するや、輦下の詩人争ふて相唱和す、人の近代の詩を問ふものあれば、摯甫乃ち『七律には姚姬傳七古には鄭子尹』と稱し、書を乞ふものあれば、其録する所亦た自作の詩にあらざれば必ず山谷の句なりしといふ、以て其瓣香する所を知るべし、願ふに槐南の詩、玉溪生より入手して老杜に歸宿し、而して其雄麗の才能く其學ぶ所に副ふ、何を以て

か遽かに改轍を思ふに至れるか、蓋し亦た摯甫と予唱汝和の際に投合する處ありしによるか。

『百花欄』七集『雙魚小觀』中亦た槐南の近作一律を收む、云く槐夏無花但綠苔。薰爐一炷午瓶開。蛩鳴未沸風微變。蟻戰方酣雨驟來。蕉葉覆隍空得鹿。碑文薦福又轟雷。勞生何似茶澆腹。炊黍中間喚夢回。

果然その山谷に逼肖するを見る、余は常に國民報に因て槐南の詩を見る、然れども百冗纏擾して細讀を許さず、故を以て圖罔看過未だ深く留意せず、此作を見るに及んで始めて其詩風の已に變ずるを知れり、因て憶ふ往年槐南と說詩軒に對酌するや、適々岩溪蓑川來て東坡の詩を説く、槐南云く『蘇詩は我が四十以後に讀むべきものとし特に之を留めて他日の研鑽に供せり』と、而して今や已に四十に達す、其山谷を唱ふるものは、將に一轉して東坡に入らんとするの階梯にあらざるを得んや

古來蘇黃の二家を論ずるもの、多くは蘇を揚げて黃を抑し、近世袁子才の如き、特に山谷を喜ばず、其詩話中往々罵詈に渉るものあり、然れども拗峭を以て俗を避け、肯て一尋常の語を作さざるは、則ち山谷の長所にして、東坡亦た及ぶ能はず、槐南の才と學とを以て時に一たび之れに倣ふは可なり、他人或は虎を畫て句に類するの謗あらん、但だそれ槐南已に宋詩を唱ふ、輦下詩人縱ひ山谷に入らざるも東坡に入り、東坡に入らざるも放翁に入り石湖に入り、或は子美聖論に入るものなきを保せず、果して然らば海内詩風の一變する亦た遠きにあらざらんか、姑らく吾が見る所を擧げて縣下の同人に告ぐといふのみ

以上のように、五峰は森槐南の詩風における変遷や東京漢詩壇と来日

した清人・吳摯甫<sup>266</sup>との交流の様子などに触れつつ、『百花欄』<sup>267</sup>六集・七集にそれぞれ収録した槐南の七古一篇と七言律詩一篇を評論し、その詩風の変わったことを高く評価するとともに、東京漢詩壇の詩風はこれからもきつと変わるだろうと期待している心境を表している。

「讀吳辟疆啓孫詩本偶獲一篇即書其後還之<sup>268</sup>」（吳辟疆<sup>269</sup>啓孫の詩本を讀み、偶に一篇を獲て、即ち其の後に書し、之に還す）と題する七言古詩は『槐南集』卷二に収録され、明治三五年、槐南四〇歳の詩である。『新潟新聞』に掲載している槐南の二首目の詩は叙述通りの『百花欄』七集に見当たらない。詩題についても言及されていないが、筆者の調査の結果として、『槐南集』卷二に「七月四日清谿雨集即賦道情（七月四日、『清谿雨集』即ち道情を賦す）」と題する七言律詩に当たる。明治三六年、槐南四一歳の作であり、当時の槐南は東京帝國大學文科大学で講師として勤めている<sup>270</sup>。

五峰は本詩に触れる前に、その背景を紹介している。それは同年五月の交に五峰は一日、森槐南を訪ねた。その時、槐南から「近日都下宋詩を唱ふるもの漸く多し蓋し唐詩極盛の域に達し將に一變せんとするの時なり」と言われ、そこで、五峰は「宋詩は蘇黄か范陸か」というふうに、その具体的なことについて、確認している。槐南から、「范陸あり蘇黄あり而して蘇黄中又た専ら東坡を唱ふるものあり山谷を唱ふるものあり」と答えられた。五峰はこの槐南との斯界に関する対話にちなんで、『百花欄』に掲載している槐南の詩を取り上げたことがうかがえる。

この後、五峰は槐南の七古一篇に「一大詩論、之を一百九十六言中に寓す」という評を下している。この槐南詩では、まず韓愈、歐陽脩、王安石、蘇軾といった唐・宋時代の著名な詩人古文家について言及し、「其詩は一に老杜を以て歸宿と爲ざるを得ず、蓋し老杜は能く古今を奄有し

て其大成せるものなればなり、然れども此數公は善く老杜を學べるものにあらず」と詠じ、杜甫の「詩聖」という存在を強調している。次に、杜詩に私淑する詩人は晩唐で言えば、李商隱があり、宋で言えば、黃庭堅がある。文学史上では、その後に見れた明の七子があるが、それは槐南から「徒らに西施の捧心を美として之に倣ふも、反て識者をして覺醒せしむるに過ぎ」ないと批判している。その後、清の時代となり、漸く杜詩の奥義を悟った詩人が現れた。それはこの記事にある五峰の略叙によれば、「一は桐城の姚姬傳と爲し、一は常熟の憑默庵憑鈍吟兄弟と爲す、姚は豫章山谷の骨法を傳へ、二憑は樊南玉溪の膏腴を傳へて、同じく老杜の遺法を得」た、と考えられている。それから、詩題に触れている人物・清人「吳辟疆」の家集を取り上げ、その詩は杜詩の奥義を会得した姚姬傳のような詩風を呈していると語りつつ、若い頃の自身の幼稚を恥ずかしがりながら、改心し、宋詩を学ぼうという気持ちを表現している。

また、吳辟疆のことについて、五峰から「吳辟疆啓孫は吳摯甫汝給<sup>マツ</sup>の孫、去年王父に従て來朝せしものなり」と補足しているし、その父親である「吳摯甫」についても、詳しい言及がある。「摯甫は桐城の人にして其學亦た桐城を宗とす、其來朝するや、輦下の詩人争ふて相唱和す、人の近代の詩を問ふものあれば、摯甫乃ち『七律には姚姬傳七古には鄭子尹』と稱し、書を乞ふものあれば、其録する所亦た自作の詩にあらざれば必ず山谷の句なりしといふ、以て其瓣香する所を知るべし」と、「廢詩」期から再び操觚界に入った五峰は政事が多忙であるにもかかわらず、当時の漢詩壇の最新の情報に高い関心を持っているのがうかがえる。

この新聞記事にある五峰の本詩に対する解釈や東京漢詩壇の様子を説明した後、槐南の宋詩を学ぼうとする兆しの詩篇「七月四日清谿雨集即賦道情」と題する七言律詩を取り上げている。

その詩中の用語から見れば、黄庭堅の詩をよく参考にしたと考えられる。この槐南の七言律詩を取り上げてから、五峰は以下のようなことを述べている。「果然その山谷に逼肖するを見る」と、槐南の詩風に言及している。この頃、五峰はいつも『国民新聞』を通して、槐南の詩を読んでいる。しかし、多忙のため、精読できず、槐南の詩風の変化に気付かなかったと語っている。「此作を見るに及んで始めて其詩風の已に變ずるを知れり、因て憶ふ往年槐南と説詩軒に対酌するや、適々岩溪裳川來て東坡の詩を説く、槐南云く『蘇詩は我が四十以後に讀むべきものとし特に之を留めて他日の研鑽に供せり』と、而して今や已に四十に達す、其山谷を唱ふるものは、將に一轉して東坡に入らんとするの階梯にあらざるを得んや」と、往事を回顧している。五峰のこの時点での宋詩に対する言及を通して、その宋詩に対する関心が高く、また、それなりの知識を持っていることがうかがえる。この明治三六年は槐南が既に四〇代になり、これから宋詩に着目し、宋詩を学ぼうとしていたものと思われる。

この後、五峰は明治中央漢詩壇の展望を語っている。「それ槐南已に宋詩を唱ふ、輦下詩人縦ひ山谷に入らざるも東坡に入り、東坡に入らざるも放翁に入り石湖に入り、或は子美聖諭に入るものなきを保せず、果して然らば海内詩風の一變する亦た遠きにあらざらんか」と中央漢詩壇の詩風は清詩から宋詩に移り変わろうと期待している心境がうかがえる。

師春濤の子息であり、明治三〇年代中央漢詩壇の牛耳を執る存在の、盟主・森槐南と、五峰との交友は、これに止まらず、明治四四（一九一一年）年に槐南がなくなるまで続いている。例を挙げると、明治三九（一九〇六）年八月二三日の『新潟新聞』に掲載している「三詩宗の新潟來遊」の記事によれば、同年同月の二四日に、槐南は永坂石埭と本田種竹とともに、新潟を来訪した。その招請役はやはり阪口五峰である。そこでも、五峰と中央漢詩壇との関わりの深さがうかがえる。

次に、この新聞記事を掲載した後、五峰自身の詩はどうなっているのかを検証してみたい。では、『五峰遺稿』三一七首目の詩・明治四一（一九〇八）年五峰五〇歳の七言絶句を見よう。

新正志感戊申（新正 感を志す）二首中の一首目

廬舍悽涼歲又新 廬舍 悽涼として 歲 又た 新なり

團樂空對一盤辛 團樂 空しく對す 一盤の辛

春杯到手還悵悵 春杯 手に到るも 還た 悵悵たり

終次屠蘇第十人 終に欠く 屠蘇 第十の人

楊誠齋詩 楊誠齋詩に

遙憐兒女團樂處 正欠屠蘇第十人」と。  
先考在日亦屠蘇第十人 先考在りし日、亦た屠蘇の第十人なり

（家はぞつとするほど物寂しい中、年はまた新たになった。一家集まって和やかに楽しむべきところ、寂しく正月の料理の大皿を目前にしている。杯を手に入れたにもかかわらず、嘆きうらんでいる。終に、一家団樂にならず、その屠蘇を入れた酒を飲むべき十人目の人は居ない。楊誠齋（万里）に「遙かに憐む兒女團樂の處を 正に屠蘇の第十人欠く」という詩句があるが、亡くなった父親は若しまだ生きていたならば、その屠蘇酒を飲む十人目になるだろう。）

本詩は正月を祝う時に詠じた作だとうかがえるが、詩全体に陰鬱な雰囲気が漂っている。

起句「廬舍悽涼歲又新（廬舍 悽涼として 歲 又た 新なり）」の「悽涼」や、承句「團樂空對一盤辛（團樂 空しく對す 一盤の辛）」の「空」

や、転句「春杯到手還悵悵（春杯 手に到るも 還た 悵悵たり）」の「悵悵」は、詩人の哀愁を表している。

結句「終次屠蘇第十人（終に欠く 屠蘇 第十の人）」は、詩中にある自注によれば、それは南宋の詩人楊万里（一一二七〜一二〇六、号・誠齋）「除夜宿石塔寺（除夜、石塔寺に宿す）」に「遙憐兒女團欒處（遙に憐む兒女團欒の處）正欠屠蘇第十人（正に欠く屠蘇の第十人）每飲屠蘇予居第十（毎に屠蘇を飲む予第十に居す）」<sup>271</sup>とあるのを踏まえている。五峰の父君得七翁は明治三九年一月に亡くなった。本詩の創作する時点では既にこの世の人間ではなかった。これは五峰から父親に対する哀詞だと思われる。

五峰は森槐南のように北宋詩人黄庭堅に強い関心を示していないが、本詩は五峰にとつて、南宋詩人楊万里の詩集を学んだ痕跡の一つだと考えられる。本論文の第二章の「第二節 森春濤来滬時期の詩」に述べたとおり、五峰は二〇代既に北宋の大文豪蘇軾や南宋隨一の詩人陸游の詩作に接点があったと考えられるが、およそ三十年後のこの五〇歳の詩において、五峰が再び宋詩と関わりを持ったことが現れている。本詩の二首目も検討してみよう。

回頭四十九年非 回頭す 四十九年の非を  
百歳茫茫亦可知 百歳 茫茫たる 亦た 知る可し  
草澤狂歌從此始 草澤の狂歌 此従り 始む  
平生一卷達夫詩 平生 一卷 達夫の詩

高適詩乍可狂歌草 高適の詩に「乍」<sup>むしろ</sup> 草澤の中に狂歌す可し  
澤中寧堪作吏風塵下 寧んぞ 風塵の下に 吏と作るに堪えん

（わが人生の四十九年間の是々非々を振り返り見て、百年間のはるかなことも分かるはずだ。これから、高適詩にあるように荒れ果てた野原で思う存分歌い始めよう。我が人生は恰も高適の詩巻のようなものだ。）

本詩は前一首と同じ題名である。しかしながら、前一首にある詩語の典拠が違っている点に注目すべきだろう。それにより、当時の五峰の心境がうかがえる。

詩中にある自注・高適（七〇二〜七六五）の詩句は「封丘縣<sup>272</sup>」と題する七言古詩の三句目と四句目である。「達夫」は高適の字である。「達夫詩」は高適の詩集を指しているだろう。「封丘縣」は、高適が人生初めて官吏の社会に入り、封丘県の県尉<sup>273</sup>になったが、官界に慣れず、辞任して帰郷しようと思うものの、まだ君主に対する使命感を持っているからなかなか決心が付かない、というジレンマに陥る矛盾な苦痛の中の一首であるといわれる<sup>274</sup>。

五峰が本詩を創作した時は既に衆議院議員に当選してから七年目になり、地方議員から衆議院議員になっている。転句「草澤狂歌從此始（草澤の狂歌 此従り 始む）」と、結句「平生一卷達夫詩（平生 一卷 達夫の詩）」は、知命の年になった五峰にとつて、当時の政界の現実と自分の抱負を果たす理想とに矛盾ができ、その現実を受け止め、やり続けるか、それとも、辞めて元に戻るかという複雑な心境を表現している。まさしく高適「封丘縣」にある「乍可狂歌草澤中（乍 草澤の中に狂歌す可し）寧堪作吏風塵下（寧んぞ 風塵の下に 吏と作るに堪えん）」のような苦悩であることがうかがえる一首である。また、本詩は五峰自身の、政治家と漢詩人とを調和させようとしている内容の一首だと考えられる。『五峰遺稿』にある本詩の次の詩もこの盛唐詩人・高適に関わっている。

る。その具体を見よう。

人日千秋庵次松雨韻（人日、千秋庵にて松雨の韻に次す） 二  
首の一首目

我亦東西南北人 我 亦た 東西南北の人  
草堂人日感風塵 草堂 人日 風塵に感ず  
梅花應笑高常侍 梅花 應に笑ふべし 高常侍  
書劍龍鐘又一春 書劍 龍鐘 又た 一春  
（私もあの高適詩にある杜甫のような自由に東西南北に放浪できる人間だ。正月七日の今日、草堂の我が家で俗世間の営みを考えている。梅の花はきつと高適のことを笑っているだろう。文を学んだり、武を学んだりしているうちに、また、新しい一年になった。）

本詩全体は高適詩「人日寄杜二拾遺（人日杜二拾遺に寄す）」に因んだ作だと思われる。以下、高適の本七言古詩一首（一二句）を引く。

人日寄杜二拾遺（人日杜二拾遺に寄す）

人日題詩寄草堂 人日 詩を題して 草堂に寄す（傍点筆者、以下同）  
遥憐故人思故郷 遙に故人を憐み 故郷を思ふ  
柳條弄色不忍見 柳條 色を弄するも 見るに忍びず  
梅花滿枝空斷腸 梅花 枝に滿つるも 空しく 斷腸す  
身在南蕃無所預 身は南蕃に在りて 預る所 無し

心懷百憂復千慮 心に懐く 百憂 復た 千慮  
今年人日空相憶 今年 人日 空しく 相憶ふ  
明年人日知何處 明年 人日 知んぬ 何れの處ぞ  
一臥東山三十春 一臥 東山 三十春  
豈知書劍老風塵 豈に知らんや 書劍 風塵に老いんとは  
龍鐘還忝二千石 龍鐘として 還た 忝なうす二千石  
愧爾東西南北人 愧づ 爾 東西南北の人に<sup>275</sup>  
（正月の七日に詩を書いて、あなた・杜草堂（甫）に送る。今のあなたは遠く別れている故郷の家族や友人たちを思い出しているだろう。柳の枝は美しい色を弄び、そのきれいな姿を見るのに耐えず、梅花は既に満開になったが、その鮮やかな風景を鑑賞する気持ちはならず、かえって、腸がちぎれるほど悲しくなっている。私は今、南の蕃国において、気になることが特にないし、とても気楽であるが、世間の是々非々を見て、様々な憂いがまた自然に思いついてきた。今年の正月七日はここで、あなたのことをただ思い出しているが、来年の正月七日はまた、どこに異動されるか分からない。私はこの仕途に入る前に、抱負を抱いて東山に三十年間長くいたが、思いがけないことで、官職に就いてからは、書と劍を帯びて、俗世間の営みの中に走り回り、今日のように無益なままに年を取るとは思わなかった。しかし、この老衰の身でまた二千石の俸禄をかたじけなく受け取っているが、それで、まるで身を束縛された鳥のようなものになっけし、あなたのような無官の身に自由自在に東西南北に移動できるに對し、私はそのようなことができなくて恥ずかしく思っている。）

高適の本詩は、官を辞して成都に浣花草堂を築いて住んでいる杜二拾遺（杜甫）に贈った作である。

先に引いている五峰の詩は詩題「人日千秋庵次松雨韻（人日、千秋庵にて松雨の韻に次す）」にあるように松雨の韻を踏む作である。

五峰詩の起句「我亦東西南北人（我 亦た 東西南北の人）」は上記の高適詩の最後の詩句「愧爾東西南北人（愧づ 爾 東西南北の人に）」を踏まえている。詩句の順序から見れば、全く逆の形をとっている。しかし、「亦」という言葉は高適詩との繋がりを連想させるが、五峰の場合は自分の政治活動における奔走を表している。

承句「草堂人日感風塵（草堂 人日 風塵に感ず）」は高適詩の一句目「人日題詩寄草堂（人日詩を題して 草堂に寄す）」を踏まえている。高適詩にある「草堂」は友人・杜甫のことであるに対し、五峰の場合「草堂」は自分のいる場所を指している。その場所から世の中の色々なことを嘆いて考えている。

転句「梅花應笑高常侍（梅花 應に笑ふべし 高常侍）」にある「高常侍」は高適のことである。高適はかつて散騎常侍（唐の官名）になったことがあるので、「高常侍」と称されている。ここでは、五峰は自身のことを高適になぞらえていると考えられる。

結句「書劍龍鐘又一春（書劍 龍鐘 又た 一春）」にある「書劍」・「龍鐘」は高適詩の十句目と十一句目の詩語を踏まえている。

五峰の本詩は七言絶句であり、友人の詩韻を踏みつつ、正月七日に因んで、自ら新春に対する所懐を叙する作である。高適の詩は七言古詩であり、杜甫を思いやる情を叙述しつつ、自身の境遇を語り、旧懐を表している。詩形が別であるし、詩の内容も全く同じではない。高適詩にある「愧爾東西南北人（愧づ 爾 東西南北の人に）」のような「愧」は、五峰詩には無い。しかし、『唐詩選』にある高適の本詩から大量の詩語を

使用することは五峰の初期作詩時期への回帰を表していると考えられる。続いて、上記三首と同じく天命を知る齢に詠じた「自笑（自ら笑ふ）」と題する七言絶句を見よう。

李杜文章光焰明 李杜の文章 光焰 明かるし

昌黎硬語鬼神驚 昌黎の硬語 鬼神驚く

我詩老嫗亦能解 我が詩 老嫗 亦た 能く解す

自笑香山是後生 自ら笑ふ 香山の是れ後生なりと

（李白と杜甫の詩篇は雄大で勢いに富み、長く後世に伝わるだろう。韓昌黎（愈）の力強くぎこちない言葉は天地の神霊と死者の霊魂を驚かしている。私の詩は年老いた女性でも理解できるから、自分から笑って言う、自分は白香山（居易）の後輩だ。）

本詩は詩人五峰自ら述べた自身の作風に対する作品である。あるいは、目標として強く意識している作風だと思われる。天命を知る年になり、詩に対する悟りを表していると考えられる。

起句「李杜文章光焰明（李杜の文章 光焰 明かるし）」は、韓愈（七

六八〇八二四）の五言古詩「調張籍（張籍を調ける）」に「李杜文章在（李杜の文章在り）光焰萬丈長（光焰 萬丈と長し）」とあるのを踏まえている。

承句「昌黎硬語鬼神驚（昌黎の硬語 鬼神驚く）」は、韓愈の五言古詩

「薦士（士に薦める）」に「橫空盤硬語（空を横ぎりて硬語 盤る）」とあるのを踏まえている。

起句と承句は、それぞれ盛唐詩人李白、杜甫の文学と中唐詩人韓愈の

詩風を褒めている。転句「我詩老嫗亦能解（我が詩 老嫗 亦た 能く解す）」と結句「自笑香山是後生（自ら笑ふ 香山の是れ後生なり）」は、白居易のことにちなんだ詩句になる。

結句の「香山」は白居易の号である。

転句「我詩老嫗亦能解（我が詩 老嫗 亦た 能く解す）」は、『冷齋夜話』卷一に「老嫗解詩」「白樂天毎作詩、令一老嫗解之。問曰解否。嫗曰解、則録之。不解、則易之。（白樂天詩を作す毎に、一老嫗をして之を解さしむ。問ひて曰く、解すや否やと。嫗解すと云えば、則ち之を録す。解さざれば則ち之を易ふ。）<sup>276</sup>」とあるのを踏まえている。白居易の詩語は簡明で分かりやすいと言われる。五峰は自分の詩も白香山のような、年取った老婦人にも理解しやすい詩風だと明言している。

そういうわけで、結句「自笑香山是後生（自ら笑ふ 香山の是れ後生なり）」とあるように自分自身から白居易は私の先輩であると笑って詠じている。五峰は白居易のような平易な詩風を目指している傾向が見られる。また、宋の詩人の楊誠齋に注目している理由もここにある。誠齋体という詩風も平易な作風だと言われる<sup>277</sup>からである。

## 第二節 『五峰遺稿』に見られる「憂」「愁」及び贈答詩・疊韻詩

### 韻詩

前節では、森槐南による五峰の「廢詩」に関する詩や言及など、五峰自身及び同時代人の「廢詩」についての叙述に触れるとともに、五峰の「廢詩」期間とその要因を明らかにした。その上で、五峰自身の「廢詩」に関する言及や詩を分析し、その心境を探ってみた。本節では、まず、『五峰遺稿』にある五峰の「憂」「愁」の心理状態を探ってみた。それから、中・晩年に一番多く見られる詩・贈答詩の分析を通して、五峰

の詩風の変化を追究してみる。最後に、『五峰遺稿』にある唯一の疊韻詩を取り上げ、五峰の作詩の心境を明らかにする。

### 一、『五峰遺稿』に見られる「憂」「愁」

『五峰遺稿』全三九二首の詩を紐解くと、「愁」、「憂」字を含む語句の出現する詩が三三首にのぼる。通覧して、その詩の題とともに語句を挙げてみると、以下のとおりである。

「愁聽」（舟中聽歌、一七歳）

「愁來」（夜坐有懷次山中耕雲見寄韻 時予病後止酒、一七歳）

「春愁」（墨水春興和諸橋斬庵韻）（二首の一首目、一八歳）

「野人憂不細」（對酒、一九歳）

「不及忘憂醜」（茶園 并引、二〇歳）

「愁暈青」（次鷗水別後見寄韻、二一歳）

「吹愁」（新瀉秋詞）（二首の二首目、二四歳）

「愁緒」（建部小椽佐佐木圖南讀予古街酒樓詩次韻見示乃疊韻卻寄、二

二歳）

「清愁」（江樓秋夜同鷗水賦、二二歳）

「窮愁」（春濤先生見過招同社友小集書樓山際柳堤有詩乃次其韻時辛巳

立秋前一夕也、一三歳）

「窮愁」（歲暮雜感）（四首の一首目、二四歳）

「窮愁」（歲暮雜感）（四首の四種目、二四歳）

「百歲無愁」（寄居村舍雜詠次藍川養病詩屋原韻）（四首の二首目、二

五歳）

「窮愁」（秋山弟東行 折二、二六歳）



「別愁多」(「王漆園將歸招同諸友于松風亭次留別韻」、二二六歳)

「惆悵」(「杉雨樓詩鈔題詞安田泰堂屬 折二」(二首の二首目)、三二歳)

「愁予」(「出門壬辰時生辰後二日」、三四歳)

「愁鬢」(「鬢絲禪榻小影」、三五歳)

「窮愁」(「陸玉田將游佐州有詩次韻志別」、三九歳)

「野人妄意欲分憂」(「蝶夢太守招同龍川香浦飲于松風亭席上次蝶守議事堂題壁韻」、四一歳)

「愁心」(「寄懷秋山弟疊韻」、四一歳)

「消愁」(「訪鷗所次見示原韻」、四一歳)

「暮笛愁」(「似蝶夢太守」、四一歳)

「忘憂」(「一六遊佐渡賦此寄懷疊韻」、四三歳)

「憂國・愁來」(「秋夜被酒偶然有作三疊韻」、四三歳)

「愁不消」(「新年招同天颺洪洲中洲山陰易水諸子過飲松風亭用白樂天正月三日閒行韵」(二首の二首目)、四四歳)

「憂時」(「金家屯陳中謁黒木大將」、四七歳)

「憂世」(「雙龍園詩次小野湖山翁韻 并引」(四首の一首目)、四七歳)

「悵悵」(「新正志感」(二首の一首目)、五〇歳)

「傷時憂國」(「自題小照二首 節一」、五〇歳)

「窮愁」(「北越詩話成作五絶句」(五首の五首目)、六一歳)

「窮愁詩句」(「歳晚作」、六一歳)

「憂社稷」(「庚申新年」、六一歳)

つまり、『五峰遺稿』には、「愁聽」・「春愁」・「愁緒」・「窮愁」(七例)・「無愁」・「愁鬢」といった「愁」を含む熟語を用いる詩が二三首あるし、「分憂」・「忘憂」・「憂国」・「憂時」・「憂世」・「憂社稷」といった「憂」を含む熟語を使用している詩が九首(中、「憂」と「愁」を同時に使って

いる一首がある)ある。他に、「惆悵」・「悵悵」それぞれ一首があり、合わせて三三首にのぼる。

その「愁」を用いる用例の中で、上記リストにある三四歳の詩「出門」にある「愁予」という詩語は五峰「憂」「愁」表現の分水嶺的位置にあると考えられる。では、その具体的な内容を見よう。

出門壬辰時生辰後二日(出門 壬辰、時に、生辰の後の二日)

殘臘歸來歳已除 殘臘 歸り來れば 歳 已に除たり

前途渺渺又愁予 前途 渺渺として 又た 予を愁へしむ

一千里外登程日 一千里外 登程の日

卅五年前墮地初 卅五年前 墮地の初

笑我求田仍問舍 我が 田を求め 仍りに 舍を問うを笑ふ

爲誰秣馬更膏車 誰が爲に 馬に秣し 更に車を膏ぜん

出門獨與梅花別 出門 獨り 梅花と別る

鬢影蕭蕭雪半梳 鬢影 蕭蕭として 雪 半ば梳く

(年末に帰って来るともう除夜となった。未来の行く道のりが暗くなる。はるかな旅に出発した日は、三十五年の前、ここに生まれた時だ。自分が田を求め、しきりに屋舎を求めて私利に走るということは恥ずべきことだ。馬に餌をやり、更に、車に油を付けたのは誰のためだったか。旅立つ時は春で、ひとり梅花と別れたが、今、鬢髪はまばらで、半分雪のような白髪になっている。)

本詩の詩題にある「壬辰」は明治二五(一八九二)年であるから、本詩は五峰三四歳の書懷詩である。ということは、前節で述べた五峰の「廢

詩」期間に、五峰は必ずしも詩を一首も創作していないわけではないということになる。本詩はこの「廢詩」期とされる時期の詩にあたる。

首聯後半「前途渺渺又愁予(前途 渺渺として 又た 予を愁へしむ)」にある「愁予」は、『楚辞・九歌・湘夫人』に「帝子降兮北渚(帝子 北渚に降る)目眇眇兮愁予(目 眇眇として 予を愁へしむ)」とあるのを踏まえている。堯帝の次女・湘夫人が、洞庭湖の北の岸に降りたもう。見る目もはるかにその様子も見えず、私の心を悲しませる<sup>278</sup>。という意味の神前に演ずる歌舞劇の台本であり、祭巫から歌われた歌詞である。それに対して、五峰の詩は前途に対する憂愁を表している。

領聯「一千里外登程日(一千里外 登程の日)卅五年前墮地初(卅五年前 墮地の初)」は、人生を旅に例えている。ここでは、「一千里外」という非常に遠い距離を用い、「卅五年前」という時間と対句になっている。「登程日」と「墮地初」といった旅の出発日と生まれることと対句になり、その意味は三十五年間前に私はその「一千里外」の「登程日」の旅の出発地に生まれたことになる。つまり、私の人生の旅は三十五年前から始まったのである。完成度が大変高い対句だと考えられる。

頸聯前半「笑我求田仍問舍(我が 田を求め 仍りに 舍を問うを笑ふ)」の「求田」、「問舍」は『三国志 魏書 陳登伝』に「備曰君有國士之名、今天下大亂、帝主失所、望君憂國忘家、有救世之意。而君求田問舍、言無可采(備曰く君に國士の名有り、今、天下大いに亂れ、帝主所失ふ。望むらくは君國を憂へ、家を忘れ、救世の意有らむことを。しかるに君田を求め、舍を問ひて、言采る可き無し)」とあるのを踏まえている。「求田問舍」は成語であり、本来は田を買い屋敷を求めて私利に汲々とし、大志が無い意味に用いる。この詩句は五峰年譜の「明治二三年四月解散県會議員を辞す<sup>279</sup>。」という叙述とともに見れば、それ以来の自分のことを笑い、憂國の士ではない身になってしまふことへの遺憾な気

持ちと苦しみを表しているだろう。

頸聯後半「爲誰秣馬更膏車(誰が爲に 馬に秣し 更に車を膏せん)」の「秣馬」、「膏車」は唐代詩人韓愈(七六八〜八二四、唐宋八家の一。『送李願歸盤谷序(李願盤谷に歸るを送る序)』に「膏吾車兮秣吾馬、從子於盤兮、終吾生以徜徉(吾が車を膏し、吾が馬に秣をあたえ、子に盤に従ひ、終に吾が生以て徜徉す)」とあるのを踏まえている。「秣馬」は馬に餌をやることであり、「膏車」は車に油を付けることである。「膏車秣馬」は成語であり、旅の準備を整えることの意味に使われる。ここにある「爲誰」という自問に注目したい。頸聯前半「笑我求田仍問舍(我が 田を求め 仍りに 舍を問うを笑ふ)」と関連し、出門(旅)は誰のためか、自分のためだったかと自問しつつ、旅に出かけることを表現している。つまり、今までの自分自身の営為(営み)は何のためであるか。自身の凌雲の志はどうなっているかについての反省がうかがえる。

頸聯全体も領聯のように完成度の高い対句になっている。自問の形で今までの人生を省みて、もつと真剣に考えるべきという姿勢を表しているし、自身の少壮期から抱く人生の抱負が未だに実現していないことに對する「憂愁」が漂っている。

尾聯前半「出門獨與梅花別(出門 獨り 梅花と別る)」は、詩人五峰の孤独を表している。

尾聯後半「鬢影蕭蕭雪半梳(鬢影 蕭蕭として 雪 半ば梳く)」は、宋・李綱(一〇八三〜一一四〇、愛国名臣)「摘鬢間白髮有感(鬢の間にある白髪を摘み感有り)」に「蕭蕭不勝梳(蕭蕭として 梳くに勝えず)擾擾僅盈掬(擾擾たる 僅かに 掬めに盈す)」とあるのを踏まえている。「梳雪」という語彙があるが、意味は白髪を梳くことである。この詩句はその単語の逆の形を取り、その上、「半梳」を用い、髪のは半分白髪

になったと表現したいのだろう。鬢髪は既にまばらになり、その上、年をとって半ば白髪になった。尾聯全体は孤独感と自信がなくなってきた心境を表していると考えられる。

本詩は『五峰遺稿』全三九二首の作中、二首しかない同じ詩題の詩の一首に当たる。この二首中のもう一首は本論文の第一章で取り上げた『五峰遺稿』一首目・「出門」、五峰一六歳の詩である。五峰詩風の変遷を検討するため、『五峰遺稿』一首目の詩を再掲する。

#### 出門

落地蓬蒿十六秋 落地 蓬蒿 十六の秋

壯心未肯老荒陬 壯心 未だ荒陬に老ゆるを肯んぜず

仰天大笑出門去 天を仰ぎ大笑して門を出でて去る

滾滾長江萬里流 滾滾たる長江 万里流る

(生れてからずっとこの偏僻なところに十六年間いた。壮烈な心が辺鄙ないなかで未だ老いたことを肯んじない。天を仰いで大いに笑いながら、門から出て行く。まるで滾滾と流れている長江の万里の流れの勢いだ。)

本詩は一六歳の少年五峰の作である。この詩は、詩として見た場合、『全唐詩』に収録している李白の詩句をそのまま用いたり、『唐詩選』に出ている張祐と杜甫の句を混ぜ合わせて用いたりしている等、模倣的色彩の強い詩であり、詩としては未完成な若書きの詩であることは前述した。

「廢詩」期間中に創作した「出門」は完成度が大変高く、若書きの段階の「出門」詩とは形式も違う。前者は七言律詩であり、後者は七言絶

句である。それだけではなく、後者は『全唐詩』に収録している李白の詩句をそのまま用いたり、『唐詩選』に出ている張祐と杜甫の句を混ぜ合わせて用いたりしている等、模倣的色彩の強い一首目に対し、前者は『楚辞』の「九歌」の語彙や成語故事などを詩句に取り入れ、人生の道省みつつ、天性の議論家と言われる五峰の、議論をした上で、自分の孤独と自信がなくなってきたことまで連想させる日下勺水から指摘されている「意遠而思深(意遠くて思深き)」という詩風を呈している。若書きの段階から詩人らしい詩人にまで成長してきた証になるだろう。

更に、「廢詩」期間中に創作した本詩・「出門」は青年客気のような雄心勃勃の勢いが見えず、ある種の「憂愁」が漂っているし、その上、今までの「愁い」と根本的に違っていることがうかがえる。この「愁い」は五峰自身のことに対するものであり、壮年五峰の心境がうかがえる一首でもある。本論文の序章で引用している『五峰遺稿』巻頭にある館森鴻の「序」に「嘗問詩於森春濤。春濤原以艷體名、而思道亦以巧麗勝。春濤以其乏沈鬱之致、傲之曰、子不可仿吾之所爲。(嘗て森春濤に於いて詩を問う。春濤は原と艷体を以て名あり、思道(五峰の字の一つ)亦た巧麗を以て勝る。春濤其の沈鬱の致に乏しきを以て、之をいましめて曰く、子は吾の所為に倣うべからずと。)」とあるように、五峰の詩は「沈鬱」の趣に乏しいと森春濤から評されている。森春濤の上記の発言はいつ頃のことであるかについて、館森鴻の「序」では明言していないが、少なくとも、森春濤の亡くなる前、つまり、明治二二年までの五峰の詩風に関する発言になると考えられる。「廢詩」期間中の本詩は詩中の「愁予」に暗示されているように、五峰の「沈鬱」の兆しがうかがえる。再び、本章第一節の五、『五峰遺稿』に見られる「廢詩」で、取上げた『五峰遺稿』二四二首目の「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す)」を見よう。

手撫圓銅有所思  
吾生已及二毛時  
涓埃無補猶憂國  
風月多情可廢詩  
烽警頻傳鄰境急

手 圓銅を撫で 所思有り  
吾が生 已に二毛の時に及ぶ  
涓埃 補う無けれども 猶ほ 國を憂ふべし  
風月 多情 詩を廢す可し  
烽警 頻りに鄰境の急を傳う

廟謨未許野人知

廟謨<sup>びょうぼ</sup> 未だ野人の知るを許さず

愁來且買紅樓酒

愁來れば 且く紅樓の酒を買ひ

醉見新裙舞柘枝

醉ひて 新裙 柘枝を舞うを見ん

(丸い銅製の鏡を撫でながら、思うところがある。我が生命は既に白髪混じりの髪の毛の時期になってきた。この身はしずくとちりのような卑小な存在であるが、それでもなお憂国の情はある。風月を眺めて楽しむだけのような詩は止めよう。戦争の烽火は頻りに隣国との境にある切迫した状況を伝えてくる。政府の対策は野にいる私には知ることができない。憂国の情が襲って来たら、しばらく妓楼で酒を飲み、酔って、新人の柘枝の舞を見ることにしよう。)

この詩に出現している「憂國」、「愁來」といった詩語に注目したい。なぜなら、五峰の師森春濤は「憂愁」の詩人だと言われており、また、『五峰遺稿』巻首にある館森鴻の「序」に、五峰の詩は「沈鬱」の境地にまだ達していないと師春濤から注意されたことがあるからである。それは春濤の生前(明治二二年没)の五峰の詩に対しての評であるが、この明治三四年・四三歳の詩には前述した「出門」二首目の「愁予」から発展してきた五峰の「憂鬱」が現れている。

更に、それまでは他人・物に対する感傷的な「愁」(「春愁」や「愁緒」

や「清愁」など)であったものが、ここでは自身の治国平天下・経世済民という抱負を実現すべき年になったにもかかわらず、まだ、そのようなになっていない「野人」のままの焦りと困惑を表現する「愁」に変化してきたと考えられる。その後も「愁」表現はあるが、同時に、「憂」表現が集中的に表れる。特に、本詩では、その「憂國」と「愁來」が同じ詩に現れるのも希有である。五峰の「憂國」の心境を表す一方、その「出門」詩にある「愁予」・単なる自分の抱負をまだ実現していない現実に対する「愁」という対象から、国の情勢に対する本詩にある「愁來」までの対象の深化もうかがえる。

更に、四四歳の八月に衆議院議員に当選する以前、「愁」を含む表現が集中的に使われている傾向が見られる。また、本詩後聯後半「廟謨未許野人知(廟謨 未だ野人の知るを許さず)」にある「野人」という詩語は当選後の詩には見かけなくなる。「愁」に代わって、「憂」を含む詩語が四四歳当選以後の詩に頻繁に使用されるようになる。その「憂」の対象は上記のリストからもわかるように、すべて国、社会、時勢、社稷を対象にしている。すなわち、五峰における「憂」は、「憂國」の情を表すようになったのである。

## 二、『五峰遺稿』に見られる贈答詩

『五峰遺稿』の一番多い詩の種類は贈答詩であり、特に中・晩年に集中的に創作している。その中に、贈り手からわざわざ注文が寄せられ、綴った一首がある。それは以下の七言古詩一首である。

雞血石歌贈市島春城(「雞血石」の歌を市島春城に贈る)

春城先生有印癖

龍文鳳篆苦搜索

玩物自比襄陽顛

博古將奪松雪席

少時論事忤當路

文字買禍鬪雞檄

時艱蒿目三十年

一腔熱血空鬱積

久之遂致長吉嘔

赤醬迸地眞可惜

天上將成白玉樓

人間難覓丹砂液

有人來賣雞血紅

昌化所產其鈕百

方圓大小各態殊

或戴花冠或赤幘

綠字鮮疑繡頸回

朱文勁見金距磔

就中一塊如峻山

山皴隱見絡紅脉

先生獲此疾霍然

摩挲日夕手不釋

紅霞滿室光熊熊

春城先生 印癖有り

龍文 鳳篆 搜索に苦しむ

玩物 自ら襄陽の顛に比し

博古 將に 松雪の席を奪はんとす

少時 事を論じ 當路に忤さかひ

文字 禍を買う 鬪雞の檄

時艱を蒿目すること三十年

一腔の熱血 空しく鬱積す

之を久しうして 遂に 長吉の嘔を致す

赤醬 地に迸しるは 眞に惜しむべし

天上 將に 白玉樓を成さんとす

人間 覓め難し 丹砂の液

人有り 來りて賣る 雞血の紅

昌化の産する所 其の鈕 百

方圓 大小 各態 殊ことなる

或は 花冠を戴き 或は 赤幘

綠字の鮮やかに疑ふ 繡頸の回るかと

朱文 勁く見る 金距の磔はりつけ

就中 一塊 峻山の如し

山皴に 隱見す 紅脉を絡すを

先生 此を獲たれば 疾 霍然たり

摩挲して 日夕 手 釋かず

紅霞 室に満ちて 光 熊熊たり

春城居赤城下顔其室曰紅霞山房

春城、赤城の下に居し、其の室に顔して紅霞山房と曰ふ

邀吾誇示連城壁

自謂曩時嘔出三斗血

滲入石膚如許赤

寸心耿耿某在斯

歷遭塵劫長不易

吾謂先生莫乃丈人頑

彫肝斲肺亦何益

胸中磊塊今有無

聞雞起舞憶曩昔

不願磨厓刻姓名

唯願先生壽猶石

吾を邀えて誇示す 連城の壁を

自ら謂ふ 曩時に 嘔き出す 三斗の血を

石膚に滲み入り かくの如くに 赤らむ

寸心 耿耿たり 某は斯に在り

塵劫を歴て遭ひ 長く易らず

吾謂ふ 先生 乃ち 丈人の頑 莫れ

彫肝 斲肺 亦た 何の益あらん

胸中 磊塊 今 有りや無しや

雞を聞きて起舞し 曩昔を憶ふ

願わず 厓を磨き 姓名を刻すを

唯だ願ふ 先生の壽 猶ほ石のごときを

(春城先生は印癖が有る。龍文や鳳篆を骨を折って探し求めている。好きな物に夢中になるのを自分から米芾の癡狂に比している。古代の事に精通していることは趙子昂の席を奪おうとするほどだ。若い頃事を論じて、政権を掌握する人に逆らって、文章の禍に巻き込まれた。鶏を戦わせるのを観覧することを糾弾する文章になっていたからである。時局の苦難を三十年間憂慮し続けている。満腔のうつ積する怒りや憂いなどの熱烈な思いが、心の中にかいなく集積している。長い年月が経って、ついに、李賀のように血を吐き出した。その濃い鮮血が地に落ちるのは、まことに悲しみ惜しむに値する。天上には、今にも李賀の白玉樓ができようとしている。この世では、丹砂の水は見つけにくいのだ。ある人が赤い鶏血石を売りに来た。鶏血石の産地である昌化の製品が百個もある。その形は正方形もあれば、円形もある。その大きさもそれぞれであり、異なっている。

綺麗な模様のあるものもあれば、鶏冠のようなものをかぶっているものもある。古代の碑文のような文字がとても美しくはつきりしているようであり、鶏血石の印鑑の細い部分（取っ手）に縫い取りをしたかと疑うくらいである。印面の文字が剛健であり、金属製の鶏のけづめに張り付けた力強さが見える。その中に険しい山のようなものが一個ある。山の皴に紅色の脈絡が見え隠れしている。春城先生はこれを手に入れて、すぐ病気が治った。これが大変気に入って、朝から晩まで手放せずに撫でている。夕日で赤く染まった霞が先生の部屋に充満し、その光芒が盛んになっている。私を招いて、この連城の壁（価値がきわめて高い玉）を見せびらかした。春城先生本人が、以前、三斗ぐらいの血を吐き出したことを教えてくれた。その吐き出した大量の血液はこの鶏血石の肌に滲んで入り込んだからこそ、今の赤みが出ているだろう。その心がなかなか安んぜぬままにここにいるためだ。いろいろな俗世の災難に遭っても、その心が変わっていない。私は先生にこのように老人のように頑固なお考えは止めてくださいと言った。苦心して考えたりいつも心にかけていても、何の利益になるだろうか。先生の心の不平や不満などは今もまだあるか。志のある者は時に至って昔のことを思い出して奮起する。石を磨いて、姓名を刻んで、普通の印鑑にすることを願うわけではない。ただ、一つだけ願うことはあり、それは先生の長寿はこの鶏血石のように永遠であることだ。）

本詩は、『五峰遺稿』にある、五峰と親友・市島春城（一八六〇〜一九四四 著述家・『五峰遺稿』の跋文を著する一人、『北越詩話』の序文を著した間柄）との交友関係を表す唯一の作であり、また、作詩背景を通して五峰の「印癖」<sup>280</sup>。がうかがえるものでもある。当時、五峰五〇歳

であり、春城四九歳である。以下では、作詩背景を紹介する。

五峰は春城所有の一個の印鑑に興味があった。それは、著名な篆刻家・高芙蓉作の二個一組の印の一つであった。同郷の漢方医の三浦桐陰は二個とも所有していたが、一個を春城に贈り、もう一個を、五峰に贈った。五峰は春城が所有している方の印が欲しかった（一組として揃えたかった）ので、粘り強く春城に要求し、求めていた。それについて、春城が「五峰君の印癖」として、以下のような回想を綴っている。

君の冀望が熱烈であるので、私も遂に氣根負をして、割愛することになった。私は君に向かつて言ふには、折角のお望だから差上げが、私の爲めに詩を作つて貰ひたい。その詩に就ては注文がある。それは此頃御覽に入れた三十數顆の鶏血石の印を題にして欲しい。且つ詩の趣向に就ても注文がある。私は前年新潟で咯血したことがあるが、此の多數の鶏血石を得て、失うた血を補うて餘りありと言ふ意を詩中に寓して欲しいと言うた。君は欣然之れを諾して面倒な注文だが、やつて見ようと言はれた。それから一週間程は何事をも打棄て、詩作に没頭された丁度議會の開會中であつたが、議會を餘所にして森槐南や大久保湘南などを訪うて相談もされた。凝り性の君の努力は一と通りで無かつた。斯くして出來た長篇は、君の詩集中の壓巻と評さるゝ程の傑作で、それを私に示された時には私もひどく喜び、山陽にも咯血の詩があるが、それよりも遙かに優つてあるというて厚く謝した<sup>281</sup>。

と、いうことで、五峰は春城の特別な注文に応じて、上記の長篇詩作「雞血石歌贈市島春城（「雞血石」の歌を市島春城に贈る）」を、議会の隙間などの暇な時間を割いて、一週間程度、森槐南や大久保湘南らと東京に

いる名詩人と相談した上で完成した。春城の回想談によれば、本詩を完成した後、

印と交換する段になったが、君の言はるゝには無雑作に交換するのは興がない。厳かに交換の式を行ひたいから、其日向島の中の植半に會することゝしよう。立會人として大久保湘南と濱村藏六をも招くことにすると、極めておもしろい趣向であるから、私も喜んでそれを諾し、定められた日に植半へと出かけた。其の席上湘南は吟詩が得意であるから、朗々君の大作を二度まで吟誦した。私は起立して滑稽交りの卓上演説を試みた。其の大意は、此夜の席を結婚の式場に擬し、誠に御念の入った結納を賜はり感謝に堪へん。折角の御懇望に任かせ、愛嬢を差上げますが、お恥かしい事には、嫁具は何一つなく、本人も丸裸の儘で（箱にも納めない印を取上げて）差上げます。お手厚の結納に對し相濟ませんが御容赦を願ひたい。貴家の新郎は拙嬢と縁因の深い関係があり、もとは三浦氏に同棲した間柄であるから、歸とつきましたら定めし琴瑟相和するであらう。私は幾久しく新郎新婦を祝福すると挨拶をして爰に授受の式を了つて宴會に移り、例のごとく談笑湧き十二分の歡を盡した<sup>282</sup>。

と、上記のような大変面白い印の結婚式のような交換式を行い、五峰は願望していた印を入手した。

其の数日後、春城からお返しの酒宴もあつたようである。

今度は私が赤坂の三河屋へ君並に湘南藏六を招待した。其際は寺崎廣業氏にも案内した。席上君は筆を揮つて鷄血石歌を一幅に書き更

らに横巻にも揮毫された。（中略）此の印と詩の交換の宴は當時同人の間に文苑の佳話として喧傳された<sup>283</sup>。

この春城の叙述によれば、五峰の「印」に對する強い関心によつて、本詩が作られ、「印」と本詩との交換式は明治時代の同人たちの文芸の美談になったとある。

本詩の詩風は今までの七言古詩の雄渾と違い、市島春城の印癖を詠い始め、印に對する愛着は米芾（一〇五一〜一一〇七、北宋の書画家）と比肩できるし、その博識は趙孟頫（一二五四〜一三二二、号・松雪。元代著名画家・楷書四大家の一人）に匹敵できると、春城の生涯を簡潔にまとめた上で、本題の鷄血石に触れ、巧みに李賀（七九一〜八一七、字は長吉、中唐の詩人）の作詩に對する苦心と春城の咯血と鷄血石とを関連付け、最後に、春城が鷄血石のように末永く健康であることを願つて歌い終える一首となっている。

この詩は『五峰遺稿』にある多数の贈答詩の代表的な一首と言える。当然のことであるが、上記にある春城からの「注文」、「御覽に入れた三十數顆の鷄血石の印を題にして欲しい。且つ詩の趣向に就ても注文がある。私は前年新潟で咯血したことがあるが、此の多数の鷄血石を得て、失うた血を補うて餘りありと言ふ意を詩中に寓して欲しい」はすべて手際よく満たしている。

### 三、『五峰遺稿』に見られる疊韻詩

本節「一」で取上げた詩「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」と、その前にある三首は、『五峰遺稿』全三九二首の中で唯一の疊韻詩である。

吉川幸次郎は『宋詩概説』で、宋詩の表現に関する現象について、目立つのは友情の表現としての「次韻」であると説明している。更に、同じ韻脚に何度も重ねて次韻する「疊韻」という詩形の用例として、王安石の六疊韻詩を挙げている<sup>2, 8, 4</sup>。五峰もこのような友情を表す疊韻詩を創作していた。

では、『五峰遺稿』に列挙している疊韻詩・七言律詩四首を編集順で引きつつ、五峰の詩風について考えたい。

巖谷一六至自東京邀飲南邊樓 用前年唱和韻（巖谷一六、東京より至り、南邊樓に邀へ飲む 前年の唱和の韻を用ゆ）

旗亭韻事足尋思	旗亭 韻事 尋思足る
敢道風光似舊時	敢えて道ふ 風光 舊時に似ると
八斗仙才三斗墨	八斗の仙才 三斗の墨
二分明月十分詩	二分の明月 十分の詩
忘年有友燈重剔	忘年 友有り 燈 重ねて剔す
寫照無人鏡不知	寫照 人無し 鏡 知らず

前年一六有

前年、一六に

玉鏡分光貽寫照句

「玉鏡 分光 寫照に貽す」の句有り

覺夢揚州吾亦老 揚州に覺夢して 吾 亦た 老ゆ  
 忍看憔悴柳千枝 忍び看る 憔悴たる 柳の千枝を

（南邊樓で詩文を作り、風流なことを行い、自分の思考を満たすことができる。今の目の前の風景は昔と似ていることと言える。あなたには曹植の八斗の超凡脱俗の才能と三斗の書や絵を書く才能の持ち主だ。そんなに明るくなっていない月が現れたが、でも、詩文は十分に満足だろう。年齢の差を気にとめないあなたがいて、灯の芯を

再び取り除いて、お酒を飲み続けましょう。鏡は人を映そうとしても、人が居ないのを知らないものだ。前年、一六に「鏡に少し姿を映し残した」という詩句があった。杜牧の「十年 一たび覺む 揚州の夢」のような夢から目が覚め、私も既に年取った。やせ衰えているたぐさんの柳の枝を我慢して見ている。）

本詩の詩題と詩句にあるように、この一首は忘年の友巖谷一六（一八三四〜一九〇五・明治三筆の一人）のため、作詩したことがうかがえる。当時、巖谷は六八歳であり、五峰は四三歳である。巖谷の能書才能を褒めつつ、歓迎の酒宴を描いている。この二五歳の年齢の差がある友人に対する友情表現を呈する一首である。

結聯前半「覺夢揚州吾亦老（揚州に覺夢して 吾 亦た 老ゆ）」は、杜牧の「遣懷（懷いを遣る）」に「十年一覺揚州夢（十年 一たび覺む 揚州の夢）」とあるのを踏まえている。詩人自身の老衰を自覚した感傷的な心境がうかがえる。

一六遊佐渡賦此寄懷疊韻（一六、佐渡に遊び、此を賦し寄懷す 疊韻す）

莽莽煙濤勞夢思	莽莽たる 煙濤 夢思を勞 <small>ね</small> ぎ
回頭海角泊舟時	回頭 海角 泊舟の時
九重天子蒙塵地	九重の天子 蒙塵の地
白髮詞臣攬淚詩	白髮の詞臣 涙を攬 <small>もよほ</small> す詩
陵樹秋風今古感	陵樹 秋風 今古の感



鑛山金氣鬼神知 鑛山 金氣 鬼神知る

忘憂唯有旗亭酒 忘憂 唯だ 有り 旗亭の酒

醉聽村娃唱竹枝 醉ひて 村娃 竹枝を唱ふを聽く

(廣大で果てしがない霧にかすんだ水面の中、いろいろな過去のことを思い巡らしているうちに、頭をめぐらすと船が既に岬に泊まる時になった。その佐渡島は天子が変事に際し難を避けて逃れる場所である。年取った文学の侍従は涙を催す詩文を作ったわけである。順徳帝陵にある樹木が秋風の中で揺れ動いている様子を見て、昔のことを思い出した。佐渡島の鉾山の金の気配は鬼神さえも知っているだろう。憂を忘れるのはただ酒楼のお酒だ。酔っ払って、田舎の女子たちの「竹枝」の歌を聴いている。)

この一首は同じ友人・巖谷に贈る詩である。詩題と詩句から見れば、この作は巖谷が新潟から佐渡島へ旅することに因んだ疊韻詩である。前一首の韻脚と全く同じである。

結聯の前半「忘憂唯有旗亭酒(忘憂 唯だ 有り 旗亭の酒)」は、五峰自身の憂国の情に言及している。詩の全体は友人の旅への思いを詠いつつ、詩人自身のいつまでも晴れぬ憂国の心境を表す一首になる。

寄懷佐渡舊知再疊韻 (懷を佐渡の舊知に寄す 再び疊韻す)

記取題襟慰客思 題襟を記取して 客思を慰めよ

扁舟孤島阻風時 扁舟 孤島に風に阻まれる時

參商忽隔三秋別 參商 忽ち三秋を隔てて別れ

天地誰留一卷詩 天地 誰か留めん一卷の詩

滄海無邊明月照 滄海 無辺 明月 照らす

煙波有約白鷗知 煙波 約有り 白鷗 知る

釣竿何日隨巢父 釣竿 何れの日か 巢父に随ひ

去拂珊瑚十丈枝 拂ひに 去らん 珊瑚 十丈の枝

(小船が離れ島で風に阻まれる時、書き留めておいた詩を思い出し、旅愁を慰めるがよい。「參商」二星のように、忽ち三秋を隔てて別れ、長く相見ぬことになる。天地の間、君の他に誰に一卷の詩を残そうか。滄海は限りなく明月が照らしている。白鷗だけが煙波の誓いを知っている。いつか巢父に従って釣竿を携え、珊瑚の十丈の枝を払いに行こう。)

本詩の詩題から、これは巖谷に贈るもう一首の疊韻詩である。前一首と同じ韻脚を踏みつつ、佐渡島の自然風景を描写した上、詩人自身と友人との別れを偲んでいる。

結聯「釣竿何日隨巢父(釣竿 何れの日か 巢父に随ひ) 去拂珊瑚十丈枝(拂ひに 去らん 珊瑚 十丈の枝)」は、杜甫詩「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白(孔巢父が病と謝して帰り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す)」に「釣竿欲拂珊瑚樹(釣竿払わんと欲す珊瑚の樹)」とあるのを踏まえている。詩形は宋詩の表現でありつつ、詩句は唐詩から取り入れることが五峰なりの詩風を呈している。その上、更にこの詩には五峰の隱逸傾向が見られる。本詩に関する詳しい分析は本章の「第四節「竹」を題材とした詩」に譲りたい。

「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す)」(再掲する)

手撫圓銅有所思  
吾生已及二毛時

手 圓銅を撫で 所思有り  
吾が生 已に二毛の時に及ぶ

涓埃無補猶憂國

涓埃 補う無けれども 猶ほ 國を憂ふべし

風月多情可廢詩

風月 多情 詩を廢す可し

烽警頻傳鄰境急

烽警 頻りに鄰境の急を傳う

廟謨未許野人知

びょうぼ 廟謨 未だ野人に知るを許さず

愁來且買紅樓酒

愁來れば 且く紅樓の酒を買ひ

醉見新裙舞柘枝

醉ひて 新裙 柘枝を舞うを見る

(丸い銅製の鏡を撫でながら、思うところがある。我が生命は既に白髪混じりの髪の毛の時期になってきた。この身はしづくどちりのような卑小な存在であるが、それでもなお憂国の情はある。風月を眺めて楽しむだけならば、詩を止めることができる。戦争の烽火は頻りに隣国との境にある切迫した状況を伝えてくる。政府の対策は野にいる私には知ることができない。憂国の情が襲って来たら、妓楼の酒を買い、酔っ払って、新人の柘枝の舞を見よう。)

本詩は既に本節「一」で述べたので、ここでは詳細には触れないが、注目したいのは、本詩が吉川幸次郎が述べるような友情の表現ではない点である。むしろそれは、五峰自身の「憂国」、「野人」、「愁來」に対する心境を表現している。その上、詩形は疊韻詩でありつつ、結聯「醉見新裙舞柘枝(醉ひて 新裙 柘枝を舞うを見る)」では、白居易の詩句を取り入れている点において、前一首と同じ特徴が見られる。

『五峰遺稿』にある上記四首連続の疊韻詩は五峰四三歳の作である。その一首目「巖谷一六至自東京邀飲南邊樓 用前年唱和韻(巖谷一六、東京より至り、南邊樓にて邀き飲む 前年の唱和の韻を用ゆ)」から三首目「寄

懷佐渡舊知再疊韻(懷<sup>おも</sup>を佐渡の舊知に寄す 再び疊韻す)」までは、友人・巖谷に対する贈答詩である。詩風はほぼ同じパターンで、詩の前半は友人に関する様子を詠い、後の二句は詩人自身のことを詠じている。特に、三首目の場合は、五峰の隱逸傾向が見られる。凌雲の志を実現するための一歩さえも踏み出していない「愁」という現実から、脱俗しようという心境を表している。

四首目「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然、作有り、三たび疊韻す)」は、前三首と全く同じ韻脚を踏んでいるにもかかわらず、詩の内容も詩境も前三首と違い、前述したように不惑になった詩人自身の「憂愁」を切実に表している一首になる。

その上、この四首連続の次韻・疊韻詩を通して、五峰自身は宋詩の特徴のある詩形を取りつつ、唐詩の詩語や詩句などを融合し、前述した『新鴻新聞』の「詩風一變の徴」という中央漢詩壇の詩風の変遷に関する記事を発表する前に、既に自分の詩作に先取りするという、先見の明があったと考えられる。

### 第三節 田邊碧堂、国分青厓との関わり及びその詩

本節では、明治四四(一九一一年)年森槐南が亡くなった後の、五峰と田邊碧堂・国分青厓との関わりについて考えたい。それとともに、五峰の詩風の変遷の分析を試みたい。

#### 一、田邊碧堂の人となり及び五峰との邂逅

本論文の第一章と第二章に、五峰の同門田邊碧堂の証言を引用したが、

その人となりについてまだ触れてこなかった。ここでは、まず、田邊碧堂がどんな人物であるか紹介しておきたい。

田邊碧堂は、元治元（一八六四）年、備中長尾（現在の倉敷市玉島）に生まれ、名は華<sup>か</sup>、通称は為三郎である。生家は裕福であったが、生まれつき体が弱く、幼時通っていた塾をやめ、詩や画を趣味とした。壮年になってからは、金町製瓦、日本煉瓦会社、大東汽船株式会社、日清汽船株式会社の経営に関わっている。衆議院議員には二回当選している。詩は初め森春濤に学び、のち国分青崖と交流を深めた。詩作では春濤と似た艶麗体の絶句を得意とし、「絶句碧堂」と呼ばれた。晩年は二松学舎、大東文化学院で詩作の講義を行った。大東美術振興会、芸文社顧問も務めた<sup>285</sup>。

次に、田邊碧堂と五峰との出会いについて触れたい。『五峰餘影』では、田邊本人が以下のような回想を語っている。

自分が初めて五峰君の名を耳にしたのは明治十六年先師森春濤翁が自分の郷里備中の玉島に來られたときであった。その二年前、春濤翁は新潟に遊んだので、玉島漫遊の際に、余は諸國を歴訪していたところ若い詩人に接したが北越に阪口五峰あり、天性議論家で詩にもなかく議論がある。（中略）東に五峰、西に碧堂、前途有望の好門下を獲て洵に嬉しい。（中略）明治十六年といへばまだ自分が廿歳で、五峰君は五つ上の廿五歳であった、それでも自分はすでに相當詩名を成してゐたのであるが、當時自分のみならず突如として詩壇を驚かした非常な佳作が春濤翁主宰の『新文詩』に載せられた。

それは君が上京途中の作七律でそのころ春濤翁の一門は最も<sup>マ</sup>斯壇に勢力を占めてゐたが、その詩風は艶美流麗を極めたものであつた。しかるに五峰君の七律は莽蒼の氣に富んで氣格の高い骨力のある強い詩であつた。めに著しく異彩を放つて眞にその時分の詩界を壓するの概があつた。田舎にゐた自分は「新文詩」にこれを讀んで五峰とは一體いかなる人物であらうと初めてその詩に傾倒したほどであるから、春濤翁が玉島漫遊の際にこの五峰君と自分を並稱されたことを名譽にもおもふと同時にまた聊さか不平でもあつた。<sup>286</sup>

上記のように田邊碧堂は明治一六（一八八三）年、師森春濤の玉島を遊歴した時に、師を通して、新潟に詩人五峰がいることを初めて耳にした。また、師春濤は五峰は碧堂と同じく将来に期待できる弟子だと喜んで語つた。当時の詩人五峰の詩風は春濤一門の「艶美流麗」といった詩風と違つて、「莽蒼の氣に富んで氣格の高い骨力のある強い詩」であるため、当時の漢詩壇に異彩を放つたと考えられる。言い換えれば、森春濤門下の五峰は当代の漢詩壇とは違つた詩風を呈している存在の詩人だとうかがえる。当時、既に有名であつた碧堂さえも、五峰の詩に魅了されたことも事実であろう。

更に、上記のように、春濤が「東に五峰、西に碧堂、前途有望の好門下」という評価を浴びた田邊碧堂は、五峰とともに森春濤門下の「双壁」といわれるような、地方に居る弟子であることがうかがえる。

上記の内容の一つ、訂正したいことがある。それは碧堂が言及している五峰の「上京途中」の七律の掲載雑誌のことである。筆者は『新文詩』第百集終月号まで調べた結果、碧堂や当時の漢詩壇を驚かせた五峰のその七律は『新文詩』に掲載されているのではなく、『新文詩』と同じく森

春濤によって主宰される明治一八（一八八五）年一二月の『新新文詩』<sup>287</sup>七集に掲載されていることを突き止めた。

また、田邊碧堂は五峰との初対面や二人の政治活動についても、以下のよう語っている。

詩人五峰の名を早くから聞いてゐたことは前に話した通りであるが、互に面識機<sup>マシ</sup>のを得たのはずっと後れて明治三十一年であつた、

その時自分は三十四歳で代議士に當選したが折柄新潟縣の憲政黨代議員として越後から阪口仁一郎といふ人が東京の本部へ來た。この時初めて詩人五峰と碧堂が互に名乗り合つたのである。然るに自分は三十六年に議員生活を罷めると、恰も其年、互ひ違ひに今度は五峰君が代議士に當選して上京し日本橋本銀町樋口屋旅館に滞在してゐるところへ、自分は訪問したこともあるが、この時分君も詩作に遠ざかり自分も亦詩作を廢してゐた爲に、その交際もそれ程深いものではなかつた。<sup>288</sup>

上記の追懷によれば、明治三一年田邊碧堂三四歳の年に代議士として選ばれ上京した。その時、ちょうど新潟縣の憲政黨の代議員として上京してきた阪口五峰（四〇歳）と初めて面会した。その後、明治三六年田邊は議員を辞任した年、衆議院議員として選ばれた五峰は上京し、日本橋の樋口屋旅館に滞在していた。その時に、田邊は五峰を尋ねたのである。その上、田邊は五峰が詩作から遠ざかつたことと、田邊自身の「詩作を廢して」いることに言及し、そのため、漢詩人としての二人の交友は進まなかつたとのことである。しかし、『新詩綜』や『百花欄』や雪門会などの資料を通して、二人の交友は上記の明治三一年からスタートし、

五峰亡くなるまで及んでいたことが推測される。また、五峰本人からも二人の長い交友関係に関する言及も見られる。それは田邊碧堂が大正一〇（一九二一）年中国へ渡る前に、友人たちから贈られた送別詩を詩集『壮行集』一冊にまとめ、五峰はその序文冒頭に「余知田邊碧堂久矣（余は田邊碧堂を知ること久し）」と綴っている。五峰の序文の言及からは長く付き合っていることが明らかであり、その交友の具体的な年数などには触れていなくても、その交友の深さがうかがえる。

更に、大正八（一九一九）年頃の詩人五峰と碧堂との交流に触れたい。

大正八年頃と思ふが牛込にゐた五峰を往訪した時、何故作詩を廢してゐるのかと自分が問ふと君は答へて必ずしも全然作らぬわけはない。ぼつくとやつてゐるといふのでそのとき示されたのが日本の歴史を詠じた五言古詩であつた。自分はそれを見て讚嘆敬服恰も往年の七律を見たときとおなじ驚きを再びした。實に山陽の詠史以後、またと見ない立派な作ばかりであつた。しかも五峰君自身は曰く、相當骨を折つた積りだが實は讀史餘論や他の國史類から材料を得てそれを詩語に並べただけで到底山陽の如くに自家の胸奥から出たものとは同日の論でない隨つて他に示すほどの勇氣もないと、むしろ意外なほど非常に謙遜してゐるので自分は山陽とて根柢は同一で矢張り讀史餘論その他から材料を捉へたに過ぎぬ。たゞ山陽は君よりも先に生れて早くそれをやつただけに、君より一日の長あるを得たのであるがその代りに詩人として鍊磨された字句で詩を成してゐる點は却つて君に強點があると説いた。

自分の熱心な主張に對し君も流石に満足したらしく、實は二、三の詩人にも見せて相談はして見たのだが結果はどうも本意に反くことが多いで困つてゐた。君は幸ひよく理解してくれるから今後君

に相談して定稿にしたいといはれる。自分は一應辭退もしたが、折角いはれるので拝見することにしたが、自分一人でもいかゞと考へて、折々國分青厓君にも相談して見ることにした。ところが青厓君も大いに感服して、いつのまにか同君も喜んで五峰君の作を見るやうになり、こゝに自分といふものに引摺られた形で青厓五峰兩君は互に知己となつたのである。<sup>289</sup>

上記の追懷によれば、大正八年、東京牛込に住んでいた五峰を田邊が訪れ、その時、田邊は五峰が詩を作らなくなった理由を質問した。五峰の答えは全く作っていないわけではなく、少しずつやっているということであり、その時、歴史を詠じた五言古詩という作品の原稿を田邊に見せた。この歴史を詠じた五言古詩は『五峰遺稿』の「讀史」と題する五言古詩二三首連作にあたる。本節の「三」では、五峰の「讀史」詩を論じた。また、上記の追懷によれば、田邊は五峰と國分青厓との知己關係を結ぶ重要人物にもなっている。國分青厓と五峰との交友關係は本節の「二」では、述べたい。要するに、田邊碧堂は五峰にとつて、一人三役の存在だといえる。その第一は、師森春濤の同門弟子（詩の友）である。その二は、政界の盟友でもある。最後に、國分青厓へ五峰を紹介し、その交友を深めた仲介役でもある。田邊碧堂は五峰の交友歴に存在している極めて重要な一人だと考えられる。

## 二、國分青厓の人となり及び五峰との邂逅

次に、田邊碧堂の回想に基づいて、五峰と國分青厓との邂逅について触れたい。

まず、國分青厓の人となりに触れておきたい。

國分青厓は、安政四（一八五七）年、陸奥仙台の出身で、名は高胤、たかたね

俗称は豁、とわ別号は青崖、太白山人などがある。藩学の養賢堂に入り、漢学を國分松嶼に、国学を落合直亮に学んだ。のち司法省法学校で学んだが、同窓の原敬、陸羯南らとまかない賄征伐のため退学した後は、新聞で漢詩による時事評論を行った。一八九〇年に森槐南、本田種竹、大江敬香などと星社を復興したが、森槐南とは詩風、性格が合わず、袂を分かち、詩壇を遠ざかった。のち種竹（一九〇七年）、槐南（一九一一年）の没後、隨鷗吟社が結成されると詩壇に復帰し、中心的役割を果たす。一九二三年、大東文化学院の結成とともに教授となり、一方で多くの詩社に関わった。また、雑誌「昭和詩文」を主宰して漢詩壇の振興に力を注いだ。<sup>290</sup>「國民詩人」<sup>291</sup>といわれる人物である。

既に本節の「一」で触れたことであるが、田邊碧堂は「大正八年頃」、牛込に居る五峰を訪問した時に、五峰から見せてもらった「日本の歴史を詠じた五言古詩」を読み、五峰明治一八年の「上京途中作」という詩作を読んだ時と同じように驚嘆した。また、五峰から「今後君に相談して定稿にしたい」と願われた時に、以下のようなことを語っている。

自分は一應辭退もしたが、折角いはれるので拝見することにしたが、自分一人でもいかゞと考へて、折々國分青厓君にも相談して見ることにした。ところが青厓君も大いに感服して、いつのまにか同君も喜んで五峰君の作を見るやうになり、こゝに自分といふものに引摺られた形で青厓五峰兩君は互に知己となつたのである。<sup>292</sup>

というふうには、田邊は五峰と国分青厓との知己関係を結ぶ仲介役になった。更に、田邊から五峰の詩風と国分青厓の詩風について、以下のよう  
な言及がある。

この場合自分が敢てお話しして置きたいことは、五峰君が青厓君と相識るにいたつたことは、君にとつて大なる幸福であつたといふことである。由來青厓君は森門一派と全然詩風を異にしてゐたので、春濤門下たる五峰君は從來青厓君と相遇ふ機會がなかつたのである。こゝにいたつて兩者の親しみは大いに加はり、死にいたる迄青厓君と自分とが、故人の詩の相談相手となつたわけで、五峰君本來の詩風はその師春濤翁や槐南君よりもむしろ青厓君に近いのであつたから、晩年眞の知己を得たのは慶すべきことで、さればこそ五峰君本人自身も生前遺言されてその詩稿の拜見漏れの分をことごとく自分等兩人に見てくれといふことで、その遺志に副ふべく館森袖海君の手に蒐集整理された上に、兩人がさらにこれに眼を通して完璧を期した次第であるが、この集も既に世に出た<sup>293</sup>。

詩における二人の傾向は似通つているとはいえるが、必ずしも五峰が青厓から影響を受けたとは言えない。それは五峰の詩風が既に国分青厓との親交が始まる前に形成されていたと思われるからである。例を挙げれば、国分青厓は時事的な詩作（評林詩）で有名であるが、五峰にも青厓と接触する前に、既に時事に関する一連の詩作が見られる。それは『五峰遺稿』二八〇首目〜二九五首目あたりの詩作（明治三七〜三八年頃・五峰四六〜四七歳）にあたる。その中から二首を抽出し、五峰の時事に関する詩の作風を考えたい。

寄懷松田學鷗在滿洲軍（松田學鷗の滿洲軍に在るに寄懷す）

踏勘<sup>マカ</sup>辛勤聚米工 踏勘 辛勤 聚米の工  
圖經編就助神功 圖經 編就し 神功を助く  
王師百戰無遺算 王師 百戰 遺算無し  
敵地山川指掌中 敵地の山川 掌中を指す  
（現地まで足を運んで、実際に調べ、工みな万全の方策を立てる労苦を惜しまない。現地の地図・地形に関する資料を編集し、軍功を揚げるのを助けている。これで天子の軍隊がいくら戦つても負けることは無く、敵地の地形は掌を指すが如くである。）

本詩の題名にある「松田學鷗」は、測量学を身につけた人であり、明治一五（一八八二）年、参謀本部の測量技手になり、日清・日露戦争に従軍することがある。明治三九（一九〇六）年以後、臨時測図部の測量主任になる<sup>294</sup>。本詩は松田學鷗が滿洲軍陣にいることを記念として詠じている一首である。

本詩の起句にある「踏勘」は「踏勘」の誤植だと考えられる。起句と承句では、松田本人に関する測量について、高く評価しつつ描き出している。転句と結句では、その測定・測量の精密性が高いことで、日本軍が負けることがないからこそ、松田の功績を称揚している。次に「清河陣中即事」を取り上げる。

清河陣中即事 第十六聯隊本部（清河の陣中即事 第十六聯隊の本  
部） 五首連作の四首目

揮塵拂蠅風榻前 塵を揮ひて蠅を拂ふ 風榻の前

談兵相對似談禪 談兵 相對すは 談禪に似る

軍中近日競新智 軍中 近日 新智を競ふ

彈挿草花丸喫煙 彈もて 草花を挿し 丸もて 喫煙す

夏日蠅多人人 夏日、蠅多し。人々、

手塵尾拂蠅也 塵尾を手にして蠅を追い払うなり。

陣中用砲彈挿 陣中、砲弾を用いて

花又以銃丸製 花を挿し、又、銃丸を以て

煙管甚工 煙管を製す。甚だ工みなり。

(納涼用の寝台の前で扨子を振って蠅を追い払う。向き合って軍事を談じることは禪を談じるようだ。第十六聯隊本部では、近頃、新しい知恵を競っている。それは砲弾を草花代わりにして花を活け、銃丸をキセル代わりに用い、喫煙することだ。)

本詩も時事に関する作である。本詩の創作時期は『五峰餘影』の「年譜」では、明治三八(一九〇五)年六月滿鮮戰地視察と綴っているため、明治三八年、五峰四七歳の時、日露戰地を視察する時だと推知できよう。この視察は五峰にとって、最初にして最後の海外視察である。

起句にある「拂蠅」は、中唐詩人賈島詩「贈圓上人<sup>295</sup>」に「塵尾持行不拂蠅(塵尾 持行 蠅を拂わんず)」とあるのを意識しているだろう。賈島詩の「不拂蠅」という否定表現は「圓上人」の慈愛に満ちた品行を詠じているに対し、五峰の詩句は陣中の夏場の様子をそのまま詠い、「拂蠅」を通して、その臨場感を注いでいる。

承句にある「談兵」を「談禪」にたとえ、五峰のユーモアを表現している。本詩の「談禪」という詩語は『五峰遺稿』にある全一二首の「禪」

字を含む詩句の最後の出現になる。

結句にある「彈」と「丸」という語は、一般に詩に用いないが、ここでは、五峰の表現のリアリティーを呈している。

前一首「寄懷松田學鷗在滿洲軍(松田學鷗の滿洲軍に在るに寄懷す)」は、松田の從軍における功績を詠じているに対し、本詩は五峰自身の目で見た陣地の状況をユーモラスに描いた一首である。

上記の二首はともに、戰場を詠う詩作であるが、唐詩のような悲哀は感じられず、平易明快な詩風を表している。これらの詩は国分青厓と知る前の詩であり、五峰の時事的な関心が以前からあったことを示す証拠となる。

### 三、「讀史」詩

『五峰遺稿』には「讀史」と題する五言古詩の連作が二三首ある。前述した田邊碧堂の追想によれば、それは大正八年頃の五峰六一歳の作になる。が、五峰の実弟である南義二郎の回想によれば、五峰は少年時代に歴史に対する嗜好があったそうである<sup>296</sup>。また、第一章で論じた五峰初期の詩の中でも、本節「二」の中で取り上げた詩でも、歴史に対する執着がとくに表れている。詩名をあげれば、『五峰遺稿』三首目の「米澤(二五歳)、その六首目の「川中島懷古(二七歳)、その一二四首目の「赴京途中作(二七歳)」などがある。その関心の高さが五峰の詩に反映している。では、どのような歴史人物に注目したか。「讀史」連作を通して、探ってみよう。

まず、漢詩人五峰が一人三役(五峰は『新鴻才人詩』の校閲を担当し、詩の評者の一人でもあり、且つ文中登場する才人の一人でもある。)を買って出た『新鴻才人詩』第一集の四首目の詩を引く。

詠史 原七<sup>297</sup>

南陔樵史 丸岡

夢賚英雄果偉人 夢に 英雄を賚ふは 果して偉人なり

乾坤赤手掃氛塵 乾坤 赤手 氛塵を掃ふ

能將一死酬明主 能く一死を將つて 明主に酬ゆ

遺恨七生亡賊臣 遺恨 七生 賊臣を亡ぼす

匡國原堪比諸葛 匡國 原より 諸葛（孔明）に比するに堪う

守城何必數張巡 守城 何ぞ必ずしも張巡を数へん

可憐身後雷兇輩 可憐れむ可し 身後 兇輩に雷す

擁護南朝五十春 南朝を擁護し 五十の春

坂口五峯曰僕最愛前聯楠公一生心事不出乎此十四字也（坂口五

峯曰く、僕最も前聯を愛す。楠公一生の心事は此の十四字に出

でざるなり。）

（夢が呉れた英雄ははたして偉人であった。天地の間の反乱などを素手で一気に取り除いていた。この能く一死を以て賢明な君主に酬い、忘れがたい恨みを以て、七回生まれ変わって、反逆の臣たちを亡ぼそうとした。国を治めることは、もとより諸葛孔明に比べられるほどであるし、また、城を守ることは、張巡（唐代の守城する英雄）に劣らない。楠公の没後まで、子孫たちに威厳を示しているのは感にたえない。彼らは南朝を五十年間、庇い守り続けたわけである。）

『新鴻才人詩』第一集は明治一五（一八八二）年初冬（十一月）に小

林二郎の編纂、坂口五峰の校閲によって出版された漢詩雑誌である<sup>298</sup>。

本詩は新鴻漢詩壇の重鎮である丸岡南陔の七言律詩であり、五峰が評を

下したものである。その評に注目したい。五峰の気に入った詩句は、前聯「能將一死酬明主（能く一死を將つて 明主に酬ゆ）遺恨七生亡賊臣（遺恨 七生 賊臣を亡ぼす）」である。当時の五峰は二四歳であり、師森春濤は既に来鴻しており、実際にその薫陶を受けた後の時期になるが、この詩への評は春濤への入門とは関係のない、五峰自身の嗜好を示すものである。

後聯後半「守城何必數張巡（守城 何ぞ必ずしも張巡を数へん）」は、頼山陽『日本外史』巻五「新田氏前記」に「後の論者、或は之を唐の張巡に比する者あり。」<sup>299</sup>とあるのに因んだ詩句になる。

次に、『五峰遺稿』の「讀史」第二二首を見よう。

國亂思良相 國乱れて 良相を思ひ

軍敗思良將 軍敗れて 良將を思ふ

天生我楠公 天 我が楠公を生み

自任何太壯 自任 何ぞただ壯なる

進曰臣未死 進んで曰く 臣 未だ死なず

君勿憂得喪 君 得喪を憂ふる勿かれ

築城金剛山 金剛山に築城し

起爲天下唱 起ちて天下の唱となる

旋乾轉坤功 乾を旋らし坤を轉ずるの功

獨負海内望 独り 海内の望を負う

皇運狐濡尾 皇運 狐の濡尾

中原賊氛漲 中原 賊氛 漲る

天意厭南朝 天意 南朝を厭ふ

人力非可抗 人力 抗らうべからず

一死勵後世 一死 後世を励まし



七生護天仗 七生 天仗を護る

古來純忠臣 古來 純忠の臣

誰出楠氏上 誰か楠氏の上に出でん

(国が混乱に陥るときに、良い宰相がほしくなり、軍が敗れたときに、良い將軍がほしくなる。天与として楠公が生まれ、自ら重大なことを自分の任務として壮氣を示した。天皇の前へ進んでこのように言った。臣は未だ死んでいない。明君陛下、得喪をご心配されないようと、進言した。金剛山に築城したし、始めて、天下に号令した。天下の情勢を一新する功によつて、独り海内の人望を集めたのだ。ところが、皇運は狐の濡れた尻尾のように混乱した。中原では、叛逆の勢力が漲つてきた。天意は南朝を嫌い、それは人間の力によつて抗らえないものとなつた。楠公が一命をすてた後でも、その子孫たちが意気込んで南朝のために努めてくれるだろう。楠公自身は七回生まれ変わつて、天子を護ると誓いを立てた。古來の私欲のない純粹の忠義を持つ忠臣たちのなかで、誰が楠氏の上に出ることができようか。)

本詩は下平声の七陽の韻を踏んでいる。本節の「一」で触れた田邊碧堂の追想の中で言及された「日本の歴史を詠じた五言古詩」の一首でもある。

一句目「國亂思良相(国乱れて 良相を思ひ)」と二句目「軍敗思良將(軍敗れて 良將を思ふ)」とは、国事と軍事について述べている。

三句目「天生我楠公(天 我が楠公を生み)」から、本詩は明治時代に「大楠公」と称えている楠木正成に関する詩作だろうかがえる。

五句目「進曰臣未死(進んで曰く 臣 未だ死なず)」は、頼山陽『日本外史』巻五「新田氏前記」に「陛下、苟も未だ正成死せずと聞かば、

即ち復宸慮を勞する母かれと。乃ち拝辭して還る<sup>300</sup>。」とあるのに因んだ詩句である。

この次にある詩句は全部、楠木に関する事情を詠じている。折々、穏やかな語調で語り、折々、氣宇壮大な感慨を洩らしている。

最後にある三句に注目したい。その一つ、「七生護天仗(七生 天仗を護る)」は、頼山陽『日本外史』巻五「新田氏前記」にある湊川の戦いの話に「正成、心に生を欲せず。乃ち走りて湊川の北の民舎に入り、坐して鎧を釋く。身に十一創を被る。顧みて正季に謂ひて曰く、死して何をか爲すと。曰く、願はくは七たび人間に生れて、國賊を殺さんと。正成、欣然として曰く、是れ吾が心を獲たりと。耦刺して死す。正成、年四十三<sup>301</sup>。」とあるのを踏まえている。

最後にある二句「古來純忠臣(古來 純忠の臣) 誰出楠氏上(誰か楠氏の上に出でん)」は、頼山陽『日本外史』巻五「新田氏前記」に「而して其勤王の功は、余れ楠氏を以て第一と爲す」<sup>302</sup>とあるのを踏まえているし、また、新井白石『読史餘論』に「功臣においては、正成を以て第一とすべし<sup>303</sup>。」とあるのも踏まえている。

丸岡「詠史」詩の評を下す明治一五年二四歳から本詩を創作する時期大正八年六一歳頃まで、およそ四〇年間五峰は相変わらず忠君愛国の士楠木正成に注目している。楠木正成に対する歴史観が変わっていないことがうかがえる。それを反映したものとして、五峰は丸岡詩の前聯「能將一死酬明主(能く一死を將つて 明主に酬ゆ) 遺恨七生亡賊臣(遺恨七生 賊臣を亡ぼす)」を好んでいた。この詩句は楠木正成の忠誠を語っている箇所であるからである。五峰自身の歴史人物に対する愛好の傾向がうかがえる。それは自身のように君主に忠義をつくす、君主のために身を惜しまない精神の持ち主への憧れだと考えられる。

丸岡詩では詠じられる歴史人物の名を出していないのに対し、本詩は

五峰の長所である議論を出しつつ、三句目から最後の詩句まで、歴史人物の名「楠公」「楠氏」を前面に出している。また、五峰は楠木正成に対する呼び方も『読史餘論』の「正成」と、『日本外史』の「正成」と違い、明治時代の呼び方で「楠公」を本詩に取り入れ、その作詩の時代情勢もうかがえるし、五峰詩自体の時代性もうかがえる。詩風は既に師春濤や、『五峰遺稿』序文や跋文で指摘された通り、雄渾な古詩大作だと思われる。

#### 第四節 「竹」を題材とした詩

本節では、五峰の竹についての漢詩を取り上げる。というのは、五峰は竹に関する詩を二〇首近く創作しているからである。本節で、特に注目したいのはその中で類似した内容と表現を持つ四首の詩である。これらの詩を書いた時期は二〇年にわたる。また、五峰は竹の絵もよく描いている。村山真雄<sup>304</sup>は、「岳父坂口五峰の思い出」において次のように書いている。

書は半切扇面<sup>せん</sup>などに、適当大の物を好んでものされた額面の文字は書かれたものは稀<sup>まれ</sup>である。画は数竿<sup>かん</sup>葺夜雨など題して黒竹<sup>ま</sup>だけ、これは晩年蘇籠<sup>そ</sup>せられてから蘇盒<sup>そ</sup>老人の名で描かれた。家で書かれる事は稀<sup>まれ</sup>の方であつて多くは遊説などの出先に於いてである。

305

村山の思い出によれば、画は墨竹だけしか描いていない。なぜ五峰はこれほど竹についてこだわっていたのか。竹は五峰にとって、どのような意味を持っていたのだろうか。あるいは、竹に託して、何を表現したかったのか。詩を分析し、五峰竹詩の深層を追究しよう。

#### 一、詩、書、画一体の作品

岡村浩（号鉄琴）は「阪口五峰展」始末記と今後の展望」にこの展覧会の主要出品作である「黒竹自画讚大幅<sup>ま</sup>」について次のように書いている。

新津ゆかりの作品から紹介すると、黒竹自画讚大幅<sup>ま</sup>がある。縦一八一・横九一センチメートルに及ぶ紙面に、五峰としては珍しい巨岩と濃淡の差違の美しい枝ぶりの良い竹を描く。左上部には、

湘江の烟雨碧模糊<sup>たちま</sup>たり。乍<sup>たちま</sup>ち憶う吾が生本<sup>も</sup>と釣徒<sup>た</sup>なると。何れの日か一竿を截<sup>も</sup>し將て去り。東海より柵<sup>ま</sup>瑚を払わんと欲す。

と画讚を自作詩文で付す。（後略）<sup>306</sup>

画に書かれた漢詩の原文は、以下の通りである。

湘江煙雨碧模糊 乍憶吾生本釣徒

何日截將一竿去 欲従東海拂珊瑚

落款によれば、「辛亥夏日」と制作年の明らかな作品である。明治四四（一九一）年夏、五峰五三歳の時の詩だと岡村<sup>307</sup>は考証している。紙上の竹と岩との水墨画も、五峰の手に出来上がったものであることが明らかにされた<sup>308</sup>。

この七言絶句を詳しく分析しよう。まず、起句の「湘江煙雨碧模糊」を見よう。「湘江は雨に煙ってぼんやりとした深緑色である」と、詠い起す。湘江の水面に雨が降っている。その雨は碧緑の湘水と混じりあい、深緑色にぼんやりとしている様子が描かれている。この起句で用いられている「碧」という言葉は後の三句とのつながりで重要な役割を果たしている。単なる川水の色と雨のぼんやりと深緑色の状態の描写ではなく、主眼とされる竹のことにもつながっている。（湘江の両岸には竹林があるかもしれないことを暗示している。）「碧」は湘江との関係では「碧湘」<sup>309</sup>という連語として用いられ、「湘江の美称」でもある。

この「碧」という字は、転句に出てくる釣竿の竹と結びついている。竹の異名として「碧虚郎」<sup>310</sup>という単語がある。『述異記』には次の記述がある。

湘水去岸三十里許、有相思宮、望帝臺、昔舜南巡而葬於蒼梧之野、堯之二女娥皇・女英、追之不及、相與慟哭、淚下沾竹、竹文上爲之斑斑然。<sup>311</sup>  
〔述異記、上〕

その「斑斑然」とは「斑竹」の斑点のことである。「湘江」→「湘水」→「湘妃」<sup>312</sup>→「湘妃竹」（「斑竹」の異称）→「斑竹」の連鎖関係で、湘江風景から本題の「竹」まで連想される。

次に、「乍憶吾生本釣徒」という承句は以上のような起句との連想関係を受け、「たちまち私の一生は本来一人の釣り人だと思い出した」と詠う。そして、「いつの日か一竿の釣竿をたちきって、持って行こう」と転ずる。どこへ、何をするため、持って行くのかという疑問を読者から引き出し、最後の四句目である結句を導き出す。

結句は、転句から導き出された「欲従東海拂珊瑚」と詠い、この七言絶句を収束する。どこへ、は「東海」へ、何をするため、は「拂珊瑚」をするためである。「珊瑚」は海底に生ずる樹枝状をなす植物であると考えられていた<sup>313</sup>。大変珍しいし、美しいものだと考えられている。東海でこのような珍品をかすめて通ろう、と言うのであるが、この行為の意味が不明である。このことについては、後に追究しよう。

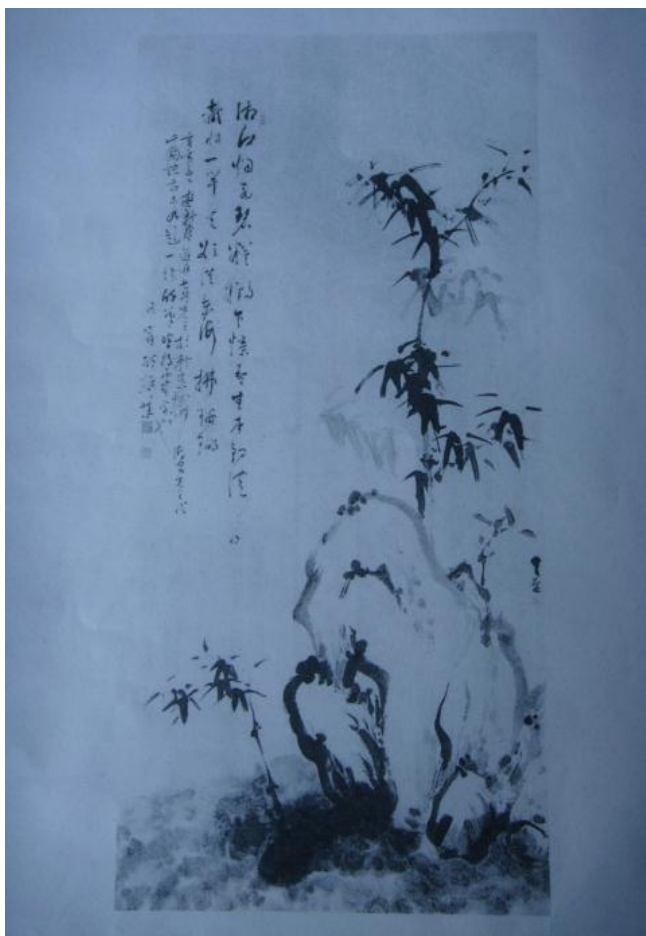
ここで「拂珊瑚」の「拂」という言葉の意味を説明しておく。日本語では、「拂」という語は「払う」、「取り除く」などの意味で使われているが、「拂珊瑚」の「拂」は中国語としては、「すぎる。かすめる。ふれる」<sup>314</sup>という意味で使われている。

前述のように、起句の「碧」は「拂珊瑚」の道具である釣り竿のことを暗示している。というのは、「碧」は濃い緑色であり、「碧」から「緑」へ、「緑」から「竹」の緑色まで連想させるようになっている。釣り竿は竹製のものが多いだろう。詩文には「竹」という漢字は使われていないが、読者に竹のことまで連想させるようになっていく。清の王士禎「神韻派」の朦朧とした雰囲気の中、余韻が漂う詩風を醸し出している。

また、この詩文の右側に挿図に示すように画が描かれている。水墨画であるため、色で「碧」ははっきりとは感じられないが、竹の枝や葉などの形から見れば、勢いが強い竹の印象を与える。

「碧」竹というものは「拂珊瑚」の道具であり、吾が人生はもと一人の釣り人であることを思い起こし、「東海」の珊瑚に触ろうと思っている

というこの詩は一体何を言おうとしているのか、五峰の他の竹に関する詩作を読み解き、その詳細を追究していく。



## 二、合作にみる五峰の詩と書

二〇一〇年二月一三日に催された「坂口家のお宝 大博覧会」(会場―新津美術館)にも、もう一首の竹についての遺墨の出品があった。前項に述べた詩と良く似たものである。

凌雲餘勢翠模糊 凌雲の余勢翠模糊たり

乍憶吾生本釣徒

乍たちまち憶う吾が生本と釣徒なると

何日截将一竿去

何れの日か一竿を截し将もて去り

直従東海拂珊瑚

直ちに東海より珊瑚を拂わん(書き下しは筆者によるもの)

者によるもの)

掛け軸の落款には「壬子夏日」と書いてある。大正元(一九一二年)の夏だと推測できる。とすれば、五四歳の五峰の漢詩になる。この漢詩は前述した詩のちょうど一年後の作品である。この竹と岩との水墨画は五峰の作品ではないと岡村<sup>315</sup>は判定している。

では、右の漢詩を詳しく見ていく。これも七言絶句である。まず、起句の「凌雲餘勢翠模糊」から見る。「凌雲」は雲をしのぐように高いことであり、「凌雲の志」として一般的に使われているが、竹の異名として「凌雲處士」<sup>316</sup>という言い方もある。次の「餘勢」はありあまった勢いの意味であり、五峰は左の墨竹画の竹を見て、その細長く見える竹の勢いを詠っているといえるだろう。また、左の竹の画は少し薄い緑色が付いているが、その画に用いられている竹の色は「碧」ではなく、「翠」である。「翠」は「碧」より濃くなく、萌黄色に近い緑色である。また、「翠竹」<sup>317</sup>という言葉もあり、みどりの竹、緑竹である。この起句は前の詩とは違い、湘江の風景ではなく、竹の様を現している。雲をしのぐ竹の勢いは薄青色でぼんやりとしているということである。

次に、承句では、「乍憶吾生本釣徒」、それは「一」に取り上げた詩文と完全に同じなので、特に説明する必要がない。

更に、転句の「何日截将一竿去」も、また、「一」に取り上げた詩文と完全に同じである。

最後に、結句では、「直從東海拂珊瑚」、直ちに東海で珊瑚を拂おうと  
なっている。これは「一」に取り上げた結句の最初の文字「欲」と違っ  
て、「直」になっている。転句の「何日截将一竿去」の目的はすぐさま東  
海より珊瑚を拂おうということであり、これでこの七言絶句が結ばれる。  
一年後の詩の中では、一年前の詩の一句目の「湘江」を「凌雲」に変  
え、「煙雨」を「餘勢」に変え、「碧」を「翠」に変え、二句目は全く同  
じ、三句目も全く同じ、四句目の「欲」を「直」に変えている。それは  
一年間のうちに、世の中で起こった出来事や五峰自身の生活や心境の変  
化などから影響されているかもしれない。



### 三、大病後の詩

ところで、竹についての詩文はこの二首に止まっていない。『五峰餘影』  
<sup>318</sup>に収められた内藤久寛「五峰阪口先生を憶ふ」によると、以下のよ  
うな漢詩もある。

凌雲餘勢碧糶糊。乍憶吾生本釣徒。  
何日剪将一竿去。 經從東海拂珊瑚。

辛酉三月

五峰老樵

落款から推測すれば、大正一〇（一九二一）年三月、五峰六三歳の作  
品である。この詩の創作背景について、内藤は以下のように書いている。

又一面には新潟新聞社の社長であり、記者であつて、雄健の文章を  
以して操觚界に重きを成して居た。詩人として當時既に高名なりし  
ことは申す迄も無い。晩年に及んでは実業界を去り、専ら衆議院議  
員として中央の政界に馳駆し、憲政会の重鎮として目せられた。（中  
略）大正十年三月、もはや餘命二ヶ月に過ぎずとの医師の診断を伝  
聞して、取敢へず牛込の寓居を訪ひたるに瘦軀に病容を湛へては居  
たが、依然たる元氣であつて、さばかりの重態とも思はれぬ程であ  
つた。茲に於て予は市島春城君と謀り、決別の宴を張る内意にて、  
築地の旗亭瓢家に小宴を催ほした。来り会する者阪口五峰、久須美  
雪堂、市島春城、田邊碧堂、廣井紅秋、柳江書伯並に予栗城の七名  
で、酒酣はにして絹紙を展べ、各々得意の筆を揮つた。中に雪堂翁  
の竹を描きたるに、五峰先生左の一詩を題したが、筆勢奔放にして、  
病者の作とは思はれないものであつた。<sup>319</sup>

右の内藤の思い出によると、五峰は雪堂の竹の水墨画を見て、即興的にこの詩を作り出したとあるが、右にあげた詩からもわかるように、少々字句の異同のある詩が以前から作られていたのである。五峰の年譜資料から分かるように、五峰が発病したのは大正九年一月ごろであり、その後、段々快復し、大正一〇年一月また再び発作が起こった。右の漢詩はその病の快復する段階の作だろう。その詩の書き下しは以下の通りである。

凌雲の余勢碧模糊たり。乍たちまち憶う吾が生本もと釣徒なると。

何れの日か一竿を剪んで将もて去り、東海より経て珊瑚を拂わん

「一」に取り上げた詩作の年代からすると、凡そ一〇年後の漢詩であり、「二」の詩からは九年後の詩である。この三首の七言絶句を並べてみると、三首の共通点と相違点とは一目瞭然である。

- 一 湘江煙雨碧模糊 乍憶吾生本釣徒  
何日截将一竿去 欲従東海拂珊瑚
- 二 凌雲餘勢翠模糊 乍憶吾生本釣徒  
何日截将一竿去 直従東海拂珊瑚
- 三 凌雲餘勢碧模糊 乍憶吾生本釣徒  
何日剪将一竿去 經従東海拂珊瑚

以上の三首はいずれも七言絶句の正格の平仄に則っており、平仄を正すために推敲したわけではなかったことが分かる。では、単なる推敲作業でないとしたら、この変化は何を意味するのか。

#### 四、最初期の詩

『五峰遺稿(中)』<sup>320</sup> 『五峰遺稿』の編集順番を参考にすれば、以下の詩は明治三八(一九〇五)年、五峰四七歳の作品だと推測できる。)に左のような「畫竹」の詩がある。右の「一」の詩より更に六年前の詩である。

#### 畫竹

- 小園修竹翠煙絢 小園の修竹翠煙めぐる  
竹裏幽人本釣徒 竹裏の幽人本と釣徒なる  
何日剪将一竿去 何れの日か一竿を剪んで将もて去り  
直従東海拂珊瑚 直ちに東海より珊瑚を拂わん

まず、起句を見よう。「小さい庭園の中の長く延びた竹に緑色の煙がまわり漂う」という竹園の風景が描かれている。

次に、承句では、「竹園に世を避けて隠れ居る人は、本と釣徒である」というふうに起句と繋がっている。

そして、転句では、「いずれの日かその竹を釣竿一竿分剪んで持っていく」と、転換するのは、承句から見れば、全くの突然ではないかもしれない。釣竿は釣徒にとって必要な道具である。

最後に、結句では、竹の一竿を剪んだ目的を明示している。「すぐに東海に行つて珊瑚を拂う」という目的である。

廣井一は『明治大正北越偉人之片鱗』<sup>321</sup>に収められた「北越政治界の驍將、詩壇の明星阪口仁一郎氏」という文章の中で、五峰について、以下のようなことを書いている。

氏は時折筆者などに、僕は作詩は即吟が出来ない、長く思考し深く彫琢せざれば物にならぬが、議論や争議は却て当意即妙の方が、上乘の作となつて敵手を苦むることが出来ると云はれたが（後略）

この五峰の言葉からすると、彼は漢詩を即興で作ることができず、時間をかけ、推敲を重ねて作っていたらしい。

これまで挙げてきた四首の竹の詩をみれば、確かに五峰自ら語っていた通り、漢詩を作るときに、推敲を重ねている。しかし、そのいずれにも「釣徒」という言葉が常に用いられている。それは十数年という歳月にわたつて、五峰の心の中に蔵されていた重要な意味を持つ言葉であつたに違いない。この「釣徒」という言葉の意味をその出典にさかのぼつて調べてみよう。

## 五、「釣徒」

『新唐書』「列傳」隱逸の中に、張志和（七三〇年頃〜八一〇年頃）について以下のような記述がある。

張志和字子同，婺州金華人。始名龜齡。父游朝，通莊，列二子書，為象罔，白馬證諸篇佐其說。母夢楓生腹上而產志和。十六擢明經，

以策干肅宗，特見賞重，命待詔翰林，授左金吾衛錄事參軍，因賜名。後坐事貶南浦尉，會赦還，以親既喪，不復仕，居江湖，自稱煙波釣徒。著玄真子，亦以自號。<sup>322</sup>

右に書いてあるように張志和は自分のことを「煙波釣徒」と称している。只の「釣徒」ではない。張志和という人物は隱者であり、亡くなる方法も仙人的である<sup>323</sup>。ところで、五峰の一首目の竹の詩には「煙雨」という語を使っている。「煙波」と類似しているだろう。張志和の伝には、竹が触れられていないが、五峰は「乍憶吾生本釣徒」と詠っている。五峰は模糊としている煙雨の中の深い青みの竹林から我が身は「本と釣徒」と自覚している。これは五峰の心中では、竹から釣徒へという連想が自然であつたからであると考えられる。

また、張志和の場合、「不復仕，居江湖，」（仕に復らず，江湖に居る）と記されているように、再び仕途に入らず、隱者になるという決心をしていた。五峰の場合、この詩を作る時に、既に仕途に入っている時期になるが、では、五峰の当時の心境はどのようなことになるか追求しなければいけないだろう。以下、五峰生涯と以上の四首の竹詩の関係を検討したい。創作年代順で見たいこう。

まず、「四」に取り上げた詩の創作背景を纏めてみよう。この詩は明治三八（一九〇五）年の作であり、五峰四七歳の年である。『明治大正北越偉人の片鱗』<sup>324</sup>によると、明治三五年八月に行われた第七回衆議院議員総選挙で五峰は初当選する。『日本人名大辞典』<sup>325</sup>によると、五峰の当選は明治三五年八月当選以来、合わせて八回とされている。つまり、第七回（一九〇二年）衆議院議員総選挙から第一四回（一九二〇年）衆議院議員総選挙まで毎回当選したわけである。「明治三十六年十一月二十九日新潟縣進歩黨大會を開きたる時、ある議員から憲政本黨に復舊する

の意を以て、新潟縣進歩黨を解散すとの動機が突然提出せられた、二三の異議者ありしも可決し、復黨に関する諸般の手續<sup>326</sup>が整った。これから五峰は中央政界で代議士として働くことができるようになった。これらの出来事は五峰が前述した最初の竹詩（「四」）を創作する前のことである。最初の竹の詩には、地方議員から中央議員に選出された後の五峰の心境がうかがえるだろう。地方議員のやり方そのまま中央政界では通じないところがあると五峰が自覚したと考えられる。

それから、「一」に取り上げた詩の創作の周辺を見よう。この詩は明治四四年夏の漢詩であり、五峰五三歳の時である。『五峰餘影』<sup>327</sup>と岡村浩の五峰年表<sup>328</sup>から見ると、政治の波に翻弄されても、文人との交流を断たなかったのが見える。「一」の詩は落款によると、五峰が出身地に帰省し、新森楼という割烹で「酒席を張つた際の作」<sup>329</sup>である。宴の酣の時の漢詩だろう。「四」の詩の「小園修竹翠煙紆 竹裏幽人本釣徒」を「湘江煙雨碧糝糊 乍憶吾生本釣徒」に変えている。すなわち、竹という漢字が消えてしまっているのである。

また、「四」の「何日剪将一竿去 直従東海拂珊瑚」から「一」の「何日截将一竿去 欲従東海拂珊瑚」へと変化したのが、その理由を追究すれば、五峰の政治的抱負に関係があると思われる。衆議院議員の初当選（一九〇二年）から十年近く中央政界と地方政界との間を往来し、政治的、社会的経験を経てきたわけである。単なる「修竹」の中の幽人ではなく、もっと広い世界へ目を向けるべきだと覚悟してきたと思われる。缺で竹を「剪」むではなく、様々な手段で竹を「裁」することにしたと読み取れる。次第に、「直」に東海の珊瑚を拂うのではなく、東海の珊瑚を拂うことを「欲」することにした。そのため、珊瑚を拂うことは急がなくても、いつでもいいことになる。

次に、「二」に取り上げた詩の創作背景を見よう。これは大正元（一九

一二）年の夏の漢詩であり、当時五峰五四歳になる。この詩はちょうど年号が変わる時期の作品である。明治天皇が七月三〇日に崩御ということとで、この漢詩は夏の創作時期であり、どちらが前か後かはつきりと判断を下すことが出来ないが、とにかく、「一」の詩と比べると、かなりの用語の違いがある。「二」の起句「湘江煙雨碧糝糊」は「二」の「凌雲餘勢翠糝糊」へと大きく変更された。「湘江」から「凌雲」へ、「煙雨」から「餘勢」へ、承句の部分は全く変わっていない。つまり、「湘江」や「煙雨」といった自然風景から「凌雲」や「餘勢」といったやや抽象的な形に書き換えている。一年前の詩より壮大な志が「凌雲餘勢」によって、表されている。しかし、同時に、「碧」から「翠」への転移によって、その抱負が薄くなってきた感覚も与えられている点を見逃すことが出来ない。「碧」とは濃い緑色であり、「翠」とは薄い緑色である。この漢字の変化で五峰自身の心境の変化を表していると思われる。転句の「何日截将一竿去」は「一」でも「二」でも、変わっていない。「一」の結句「欲従東海拂珊瑚」は「二」の「直従東海拂珊瑚」へと変化するが、それは「四」の結句「直従東海拂珊瑚」へと戻っただけである。作者の心境は初心に戻ってきたのだろう。やはり、様々な手段で直ぐに東海の珊瑚に触りたい気持ちに戻ってきたと推測できる。

最後、「三」に取り上げた詩の創作までの時代状況や五峰身辺のことに注目しよう。この漢詩は大正一〇（一九二一）年三月の作品であり、五峰当時六三歳である。前述のように内藤の思い出によると、五峰が病気になるまで、回復した後の詩である。「二」の創作時期大正元年から大正一〇年までの出来事<sup>330</sup>を見ると、大正一〇年の病気の再発が内藤の思い出と一致している。その発病の後の回復段階で五峰はその「三」の漢詩を書いたと推測できる。「二」起句の「凌雲餘勢翠糝糊」から「凌雲餘勢碧糝糊」になっている。「翠」から「碧」に戻ってきたのである。そうい



うことは薄い色から濃い色まで変化し、戻ってきた。大病から回復し、更生された五峰の気持ちを照らしている。承句は変わっていないが、「二」の「何日截将一竿去 直従東海拂珊瑚」から「三」の「何日剪将一竿去。經従東海拂珊瑚」へと書き換えている。「截」から「剪」に変化してきたが、それは病と闘っていた六〇代の翁の心境の表現だろう。あまりに気力や体力がなく、様々な手段より気楽に切ることができる道具の缺で一竿を切つてもよろしいだろうと思われる。結句では「直」から「経」に入れ替えている。直ちに東海で珊瑚を拂わなくてもいいから、東海を経過し、珊瑚を拂えばいいという心境の変化を表していると考えられる。

## 六、「拂珊瑚」(一)

竹の詩の中で、もう一つ注目したい言葉がある。それはこれまで挙げたすべての竹の詩の結句にある「拂珊瑚」である。珊瑚を拂うという行為の意味は解しにくい。いったいそれは何を意味しているのか。

杜甫(七一二～七七〇年)に「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」<sup>3:1</sup>という、この詩句の典故であろうと思われる注目すべき詩がある。

送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白 (孔巢父が病と謝して帰り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す)

巢父掉頭不肯住 巢父頭を掉りて住まるを肯んぜず  
東将入海隨煙霧 東将に海に入りて煙霧に随わんとす  
詩卷長留天地間 詩卷長しえに留む天地の間  
釣竿欲拂珊瑚樹 釣竿払わんと欲す珊瑚の樹  
深山大澤龍蛇遠 深山大沢竜蛇遠し

春寒野陰風景暮

春寒野陰風景暮る

蓬萊織女回雲車

蓬萊の織女は雲車を回らし

指點虛無是征路

虚無を指點す是れ征路

自是君身有仙骨

自らはれ君が身に仙骨有り

世人那得知其故

世人那ぞ其の故を知るを得んや

惜君只欲苦死留

君を惜しんで只だ苦死して留めんと欲す

富貴何如草頭露

富貴は何ぞ草頭の露に如かん

蔡侯静者意有餘

蔡侯は静者にして意余り有り

清夜置酒臨前除

清夜酒を置きて前除に臨む

罷琴惆悵月照席

琴を罷め惆悵すれば月席を照らす

幾歲寄我空中書

幾歲か我に寄せん空中の書

南尋禹穴見李白

南禹穴を尋ねて李白を見ば

道甫問信今何如

道え甫問信す今何如と<sup>3:2</sup>

(孔巢父は病を理由に仕途から離れようとした。そのとき、杜甫はそれを止めようとしたが、孔巢父は杜甫の意見など聞こうとせず、東の海へ行き、煙霧に従おうとする。しかし、孔巢父の詩は末永く世の中に残るだろう。釣竿で珊瑚の木に触ろうと考えている。その後の四句は、仙境に行く道や自然環境などを暗示する。孔巢父には既に仙骨があり、世の中の人たちにはそれが分からなかったのである。杜甫は孔巢父の去ることがとても残念であるため、苦心して引きとめようとしたが、世間の富と名譽は孔巢父にとって、只の草の葉の上の露のようなものに過ぎない。蔡侯は静かな人間であり、情けがあまりあり、涼しく爽やかな夜、前の階段でお酒を置いて臨む。琴を弾くのも止め、嘆きうらみ、月は席を照らす。この別離の後、いつ頃、私にお手紙を寄せるか。会稽で李白に会ったら、杜甫が今いかがお過ごしでしょうかと問うていたと伝えてください。)

『旧唐書』<sup>333</sup>には、孔巢父について、以下のような叙述がある。

孔巢父、冀州人、字弱翁。(中略)巢父早勤文史、少時與韓準、裴政、李白、張叔明、陶沔隱於徂徠山、時號「竹溪六逸」。

『旧唐書』によれば、孔巢父は冀州(今の河北省冀県)の人であり、早く詩文や史書などに勤め、また、若いときに、韓準、裴政、李白、張叔明、陶沔とともに山東の徂徠山に隠居したことがあり、「竹溪の六逸」と呼ばれたことがうかがえる。では、この時期の李白のことについても調べよう。

『旧唐書』<sup>334</sup>には、李白について、左の記述がある。

李白字太白、山東人。(中略)少與魯中諸生孔巢父、韓沔、裴政、張叔明、陶沔等隱於徂徠山、酣歌縱酒、時號「竹溪六逸」。天寶初、客遊會稽、與道士吳筠隱於剡中。

右の資料を見れば、李白は若いときに、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔とともに、徂徠山に隠居し、酒をほしのままに飲んで好きなだけ歌い、時に、「竹溪六逸」と呼ばれた。天寶の初(七四二)年会稽を客遊し、道士吳筠とともに剡中(今の浙江省の剡溪)に隠居した。『旧唐書』<sup>335</sup>の吳筠についての記述は以下の通りである。

吳筠、魯中之儒士也。少通經、善屬文、舉進士不第。(後略)  
天寶中、李林甫、楊國忠用事、綱紀日紊。(中略)既而中原大亂、

江淮多盜、乃東遊會稽。嘗於天台剡中往來、與詩人李白、孔巢父詩篇酬和、逍遙泉石、人多從之。

吳筠は魯中(今の山東省)の儒者である。少年時代から經書に通じ、作文に善くし、進士に挙げられたが落第した。天寶中、東へ會稽を遊す。嘗て天台と剡中との間を往來し、詩人李白、孔巢父とともに詩文を作りあつて報い答えている。泉石を逍遙し、人が多くこれに従う。

以上のような李白、吳筠についての記述から、孔巢父は李白、吳筠とともに隱逸生活を送ったことが分かる。

杜甫の詩の題から見ると、孔巢父が病氣を理由に辭職して歸り、江東(江蘇・浙江省)への歸遊の旅に出るのを杜甫が見送った時の事を、共通の友人であり、そのころ會稽(浙江省紹興市)に隱棲していた李白に与えた詩である。時は天寶五年(七四六)、杜甫三五歳の作品である。詩の内容から見れば、孔巢父は朝廷から離れ、李白が隱逸している會稽へ隱居する決意を持っていることがうかがえる。

この詩の内、ここに関係するのは、四句目「釣竿欲拂珊瑚樹」である。この詩句の意味は、「わが身は釣竿で海中に生える珊瑚の木を払おう」<sup>336</sup>ということである。

孔巢父は杜甫が引き留めるのを聴かず、東方にある海に漂っている煙霧の中に入っていこうとする。そのときに、釣り竿で海底<sup>337</sup>にある珊瑚樹をかすめて通ろうというのである。孔巢父はこの時また隱逸生活を過ごす決心したのだと思われる。「東海」は中国人にとっては仙人と結びつく海である。例えば、劉憲(?、七一一年頃)には、以下のような詩<sup>338</sup>がある。「蒼龍闕下天泉池。軒駕來遊簫管吹。緣堤夏篠繁不散。冒水新荷卷復披。帳殿疑從畫裏出。樓船直在鏡中移。自然東海神仙處。何用西崑轍迹疲。」その「神仙處」の東海で、珊瑚に触れようという釣徒の願いが

表明されている。東海は仙人たちが住んでいる所だと言われており、「有仙骨（仙骨を有する）」の孔巢父は仙人たちがいる場所に行こうとしていると杜甫には考えられたのだろう。珊瑚を拂うという行為は、神仙処としての東海での象徴的な行為である。

そこで、前述した五峰の四首絶句の結句にある「欲従東海拂珊瑚」（一九一一年）「直従東海拂珊瑚」（一九一二年）「經従東海拂珊瑚」（一九二一年）「直従東海拂珊瑚」（一九〇五年）と比べてみよう。杜甫の詩に「釣竿」が出ている。五峰の四首には「釣竿」という言葉が直接に使われていないが、転句に出ている「何日截将一竿去」「何日剪将一竿去」という転句と結句との間にある首尾呼応関係がはっきりと表されている。「釣竿」という単語は二字語として使われていないけれども、「釣竿」二文字を分けて使われ、明確なイメージとなっている。

## 七、「拂珊瑚」（二）

『杜詩叢刊』<sup>339</sup>にある杜甫の詩の諸注釈を参照すると、「拂珊瑚」については、次のように纏めることができる。

「拂珊瑚」について、直接的に解釈していないが、「釣竿欲拂珊瑚樹」の句について、「七字浩然以其將隱也」<sup>340</sup>と評しているものがある。その意味は孔巢父は俗事から解放された屈託のない心境になり、將に隱者になろうとしているということである。

また、「二似掉頭不肯住者。謝病東歸。將入海。獨把釣竿。海底珊瑚。不難拾取。但東海之處。」<sup>341</sup>という解釈では、海底の珊瑚を釣竿で拾い取るということになる。何のために取るかといえば、「珊瑚似瑠璃有五色青者可入藥爲上生海底漁人常以網掛得之」<sup>342</sup>という注では、仙薬とする珊瑚を漁師は網に引つ掛けて取るが、孔巢父は釣竿で取るということ

ことになるのだろう。

更に、趙次公は、「以其在海底故以拂言之也言巢父歸江東之後遂乃入海有此興也」<sup>343</sup>と、言う。その意味は孔巢父は江東に帰った後、海に入り、海底に生える珊瑚を拂うという楽しみを持つ、ということである。以上のような解釈から、孔巢父は東の方海に入つて煙霧に従い、海底の珊瑚を拂うという楽しみを持つと解釈されている。森槐南『杜詩講義 下巻』<sup>344</sup>に以下のような説明が書かれている。

最初の處は、所謂常人には其故を解し得られないと云ふ處から、突然と筆を著けます。當然の人情から申すと、一日も多く、此繁華なる都に、足を留めて置いて、功名利達の樂みを望むべきのであるが、獨り我孔巢父は頭を掉つて肯へて住らぬと云ふ有様である。而して何れに赴かれるかと云ふと、是より將さに東の地方を遍歴して、何處を宛てと云ふ處もなく、海に入つて、さうして煙霧の蒼茫たる間に、己れの一生を韜晦して、隠れやうと致されるのである。併しながら夫が爲めに一生、名なきに終るのではない、即ち平生、作つて居られる詩は、長く天地の間に留つて、千古不朽に垂る詩卷が、最早や出來て居ることであるから、假令、其人は煙霧の間に隠れて仕舞はれても、其名の没することはないのである。それであるから、之より都會を去つて、超然として身をば釣竿に託して、其釣竿を以て、彼の東海の内に、珊瑚樹を横に拂ふて進んで、遂には神仙の域に達せられる譯であるから、凡そ人間の中に、此位愉快なことはあるまいと思はれる。斯う申す意が、初めの四句にございますが、斗然として起つて來まして、煙霧の渺茫たる物が、目前に現れ出るやうな筆勢であります。

この槐南の解釈によれば、「拂珊瑚」は「神仙の域に達するに至るための一過程である」と考えられているようであるが、その根拠は明らかでない。要するに、「拂珊瑚」という行為の具体的意味は『草堂詩箋』にいうように、海底の珊瑚を取って仙薬にするという仙人的行為であるか、あるいは、趙次公の言うように、隠逸世界の楽しみ的一种と解釈されている。いずれにしても、「拂珊瑚」という行為は、隠逸や神仙の世界の行為と解釈されており、五峰はこのような解釈を知っていたのではないかと推測される。この詩句を自らの詩の中に用いることによって、隠逸や神仙の世界への五峰自らの憧憬を表現しているのである。

実は、杜甫のこの詩と明確な関連性を示す詩を五峰は書いている。『五峰遺稿』の編集順番から見れば、それは明治三四（一九〇一）年、五峰四三歳の作品である。

寄懷佐渡舊知再疊韻（懷を佐渡の舊知に寄す 再び疊韻す）

記取題襟慰客思

題襟を記取して客思を慰めよ

扁舟孤島阻風時

扁舟孤島に風に阻まれる時

參商忽隔三秋別

參商忽ち三秋を隔てて別れ

天地誰留一卷詩

天地誰か留めん一卷の詩

滄海無邊明月照

滄海無辺明月照らす

煙波有約白鷗知

煙波約有り白鷗知る

釣竿何日隨巢父

釣竿何れの日か巢父に随ひ

去拂珊瑚十丈枝

拂ひに去らん珊瑚十丈の枝

（小船が離れ島で風に阻まれる時、書き留めておいた詩を思い出し、旅愁を慰めるがよい。「參商」二星のように、忽ち三秋を隔てて別れ、

長く相見ぬことにならう。天地の間、君の他に誰に一卷の詩を残そうか。滄海は限りなく明月が照らしている。白鷗だけが煙波の誓いを知っている。いつか巢父に従って釣竿を携え、珊瑚の十丈の枝を払いに行こう。）

右の七言律詩の尾聯「釣竿何日隨巢父 去拂珊瑚十丈枝」という詩句から見ると、五峰は杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白（孔巢父が病と謝して帰り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す）」という詩を読んだことは確實だと推測できる。要するに、杜甫「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」と題する詩は五峰の詩の「拂珊瑚」という言葉の典拠となつていたのである。また、五峰のこの詩には「煙波」という単語が出て来っており、前述した「煙波釣徒」の張志和のことが連想される。張志和も孔巢父も五峰にとつては隠逸の人であり、これらの人物へと連想的につながっている五峰の竹の詩は、仙界あるいは隠逸への憧憬を表現していると考えられるのである。

当時のことについて、山田毅城が以下のような回想を語つてある。

随つて先生にも色彩ある半面を残さぬでもなかつたが今は夫に觸れぬとして少くとも十五六年前から余程趣が變つて来て、更に其後七八年以降は全く幽静を好む隱遁的氣風が先生を支配したらしく大患後は流石に氣丈な先生も一層書齋に閉じ籠つて、漢書の涉獵に没頭する所謂齋囚の閑生活を好んだ<sup>345</sup>。

「十五六年前から」は、五峰大正一二年六五歳で亡くなった時点からだと推測すれば、五峰四九歳以後のことになる。「更に其後七八年以降」は、五峰四九歳以後の七八年だとすると、五峰五六、七歳の時にあたる。

「竹」を題材とした詩はあたかもその「全く幽静を好む隱遁的氣風が先生を支配」した時期の前後の作に当たるとも考えられる。

## 第五節 五峰の詩風形成及び明治・大正漢詩壇における位置

け

本節では、まず、五峰の詩風形成に関することを探る。それとともに、五峰が明治・大正漢詩壇において占めていた位置を併せて考えたい。

### 一、五峰の詩風形成

田邊碧堂は五峰の詩について、「實に堂々の趣きを具へてこれを建築に例ふれば大伽藍の如き根強いがつしりしたものである」<sup>346</sup>と述べている。その詩風形成の要因について、以下のような言及が綴られている。

最もこれは獨り君の天分才學のしからしむるのみではない、一つは時世の關係といふことも決して閑却すべきはない。徳川三百年の鎖國政策は詩人をして國家もしくは血性ある文字に觸れしめなかつた。觸るれば恐ろしい刑罰が加へられた。不思議に山陽は異例の生活を續け得られたがこれがために焰々たる詩人は風雲月露の文字のみを喜ぶことを餘儀なくされて胸中の大議論も詩中に収めることが出来なかつた。此因習がたはつて明治になつても久しい間諸大家いづれもこの意味の花鳥風月を吟詠して、甚だしきは單に美辭麗句を並べる活版職工に過ぎぬものが多かつた。ところが追ひくと言論も解放されおもふ存分に自己の感懷を賦し得るやうになつたにもかゝらず詩人の大半はなほ迷夢から覺めないうちに、わが五峰君に先覺

の明があつてこゝにはじあて唐宋元明諸大家のなし得たと同日に自己の議論抱負をもつて意義ある作詩を試みたことは明治時代匹儔殆どまれなりと稱してよい。

(中略) 五峰君の詩が前代の詩人に比し驚くべく卓越してゐるといふことは、決して君自身の偉大であつたためのみだといはれぬがよくこの時世の變に應じて所信に邁往した君の着眼と見識とは甚だ高しといはねばならぬ。<sup>347</sup>

五峰の詩作は明治時代の政治的言論が可能になつた時代の詩風を呈しているとして述べている。その上、その詩風形成の要因として、時代の必然性と緊密的に繋がっているが、やはり、五峰自身の時世に対する鋭い着眼力と高い見識と無関係ではないと強調している。そのため、

五峰君の如き國土的の眞骨頭ある詩人をその門下に出した春濤翁も定めて地下にこれを喜ばれることであらうし、同門後進の自分もまた深くこれを光榮とする<sup>348</sup>

と、田邊から師森春濤も同門としての自身も五峰の「國土的の眞骨頭ある」詩人・詩風が見られることを誇りとしていると指摘している。明治漢詩壇における五峰の存在感が強調されている。

村上哲見は、中国文人における人間類型を「文人」・「士大夫」・「讀書人」といった三分類に認識している。「文人」はひたすらに「雅」をめざす精神を持つこと、「士大夫」は「治国平天下」の使命感を持つこと、「讀書人」は古典の素養と作詩文の能力を持つこととされる。ただし、この三類型は互いに排除するものではなく、お互いにそれぞれの要素を分か

ち持っている<sup>349</sup>。五峰の漢詩人像を上記の村上の中国文人の人間類型にしたがって考えてみたい。

本章で取り上げた五峰の詩作の中、特に「廢詩」期間中に作詩した七言律詩「出門」（第二節）にある「愁予」、「五峰遺稿」にある唯一「廢詩」という言語を取り入れた詩「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」（第一節）にある「憂國」・「愁來」、五峰の「憂」・「愁」を含む詩篇リスト（第二節）などに、明治三五年（四四歳）八月衆議院議員当選以後、五峰自身思うとおりの「経世済民」・「治国平天下」の抱負を実現していないことから湧き上がってきた「憂時」・「憂世」・「憂國」・「憂社稷」の情の表現が見られる。このことは、四四歳で衆議院議員当選になってからの漢詩人・五峰は、上記の村上の中国文人三類型のうちで「士大夫」型に最も近い存在だということを示している。

本章第二節で取り上げた代表的な贈答詩の一首「雞血石歌贈市島春城（「雞血石」の歌を市島春城に贈る）」は、「印癖」に関する七言古詩であるため、漢詩人・五峰の「文人」趣味が垣間見られる一首だといえるし、「士大夫」的漢詩人の営みの一つだと考えられる。その他、「時事」に関する戦場を詠う詩作なども、「士大夫」型人間の営為の一種の試みだと思われる。「讀史」と題する二三首の五言古詩という大作の中の一首は、忠君愛國の精神を持つ歴史人物（特に楠木正成）に対する強い関心・憧れを表していることが、これは五峰の「士大夫」型の詩風を形成した根本的な要因の一つだと思われる。「竹」を題材とした七言絶句は隱逸の傾向が見られるが、高適の「乍可狂歌草澤中（乍 草澤の中に狂歌す可し）寧堪作吏風塵下（寧んぞ 風塵の下に 吏と作るに堪えん）」と同じような矛盾している苦悩の中で、政治家と漢詩人とを調和させようとする傾向が見られる。

## 二、明治・大正漢詩壇における位置付け

まず、『五峰遺稿』について、どのように位置づけるべきだろうか。再び同門田邊碧堂の言葉を借りたい。

五峰君本人自身も生前遺言されてその詩稿の拜見漏れの分をことごとく自分等兩人（筆者注・田邊碧堂と国分青厓のこと）に見てくれといふことで、その遺志に副ふべく館森袖海君の手に蒐集整理された上に、兩人がさらにこれに眼を通して完璧を期した次第であるが、この集も既に世に出た。恐らく明治時代匹儔なき好詩篇としてつたはるであらう<sup>350</sup>。

というふうに、『五峰遺稿』という漢詩文集を高く評価している。続いて、明治以後、漢詩壇の漢詩人としての五峰の存在はどういうふうに見るべきだろうか。山田毅城は次のように語っている。

少年にして夙に錚々の名を博し爾來益々全國詩人間に重きを爲したのみならず、槐南、寧齋諸家の歿後は、凋落の秋を飾る現代漢詩壇の明星として試みに三四の巨頭を擧ぐる場合<sup>ママ</sup>、先生は優に其一人に數へられて居たのである<sup>351</sup>

この証言の証拠としては、大正一一（一九二二）年一月から国分青厓と田邊碧堂らとともに、五峰が『大正詩文』の顧問であることを例としてあげる。

並びに、田邊碧堂は大正一〇（一九二一）年中国へ渡る前に、友人たちから贈られた送別詩を『壮行集』と五峰から名づけられ、まとめた詩集を中国まで持っていた。この詩集の中の五峰の詩については、以下のようなことを語られている。

（前略）北京で肅親王の儒講で當代の蹟學<sup>マ</sup>たる陳寶琛<sup>352</sup>に會つた時この「壮行集」を示して批評を乞ふたが陳先生は五峰君の詩を一讀して之を激賞し「これは尋常詩人の詩ではないその風格の雄渾なる稀に見る所である」と言はれた<sup>353</sup>（後略）

上記の陳寶琛（一八四八〜一九三五）は一九一一年、清朝の最後の皇帝である溥儀の帝師となる人物である。五峰の詩文は中国の著名な学者である陳氏からも上記のように賞賛されている。五峰の詩風の雄渾さが稀な風格を呈しているのを認められている。

## 第六節 まとめ

本章では、『五峰遺稿』に収録している詩や『五峰遺稿』に未収録の『新詩綜』の詩など、全二五首（七言律詩一首、七言絶句一二首、七言古詩一首、五言古詩一首）の詩作を紐解いて、森春濤没後、五峰の漢詩人としての姿を探ると同時に、その詩風を明らかにした。

第一節では、五峰の「廢詩」について、まず、春濤の子息槐南との関わりを述べ上、『槐南集』に収録している五峰の「廢詩」に関する七言律詩一首「阪口五峰来京招同古梅錦山石埭青厓諸人会飲柳橋酒樓用其唱和詩韻爲贈（阪口五峰来京す。古梅（巖谷修）、錦山（矢土勝之）、石埭（永

坂周）、青厓（国分青厓）諸人を招同し、柳橋酒樓にて会飲し、其の唱和の詩の韻を用ひ、贈と爲す」を取上げた。槐南の詩によれば、五峰は當時の明治漢詩壇の「才人」として存在していることがうかがえる一方、槐南は五峰の「廢詩」に対する遺憾千万の意を表している。

次に、五峰の「廢詩」を軸にし、その直前の七言絶句一首「有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶（人有り、筆頭菜の圖を以つて詩を索む。戯れに一絶を題す）」と、その「廢詩」終了直後の七言律詩一首「次蝶夢太守對月有感韵賦呈（蝶夢太守「對月感有り」の韵に次し、賦して呈す）」を取上げ、詩風に変化があることを解明した。それは「廢詩」直前の自由自在に力を駆使している詩風から、「廢詩」終了直後になると、あまり自信がなさそうな、自分の馴染んでいる袁枚の清詩からの引用の多い詩作への変化である。このようにして模索しながら、再び詩壇に登場した。五峰の「廢詩」期間は、五峰三一歳の明治二二年二月、『新詩府』に詩が掲載された後から、五峰三九歳の明治三〇年、勝間田知事が赴任先新潟で「鷺会」を結社するまでとなることを明らかにした。

続いて、「廢詩」終了二年後に森槐南が主宰している『新詩綜』に掲載された「狹門雜詩」と題する七言律詩三首を読み解き、本詩三首の詩風は五峰の初期に呈している雄渾たるものに戻ったことを明らかにした。

それから、『五峰遺稿』にある「廢詩」という言語を含む唯一の詩「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」（七言律詩一首）を検討し、その心境を明らかにした。明治三四年・四三歳に創作した本詩は、ただ風月を吟弄するだけの作詩に飽き足らなく思う傾向が現れている一方、国情を述べながら、詩人の国家の安危を憂えて何もできない身でいる憂国の気持ちを表している士大夫的詩風を呈している。それは「廢詩」期間・およそ九年の間に五峰の深く考えた結果だとも考えられる。また、本詩は後述する三四歳の「出門」という七

言律詩にある「愁予」から発展してきた五峰の「憂鬱」が現れた一首だと言える。

最後に、明治三六年八月五日の『新潟新聞』に掲載されている五峰の「詩風一變の徴」という記事を取上げ、中央漢詩壇の詩風は清詩から宋詩に移り変わるだろうと期待している、五峰の明治三〇年代の漢詩壇に対する考え方やその姿勢を述べた。記事に引用している森槐南の七言古詩と七言律詩それぞれ一首について説明した上、五峰の七言絶句四首を分析し、五峰は森槐南のように北宋詩人黃庭堅に強い関心を示しているが、絶句四首中の「新正志感(新正 感を志し)」の一首目は五峰にとって、南宋詩人楊万里の詩集を学んだ痕跡の一つだと明らかにした。本論文の第二章の「第二節 森春濤来瀉時期の詩」で述べたとおり、五峰は二〇代既に北宋の大文豪蘇軾や南宋隨一の詩人陸游の詩作との接点があったと考えられるが、およそ三十年後のこの五〇歳の詩でも、宋詩との関わりが明示されている。また、取り上げた絶句四首中の二首は盛唐詩人高適と深く関わっていることを明らかにした。その内の「新正志感」の二首目は、五峰自身の、政治家と漢詩人とを調和させようとしている内容の一首だと考えられる。もう一首・「人日千秋庵次松雨韻(人日、千秋庵にて松雨の韻に次す)」と題する七言絶句は、『唐詩選』にある高適の詩作から大量の詩語を使用しており、五峰の「温故知新」・初期作詩時期への回帰が見られることを示した。取り上げた最後の七言絶句は「自笑(自ら笑ふ)」と題し、上記三首と同じく天命を知る齢に詠じた作である。本詩は白居易のような平易な詩風を目指している傾向が見られる。また、宋の詩人の楊誠齋に注目している理由もここにある。誠齋体という詩風も平易な作風だと言われるからである。

第二節では、まず、『五峰遺稿』にある五峰の「憂」・「愁」心理状態を探った。その「憂」「愁」を含む詩句の詩数は三三三にのぼる。その中では、

五峰「憂」「愁」表現の分水嶺として三四歳に創作した「出門」と題する七言律詩一首を取り上げ、詩中の「愁予」という詩語に注目した。それは自分自身の前途に対する憂愁などを呈しつつ、憂国の士ではない身になってしまふ非常に遺憾な気持ちと苦しみも表している。実は、本詩は本章第一節で述べた「廢詩」期間中の作にあたる。「廢詩」に対する決心をしたとしても、自身の悩みがなかなか解消できなければ、漢詩に表現することを求めたと考えられる。本詩は『五峰遺稿』にある唯一同じタイトル「出門」の詩二首の一首であるため、その同じタイトルのもう一首の「出門」と題する七言絶句を再掲し(本論文の第一章で既に取り上げた)、作風の変化を明らかにした。本詩は少年五峰の「出門」と比べると、若年客気のような雄心勃勃の勢いが見えず、今までの「愁い」と根本的に違っていることがうかがえる。本論文の序章で触れた『五峰遺稿』巻頭にある館森鴻の「序」文では五峰の詩は「沈鬱」の境地にまだ達していないと森春濤から注意されていることは、少なくとも、森春濤の亡くなる前、つまり、明治二二年までの五峰の詩風に関する発言になると考えられる。「廢詩」期間中の本詩は詩中の「愁予」を通し、五峰の「沈鬱」の兆しがある。その後、「憂」と「愁」をともに使用している前述した「秋夜被酒偶然有作三疊韻(秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す)」と題する七言律詩一首を再掲し、五峰の「憂」・「愁」心理状態の使い分けを解明した。本詩では、その「憂國」と「愁來」が同じ詩に現れる。五峰の「憂國」の心境を表す一方、その「出門」詩にある「愁予」・単なる自分の抱負をまだ実現していない現実に対する「愁」という対象から、国の情勢に対する本詩にある「愁來」までの対象の深化もうかがえる。その上、それまでの他人・物に対する感傷的な「愁」であったものが、自身の治国平天下・経世済民という抱負を実現すべき年になったにもかかわらず、まだ、そのようになっていない「野人」のままの焦り



と困惑を表現する「愁」に変化してきたと考えられる。四四歳の八月に衆議院議員に当選する以前、「愁」を含む表現が集中的に使われている傾向が見られる。また、「野人」という詩語は当選後の詩には見かけなくなる。「愁」に代わって、「憂」を含む詩語が四四歳当選以後の詩に頻繁に使用されるようになる。その「憂」の対象はすべて国、社会、時勢、社稷を対象にしている。すなわち、五峰における「憂」は、憂国の士の情を表している。

更に、五峰の中・晩年に一番多く見られる贈答詩の中の代表的な一首「雞血石歌贈市島春城（「雞血石」の歌を市島春城に贈る）」と題する七言古詩を取り上げ、五峰の詩風を追究した。本詩は『五峰遺稿』にある、五峰と親友・市島春城との交友関係を表す唯一の作であり、また、作詩背景を通して五峰の「印癖」がうかがえるものでもある。その詩風は今までの七言古詩の雄渾と違い、市島春城の印癖を詠い始め、印に対する愛着は米芾（一〇五一―一一〇七、北宋の書画家）と比肩できるし、その博識は趙孟頫（一二五四―一三二二、号・松雪。元代著名画家・楷書四大家の一人）に匹敵できると、春城の生涯を簡潔にまとめた上、本題の雞血石に触れ、巧みに李賀（七九一―八一七、字は長吉、中唐の詩人）の作詩に対する苦心することと春城の嗜血のことと雞血石と関連付け、最後に、春城の長寿を願ったものである。市島春城からの特別な注文に対し、あらゆる技巧を凝らし答えている。五峰の作詩に対する円熟の境がうかがえる。

次に、『五峰遺稿』にある唯一の四首連続し、同じ韻を踏む疊韻詩を取り上げ、五峰の作詩心境を明らかにした。この四首連続の疊韻詩は、すべて五峰四三歳の作である。その一首目「巖谷一六至自東京邀飲南邊樓用前年唱和韻（巖谷一六、東京より至り、南邊樓に邀へ飲む 前年の唱和の韻を用ゆ）」から三首目「寄懷佐渡舊知再疊韻（懷を佐渡の舊知に寄す 再

び疊韻す）」までは、友人・巖谷に対する贈答詩である。詩風はほぼ同じパターンで、詩の前半は友人に関する様子を詠い、後の二句は詩人自身のことを詠じている。特に、三首目の場合は、五峰の隱逸傾向が見られる。凌雲の志を実現するための一歩さえも踏み出していない「愁」という現実から、脱俗しようという心境を表している。四首目「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」は、前三首と全く同じ韻脚を踏んでいるにもかかわらず、詩の内容も詩境も前三首と違い、前述したように不惑になった詩人自身の「憂愁」を切実に表しているし、その「士大夫」の人間型を表す一首にもなる。その上、この四首連続の次韻・疊韻詩を通して、五峰自身は宋詩の特徴のある詩形を取りつつ、唐詩の詩語や詩句などを融合し、前述した『新潟新聞』の「詩風一變の徴」という中央漢詩壇の詩風の変遷に関する記事を發表する前に、既に自分の詩作に先取りするという、先見の明があったと考えられる。

第三節では、まず、五峰と同門詩人田邊碧堂との関わりを探り、田邊碧堂は五峰にとつて、極めて重要な人物の一人だと明らかにした。

次に、「国民詩人」と言われる国分青厓との交友を探ると同時に、五峰の時事に関する七言絶句二首を取上げ、衆議院議員になって以来、五峰生涯に唯一の海外視察に関する詩にも当たるが、二首とも戦場を詠う作にもかかわらず、平易な作風を呈していることが特徴的である。それにより、五峰詩風の形成において、国分青厓からの影響が極めて薄いことがうかがえる。

その後、「読史」という二三首連作の五言古詩の一首を取り上げ、『新潟才人詩』に同じ歴史人物を詠じている丸岡詩と比べた結果、丸岡詩は明確に詠じられる歴史人物に触れていないことに対し、五峰詩の平易さと雄渾な氣勢がうかがえるし、その得意な首尾一貫の論述方法も呈して

いる。およそ四〇年間五峰は相変わらず忠君愛国の士・楠木正成に注目している。その上、楠木正成に対する歴史観が変わっていないことがうかがえる。五峰自身の歴史人物に対する愛好の傾向もうかがえる。それは自身と同じタイプである「士大夫」のような君主に忠義をつくす、君主のために身を惜しまない精神の持ち主への憧れだと考えられる。更に、五峰詩自体の時代性も強く表している。

第四節では、五峰の竹についての、類似している七言絶句四首とその関連している七言律詩一首に注目し、その詩句の典拠を分析した。その結果として、実生活では政治家として多忙であった阪口五峰は、漢詩人としては、その竹の詩において、少しずつ表現を変えながらも、仙界あるいは隠逸生活に対する憧憬を、約二〇年間にわたって一貫して表現し続けたことが明らかとなった。「士大夫」としての営為を行いつつ、様々な現実の厳しさに直面し、時に仙人のような隠逸生活に逃れることを願うという矛盾の中で、融合的に生きている「士大夫」像が見える。

第五節では、まず、五峰の詩風形成について、同門田邊碧堂の言及に触れた上で、村上哲見の「文人」、「士大夫」、「読書人」といった三パターンの人間類型に基づき、五峰はその「士大夫」としての詩人像を呈していることを述べた。更に、明治・大正漢詩壇における五峰の位置付けについて、再度、同門田邊碧堂の述懐と山田穀城の証言を通して、述べた。

## 終章 まとめと今後の課題

以上三章に亘って、阪口五峰の漢詩について論じてきた。

「第一章 五峰と漢学・漢詩及び初期の詩」において、五峰が大野耻堂の私塾絆己楼で詩に関して学んだ内容について、『北越詩話』にある五峰の著述によれば、それは「武元登菴の古詩韻範」という書籍に基づいていると推知した。その『古詩韻範』は武元登菴が著した古詩の韻法に関する書籍であり、中には、杜甫（七一二〜七七〇）の「飲中八仙歌」、「丹青引贈曹將軍霸」、「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」や曹操（一五五〜二二〇）の「短歌行」や李白（七〇一〜七六二）の「山中答人」など、五峰の後年の詩作に見られる典故がある。また、森春濤を知る以前の五峰の詩風、つまり、その初期にいかなる詩を書いていたのかを追究した。

『五峰遺稿』一冊目から一六冊目までの全一七首（その中に、同じ詩題の詩が二首ある）の詩作を紐解いて、明治七年から明治一〇年までの五峰の初期詩風をまとめると、漢詩形では、五言絶句以外の全部の詩形を備えている。数の多い順に見ると、以下の通りである。七言絶句（九首）、五言律詩（二首）、七言律詩（四首）、七言古詩（二首）、五言古詩（一首）。詩におけるジャンルも多様である。この一七首の詩作はすべて正しい韻律で作られたことが分かった。これは絆己楼での『古詩韻範』などに基づいた厳しい指導の賜だと考えられる。歴史に関する題材の詩作は雄渾かつ優雅な詩風を呈している。政治に関する詩作は議論を積み重ねた剛健な詩風を表している。それだけではなく、江戸後期の詩人柏木如亭の詩にも関心を持っていることがうかがえる。五峰にとつての最

初の五言古詩は、動態的な場面に注目しつつ描くという詩風である。五峰の最初の「竹枝」詩（詩題では「竹枝」といった詩形用語を用いる唯一の詩作である）の詩風は、語彙の面から見れば、江戸後期の詩人柏木如亭詩「新瀉」と晩唐詩人杜牧詩を取り入れたものであると明らかにした。そのほか、自然に対する繊細な感覚を現す詩風の詩作も見られる。

更に曹操の楽府「短歌行」を踏まえつつ、五峰の当時の国情に対する高い関心がうかがえる詩作もある。森春濤から「五峰天分甚高特豪健氣尤不易及（五峰天分甚だ高し、特に豪健の氣を帯ぶるは尤も及び易からず）」と言われた五峰の天授の氣質もうかがえることを明らかにした。

「第二章 森春濤・茉莉吟社との関わり及びその門下としての五峰の詩」では、『五峰遺稿』に収録している詩作や『五峰遺稿』に未収録の『新文詩』の詩作など、全三四首（七言律詩一七首、七言絶句一二首、七言古詩一首、五言絶句二首、五言古詩二首）の詩作を紐解いて、五峰の森春濤門下時代の詩風、或は五峰二〇代の詩風を明らかにした。

第一節では、まず、『新文詩』に投稿する前の七言律詩一首を取り上げたが、それは当時、新瀉にあった風月吟社の重鎮とも言える詩友・丸岡南陔への送別詩であり、地元新瀉と丸岡の本居地佐渡島との通路、水路や海上の風景に着眼した、筆致流麗な詩風であると言える。次に、五峰の『新文詩』デビューの七言絶句一首について検討したが、その詩風は形式から見れば、竹枝であり、その上、劉禹錫の竹枝詞の語彙を取り入れ、白居易の水郷描写も参照しているということを明らかにした。

第二節では、『五峰遺稿』にある、森春濤が明治一四年に来瀉した時の五峰の七言律詩二首と七言絶句三首、全五首の詩作を選択し、『新文詩』にある七言律詩一首を加え、五峰の人生初めての詩の恩師に言及している詩作を通して、その詩風について以下のように論じた。

最初にある「春濤先生見過。招同社友、小集書樓。山際柳堤有詩、乃

次其韻。時辛巳立秋前一夕也。(春濤先生過ぎらる。社友を招同し、書樓に小集す。山際柳堤<sup>3,4</sup>に詩有り、乃ち其の韻に次す。時に、辛巳の立秋の前の一夕なり。)と題する、森春濤への歓迎の意を表す七言律詩は、新潟の風土を着実に描いている上、森春濤にいつまでも一緒に居てもらいたいという五峰の心境を表している。

次にある「松風亭酒間戲賦呈春濤先生(松風亭酒の間に戯れに賦し、春濤先生に呈す)」と題する七言絶句三首連作の一首目では、森春濤の姿を北宋の大文豪・蘇軾になぞらえ、森春濤の知名度を南宋の大文豪・陸游に例え、師森春濤が外観も学識も立派なことを表している。この時点で既に、五峰が宋代の詩人や文献などに触れていることが分かった。

その二首目では、森春濤の自作「詩魔自詠並引」を踏まえ、春濤を「白香山亦老詩魔(白香山 亦た 老いたる詩魔)」とあるように白居易に例え、春濤の詩才の優れていることを表現している。

その三首目は、新潟に滞在している森春濤の傍について、森春濤から「張郎膏蜜卮(張郎の膏蜜の卮)」のような詩文についての指導を受けたが、結局、「只恨肝腸難改易(ただ肝腸の改易し難きを恨むのみ)」「背人偷飲杜陵詩(人に背きて 偷飲す 杜陵の詩を)」となり、杜甫詩をひそかに読んでいたことを表している。注目すべき点は本詩の「張郎」である。それは一見すると、『雲仙雜記』にある張籍の逸話のようであるが、その裏で明治漢詩壇を風靡していた清詩の一人の詩人・張船山のことを指している。これは、森春濤から張船山などの清人の詩を勧められたが、五峰は自身の性格や詩風に合わない婉曲的に拒否しているものと考えられる。

最後にある森春濤を送別する七言律詩では、森春濤の今回の来遊をまとめた上で、森春濤「詩魔自詠並引」や白居易「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十(拙詩を編集して、一十五巻と成し、因つて巻末

に題して、戯れに元九(元稹)・李二十(李紳)に贈る)」などを踏まえ、森春濤の傑出した風流な流儀を褒め称える心境を描きつつ、東京に帰る道中の錦秋の風景まで想像させている。

『新文詩』第七五集(明治一四年九月)にある「讀春濤詩鈔題其後(春濤詩鈔)を讀み、其の後に題す)」という七言律詩(『五峰遺稿』に未収録の詩作)においては、看取した森春濤の詩作における特色を忠実に表現していることを述べた。つまり、森春濤の詩作を的確に言葉で描写しており、清・袁枚の性靈詩説で重んじている「眞性情」のような詩風を呈している。

第三節では、『五峰遺稿』にある七言絶句二首、七言律詩四首、『新文詩』にある七言律詩一首全七首を選択し、南義二郎、山田毅城、田邊碧堂から指摘されている五峰の作風について、森春濤の影響を受ける前と後とで違いが表れているか、という点について考察した。結果として、五峰は竹枝詩風な詩は三首しか書いていないし、艶体詩のような詩作は殆ど書いておらず、清・王士禎の神韻派のような詩風であることを明らかにした。

第四節では、『五峰遺稿』にある七言律詩四首、七言絶句二首、五言絶句二首、五言古詩一首計九首の詩作を選択し、五峰と清詩とのかかわりを考察した。五峰が清詩を知るに至ったのは、その知人の証言、および、『五峰遺稿』の詩の配置から考えて、森春濤の弟子・山中耕雲や森春濤本人との接触を通してであったと考えられる。そこから張船山の詩を知るようになり、その影響を受けたと考えられる。考察した結果では、張船山の五峰への影響は限定的であり、内容や用語に共通する面はあるが、詩風・詩境においては、必ずしも同一ではないと判明した。五峰詩「借病吟」と袁枚詩「借病」を通して、五峰は二〇代から六〇代の晩年まで、袁枚の独創的な「借病」作詩観念に深い関心を持ち続け、受容したこと

を述べた。結果として、二六歳に詠じた「借忙吟」の詩作や、『北越詩話』の著作に影響が及んでいることがうかがえる。「性靈」説を重んじる「性情」と自身の議論の強い作風とが結合し、「借忙吟」詩は、袁枚に対する議論の上で、五峰の「性情」を露出する詩風を形成していると考えられる。袁枚の性靈説の「詩難其真也、有性情而後真、否則敷衍成文矣。」という詩論は、五峰詩「治園」に「作詩尚真趣 治園何不然」とあるような考えと通じていると思われる。清人・張船山と袁枚といった「性靈」詩派の詩人の作風を、五峰はそのまま、そのすべてを受け入れるわけではなく、自分と共通趣向がある清の詩人に注目し、自分なりの取捨選択を行い、その結果、五峰なりの詩風として結晶したということを示した。

第五節では、『五峰餘影』にある七言絶句一首、五峰の肉筆の七言律詩一首、『五峰遺稿』にある七言絶句三首、七言律詩三首、七言古詩一首、五言古詩一首計一〇首の詩作を選択し、五峰の「禪」に関する詩について、典拠などを通じて、五峰の漢詩と禅仏教の関係を分析した。その結果として、五峰が杜甫詩「飲中八仙歌」の「逃禪」に注目した理由も、維摩の「病禪」を語った理由も、嚴羽『滄浪詩話』「禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟」に見られるような、禪の「妙悟」と詩の「妙悟」が一致する境地を求めていたためであることが判明した。「半通禪」、「已通禪」とは、同じ『滄浪詩話』「詩辨」中の「一知半解之悟」や「透徹之悟」と通ずる境地を表しており、その上、詩の道だけではなく、大沼枕山や恩師である森春濤などの「茶煙鬢絲の感」のように、五峰自身の人生の悟りまで表した表現だと考えられる。五峰の「禪」に関する詩風は春濤の艷体詩で表現している「美人禪」といった表現の「禪」と異なっていたことを明らかにした。

「第三章 森春濤没後の五峰及びその詩」では、『五峰遺稿』に収録し

ている詩や『五峰遺稿』に未収録の『新詩綜』の詩など、全二五首（七言律詩一首、七言絶句一二首、七言古詩一首、五言古詩一首）の詩作を紐解いて、森春濤没後、五峰の漢詩人としての姿を探ると同時に、その詩風を明らかにした。

第一節では、五峰の「廢詩」について、まず、春濤の子息槐南との関わりを述べ上、『槐南集』に収録している五峰の「廢詩」に関する七言律詩一首「阪口五峰来京招同古梅錦山石埭青厓諸人会飲柳橋酒樓用其唱和詩韻爲贈（阪口五峰来京す。古梅（巖谷修）、錦山（矢土勝之）、石埭（永坂周）、青厓（国分青厓）諸人を招同し、柳橋酒樓にて会飲し、其の唱和の詩の韻を用ひ、贈と爲す）」を取上げた。槐南の詩作によれば、五峰は当時の明治漢詩壇の「才人」として存在していることがうかがえる一方、槐南から五峰の「廢詩」に対する遺憾千万の意を表している。

次に、五峰の「廢詩」を軸にし、その直前の七言絶句一首「有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶（人有り、筆頭菜の圖を以て詩を索む。戯れに一絶を題す）」と、その「廢詩」終了直後の七言律詩一首「次蝶夢太守對月有感韻賦呈（蝶夢太守「對月感有り」の韻に次し、賦して呈す）」を取上げ、詩風に変化があることを解明した。それは「廢詩」直前の自由自在に力を駆使している詩風から、「廢詩」終了直後になると、あまり自信がなさそうな、自分の馴染んでいる袁枚の清詩からの引用の多い詩作への変化である。このようにして模索しながら、再び詩壇に登場した。

続いて、「廢詩」終了二年後、森槐南が主宰している『新詩綜』に掲載された「狹門雜詩」と題する七言律詩三首を読み解き、本詩三首の詩風は五峰の初期に呈している雄渾たるものに戻ったことを明らかにした。

それから、『五峰遺稿』にある「廢詩」という言語を含む唯一の詩「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」（七言律詩一首）を検討し、その心境を明らかにした。明治三四年・四

三歳に創作した本詩は、ただ風月を吟弄するだけの作詩に飽き足らなく思う傾向が現れている一方、国情を述べながら、詩人の国家の安危を憂えて何もできない身でいる憂国の気持ちを表している士大夫のような詩風を呈している。それは「廢詩」期間・およそ九年の間に五峰の深く考えた結果だとも考えられる。また、本詩は後述する三四歳の「出門」という七言律詩にある「愁予」から、発展してきた五峰の「憂鬱」が現れた一首だと言える。

最後に、明治三六年八月五日の『新鴻新聞』に掲載している五峰の「詩風一變の徴」という記事を取上げ、中央漢詩壇の詩風は清詩から宋詩に移り変わるだろうと期待している、五峰の明治三〇年代の漢詩壇に対する考え方やその姿勢を述べた。記事に引用している森槐南の七言古詩と七言律詩それぞれ一首について説明した上、五峰の七言絶句四首を分析し、五峰は森槐南のように北宋詩人黄庭堅に強い関心を示していないが、絶句四首中の「新正志感（新正 感を志し）」の一首目は五峰にとつて、南宋詩人楊万里の詩集を学んだ痕跡の一つだと明らかにした。本論文の第二章の「第二節 森春濤来鴻時期の詩」で述べたとおり、五峰は二〇代すでに北宋の大文豪蘇軾や南宋隨一の詩人陸游の詩作との接点があったと考えられるが、およそ三十年後のこの五〇歳の詩でも、宋詩との関わりが明示されている。また、取り上げた絶句四首中の二首は盛唐詩人高適と深く関わっていることを明らかにした。その内の「新正志感」の二首目は、五峰自身の、政治家と漢詩人とを調和させようとしている内容の一首だと考えられる。もう一首「人日千秋庵次松雨韻（人日、千秋庵にて松雨の韻に次す）」と題する七言絶句は、『唐詩選』にある高適の詩作から大量の詩語を使用しており、五峰の初期作詩時期への回帰が見られることを示した。取り上げた最後の七言絶句は「自笑（自ら笑ふ）」と題し、上記三首と同じく天命を知る齢に詠じた作である。本詩は白居易

易のような平易な詩風を目指している傾向が見られる。また、宋の詩人の楊誠齋に注目している理由もここにある。誠齋体という詩風も平易な作風だと言われるからである。

第二節では、まず、『五峰遺稿』にある五峰の「憂」・「愁」心理状態を探った。その「憂」「愁」を含む詩句の詩数は三三にのぼる。その中では、五峰「憂」「愁」表現の分水嶺として三四歳に創作した「出門」と題する七言律詩一首を取り上げ、詩中の「愁予」という詩語に注目した。それは自分自身の前途に対する憂愁などを呈しつつ、憂国の士ではない身になつてしまう非常に遺憾な気持ちと苦しみも表している。実は、本詩は本章第一節では述べた「廢詩」期間中の作にあたる。「廢詩」に対する決心をしたとしても、自身の悩みがなかなか解消できなければ、漢詩に表現することを求めたと考えられる。本詩は『五峰遺稿』にある唯一同じタイトルの詩二首の一首であるため、その同じタイトルのもう一首の「出門」と題する七言絶句を再掲し（本論文の第一章で既に取り上げた）、作風の変化を明らかにした。本詩は少年五峰の「出門」と比べると、若年客気のような雄心勃勃の勢いが見えず、今までの「愁い」と根本的に違っていることがうかがえる。本論文の序章で触れた『五峰遺稿』巻頭にある館森鴻の「序」文では言及している五峰の詩は「沈鬱」の境地にまだ達していないと森春濤から注意されていることは、少なくとも、森春濤の亡くなる前、つまり、明治二二年までの五峰の詩風に関する発言になると考えられる。「廢詩」期間中の本詩は詩中の「愁予」を通し、五峰の「沈鬱」の兆しとしてうかがえる。若書きの段階から詩人らしい詩人まで成長してきた証になる一首でもある。その後、「憂」と「愁」をともに使用している前述した「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」と題する七言律詩一首を再掲し、五峰の「憂」・「愁」心理状態の使い分けを解明した。本詩では、その「憂國」

と「愁來」を同じ詩に現れるのも希有である。五峰の「憂國」の心境を表す一方、その「出門」詩にある「愁予」・単なる自分の抱負をまだ実現していない現実に対する「愁」という対象から、国の情勢に対する本詩にある「愁來」までの対象の深化もうかがえる。その上、それまでの他人・物に対する感傷的な「愁」であったものが、自身の治国平天下・経世済民という抱負を実現すべき年になったにもかかわらず、まだ、そのようなになっていない「野人」のままの焦りと困惑を表現する「愁」に変化してきたと考えられる。四四歳の八月に衆議院議員に当選する以前、「愁」を含む表現が集中的に使われている傾向が見られる。また、「野人」という詩語は当選後の詩には見かけなくなる。「愁」に代わって、「憂」を含む詩語が四四歳当選以後の詩に頻繁に使用されるようになる。その「憂」の対象はすべて国、社会、時勢、社稷を対象にしている。すなわち、五峰における「憂」は、憂国の士の情を表している。

それから、五峰の中・晩年に一番多く見られる贈答詩の中の代表的な一首「雞血石歌贈市島春城（「雞血石」の歌を市島春城に贈る）」と題する七言古詩を取り上げ、五峰の詩風を追究してみた。本詩は『五峰遺稿』にある、五峰と親友・市島春城との交友関係を表す唯一の作であり、また、作詩背景を通して五峰の「印癖」がうかがえるものでもある。その詩風は今までの七言古詩の雄渾と違い、市島春城の印癖を詠い始め、印に対する愛着は米芾（一〇五一〜一一〇七、北宋の書画家）と比肩できるとし、その博識は趙孟頫（一二五四〜一三二二、号・松雪。元代著名画家・楷書四大家の一人）に匹敵できると、春城の生涯を簡潔にまとめた上、本題の雞血石に触れ、巧みに李賀（七九一〜八一七、字は長吉、中唐の詩人）の作詩に対する苦心することと春城の咯血のことと雞血石と関連付け、最後に、春城の長寿を雞血石のように末永く健康であることを歌い終えたものである。市島春城からの特別な注文にすべて技巧を凝ら

し満たしている。五峰の作詩に対する円熟の域に達したことがうかがえる。

最後に、『五峰遺稿』にある唯一の四首連続し、同じ韻を踏む疊韻詩を取り上げ、五峰の作詩心境を明らかにした。この四首連続の疊韻詩は、すべて五峰四三歳の作である。その一首目「巖谷一六至自東京邀飲南邊樓 用前年唱和韻（巖谷一六、東京より至り、南邊樓に邀へ飲む 前年の唱和の韻を用ゆ）」から三首目「寄懷佐渡舊知再疊韻（懷を佐渡の舊知に寄す 再び疊韻す）」までは、友人・巖谷に対する贈答詩である。詩風はほぼ同じパターンで、詩の前半は友人に関する様子を詠い、後の二句は詩人自身のことを詠じている。特に、三首目の場合は、五峰の隱逸傾向が見られる。凌雲の志を実現するための一歩さえも踏み出していない「愁」という現実から、脱俗しようという心境を表している。四首目「秋夜被酒偶然有作三疊韻（秋夜、酒を被る、偶然作有り、三たび疊韻す）」は、前三首と全く同じ韻脚を踏んでいるにもかかわらず、詩の内容も詩境も前三首と違い、前述したように不惑になった詩人自身の「憂愁」を切実に表しているし、その「士大夫」の人間型を表す一首にもなる。その上、この四首連続の次韻・疊韻詩を通して、五峰自身は宋詩の特徴のある詩形を取りつつ、唐詩の詩語や詩句などを融合し、前述した『新瀾新聞』の「詩風一變の徴」という中央漢詩壇の詩風の変遷に関する記事を発表する前に、すでに自分の詩作に先取りするという、先見の明があったと考えられる。

第三節では、まず、五峰と同門詩人田邊碧堂との関わりを探り、田邊碧堂は五峰にとつて、極めて重要な人物の一人だと明らかにした。

次に、「國民詩人」と言われる国分青厓との交友を探ると同時に、五峰の時事に関する七言絶句二首を取上げ、衆議院議員になって以来、五峰生涯に唯一の海外視察に関する詩にも当たるが、二首とも戦場を詠う作

にもかかわらず、平易な作風を呈していることが特徴的である。それにより、五峰詩風の形成において、国分青厓からの影響が極めて薄いことがうかがえる。

その後、「読史」という二三首連作の五言古詩の一首を取り上げ、『新鴻才人詩』に同じ歴史人物を詠じている丸岡詩と比べた結果、丸岡詩は明確に詠じられる歴史人物に触れていないことに対し、五峰詩の平易さと雄渾な氣勢がうかがえるし、その得意な首尾一貫の論述方法も呈している。およそ四〇年間五峰は相変わらず忠君愛国の士・楠木正成に注目している。その上、楠木正成に対する歴史観が変わっていないことがうかがえる。五峰自身の歴史人物に対する愛好の傾向もうかがえる。それは自身と同じタイプである「士大夫」のような君主に忠義をつくす、君主のために身を惜しまない精神の持ち主への憧れだと考えられる。さらに、五峰詩自体の時代性も強く表している。

第四節では、五峰の竹についての、類似している七言絶句四首とその関連している七言律詩一首に注目し、その詩句の典拠を分析した。その結果として、実生活では政治家として多忙であった阪口五峰は、漢詩人としては、その竹の詩において、少しずつ表現を変えながらも、仙界あるいは隠逸生活に対する憧憬を、約二〇年間にわたって一貫して表現し続けたことが明らかとなった。「士大夫」としての営為を行いつつ、様々な現実の厳しさに直面し、時によって仙人のような隠逸生活を過ごそうと思いつつも、衆議院議員の使命感・責任を背負わなければいけないという矛盾の中で、調和的に生きている「士大夫」像が見える。

第五節では、まず、五峰の詩風形成について、同門田邊碧堂の言及を通して、述べた上、村上『中国文人論』の「文人」、「士大夫」、「読書人」といった三パターンの人間類型に基づき、五峰はその「士大夫」のような詩人像を呈しているのを述べた。それから、明治・大正漢詩壇におけ

る五峰の位置付けについて、再度、同門田邊碧堂の述懐と山田穀城の証言を通して、述べた。

上記の三章を通じて、政治家阪口仁一郎とは別の漢詩人・阪口五峰について探ってきた。『五峰遺稿』の序文と跋文に見られる、歴史分野の雄渾かつ優雅な詩風、及び政治分野での剛健な詩風が、特徴的である。一方、今まであまり触れられていなかった「廢詩」についてのことを明らかにした。その期間は明治二二年五峰三一歳から明治三〇年三九歳までである。この「廢詩」期間の前と後での、五峰の詩風の変遷も明らかにした。「廢詩」直前に自由自在に筆力を駆使できる表現の詩風を呈しているのに対し、「廢詩」期間終了直後の少し自信を無くした心境を表しているが、時とともに、五峰本来の雄渾たる詩風を取り戻していったこともうかがえる。「廢詩」前には森春濤風の「艷体詩」も数首書いたが、そこから脱皮し、「憂愁」を表現できるような、「士大夫」的詩風に変わっていった傾向が見られる。

『五峰遺稿』については、五峰同門の田邊碧堂は、「恐らく明治時代匹儔なき好詩篇としてつたはるであらう」というふうが高く評価している。また、山田穀城によれば、「槐南、寧齋諸家の歿後は、凋落の秋を飾る現代漢詩壇の明星として試みに三四の巨頭を擧ぐる場合、<sup>ママ</sup>先生は優に其一人に數へられて居たのである」と、五峰の明治後期・大正時代の漢詩壇の重鎮のような存在であると述べている。彼らの証言から、明治大正の漢詩壇における阪口五峰の在り方がうかがえる。

『五峰遺稿』全三九二首の詩作を通覧すれば、『唐詩選』、『全唐詩』、『滄浪詩話』、『隨園詩話』、『船山詩草』といった詩に関する漢籍だけではなく、『莊子』や『二十四史』や『維摩詰所説經』(『維摩經』)など、



様々な漢籍を遍く精読したことがうかがえる。また、五峰の古詩には雄渾たる詩風のものだけでなく、生き生きとしている動態的な場面を呈している詩作もあるし、自己流の作詩もある。前者の例を挙げると、第一章で取り上げた「舟下魚野川」。後者の例を挙げれば、第三章で取り上げた「鷄血石歌贈市島春城」。仏教と道教との言語や用語などを巧みに結合している古詩もある。例えば、第二章で取り上げた「梅花丈室歌」。その上、繊細な詩風を表現している詩作もある。それは第一章で取り上げた「雨後驟涼」である。並びに、中・晩年に多く創作した贈答詩の中には、宋詩における友情の表現としての「疊韻」詩も得意であったことがうかがえる。五峰の七言律詩の対句表現の高い完成度は漢詩の名家である中国の人々によつて驚嘆されている。軽快な詩風の詩作もある。それは「廢詩」直前にある「筆頭菜」に関する詩作である。戦場を詠う詩作は唐詩のような悲哀がなく、陽気でユーモアをかもし出す詩風を呈している。五峰の「憂」「愁」は師森春濤の「憂愁」表現と違い、閲歴とともに、重ねながら、深化してきた。「憂国」の「士大夫」の詩風を表している。以上のような形で、五峰の詩風の考察により、明治・大正漢詩壇における独特な漢詩人・阪口五峰の姿を明らかにした。

以上のように、本論文では、明治大正漢詩壇における漢詩人五峰像を明らかにしたが、『五峰遺稿』に収録している三九二首詩作の内の五分の一の分析に留まっておき、また、従来の五峰年譜では空白になっている時期が多いといった、未解決の問題も残っている。今後も地道な研究を重ね、一つでも多くの課題に取り組みたいと思う。

# 参考文献目録

## 日本語文献

### 単行本

- 青木正兒『李白』 漢詩大系第八卷 集英社 一九八二年  
青木正兒『清代文学評論史』 岩波書店 一九五〇年  
新井白石著 村岡典嗣校訂『読史余論』 岩波書店 二〇〇九年  
石川淳『諸國崎人傳』 筑摩書房 一九六八年  
石川忠久『漢詩を作る』 大修館書店 二〇〇七年  
石黒萬逸郎編『有隣舎と其學徒』 一宮高等女學校校友會 一九二五年  
市野沢寅雄『滄浪詩話』 明德出版社 一九七六年  
揖斐高『江戸詩歌論』 汲古書院 二〇〇一年  
入谷仙介 揖斐高 大谷雅夫 山本芳明 宮崎修多 杉下元明校注『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』 岩波書店 二〇〇四年  
入谷仙介注『頼山陽 梁川星巖 江戸詩人選集 第八卷』 岩波書店 一九九〇年  
入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』 研文出版 二〇〇六年  
袁枚著・手代木公助訳『子不語』 平凡社 二〇〇九〜二〇一〇年  
大町桂月訳『新訳日本外史』 至誠堂書店 一九二〇年

- 岡本黄石『明治文学全集62 明治漢詩文集』 筑摩書房 一九八三年  
小川環樹著 吉川幸次郎 小川環樹編集・校閲『唐詩概説 中国詩人選集別巻』 岩波書店 一九五八年  
小川環樹著 吉川幸次郎 小川環樹編集・校閲『蘇軾』 岩波書店 一九六二年  
小野長愿『湖山近稿』 出版人 森春濤 一八七七年  
小尾郊一『李白』 中国の詩人6 集英社 一九八二年  
柏木如亭『柏木如亭集 覆』 太平書屋 一九七九年  
金谷治訳注『論語』 岩波書店 一九九一年  
神田喜一郎『神田喜一郎全集』 第八卷 同朋社 一九八七年  
簡野道明『唐詩選詳説』 上、下 明治書院 一九二九年  
木下彪選『明治大正名詩選』 アトリエ社 一九三七年  
黒川洋一編『杜甫詩選』 岩波書店 一九九一年  
國民文庫刊行會編『國譯漢文大成 經子史部 第七卷 老子・列子・莊子』 國民文庫刊行會 一九二五年  
國民文庫刊行會編『國譯漢文大成 文学部 第一卷 楚辭』 國民文庫刊行會 一九二四年  
小林二郎編纂『新瀉才人詩』 第一集 一八八二年  
小林二郎編纂『新瀉才人詩』 第二集 一八八五年  
近藤光男『漢詩大系 第十七卷 蘇東坡』 集英社 一九八二年  
近藤光男『漢詩選14 清詩選』 集英社 一九九七年  
坂口安吾『石の思ひ』 『坂口安吾全集4』 筑摩書房 一九九八年  
阪口猷吉編輯・発行『五峰餘影』 一九三一年  
阪口五峰『五峰遺稿』 日清印刷株式会社 一九二五年  
阪口五峰『北越詩話』 国書刊行會 一九九〇年  
鈴木子順『詩禪一味』 民友社出版部 一九九一年

鈴木虎雄『支那詩論史』 弘文堂書房 一九二五年  
 鈴木虎雄訳注『杜詩』(第一冊) 岩波書店 一九六三年  
 高楠順次郎編『大正新脩大藏經』普及版 大正新脩大藏經刊行会 一九八八年〜一九八九年  
 竹田晃 黒田真美子編 佐野誠子著『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他(六朝I)』 明治書院 二〇〇六年  
 武部利男『李白』中国詩人選集第7巻 岩波書店 一九五八年  
 武部利男『李白』世界古典文学全集第27巻 筑摩書房 一九七二年  
 徳田武『江戸漢学の世界』 ぺりかん社 一九九〇年  
 長坂吉和『會津八一と坂口歎吉』 新潟日報事業社 一九七九年  
 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第十五輯 汲古書院 一九七六年  
 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七巻 仏典II』 筑摩書房 一九六五年  
 中村幸彦編『近世の漢詩』 汲古書院 一九八六年  
 新潟日報事業社出版部『図解にいがた歴史散歩・南魚沼』 一九八三年  
 橋本循譯『楚辭』 岩波書店 一九四一年  
 濱久雄『牧野黙庵の詩と生涯―江戸漢詩性靈派の後勁―』 明德出版社 二〇〇五年  
 濱久雄『岸上質軒の漢詩と人生』 明德出版社 二〇〇九年  
 BSN 新潟放送・新潟日報社編『坂口歎吉追悼録』 一九六六年  
 東山拓志『漢詩の作詩技法と鑑賞』 萌動社 二〇〇六年  
 日野俊彦『森春濤の基礎的研究』 汲古書院 二〇一三年  
 日野龍夫注『成島柳北 大沼枕山 江戸詩人選集 第十巻』 岩波書店 一九九〇年  
 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』 一九二九年  
 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』 麥書房 一九六六年

藤野岩友『楚辭』 漢詩大系第三巻 集英社 一九八二年  
 前田愛『前田愛著作集』第一巻 筑摩書房 一九八九年  
 前野直彬注解『唐詩選』(上) 岩波書店 二〇〇〇年  
 前野直彬・斎藤茂著『韓退之…豪放詩人』集英社 一九八三年  
 松浦友久 植木久行編訳『杜牧詩選』 岩波書店 二〇〇四年  
 三浦叶『明治漢文学史』 汲古書院 一九九八年  
 武者小路実篤『維摩經』改版 角川書店 一九七〇年  
 村上哲見『中国文人論』汲古書院 一九九四年  
 森槐南『杜詩講義 下巻』 文會堂書店 一九一二年  
 森槐南『槐南集』 出版社不明 一九一二年  
 森春濤『春濤詩鈔』 文會堂書店 一九一二年  
 森春濤編『清三家絶句』 茉莉詩店開雕 一八七八年  
 柳田聖山、椎名宏雄編『禅学典籍叢刊』第五巻 臨川書店 二〇〇〇年  
 結城重男『雛田松溪 その詩と生涯』 新潟日報事業社 二〇〇八年  
 吉川幸次郎『宋詩概説』岩波書店 二〇〇六年  
 吉川幸次郎『元明詩概説』岩波書店 二〇〇六年  
 吉川幸次郎『吉川幸次郎遺稿集』筑摩書房 一九九五〜一九九六年  
 頼山陽著、頼成一・伊藤吉三譯注『頼山陽詩鈔』岩波書店 一九四四年  
 頼山陽著、頼成一・頼惟勤訳『日本外史』岩波書店 一九七六〜一九八一年  
 頼山陽著揖斐高訳注『頼山陽詩選』岩波書店 二〇一二年  
 早稻田大學出版部編『先哲遺著 漢籍國字解全書 第一七巻 楚辭』早稻田大學出版部 一九一一年  
 『新文詩』国立国会図書館デジタル化資料 茉莉詩店 一八八一年〜一八八三年  
 『新新文詩』森春濤 一八八五〜一八八七

『新詩綜』森槐南主宰、上村賣劍編輯 一八九九〜一九〇一  
『百花欄』野口寧齋 一九〇三〜一九〇五  
日下寛『壮行集』一九二一年

## 辞典・事典

相川町史編纂委員会『佐渡相川郷土史事典』二〇〇二年  
荒木常能『越佐書画名鑑』新潟県美術商組合 二〇〇二年  
上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講  
談社 二〇〇一年  
簡野道明編『字源』増補初版 角川書店 一九五五年  
近藤春雄『日本漢文学大事典』明治書院 一九八五年  
新村出『広辞苑』第五版 岩波書店 一九九八年  
長澤規矩也著 長澤孝三編『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』汲古  
書院 二〇〇六年  
長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覧』汲古書院 二〇一一年  
新潟県立図書館編『越佐名家著述目録』一九二九年  
西ヶ谷恭弘編著『定本 日本城郭事典』秋田書店 二〇〇一年  
藤島達朗、野上俊静『東方年表』平樂寺書店 二〇〇七年  
本間周敬『佐渡人名辭書 全』弘文堂 一九一五年  
松村明監修『大辞泉』(増補・新装版) 小学館 一九九五年  
村島靖雄『越佐人名辭書』歴史図書社 一九七四年  
孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新  
潮社 二〇〇〇年  
諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版 大修館書店 一九九六年

## 雑誌(特集)・紀要所収論文

新井洋子「森春濤編『清三家絶句』について」『二松』第一九集 二〇〇  
五年  
石川忠久「杜牧の詩―酒と茶と―」『斯文』斯文会 一九六九年八月  
揖斐高「明治漢詩の出発―森春濤試論―」『江戸文学』二一号 一九九  
年一二月  
今關天彭「森春濤(下)」『雅友』第三六号 一九五八年四月  
内田賢治「大沼枕山と杜牧」『国語国文』二〇一一年六月  
岡村鉄琴「『阪口五峰展』始末記と今後の展望」『坂口安吾生誕百年事業  
実行委員会記録誌 安吾探索ノート』第七号 安吾の会 二〇〇七年一  
〇月  
岡村浩「『阪口五峰』としての文人像」『坂口安吾生誕百年祭 阪口五峰  
を中心とする文人の魅力』二〇〇六年一〇月  
岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山」『M』『新潟大学教育人間科学部紀  
要』第一卷第一号 一九九八年九月  
合山林太郎「幕末明治期の艷体漢詩―森春濤・槐南一派の詩風をめぐ  
って―」『和漢比較文学』二〇〇六年八月  
柴田清継「王治本 越佐の旅 およびその間の詩文交流―明治十六、七  
年を中心として」『新潟県文人研究』第一五号 二〇一二年一二月  
水津有理「明治期における清詩受容について―同時代の文学として」『対  
話と深化』の次世代女性リーダーの育成「魅力ある大学院教育」イニシ  
アティブ平成一八年度活動報告書(海外研修事業編) 二〇〇七年三月

徳田武「大庭松斎―始めて知る人世乗除有るを―(上)」『明治大学教養論集』四〇〇号 二〇〇六年一月

中津濱涉「劉禹錫の〈竹枝詞〉について」『新国語研究』第一七号 一九七三年

中村宏「大須賀筠軒の生涯―附・「新文詩」とその作家」『東洋研究』26

大東文化大学東洋研究所 一九七二年三月

中村宏「詩に於ける処士の謳歌―岩溪裳川の世界―」『東洋研究』一九七六年八月

日野俊彦「清廿四家詩」について 『成蹊國文』第四三号 二〇一〇年

日野俊彦「森春濤と森槐南―「新文詩」ノート」 『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂 二〇〇八年一〇月

福井辰彦「宮崎晴瀾と張船山―明治漢詩における清詩受容の一斑―」『国語国文』 第七一巻第四号 二〇〇二年四月

福井辰彦「森槐南と陳碧城―槐南青少年期の清詩受容について―」『国語国文』 第七二巻 二〇〇三年八月

藤田智章「漱石詩における「白雲」のイメージについて」『二松学舎大学院紀要』一九号 二〇〇五年三月

帆苅隆「著述家・坂口五峰(一)」『新潟県文人研究』第一五号 二〇一二年十一月

村山真雄「岳父坂口五峰の思い出」『月刊 いがた』第二巻第五号 新潟日報社 一九四七年

『国文学 解釈と鑑賞 特集Ⅱ古典文学の精髓としての漢詩文―中世・近世・近代』 至文堂 二〇〇八年一〇月

## 新聞

『新潟新聞』一九〇三年八月五日

## 中国語文献

### 単行本

白居易著 朱金城箋注 『白居易集箋校』上海古籍出版社 二〇〇八年

杜牧著 陳允吉校点『杜牧全集』上海古籍出版社 一九九七年

馮贄撰(唐)『雲仙雜記』上海書店 一九八四年

高適著 劉開揚箋註『高適詩集編年箋註 中國古典文學基本叢書』中華書局 一九八一年

郭紹虞校釋『滄浪詩話校釋』人民文學出版社 一九八三年

韓偓著陳繼龍註『韓偓詩註』學林出版社 二〇〇一年

韓成武 张志民『杜甫詩全譯』河北人民出版社 一九九七年

郝樹侯選注『中國古典文學讀本叢書 元好問詩選』人民文學出版社 一九九七年

九九七年

胡伝准『張問陶年譜』巴蜀書社 二〇〇五年

黄永武博士主編『杜詩叢刊』台湾大通書局印行 一九七四年

李延壽(唐)撰 楊家駱主編『南史』中華書局 一九七五年

劉昫(後晋)撰 楊家駱主編『舊唐書』中華書局 一九七五年

- 林克勝『詩律詳解』商務印書館 二〇一〇年  
 羅聯添『唐代四家詩文論集』學海出版社 一九九六年  
 歐陽修 宋祁撰『新唐書』中華書局 一九七五年  
 錢謙益著 錢曾箋注 錢仲聯標校『錢牧齋全集』上海古籍出版社 二〇〇三年  
 任昉撰『述異記』中華書局 一九九一年  
 蘇軾(宋)著 朱孝臧編年 龍榆生校箋『東坡樂府箋』上海古籍出版社 二〇〇九年  
 沈約撰 楊家駱主編『宋書』中華書局 一九七四年  
 司馬遷(漢)撰 裴駰(宋)集解 司馬貞(唐)索隱 張守節(唐)正義『史記』中華書局 一九八二年  
 王宝平主編『中日詩文交流集 晚清東遊日記匯編』1 上海古籍出版社 二〇〇四年  
 王士禛編 張明非撰『唐賢三昧集詁注』上海古籍出版社 二〇〇〇年  
 王曉平『日本中國學述聞』中華書局 二〇〇八年  
 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』遼寧大學出版社 一九九八年  
 王雲五編『碧城仙館詩鈔』商務印書館 一九三六年  
 王運熙、顧易生主編『中國文學批評通史』清代卷 上海古籍出版社 二〇〇七年  
 吳言生『禪宗詩歌境界』中華書局 二〇〇一年  
 吳言生『禪宗思想淵源』中華書局 二〇〇二年  
 吳言生『禪宗哲學象徵』中華書局 二〇〇二年  
 吳雨平『橘与枳 本漢詩的文体学研究』中國社會科學出版社 二〇〇八年  
 辛文房撰『唐才子傳』中華書局 一九九一年

- 袁枚『小倉山房詩文集』上海古籍出版社 一九八八年  
 袁枚『正統子不語』新興書局有限公司 一九七八年  
 嚴迪昌『清詩史』五南圖書出版有限公司 一九九八年  
 嚴迪昌『清詞史』江蘇古籍出版社 二〇〇一年  
 嚴迪昌『清詩史』人民文學出版社 二〇一一年  
 趙爾巽等撰『清史稿』中華書局 一九七六年、一九七七年  
 張晶著『禪与唐宋詩学』人民文學出版社 二〇〇三年  
 張問陶『船山詩草』中華書局 一九八六年  
 鍾嶸著 曹旭集注『中國古典文學叢書 詩品集注』上海古籍出版社 一九九四年  
 班固撰 顏師古注『漢書』中華書局 一九九七年  
 『全唐詩』中華書局 一九六〇年

## 辭典·事典

- 蔣祖怡 陳志椿主編『中國詩話辭典』北京出版社 一九九六年  
 『古漢語常用字字典』修訂版 商務印書館 一九九六年  
 『漢語大詞典』繁體版 聯合出版集團 二〇〇二年

## 初出一覧

### 第一章 五峰と漢学・漢詩及び初期の詩

『表現文化研究』一〇 二〇一四年三月 一〜三七頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―漢学・漢詩との因縁及び初期の詩―」)

### 第二章 第四節 五峰と清詩

『現代社会文化研究』五七 二〇一三年二月 一九〜三六頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―清詩との関わり―」)

### 第二章 第五節 五峰の「禪」に関する詩

『現代社会文化研究』五五 二〇一二年二月 二一〜三八頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」)

『表現文化研究』九 二〇一三年三月 一〜二四頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―「半通禪」、「已通禪」の表現―」)

### 第三章 第四節 「竹」を題材とした詩

『現代社会文化研究』五二 二〇一一年二月 一〜一七頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―竹を題材とした詩について―」)

附1 明治漢詩壇と関わりのある吟社、雑誌リスト及び掲載詩作目録

『新大國語』三五 二〇一二年三月 三一〜三九頁

(掲載時題目は「漢詩人としての阪口五峰―『新文詩』などとの関わり―」)

附2 『新潟才人詩』全二集について

『新潟県文人研究』一六 二〇一三年一月 一四六〜一五三頁

(掲載時題目は「阪口五峰著『新潟才人詩』分析の一端」)

## 謝辞

本博士学位論文は、筆者が新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程において、佐々木充教授の研究室において行った研究をまとめた成果です。

本学位論文を執筆するあたり、学内外の多くの方々にお世話になりました。

まず、主指導を担当してくださった佐々木充教授には、研究テーマから研究方法まで、及び研究方向・論文の表現などの専門的見地から丁寧かつ熱心な御指導を賜りました。研究資料を入手する際に、先生から至大のご支援をいただきました。日頃より、佐々木先生からは、論文に目を通していただき、一字一句に至るまで懇切丁寧な御指導をいただきました。その上、酷暑と厳寒にも関わらず、土曜日・日曜日にも関わらず、大切なお時間を惜しまずに、いつも遅くまで貴重な御指導・ご教示を賜りました師恩に感佩します。

そして、副指導を担当してくださった廣部俊也准教授には、江戸漢学・漢詩の見地から多くのご示唆・ご助言をいただきました。ご多忙中、論文をお読みいただき、貴重なご意見をたくさんいただきました。心から感謝を捧げます。

また、副指導を担当してくださった岡村浩准教授には、研究の進め方へのご助言、論文への細かなご指導を賜りました。「越佐文人研究会」に入会することができ、機関誌『新潟県文人研究』に投稿する際に、更なる貴重な御指導をいただきました。感謝の念に尽きません。

さらに、修士課程において、お世話になりました本学大学院教育学研究科の国語科の先生方々や『新大国語』に投稿する際に、暖かく励ましてくださった堀竜一准教授、足立幸子准教授にも感謝申し上げます。時

には、角谷聰准教授から個人蔵書さえも拝借いたしました。厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は明治時代の漢詩漢文に関するものであるため、当時の文献を入手することがなかなか難しかったのですが、本学附属図書館の中央図書館の情報調査係の家後眞澄さん、高井真利子さん、川口洋平さんから、学外への和装本を貸借する時に、絶大なご協力を得たことが本学位論文の完成に繋がりました。皆様には本当に感謝いたします。

学位論文提出資格 (Ph.D.Candidate) 審査の際に、橋谷英子教授と先田進教授からは、本学位論文の作成に関することや研究の進め方について、多くのご助言をいただきました。また、本学の企画戦略本部男女共同企画推進室の中野享香准教授、表現文化研究会の石田純子先生をはじめとしたゼミの皆様には数多くのアドバイスをいただきました。特に、本学位論文を執筆する最終段階に入り、同じゼミの風間彩香さんから日本語の御指導とアドバイスをいただきました。皆様には深甚の謝意を表します。

学外においては、友人・西岡和夫先生から、参考文献や参考資料などを送っていただき、厚く御礼申し上げます。その他、物心両面からのご支援、ご協力をいただきながら、ここに芳名を記すことができなかつた日中両国の方々にも心より深謝の意を表します。

最後に、私の家族に心からの感謝を捧げます。そのすべてを惜しまずに中国語の書籍や文献資料などを購入し、迅速に日本まで送ってくれた父、中国で三十年「語文（日本での国語）」教育に携わり、漢詩理解における助言をくれた伯母、日本海に向こうから常に温かく見守っている親戚・友人、常に天国で優しく見守っている母と祖母に「感恩」の心を捧げたいと存じております。

二〇一四年三月吉日 田 春娟



# 附1 明治漢詩壇と関わりのある吟社、雑誌リスト及び

## 掲載詩作目録

### 一、『新文詩』

『新文詩』は、森春濤が東京で茉莉吟社を起し、明治八（一八七五）年七月に創刊した雑誌である。これが明治年間詩文雑誌の唱首である。

「新文詩」とは「新聞紙」を振ったもので、漢詩専門雑誌の嚆矢とされた。雑誌とは言いながら、木版白紙刷、緑色梅花欄、紅野という四六判の美麗な装丁である。明治一六（一八八三）年一二月に第一〇〇集の刊行に達して打ち切りとされた。一〇〇集まで及んだ雑誌は純粹文芸雑誌としても稀であった。その間、「別集」の増刊が二八まで出版された<sup>355</sup>。第一集から第百集までに、約四四〇人の漢詩を収める<sup>356</sup>。ちなみに、『新文詩』一部は定価八錢であった。

五峰の漢詩は『新文詩』の第五六集から載せられた。それは明治一二（一八七九）年一二月のことである。第五六集から第一〇〇集までの『新文詩』に掲載された五峰の漢詩リストは以下の通りである。

- 第五六集 明治一二年一二月 五峯樵史 仁一郎「送友人遊新瀉」(春濤評)
- 第六〇集 明治一三(一八八〇)年三月 五峯樵史 仁一郎「江樓聽歌」
- 第六一集 明治一三年四月 五峯樵史 仁一郎「讀野村鶯溪遺稿」
- 第六四集 明治一三年七月 五峯樵史 仁一郎「次鷗水別後見寄韻」
- 第六五集 明治一三年九月 五峯樵史 仁一郎「古街酒樓與全人飲」
- 第六七集 明治一三年一二月 五峯樵史 恭「江樓秋夜同鷗水賦」

- 第六八集 明治一三年一二月 五峯樵史 恭「秋夕懷人」
- 第七一集 明治一四(一八八二)年四月 五峯樵史 恭「次面南見贈韻」
- 第七四集 明治一四年八月 五峯樵史 恭「仙夢」
- 第七五集 明治一四年九月 五峯樵史 恭「讀春濤詩鈔題其後」 春濤老髯 魯直「次五峯見贈韻」
- 入谷仙介は『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』<sup>357</sup>『春濤詩鈔』の「抵新潟寓阪口五峰宅五峰有讀春濤詩鈔次韻」と題する詩の脚注で、

『五峰遺稿』にこの時の春濤歓迎の詩五首を収めるが、「春濤詩鈔を讀む」は見えない。『春濤詩鈔』は明治十四年刊行。すなわち出版直後であった。

と解釈している。『新文詩』第七五集のこの五峰詩は『春濤詩鈔』に触れた五峰の詩作に当たると考えられる。

- 第七六集 明治一四年一二月 五峯樵史 恭「山中耕雲見似病中書感詩 盖次予近作韻也乃疊原韻卻寄」
- 第七七集 明治一四年一〇月一二月 五峯樵史 恭「呈春濤先生」
- 第八一集 明治一五(一八八二)年五月 五峯樵史 恭「案上有郷友詩 文數種披覽之間偶得五律乃書其後」(槐南評)(五首)
- 第八三集 (年代不詳) 五峯樵史 恭「空山讀書圖」(槐南評)
- 第八五集 明治一五年七月 五峯樵史 恭「綠陰清書」
- 第八六集 明治一五年八月一九月 五峯樵者 恭「新斥秋詞」(二首)
- 第八八集 明治一五年一二月 五峯樵史 恭「案上有春濤先生及枕湖二翁詩集率題四律亦瓣香私淑之意也。」(四首)
- 第八九集 明治一五年一二月 五峯樵史 恭「贈山際柳堤」(春濤評)

第九三集 明治一六（一八八三）年四月 五峰樵史 恭「新正三日書懷」（春濤評）

第九四集 明治一六年五月〜六月 五峰樵史 恭「題藍川養病詩屋原四」（湖山評）

第九五集 明治一六年七月 五峰樵者 恭「寄居村小寓 疊養病詩屋詩韻」（槐南評）（三首）

第九七集 明治一六年九月 五峰樵者 恭「病中次藍川見贈韻」

五峰の作詩は合わせて三一首にのぼる。時期は明治一二（一八七九）年一二月〜明治一六（一八八三）年九月である。

また、『五峯餘影』の「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」の「田邊碧堂氏談」には、次のようにある。

自分が初めて五峰君の名を耳にしたのは明治十六年先師森春濤翁が自分の郷里備中の玉島に來られたときであつた。その二年前、春濤翁は新潟に遊んだので、玉島漫遊の際に、余は諸國を歴訪していたるところで若い詩人に接したが北越に阪口五峰あり、天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びてゐると語られて、さらに自分に對して君は素直な人物で物に凝滞せぬ性格であるから五峰とは一寸相反した趣をもつてゐる。東に五峰、西に碧堂、前途有望の好門下を獲て洵に嬉しい。元來君は絶句において長所を見る。絶句に貴ぶ所は神韻と風致にあるから君の如き性情の人には適するが五峰は理屈に長じてゐるから古詩大作にふさはしい、丁度芝居の女形と立役者が出來たやうなものだと、愉快さうに物語られた<sup>358</sup>。（後略）

田邊の記憶によると、五峰と同じ尊師である森春濤から上記のような

評価を受けた。田邊は五峰とともに森春濤門下の「双璧」といわれる地方に居る弟子になる。

明治一二年一二月に、五峰は中央漢詩壇にデビューし、その後も『新文詩』に投稿し続けた。明治一四（一八八一）年の秋、森春濤來潟し、同年一〇月、森春濤は『新潟竹枝』を世に出し、五峰がその詩集の解説などを勤めていた。五峰と森春濤との師弟関係は明治二二年春濤が亡くなるまで及んでいた。

## 二、『新文詩別集』

『新文詩別集』は、明治九（一八七六）年三月に、森春濤の茉莉吟社から刊行された詩集である。中村宏は『新文詩別集』について、以下のように言及している。「別集は本集終刊時に一九集まで刊行されており、その後も二〇集から二八集に及んだ。前者は全く特集であり、後者は二一集の「玉峰小詩」を除いて、本集と同性格のもの<sup>359</sup>」である。明治一七（一八八四）年一二月に終刊した。第二一集では、「玉峰小詩」を五峰の手で一部収録された<sup>360</sup>。『五峰遺稿』では、「題玉峰小稿後四首 折二」と題する詩が収録されている。

## 三、『新新文詩』

第二集 明治一八（一八八五）年六月 「林園月令藁本歌」

第七集 明治一八年一二月 「上京途中作録五」

第八集 明治一九（一八八六）年一月 「呈鱸松塘先生」二首

第一〇集 明治一九年三月 「讀湖山樓十種集」

第一一集 明治一九年四月 「遥和家弟秋山詩韻寄懷」二首

第二集 明治一九年五月 「上州途上」  
第三集 明治一九年六月 「賀夢詩呈鱸松塘先生」

#### 四、『新詩府』

『新詩府』は、明治二二（一八八九）年二月に、松村琴莊等によって発刊された。活版洋紙刷、体裁は頗る意匠を凝らし、優雅な好雑誌である<sup>361</sup>。同年四月に四号で廃刊になった。現存するものは少ないが、五峰の漢詩一首がある。

初集 明治二二年二月一日 五峰樵史 坂口恭「戲詠筆頭菜」

#### 五、雪門會

雪門會は明治三〇（一八九七）年に、關澤霞庵によって創立された詩社である。雪門會と關係を持つ詩家三七名（實際に三七名以上居る可能性がある）の中には、森春濤・森槐南父子の名前もうかがえるし、阪口五峰もみえる。五峰と雪門會の交流は少なくとも、五峰の亡くなるまで、続いていると推測できる<sup>362</sup>。

#### 六、『新詩綜』

『新詩綜』は、明治三二（一八九九）年四月に、森槐南の主宰、上村賣劍の編輯で、創刊された雑誌である。毎月一回五日発行、体裁内容は菊洋紙刷五〇頁程で、後ろに森槐南の杜詩諺解を付録としていた。明治三四（一九〇一）年四月第一三集までで廃刊になった<sup>363</sup>。五峰の作詩は以下の通り載せられている。

二集 明治三二年五月五日 三李堂發行 五峯阪口恭「松風亭贈韓人黃治祖和蝶守」（二首）

本篇を掲載する前文（導入文）のところでは、森泰二郎（槐南）により左記のような説明が綴られている。

五峰早日詩名傾動京國才雄氣厚不作浮響有故中廢一時無不惜其才者故予贈詩有如此才人可廢詩之句近年再理舊業雖不多作作必驚人曾在廣島大本營與錦山仙吏同讀其蝦夷錦歌有云此時此錦何足惜我將一割十丈長裁爲大旗小幟擊日月樹之從軍海外輝國光不然眞乃無用物什襲何益筐中藏噫嘻乎什襲何益筐中藏歎其開闔動邊貫以勁氣可拔鯨牙而搖雲漢茲錄小詩乃係其近製

森槐南の説明では、五峰の詩風や才気などを紹介し、また、五峰の「蝦夷錦歌」と題する七言古詩の一部も紹介している。

六集 明治三二（一八九九）年九月五日 三李堂發行 五峰阪口恭「狹門雜詩」（五首、説明文の中にも一首がある）

五峰有狹門雜詩十篇凡三易稿而就可見用功之苦茲錄其半他如積翠壓墟煙市小洪濤撼地郡城寒巖巖浦近千帆落三郡山開萬瓦明月明珠鮫人淚仙夢鷗隨海客船暮雨鴻川殘柳影秋風荻浦夜漁聲亦皆積健返虛足推高響

八集 明治三三（一九〇〇）年九月二五日 鳴臯書院發行 五峯阪口恭「送蝶夢太守致仕歸京」（四首）

五峯才情雙麗、落々拔俗、蝶守卸篆後、與洪州判官、替主鷗鷺會盟、挖風揚雅、齊名何李、尚記舟江游次、日夕歡集、紅袖佐酒、白袷談詩、贈余有云、詩驚坐客八叉手、歌遏行雲一串珠、畫橋煙柳多於水、古寺風幡高出樓、於今令人神往勝區、夢馳花國、

五峯の作詩は合わせて一二首にのぼる。時期は明治三二（一八九九）年五月〜明治三三（一九〇〇）年九月である。

## 七、『檀樂會』

檀樂會は江木冷灰によつて明治三五（一九〇二）年の初春に創られた。『明治漢詩』にある「明治詩壇展望<sup>364</sup>」によると、檀樂會は「毎月一回詩酒徵逐、唱和の作品は壬寅より甲午迄年々『檀樂集』となつて残された。會する者は、森槐南・永坂石球・本田種竹・岩溪裳川（中略）等の諸家」である。その中には五峯の名前はあげられていないが、『五峰遺稿』巻中「輕井澤讀檀樂集次遠近山莊唱和韻寄呈江木冷灰吟壇<sup>365</sup>」と題する漢詩から見れば、やはり、五峯との関わりがあると考えられる。明治壬寅の歳（三十五年）五峯東京に在り、其年十二月議會解散の令下りしと思ふ。其後江木冷灰檀樂會を待我歸軒に開く。檀樂會は其春冷灰主人は、偶然招待せし人を以て一社を結びたるも、一時其盛を極め（『五峰餘影』一二三頁）

## 八、『百花欄』

『百花欄』は、明治三六（一九〇三）年一月に、野口寧齋が主宰し、

上村才六の鳴臯書院から創刊された。四六判五号活字印刷、表紙朱野模様入、每号七〇頁余の瀟洒たる体裁である。この雑誌は『新詩綜』などが廃刊した後を受けて、詩壇雜誌の圧巻を成した。終刊二九集で明治三八（一九〇五）年五月に廃刊となつた。定価一部一五錢であつた<sup>366</sup>。本誌中の五峯の詩作は以下の通りである。

初集 明治三六（一九〇三）年一月 五峯仙史「百事」  
三集 明治三六年三月 五峯仙史「次香國先生見贈韻」  
一五集 明治三七（一九〇四）年三月 五峯仙史「津川旗亭同担山賦」  
二〇集 明治三七年八月 五峯仙史「醉後次韻」  
二三集 明治三七年十一月 五峯仙史「津川大善樓即事」  
二五集 明治三八（一九〇五）年一月 五峯仙史「寄懷松田學鷗在軍中」  
五峯の作品は合わせて六首にのぼる。

イ、明治三六（一九〇三）年三月六日及び七日の『新潟新聞』で、五峯が聴濤山人という名義で『百花欄』を読む 上、『百花欄』を読む下」という記事を書いている。

## 九、『新潟才人詩』

『新潟才人詩』は、明治一五（一八八二）年初冬（十一月）に、小林二郎の編纂、阪口五峯の校閲によつて、出版された漢詩雜誌である。表紙に「春鷗吟社<sup>367</sup>歳」と記してある。定価一二錢である。これが第一集であり、この雑誌の刊行は第二集までである。第二集は第一集の編纂者と同じ小林二郎によつて編纂され、明治一八（一八八五）年五月一日に届け出て、同年の二月三〇日に出版された。それぞれの内容は以下の通りである。

第一集は、三〇名の詩人の三四首の漢詩を収録している。詩集中、五峰詩「歳晚雜感」と題する二首の七言律詩が載せられている。また、詩集では、五峰による評が一〇首にのぼる。森春濤による評が四首であり、森槐南による評が三首である。

第二集は、三二名の詩人の四〇首の漢詩を収録している。詩集中、五峰詩「治園」と題する二首の五言古詩が載せられている。また、詩集では、五峰による評が一八首にのぼる。槐南による評は六首である。

以上から見ると、阪口五峰は新潟に居ながらにして、東京に在住する森春濤の『新文詩』と深い関わりを持ち、また、森槐南主宰の漢詩雑誌『新詩綜』にも投稿しただけではなく、『新潟新聞』では、五峰は森槐南の詩風の変化などにも注目し、紹介していた。しかも、『新詩府』や『百花欄』にも関係を持つているのがうかがえる。これらの資料を踏まえて、阪口五峰と森春濤・森槐南父子との詳細な関係を説明することができるだろう。

附2 『新潟才人詩』全二集について

『新潟才人詩』第一集 目録、作者及び選者一覧

No	詩題	出身地	作者	評者
1	北海道々中作	越後	榎華学人	大野 巖谷一六(『五峰遺稿』卷中「巖谷一六至自東京邀飲南邊樓 用前年唱和韻」七言律詩、「一六遊佐渡賦此寄懷疊韻」七言律詩、「一六歸自佐渡同人邀飲松風亭一六詩先成乃次韻率賦時九月十三夜也」七言律詩 合わせて三首)
2	雜感	越後	星洲漁人	平戸 森春濤
3	秋江散策	全	霜筠頑士	山田 小林遂齋
4	詠史 原七(二首)	佐渡	南陔樵史	丸岡 菊池三溪、坂口五峯
5	新年感懷	越後	田龍小史	諸橋 遂齋
6	杜鵑花	佐渡	溟北学人	丸山 <sup>ママ</sup> 五峯
7	杉田觀梅	越後	唵水漁史	清川 廣瀬青村
8	春感	越後	小櫟迁史	健部 <sup>ママ</sup> 五峯
9	宝刀	全	寒翠山人	小林 春濤
10	獄中作	全	松溪居士	雛田 遂齋
11	山間屋	越後	石牛窩主	銀田 春濤
12	過古戰場	佐渡	柳塘釣徒	小崎 <sup>ママ</sup> 丸岡南陔
13	新潟竹枝(二首)	越後	鳩村處士	三浦 五峯
14	新潟雜詞	全	櫻坪居士	旗野 春濤、一六
15	霧窪	佐渡	和菴主人	萩野 山際柳堤
16	寄懷鷗水用其与五峯唱和韵	越後	柳堤釣史	山際 小崎藍
17	寄人	全	一青山人	石黒 森槐南
18	寒夜	越後	雀陰野人	堀 藍川、
19	雨中聞子規有感	全	烟塢釣侶	久住 藍川
20	入吉客舍中秋	越後	自笑山人	羽田野 藍川
21	九月十三夜自高田抵片街途中	全	雲濤逸史	水落 五峯、遂齋
22	躬耕	越後	頑竹居士	高橋 遂齋
23	幽室雜詩	全	烟波散人	高橋 遂齋
24	歲晚書懷	越後	網亭學人	蒲生 鱸松塘
25	對酒	全	廉堂主人	高橋 柳堤
26	新潟客舍似長谷川某	全	鶯溪居士	野村 五峯
27	書懷	越後	鷗水漁長	水落 橋本蓉塘
28	題春濤先生詩卷後	越後	秋山樵者	坂口 柳堤
29	(詩の題名無し)(二首)	佐渡	藍川釣侶	小崎 五峯
30	歲晚雜感 原五(二首)	越後	五峯樵史	坂口 槐南

閱 五峯坂口  
纂 遂齋小林二郎  
編輯兼出板人 小林二郎  
題字 大野樗華の書

『新潟才人詩』第二集 目錄、作者及び選者一覽

No	詩題	作者	評者
1	自題偉人傳複韻一格	網亭學人	重章 黃遵憲、小山
2	秋懷	雲濤逸史	良輔 五峯
3	滬上偶成	一青山人	弘 錢子琴、槐南
4	即事	和菴主人	和之 槐南
5	送人之浪華	學海漁人	華 藍川
6	梅津途上	朔汀棹夫	玄益 藍川
7	贈醉石翁	鶴陰野衲	敬聞 五峯
8	送別	梅華居士	誠 五峯
9	足柄山吹笙	南陔老人	成章 藍川
10	寒夜	修齋主人	篤太郎 藍川
11	寒夜	漁村窩夫	契 五峯
12	橡尾股温泉雜詩 録一	自快醉士	嘉三 藍川
13	春夜	醉月閒人	恪太郎 五峯
14	次五峯見贈韻	柳堤釣史	操 五峯、藍川
15	柳橋酒樓別水野櫻雨	鷗水漁長	璋 五峯
16	鳴東雜咏 録一	澹處處士	金八郎 依田学海
17	春晚	嵐泊漁史	相資 五峯
18	寄題梅花書屋		栗江漁人 恒 五峯
19	八木巖		石牛窩主 稔 槐南
20	臆尾貧甚詩以紀懲		松溪居士 中清 藍川、五峯
21	鎮西雜詩 録四(四首)		煙波釣侶 武 五峯
22	秋感三首次吳毅人韵 録一		鶯溪漁客 安之 藍川、五峯
23	大野耻堂先生壽詞		北涯處士 巖 五峯
24	癸未中秋与王漆園飲綠樓酒間次漆園韵		城南釣侶 石太郎
25	初夏雜咏		翠溪漁客 恒四郎 藍川
26	冬夜		鏡雨道人 雲宗 藍川
27	塩澤賦長歌以贈		杏塢漁人 逸 五峯
28	送坂口秋山游東京		城川小漁 澄 湖山
29	新秋夜坐(二首)		玉峯樵史 元 王漆園
30	〔五峰遺稿〕卷上「王漆園將歸招同諸友于松風亭次留別韻」七言律詩一首、槐南		秋山樵者 義 湖山、槐南
31	養病詩屋雜述(四首)		藍川釣侶 懋 漆園
32	治園(二首)		五峰居士 恭 漆園
編輯兼出板人	小林二郎		編輯者識

題字 日下部鳴鶴（一八三八〜一九二二、太政官大書記官・明治三筆の一人・日本近代書道の父、『五峰遺稿』巻上「贈日下部鳴鶴仙史」七言律詩、「古重陽招飲鳴鶴及彌岳藍川于公園旗亭」七言律詩、『五峰遺稿』巻中「日下部鳴鶴重游新斥招飲松風亭同賦」五言古詩 合わせて三首）の書

### 『新潟才人詩』全二集概説及び詩人の顔ぶれ

『新潟才人詩』第一集は、明治一五（一八八二）年初冬（十一月）に、小林二郎の編纂 阪口五峰の校閲によつて、出版された漢詩雑誌である。表紙に「明治壬午初冬新鑄春鷗吟社<sup>368</sup>歳」と記してある。この春鷗吟社のことは、阪口五峰の「人日千秋庵次松雨韻」と題する漢詩の二首目の自注の説明文<sup>369</sup>では

春濤先生游新潟余與同人結吟社先生乃名春鷗取黃山谷五湖春水白鷗前也

と触れている。北宋の「詩書画三絶」といわれる黄庭堅（一〇四五〜一一〇五、字は魯直、号は山谷道人など）詩「呈外舅孫莘老二首」の一首目の詩にいう。

この第一集の定価は十二銭である。この雑誌の刊行は第二集までである。第二集は第一集の編纂者と同じ小林二郎によつて編纂され、明治一八（一八八五）年五月一八日に届け出て、同年の十二月三〇日に出版された。それぞれの内容は以下の通りである。

第一集は、三〇名の詩人の三四首の漢詩を収録している。詩集中、五

峰詩「歳晚雜感」と題する二首の七言律詩が載せられている。また、詩集では、五峰による評が一〇首にのぼる。森春濤による評が四首であり、森槐南による評が三首である。

第二集は、三二名の詩人の四〇首の漢詩を収録している。詩集中、五峰詩「治園」と題する二首の五言古詩が載せられている。また、詩集では、五峰による評が一八首にのぼる。槐南による評は六首である。定価金拾二銭五厘である。

### 『新潟才人詩』第一集 詩人の顔ぶれ

一、北海道々中作 越後 樺華学人 大野

（名は誠。字は仲亨。號は睡虎・梅華。北蒲原郡聖籠村諏訪山の人。東京に寓す。大野恥堂の長男。勤皇家。長野県令。明治一七・一八八四年一〇月、五一歳で没<sup>370</sup>。）

二、雜感 越後 星洲漁人 平戸

（名鄰。字は聞命。一號碌碌道人。父某、嘗て水原代官所の吏と爲り。而して星洲を生む。故に星洲自ら越後人と稱す。書法、菱湖に仿ひ。尤も細楷を善くす。春濤先生の新文詩、多くは其寫す所。半嶺と同く下谷に住し。日夕往來。親、兄弟の如し。己酉春。予之を訪ふ<sup>371</sup>。）

三、秋江散策 全 霜筠頑士 山田

（名は聲。字は子遠。小字波之助。通稱八十八郎。霜筠と號す。別號米郎。柏崎の人。柏崎初代郡長。大正四年、八〇歳で没<sup>372</sup>。）

四、詠史 原七 佐渡 南陔樵史 丸岡



〈名は成章。字は子煥。通稱傳藏・總四朗。號は南陔。師は藤木實齋。亦た相川の人。壯年、江戸に遊び。名家を歴訪す。藤森天山・田口江村・小野湖山・菊池三溪等、皆な其才を稱せり。世、溟北と併せて佐渡の二老と稱す。南陔遺稿三卷あり。予、溟北を識るに及ばざりしも。南陔数々越後に遊ぶ。因て忘年交を訂す。嘗て予が七松山莊に過ぎり。373 明治一九年一月六二歳で没374。『五峰遺稿』卷上に「送丸岡南陔歸佐渡 風月吟社席上作」と題する七言律詩がある。〉

### 五、新年感懷 越後 田龍小史 諸橋

〈名は政弘。浅三郎と稱す。蒲原郡入蔵新田（旧下田村）の人。幼にして渡邊鐵崖に学び。鐵崖没後、新保西水に従つて遊ぶ。文章に長じ。新潟師範学校に挙げられ375。明治三十一年、四四歳で没した376。諸橋田龍、亦た勤王の士。而して當路の専横を慨し。後藤伯の為に政論を編輯し、排撃、餘力を遺さず。遂に以て罪を獲。繫獄年餘。憲法發布の大典に會うて特赦せらるる。當時、有司の言論を拘束する甚嚴、志士横禍、必ずしも異とするに足らず。而かも直論儻議、官威に屈せざる、尤も其の氣節を見る。是の一時、田龍傳中、必ず叙せざる可からず。377〉

### 六、杜鵑花 佐渡 溟北学人 丸山

〈圓山溟北のこと。本姓は小池。名は葆（しげる）。字は子光。通稱は三平。別号に与古為徒齋、赤川隱士など378。佐渡夷町（両津町の内）の人。三八歳で佐渡奉行所の儒官となった。明治二五年五月、七五歳で没379〉

### 七、杉田觀梅 越後 唵水漁史 清川

〈字は士厚。揚川と號す。別號唵水。北蒲原郡京ヶ瀬村深堀の人。明治四四・一九一一年一〇月、六九歳で没380〉

### 八、春感 越後 小櫟迁史 健部

〈建部小櫟のこと。名は令。通稱令藏。中蒲原郡横越村の人。青木青城に学び、後、新潟英語学校に学び、明治八年上京、大学予備門に入り転じて東京師範学校に学ぶこと四年、卒業の前年（明治一三年）退学を命じられて帰郷、新潟に寓し、尾崎行雄の後を受けて県會書記に任じられたが明治一四年六月、二五歳で没した381。『五峰遺稿』卷上に「建部小櫟佐佐木圖南讀予古街酒樓詩次韻見示乃疊韻卻寄」と題する七言律詩がある。〉

### 九、宝刀 全 寒翠山人 小林

〈諱を虎、字を炳文、通稱を虎三郎といった。別号、寒翠・雙松・病翁。長岡藩士。明治戊辰の役に非戦論を唱え、その後、長岡藩大参事となり、長岡の復興に参画し、三根山藩から贈られた米百俵を資金として、国漢学校を設立した。廃藩後、明治四年長岡を去つて上京し、明治一〇・一八七七年八月、五〇歳で没382〉

### 一〇、獄中作 全 松溪居士 雛田

〈名は中清・銘、一名は中清、字は士新、松溪と號し、我爲我堂主人の別号がある。一學は其の通稱、加茂の人。儒者。勤王家。明治一九年二月、六八歳で没383〉

### 一一、山間屋 越後 石牛窩主 銀田

〔詩僧。名は稔、字は大有、石牛また鴨背と號し別號百嬾生。南蒲原郡下条村光徳寺の住僧。蒲生娶亭の門に學び詩及び書を善くし、岡鹿門稱して北越第一とした。酒を嗜むこと甚だしく奇行頗る多かつた<sup>384</sup>。『新新文詩』第二集・明治一八・一八八五年六月、「醉歌行」〕

二二、過古戰場 佐渡 柳塘釣徒 小崎<sup>マヤ</sup>

〔小崎藍川の父、名は意正。柳塘と號す。文學あり。兼て學門所の事を司る。明治の初。辰巳浦の小監察に挙げられ。後ち新潟に出でて縣吏と爲る。温厚寡黙。亦た喜みて詩を賦し文を作る。少作稿一卷あり。<sup>385</sup>〕

二三、新潟竹枝 越後 鳩村處士 三浦

〔名は端。字は伯厚。通稱東作。鳩邨と號す。一號友竹齋主人。水原の人。菜亭の男<sup>386</sup>〕

一四、新潟雜詞 全 櫻坪居士 旗野

〔旗野櫻坪、名は正樹。字は士良。十一郎と稱す。北蒲原郡安田村保田の人。明治の初、參謀本部の編纂官となり、後、音楽学校講師たること十余年。明治四一年、五九歳で病没した<sup>387</sup>〕

一五、霧窪 佐渡 和菴主人 萩野

〔名は由之、号は和菴、和庵。佐渡相川町に生まれた。圓山溟北の弟子。学習院教授、東京高等師範学校、東京帝国大学教授他。大正一三（一九二四）年、六五歳没<sup>388</sup>〕

一六、寄懷鷗水用其与五峯唱和韵 越後 柳堤釣史 山際

〔名は操。字は清卿。新潟縣に官し。郡長より會計課長に轉じ。今また

農工銀行頭取たり。少時、予と同く大野煤華・森春濤先生に従遊す。春濤先生の北遊する。白山公園の旗亭に邀飲し。詩あり。爾後、一行吏と爲り。斯事竟に廢す。惜む可し<sup>389</sup>。『五峰遺稿』卷上に「春濤先生見過招同社友小集書樓山際柳堤有詩乃次其韻時辛巳立秋前一夕也」と題する七言律詩、「贈山際柳堤」と題する七言律詩がある。『新文詩』第五六集（明治一二年一二月）に「雜感」と題する七言絶句が掲載されている。〕

一七、寄人 全 一青山人 石黒

〔明治一四（一八八一）年九月の『新文詩』第七五集にある「作家姓氏」では、「一青 石黒弘二越後人」と記してある。『北越詩話』下卷<sup>390</sup>に「石黒一青・石黒北涯・堀鶴陰等、時時過從して詩酒の歡を盡くす。』『五峰遺稿』卷上に「散帙得郷友詩文披覽之後乃題五律」と題する七言律詩がある。〕

一八、寒夜 越後 窪陰野人 堀

〔名は敬聞、字は鳴天、鶴陰と號す。俗姓堀。中蒲原郡小合村小戸の人。高陰寺に住す。庚寅二月其訃報を聞く。年止だ三五<sup>391</sup>。『五峰遺稿』卷上に「散帙得郷友詩文披覽之後乃題五律」と題する七言律詩がある。〕

一九、雨中聞子規有感 全 烟塢釣侶 久住

〔名は秀策、烟塢また三洲と號した。旧与板藩士。藩医の子。柏崎県典事、若松裁判所判事、東京府一等屬、小石川区長、長野、沖繩、緒島の収税長を歴任。六〇歳で没<sup>392</sup>〕

二〇、入吉客舎中秋 越後 自笑山人 羽田野

〔名は文藏、一名文甫、字は彪卿、自笑と號す。北蒲原郡水原の人。初

め大野耻堂の塾に学び、七八年、東京に出て師範学校に入り、卒業と共に督業訓導を以て熊本県に赴いた。後、郷に帰り尚ほ小学校に訓導を勤めた。明治二二年五月、三八で没<sup>393</sup>。『五峰遺稿』巻中に「過外城湖憶亡友田自笑」と題する七言絶句がある。

二二、九月十三夜自高田抵片街途中

雲濤逸史 水落

〈名は恭倩、字は良輔、雲濤・二顛と號し、元簡の子。伊勢桑名藩領袖崎の医家兼詩人。師は梅辻春樵。後桑名藩医。戊辰の變には桑名侯に従つて戦亂の裡を加茂に至り亂が平らいで帰った。明治八年八月、六三歳で没<sup>394</sup>〉

二三、躬耕 越後 頑竹居士 高橋

〈蒲原郡杉之森村（旧中之島町）の里正、高橋富春の子として生まれ、名ははじめ正庸、のち三寅、字を誠仲、通称を竹之介といった。竹之助とも。竹介と号す。別号、蘇門。文久三年七月、京都から山陽道をまわり、森田節齋・河野鉄兜等に会つて勤王の思想に影響された。戊辰戦争では松田秀次郎・室孝次郎らと方義隊を結成、越後各地を転戦した。のち三条、長岡で私塾を開く。明治四二・一九〇九年一月、六八歳で没<sup>395</sup>〉

二三、幽室雜詩 全 烟波散人 高橋

〈名は武、字は利節、煙波と號す。北蒲原郡堀越村橋田（五泉市）の儒者。東京で塾を開く。明治一六年三月、三二歳で没<sup>396</sup>。『新文詩』第六〇集（明治一三年五月）に「苦吟」と題する七言絶句一首が載せられてゐる。〉

二四、歲晚書懷 越後 網亭學人 蒲生

〈名は重章。中蒲原郡村松の人、済助の従弟。幼時意贊後子闇。精菴（省庵）と號す。又網亭（契亭）、螻屈潛史、善諷子、青天白日樓主人等の號がある。漢学者にして医を業とす。師は多紀菑庭、加藤松齋。江戸組橋に開業。村松藩に仕えたが、家老と折り合いが悪く間もなく辞した。江戸に有為塾を開いた。明治元年政府の医学官員となり、昇進して少史となり、明治八年に修史局に入った。明治十年勤めを辞め、以後、教育と著述の生活を送った。明治三四年三月、六九歳で没した<sup>397</sup>。『新新文詩』十二集、明治一九・一八八六年四月、「送關口静岡縣令之任」七言古詩、『新新文詩』十四集、明治一九七月、「向陽廬銘」

二五、對酒 全 廉堂主人 高橋

〈名は恭、字は思道、通稱敬三郎、廉堂は其の號。北蒲原郡岡方村長戸呂の人。大野耻堂及び榎華の門に遊び、博覧宏識好んで、韜略を談じ、兼ねて擊劍を善くした。最も詩に長じ、奇思空涌、管を握れば千言立るに成った。然るに其の人物世俗と諧わず窮境に死んだ。年は三〇前後である<sup>398</sup>〉

二六、新潟客舎似長谷川某 全 鶯溪居士 野村

〈野村安之のこと。字は伯信。幼字俊次郎。鶯溪と號す。北蒲原郡中浦村吉浦の人。養拙の子<sup>399</sup>。明治四年坂口が十三歳の時、吉浦村の野村俊次郎（北蒲原郡中浦村大字吉浦村野村禧右衛門の長男で坂口の従兄に當る）の紹介で聖籠村諏訪山、大野耻堂の絆己樓に入學した<sup>400</sup>。『五峰遺稿』巻上に「讀野村鶯溪遺稿」と題する七言絶句がある。〉

二七、書懷 越後 鷗水漁長 水落

〈海軍軍医。柏崎の詩人雲濤の弟巢南の子。新潟医学校に学んで海軍に職を奉じ、明治一八年一月扶桑艦に乘組み熱病に罹って没した。年二八<sup>401</sup>『五峰遺稿』巻上に「次鷗水別後見寄韻」と題する七言律詩、「江樓秋夜同鷗水賦」と題する七言律詩がある。〉

## 二八、題春濤先生詩卷後

越後 秋山樵者 坂口

〈阪口五峰の弟<sup>402</sup>。名は義二郎。秋山と號す。後、南という苗字に変え、『五峰餘影』では、五峰について語っている。『五峰遺稿』巻上に「秋山弟東行 折一」と題する七言律詩がある。『五峰遺稿』巻中に「讀秋山弟修善寺雜詩次韻寄懷」と題する七言律詩二首、「秋山弟植松沙邱賦詩記事乃次其韻」と題する七言絶句、「寄懷秋山弟疊韻」と題する七言律詩がある。『新新文詩』十集、明治一九三月「鎌倉懷古」七言律詩『新新文詩』十一集、明治一九年四月、「修禪寺村雜詩」七言律詩二首〉

## 二九、(詩の題名無し)

佐渡 藍川釣侶 小崎

〈詩人。佐渡相川の人。名は懋、字は子敬、幼名伊太郎。明治の初め父に従って新潟に出で坂口五峯の詩社に参し森春濤に従い時に新潟新聞に筆を執り終に其の主筆となり雄麗の文藻、侃諤の論説を以て名声一時に揚がった。明治四三年二月、四八歳で没した。<sup>403</sup>『五峰遺稿』巻上に「小病無聊和小崎藍川見贈韻 時移居寄居村」と題する七言律詩、「寄居村舍雜詠次藍川養病詩屋原韻」と題する七言律詩四首、「古重陽招飲鳴鶴及彌岳藍川于公園旗亭」と題する七言律詩がある。『新新文詩』十四集、明治一九年七月、「水亭題壁」〉

## 三〇、歲晚雜感 原五 越後 五峯樵史 坂口

〈阪口五峰のこと。字は恭。通称仁一郎。五峰・山樵・七松山人と号し

た。中蒲原郡阿賀浦村に生まれ。聖籠町にある大野恥堂の絆己楼で約二年間勉強した。その後、何度も上京し、大野恥堂先生の長男・大野梅華の許に走った。中村敬宇の同人社に英語などを学び、明治一二年一二月に森春濤主宰する『新新文詩』に漢詩を掲載された。以降、森春濤・森槐南父子との交流が続く。明治三五年衆議院議員当選して以来当選八回に及んだ。新潟米穀取引所理事として勤務し、尚、新潟新聞社(今の新潟日報)の社長でもあった。大正一二年一月、六五歳で没した<sup>404</sup>。〉

## 『新潟才人詩』第二集 詩人の顔ぶれ

- 一、自題偉人傳複韵一格 網亭學人 重章(蒲生重章のこと)
- 二、秋懷 雲濤逸史 良輔(水落雲濤のこと)
- 三、滬上偶成 一青山人 弘(石黒一青のこと)
- 四、即事 和荈主人 和之(萩野和荈のこと)

## 五、送人之浪華

學海漁人 華

〈依田学海のこと。幕末明治期の漢学・文学者・演劇評論家。名朝宗、字百川、通称幸造、信造、七郎、右衛門二郎。学海と号し、明治後は百川を名とし、向島の別宅を柳蔭精廬と称した。江戸生まれの佐倉(千葉県)藩士。藤森弘庵に儒ならびに詩文を授かり、経世の意識も高まる。安政(慶応期は藩の中小姓、仮目付、郡代官、留守居役を歴任、大政奉還後は譜代藩として徳川慶喜の助命嘆願、あるいは藩主の恭順を政府に伝えるために関西、江戸間を奔走。維新後は藩公議人、権大参事。明治五(一八七二)年、東京会議所書記。同八年、太政官修史局(のち修史館)の編修に任ぜられるも重野成斎(安禪)派による川田甕江派排斥のため、同四年文部省音楽取調掛兼編輯局少書記官に転任。同一年非職、以後文

筆で糊口した。演劇改革に参与し、脚本『吉野拾遺名歌誉』など。日記は明治文壇史上、貴重な資料。『北越詩話』下巻405の「蒲生重章」の項目では、蒲生重章の小傳を撰したと。蒲生重章の友人である。一八三四〜一九〇九。406)

#### 六、梅津途上

朔汀棹夫 玄益

〈若林朔汀のこと。通稱玄益、佐渡夷の人竹塙(通稱玄益、醫を業とし頗る經史に通ず)の子なり、其居を杏林堂と號す弱冠京師に遊びて醫を中山攝津守に、儒を大澤鼎齋に、詩を遠山雲如に学び郷に歸りて業餘子弟に教ゆ、明治十二年國會開設請願委員となり同十八年秋田藤十郎に勸めて汽船會社を創設し同二十八年三月歿。享年五四。407)

#### 七、贈醉石翁

鶴陰野衲 敬聞(堀鶴陰のこと)

#### 八、送別

梅華居士 誠(大野梅華のこと)

#### 九、足柄山吹笙

南陔老人 成章(丸岡南陔のこと)

#### 一〇、寒夜

修齋主人 篤太郎

〈原修齋のこと。名は雄・世雄、字は君量。一字子傑。又た公飛。通稱理一。修齋と號す。一號淡圃。柏崎の儒者。松洲の男。師は丹波思亭、朝川善庵。明治一〇年四月、六四歳で没。408)

#### 一一、寒夜

漁村窩夫 娶

〈渡辺漁村のこと。名は娶、字は美中、漁村と號し佐渡相川の人。圓山溟北の高弟。修教館の句詠師などしていたが、二五歳の時、新潟県に仕え、又収税属となり、小千谷、新発田などに歴任し、退職した後、明治三三年ごろ、当時の勝間田新潟県知事の推挙で、旧制新潟中学に漢文の

先生として勤務した。漢詩に秀でていて、勝間田知事はじめ阪口五峰らとも親交があり、佐渡では小崎藍川・大久保湘南らが、その教えを受けたとされる。鬻師。大正三年八月、六一歳で没した。409)

#### 一二、椽尾股温泉雜詩 録一

自快醉士 嘉三

〈畠山甕田のこと。名は萊、字は基卿、通稱嘉三、甕田は其の號である。中蒲原郡龜田の名族。青木青城に学び、明治一三年最初の郡會議員に挙げられ、同儕のために推されて改進黨に属し自由黨に抗した。後、肺を患つて東京に療養中、新潟新聞社長に懇望され、歸つて職に就いたが、明治二五年一月、四三歳で没した。410)

#### 一三、春夜

醉月閒人 恪太郎

〈林醉月のこと。名は恪、字は士勤。新關村船越の人。郷の右族なり。壬申秋。岡本黄石翁、將に五泉に遊ばんとす。東道人なし。予爲めに醉月に屬す。醉月、周旋甚だ力む。後ち翁、予に語りて曰く。醉月、温良善く客を待す。老夫未だ懷に忘るゝ能はず。眞に有心人なりと。(中略)醉月、城川に後るゝ数歳にして歿す。411『文海一珠』にその詩がある。岡本黄石が五泉に来訪する時期は、『五峰遺稿』卷上「贈岡本黄石翁」と題する七言絶句二首連作を参考にしたい。作詩年は壬申ではなく、甲申秋だと推測できる。)

#### 一四、次五峯見贈韵

柳堤釣史 操(山際柳堤のこと)

#### 一五、柳橋酒樓別水野櫻雨

鷗水漁長 璋(水落鷗水のこと)

#### 一六、鴨東雜咏 録一

澹處處士 金八郎

〈児玉淡処のこと。村上藩士児玉伝兵衛の長男として生まれ、幼名を金七郎といった。大正八（一九一九）年七月、八四歳で没した。412〉

### 一七、春晚

嵐泊漁史 相資

『五峰餘影』413三三頁によれば、大桃相資のことだと思われるし、明治一六（一八八三）年八月三〇日の『新潟新聞』に「賦贈王黍園先生、次其近作韻」と題する七言律詩二首があり、その著者のところでは、「嵐泊 大桃相資」と記してある414。『北越詩話』によると、苗字は長谷川であり、字は嵐泊である。当時、鷗鷺会のメンバー415の一人である。

### 一八、寄題梅花書屋

栗江漁人 恒

〈児玉恒のこと。新潟の人。清人・王黍園が新潟に旅する話では、明治一六年の九月一二日ごろに、新津・保田方面へと足を延ばしている。新津に泊まり、児玉栗江（恒）なる人物に招かれて贈答した詩が、『新潟新聞』の九月一六日号と九月二三日号とに載っている。詩題は「癸未秋日客次新津、児玉栗江詞兄招飲、賦此以贈」、署名は「清客 王黍園」となる。同九月二三日の『新潟新聞』に「招飲黍園王君」と題する七言絶句がある。著者は「栗江 児玉恒」と記してある416。〉

### 一九、八木巖

石牛窩主 稔（銀田石牛のこと）

### 二〇、鵬尾貧甚詩以紀愆

松溪居士 中清（雛田松溪のこと）

### 二一、鎮西雜詩 録四

煙波釣侶 武（高橋煙波のこと）

### 二二、秋感三首次呉穀人韵 録一

鶯溪漁客 安之（野村鶯溪のこと）

### 二三、大野耻堂先生壽詞

北涯處士 巖

〈石黒北涯のこと。医家。漢詩人、名は巖、字は深藏、初め節齋と號

し後北涯と號した。新発田藩医。明治三六年二月 六六歳で没417 『五峰遺稿』巻上に「散帙得郷友詩文披覽之後乃題五律」と題する七言律詩がある。〉

### 二四、癸未中秋与王黍園飲綠樓酒間次黍園韵 城南釣侶 石太郎

〈安孫子城南のこと。名は石、字は頑夫、通称石太郎、城南は其の號。北蒲原郡水原町の人。少時、業を大野恥堂先生に問い、後ち東京に遊び。安井息軒の門に學ぶこと二年。その後、上京し、敬宇中村氏の同人社に入る。帰郷後、町長、郵便局長となり令聞があつた。明治三九年、五六歳で没した。418〉

### 二五、初夏雜咏

翠溪漁客 恒四郎

〈田崎翠溪のこと。北蒲原郡笹岡村大室の人。名は恒久。字は士道。通称恒四郎、翠溪は其の號。大野耻堂門下、詩を善くした。大正の初め没した。419〉

### 二六、冬夜

鏡雨道人 雲宗

『五峰遺稿』巻上に「同僧鏡雨過永明寺看花 戊寅」と題する七言絶句がある。『新文詩』第九三集（明治一四年一〇月）の作家姓氏によると、「鏡雨 伊藤雲宗 越後人」と書かれている。「次蘆參道人見和原韵」と題する七言絶句が掲載されている。その詩評に「春濤曰老夫酷喜此種之诗情一缕愁一脉妙在不説破」と叙述している。〉

### 二七、塩澤賦長歌以贈

杏塙漁人 逸

〈鈴木逸のこと。字は士海。一字正卿。通称順丈。初め復堂と號す。後杏塙と更む。一號古柳。新潟の人。杏塙醫業の暇。文學を好み。妙齡に

して名を知らる。寺門静軒、新潟に遊ぶ。杏塢従うて業を問ふ。静軒特に其詩を賞し。才子の目あり。江戸に遊び。小野湖山・大沼枕山諸老を歴訪して益を請ひ。詩益々工なり。明治の初。南魚沼郡人の請に赴き。鹽沢病院に長たり。(中略) 壬寅三月に六五歳で没した。<sup>420</sup>

## 二八、送坂口秋山游東京

### 城川小漁 澄

〈武者城川のこと。儒者。名は喜澄、字は公澄、一字鏡如、城川は其の號で、村松藩士喜記の子である。書齋の名前は「寒燈夜讀書屋」。一三歳で助教に擢でられた。更に新潟師範学校を卒業して小学教育に従事したが、程なく辞し水哉学舎を設け経史を講じ詩文を授けた。明治一五・一八八二年秋、春鷗吟社に参加した。又、嘯月社を創め、月刊文海一珠を發行し、同人の詩を採録し、十八、九集まで至ったが、過度の勉強で、明治二三年一月、三〇歳で没した。<sup>421</sup>『五峰遺稿』卷上に「和武者城川寒燈夜讀書屋原韵」と題する五言絶句六首がある。『五峰遺稿』卷中に「武者城川示近世四名家墨蹟乃題各首」と題する五言古詩四首がある。『新新文詩』二集、明治一八年六月、「夜坐偶作」、「新新文詩」十二集、明治一九年五月、「新津寓樓次韻」五言律詩二首、『新新文詩』十一集、詩餘「漁歌子 閨情」、「新新文詩」詩餘「如夢令 春閨」。〉

## 二九、新秋夜坐

### 玉峯樵史 元

〈野崎元のこと。名は元。字は士亨、玉峰と号す。本姓玉井、中蒲原郡早通村の人、新潟市沼垂に住す。師は寺田小陶。明治一五年、二一歳で没した。<sup>422</sup>『五峰遺稿』卷上に「題玉峰小稿後四首 折二」と題する七言絶句二首がある。〉

## 三〇、雨中過川中島懷不識庵慨然有作

### 秋山樵者 義 (坂口秋山の

こと)

## 三一、養病詩屋雜述

## 三二、治園

藍川釣侶 懋 (小崎藍川のこと)  
五峰居士 恭 (坂口五峰のこと)

<sup>1</sup> 岡村浩「坂口五峰」としての文人像 『坂口安吾生誕百年祭 坂口五峰を中心とする文人の魅力』二〇〇六年一〇月 一六五頁以下のような説明がある。「安吾は(坂口)。兄の献吉は父の追悼録『五峰餘影』(S4刊)編集の奥付に、(坂口献吉)と名乗っているが、他殆ど(坂口)姓を用いた。一方、父親の仁一郎は代表著作『北越詩話』(下巻・T8刊)の署名をはじめ、今日みる遺墨はほぼ(坂口)姓を用いている。この度、多面的なその足跡の中でも特に文人たる事蹟に注目し顕彰の記録を留めようと試みるもので、したがって本姓は(坂口)だが、敢えて(坂口)姓を本企画では使用する次第である。」

<sup>2</sup> 坂口安吾「石の思ひ」『坂口安吾全集4』筑摩書房 一九九八年 二五一頁

<sup>3</sup> 「五峰」は坂口安吾の父親・坂口仁一郎の号である。

<sup>4</sup> 岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山」『』『新潟大学教育人間科学部紀要』(第一巻第一号 一九九八年九月)三九頁

<sup>5</sup> 岡村浩「坂口五峰」としての文人像 『坂口安吾生誕百年祭 坂口五峰を中心とする文人の魅力』二〇〇六年一〇月 一六五頁

<sup>6</sup> 大野耻堂 名は神。字は垂卿。通称は敬吉。別号に脩斎。越後新発田藩に仕える。丹羽思亭に学び、私塾紳己楼(はんきろう)を開く。のち藩学教授。尊王攘夷を唱えた。著作に「国体論」「神風実記」など。江戸後期〜明治時代の儒者。

<sup>7</sup> 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 一〜六頁

<sup>8</sup> その全詩は以下の通りである。  
中原還逐鹿 投筆事戎軒  
縦横計不就 慷慨志猶存  
杖策謁天子 驅馬出關門  
請纓繫南粵 憑軾下東蕃  
鬱紆陟高岫 出沒望平原  
古木鳴寒鳥 空山啼夜猿  
既傷千里目 還驚九折魂  
豈不憚歎險 深懷國士恩  
季布無二諾 侯嬴重一言  
人生感意氣 功名誰復論

<sup>9</sup> 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一八二頁  
<sup>10</sup> 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』一九二九年 七三二〜七三三頁 以下のように書かれている。

同塾にては毎月六次詩會を催し、塾生をして研磨せしむることを例として居った。坂口氏は始め耻て五言絶句一首を作り先生に呈すれば、先生頗に激賞し屢々同人の座に推奨せらるゝより氏は小供心にも大に喜び益々詩に心を傾くるに至った。…大野耻堂先生は大野南八氏の祖父にして、下越に帷を垂れ郷黨子弟の教育に當られた名士で、上越に藍

澤南城氏あり、下越に大野恥堂氏ありと云はれた。博覧強志の篤學者で塾を絆己樓と云ひ寄宿生數十人に及び藩士及び近隣の子弟の通學する者を加ふれば百人を超ゆと稱せられて居つた。大野先生は色温にして氣嚴なり、故に子弟皆敬ひして之を畏れた。塾則尤も嚴重を極め、亥に臥し寅に起るを例となし、躬行實踐塾生を率ゐる風雨寒暑と雖も廢せず、毎早朝中原復た鹿を逐ふの詩を朗吟して塾舎に臨まるゝので、塾生は吟聲を聞けば袋を蹴つて起ち、課に就き課畢り始めて朝食を取ることゝなつてゐたが、先生も常に生徒と飲食を同ふせられた。阪口氏は嚴肅なる此塾に入り親しく恥堂先生の教訓を受けた

1 阪口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 四〇五頁

2 『全唐詩』にある詩題は「山中問答」である。

3 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一四頁以下のような叙述がある。

阪口の元の家屋敷は甚だ手狭であつたから(今の太郎吉のところがそれである)村端れに三反歩ばかりの宅地を求め、家は村松藩藩主の隱宅を移し(今の大安寺小學校は舊宅を直したのだ)二三年もかゝつたと思ふが、阪口の十五歳の春に出來上つて一家皆引移つた。此の春坂口は絆己樓を退學した。

4 大野梅華 字は仲亨。号は睡虎、樸華。大野耻堂の長男。儒学を藤森弘庵に、劍術を伊庭軍兵衛に学ぶ。父の私塾絆己樓(はんきろう)で子弟を教え、のち江戸で春風館を開設した。維新後、太政官権大書記官、長野県令などを務めた。江戸後期〜明治時代の儒者・官僚。

5 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年「南義二郎氏談」一四〇〜一五頁

6 阪口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 五九八頁

7 阪口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』日清印刷株式会社 一九二五年 一丁オ

8 詩の全文は以下の通りである。

白酒新熟山中歸 黄雞啄黍秋正肥  
呼童烹雞酌白酒 兒女嬉笑牽人衣  
高歌取醉欲自慰 起舞落日爭光輝  
游說萬乘苦不早 著鞭跨馬涉遠道  
會稽愚婦輕買臣 余亦辭家西入秦  
仰天大笑出門去 我輩豈是蓬蒿人

上記の李白の詩の背景と大意は以下の通りである。

当時、李白は既に四二歳になり、その不惑の年を過ぎたとしても、玄宗皇帝からの謁見命令を受けたことにより、極めて喜んで、山中の我家に帰り、召使を呼んで鶏を烹させて(美味しい料理を作らせ)、白酒を飲み、親父が喜んでゐるのを見て、息子や娘たちは歌ったり、笑ったりしながら、親父の衣に取りすがる。天子のもとに自分の政見を述べることがやや遅かったのに苦しんでいたが、(今でも遅くない。)これから、鞭を執り馬に跨って長安への遠い道に旅立つことになった。お前も(自分の妻に対する)會稽の愚婦のように自分が出世することを軽蔑したが、余も朱買臣のようにまた家を去って西のかた長安に向かうのだ。天を仰ぎ大いに笑って門を出て行き、我輩は草深い田舎に埋もれてしまつてよい人物なものだろうか。本詩の創作背景と大意は以下のような文献を参照した。

小尾郊一『李白』中国の詩人 6 集英社 一九八二年 六六〜七〇頁

武部利男『李白』中国詩人選集第7巻 岩波書店 一九五八年 上巻 一二六〜一二八頁

青木正兒『李白』漢詩大系第八巻 集英社 一九八二年 五四〜五五頁

武部利男『李白』世界古典文学全集第27巻 筑摩書房 一九七二年 三五七〜三五八頁

1 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一六頁

2 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一七〜一八頁

3 明治四(一八七二)年、廃藩置県により米沢県が置かれた。明治五(一八七三)年、最後の藩主齊憲は、城内にあった上杉謙信の靈屋(御堂)を鷹山とともに合祀し上杉神社とした。

明治六(一八七三)年には城の建物が全て破却された。二の丸にあった藩の政庁はそのまま郡役所、町役場(後に市役所)として利用した。上記の内容は西ヶ谷恭弘編著『定本 日本城郭事典』秋田書店 二〇〇一年 三六頁を参照した。

4 碓氷峠(うすいとうげ)は、群馬県安中市松井田町と長野県北佐久郡軽井沢町との境にある日本の峠である。標高は約九六〇メートル、信濃川水系と利根川水系とを分ける中央分水嶺である。峠の長野側に降った雨は日本海へ、群馬側に降った雨は太平洋へ流れる。

5 もとは瀟橋を指す。長安の東にあることに因んで名付けられたからであるが、五峰の本詩では、東京の東にある吾妻橋のことを指している。

6 低く垂れ込める。

7 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一八頁

8 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一八〜一九頁

9 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一八頁

10 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 一九〜二〇頁

11 李白詩「登金陵鳳凰臺」に「二水中分白鷺洲」とあるのを踏まえている。

12 武田信玄の法号である。

13 中国古代の兵法家の孫子と呉子を指す。

14 武田信玄と上杉謙信を指す。

15 本詩後聯「雨過檐端殘雪墜 月升梅梢宿禽驚」と結聯後半「爲典春衣醉一場」にある「雨過」、「殘雪」、「梅梢」、「春衣」から見れば、明治九年春の作詩だと推知できる。

16 山際はこのように書いているが、五峰と山中耕雲が出会ったのは本節「二、二回目の上京」で前述した通り、二回目の上京時だと推知できる。

17 東京の墨田川・隅田川の異称。

18 今の東京都墨田区にある白鬚神社のことを指す。

19 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』麥書房 一九六六年 八二頁

20 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』麥書房 一九六六年 八二〜八三頁

21 阪口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 五九八頁

22 杜甫詩「小寒食舟中作」に「片片輕鷗下急湍」とあるのを踏まえている。

23 新潟県と群馬県の県境の谷川岳西麓一帯に源を発し、新潟県の魚沼地方を南から北へ向かつて貫流。長岡市東川口付近で信濃川と合流する。「魚沼を流れる川」が訛って魚野川となつたという説がある。かつては別名として上田川とも称した。

24 細矢菊治『図解にいがた歴史散歩』南魚沼『新潟日報事業社出版部 一九八三年 一一八頁以下のような解説が綴られている。

魚野川の川船が、いつころから運航するようになったのか、その起原は明らかではない。明応年(一四九五)五月、上杉房能が雲洞庵にあてて書いた船の使用を許可する文



書が伝わっていることから、室町時代には、すでに船が利用されていたのであろう。(中略)

江戸時代の初期、寛永十四年(一六三七)の記録に「河船は魚野川筋、六日町に胴高船四十八艘(荒瀬多く船滞有之に依り、小千谷迄城米四十二俵積定法と但書)浦佐に五十艘、小出島二十四艘(『南魚沼郡誌』)とある。廻米船というのは、魚沼郡の年貢米を川船に積んで新潟に送り、大船に積み替えて通路、江戸、大坂に運ぶのであった。魚野川を下る廻米船は、毎年四、五月ごろ、川が雪消えて増水した折を利用して、川筋から各組が日を定めて積み出したので、六日町・二日町・青木新田・五日町・九日町・浦佐の各河岸より船積みし、各組の目印の旗をなびかせて魚野川を下った情景は壮観であったという。

一般の川船は、六日町宿を遡上終点とし、江戸時代には定期的に発着が行われて、貨客の便に供した。江戸時代の末期には、常時運航する船が百隻あって、三国通りを通行する越後の諸大名や佐渡、新潟両奉行などは、六日町宿から乗船して魚野川を下った。また一般の旅客、貨物の輸送も活発で、にぎわったのである。

明治維新後は、廻米の廃止と荷車・馬車の発達に加え、明治中期以後の信越線開通で貨客は減り、さらに大正十年ごろになって上越北線の一部が開通した結果、通船の運航はことごとく廃されたのであった。

42 岡本黄石『明治文学全集62明治漢詩文集』筑摩書房 一九八三年「略歴」四二五頁 明治「七年から数度上京し」といった叙述もある。

43 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 七八一頁

44 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 五九八頁 「庚辰八月、予新潟に從る」と綴られている。「庚辰八月」は明治一三年の八月である。

45 全詩は以下の通りである。

娉娉袅袅十三余 娉娉袅袅 十三の余り

豆蔻梢頭二月初 豆蔻 梢頭 二月の初め

春風十里揚州路 春風 十里 揚州の路

卷上珠簾總不如 珠簾を巻き上げる總て如かず

46 原詩は以下の通りである。

落魄江南載酒行 江南に落魄し 酒を載せて行く

楚腰腸斷掌中輕 楚腰腸斷 掌中に軽し

十年一覺揚州夢 十年 一たび覚む 揚州の夢

贏得青樓薄倖名 贏ち得たり 青樓 薄倖の名

47 柏木如亭『詩本草』によれば、全詩は以下の通りである。

八千八水歸新瀉 八千八水 新瀉に歸し

七十二橋成六街 七十二橋 六街を成す

海口波平容湊船 海口 波平かにして 湊船を容れ

路頭沙軟受游鞋 路頭 沙軟くして 游鞋を受く

花顏柳態令人艷 花顏 柳態 人をして艶ならしめ

火脰霜螯著酒懷 火脰 霜螯 酒懷を著く

莫道三年留一笑 道う莫れ 三年 一笑に留まると

此間何恨骨長埋 此の間 何んぞ恨ん 骨 長に埋むるを

48 孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新潮社 二〇〇〇年 六九五頁

また、中津濱涉「劉禹錫の〈竹枝詞〉について」(『新国語研究』第一七号 一九七三年)を参照すると、中唐の詩人である劉禹錫(七七二〜八四二)が「永貞の政変」で政争に敗れ、長い流謫の生活を余儀なくされ、僻遠の地朗州(湖南省常德県)・連州(広東省連県)・夔州(四川省奉節県)に左遷された。特に、「建平」という唐の巫山県(夔州に属する)に在った時、その地に竹枝と呼ばれる民歌を聴き、その土地の人の代わりに新しい竹枝九首を七言絶句の形式として詠んだり、白居易と唱和したりして、その作は大変有名になり、民間の人々から伝わってきた。民間歌謡が劉禹錫の手で加筆され広がり、後の文人墨客から注目されるまでに至った。

49 揖斐高『江戸詩歌論』第二部 江戸漢詩の諸相の「第三章 竹枝の時代——江戸後期の風俗詩——」汲古書院 二〇〇一年 一五三〜一八二頁 参照。

50 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 三〇〜三一頁

51 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 三一頁

52 坂口安吾「石の思ひ」『坂口安吾全集4』筑摩書房 一九九八年 二五一頁

53 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 五峰追回録「その家計・その詩」二四三〜二四四頁。

54 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 「懐しき第二の父」二六六頁

55 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 「詩人としての五峰」一〇七頁

56 拙稿「漢詩人としての坂口五峰——「禪」に関する詩句を中心に——」『現代社会文化研究』第五五号 二〇一二年二月 二二〜二三頁

57 坂口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三二年 二四〜二五頁

58 一八八一年一月二七日出版届けで出版 森春濤『新潟竹枝』の発兌書肆新潟小林二郎である。一八八二年一月に出版『新潟才人詩』の編輯兼出版人でもある。

59 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 八七四頁 「名は成章。字は子煥。通稱傳藏・總四朗。號は南陔。師は藤木實齋。亦た相川の人。壯年、江戸に遊び。名家を歴訪す。藤森天山・田口江村・小野湖山・菊池三溪等、皆な其才を稱せり。世、溟北と併せて佐渡の二老と稱す。南陔遺稿三卷あり。予、溟北を識るに及ばざりしも。南陔数々越後に遊ぶ。因て忘年交を訂す。嘗て予が七松山荘に過ぎり。」

荒木常能『越佐書画名鑑』新潟県美術商組合 二〇〇二年 三二九頁

村島靖雄『越佐人名辞書』歴史図書社 一九七四年 五九六頁

長澤孝三『改訂増補漢文學者總覧』汲古書院 二〇一二年 四一九頁「明治一九年一月六二歳で没」

60 結城重男『雖田松溪 その詩と生涯』新潟日報事業社 二〇〇八年 一二五頁以下のような叙述がある。「また、漢詩の指導は得意としておりましたから、必要とあれば誰にでも懇切丁寧に教えて喜ばれました。例えば、坂口五峰は大安寺の我が家に松溪を招き、詩を習い、「益を得ること多し」と述懐しています。」

61 坂口献吉編輯兼発行『五峰遺稿(巻上)』日清印刷株式会社 一九二五年 七丁才

62 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 七六六頁

63 徳田武「大庭松斎——始めて知る人世兼除有るを——(上)」『明治大学教養論集』四〇〇号 二

〇〇六年一月 五六〇六一頁を参考にした。

64 坂口叡吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 二五〇三〇頁

65 劉禹錫詩「竹枝詞九首 并引」四首目にいう。

日出三竿春霧消

江頭蜀客駐蘭橈

憑寄狂夫書一紙

住在成都萬里橋

66 白居易詩「正月三日閑行」にいう。

黃鸝巷口鶯欲語 烏鵲河頭水欲銷

綠浪東西南北水 紅欄三百九十橋

鴛鴦蕩漾双双翅 楊柳交加万万条

借問春風來早晚 只從前日到今朝

67 坂口叡吉編輯兼發行『五峰遺稿(卷中)』 日清印刷株式會社 一九二五年 一九〇〜一九

68 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』 研文出版 二〇〇六年 「序章 春と憂愁―森

春濤―」一〜一七頁

69 坂口叡吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 三〇〜三一頁

70 岡本黄石『明治文学全集 62 明治漢詩文集』 筑摩書房 一九八三年 「略歴」四二四頁

71 坂口叡吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 二四二〜二四三頁

72 坂口叡吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 三〇頁 山際操が春濤「翁の來越

も、事實五峰君が東道の主人であつたのです。」と語っている通りである。また、石黒萬逸郎

編輯『有隣舎と其學徒』一宮高等女學校校友會 一九二五年 二五九頁では、春濤が來越した

ことについて、上記と同じような意味のことが述べられている。「新潟では坂口五峰の宅に寓

居した」とある。更に、岡本黄石『明治文学全集 62 明治漢詩文集』 筑摩書房 一九八三年 「明

治詩壇展望」三六七頁の森春濤の項目では、「明治十四年、新潟に遊ぶ。坂口五峰の斡旋なり。」

と記してある。そのすべてからは、五峰は森春濤の來潟に対する大歓迎の氣持ちや恩師を地元

まで迎えるのが待ち遠しい様子が感じられる。

73 坂口叡吉編輯兼發行『五峰遺稿(卷上)』 日清印刷株式會社 一九二五年 八丁才

74 山際操のことで、「柳堤」はその号である。

75 王陽明詩「遊通天巖示鄒陳二子」にいう。

鄒陳二子皆好遊 一往通天十日留

候之來歸久不至 我亦乘興聊尋幽

巖扉日出雲氣浮 二子晞髮登巖頭

谷轉始聞人語響 蒼壁杳杳長林秋

嗒然坐我亦忘去 人生得休且復休

採芝共約陽明麓 白首無慚黃綺儔

76 坂口叡吉編輯兼發行『五峰遺稿(卷上)』 日清印刷株式會社 一九二五年 八丁才〜八丁

ウ 7 蘇軾詩「病中游祖塔院」にいう。

紫李黃瓜村路香 烏紗白葛道衣涼

閉門野寺松陰轉 欹枕風軒客夢長

因病得閑殊不惡 安心是業更無方

道人不惜階前水 借與匏樽自在嘗

78 陸游詩「六月二十四日夜分夢范至能李知几以尤延之同集江亭諸公請予賦詩記江湖之樂詩成

而覺忘數字而已」にいう。

露筍霜筠織短篷 飄然來往淡煙中

偶經菱市尋溪友 却揀葦汀下釣筒

白菡萏香初過雨 紅蜻蛉弱不禁風

吳中近事君知否 團扇家家畫放翁

79 その引の部分は森春濤に関する資料や先行文献の中、よく引用され、紹介されている。少

なくとも、石黒萬逸郎編輯『有隣舎と其學徒』一宮高等女學校校友會、一九二五年二月二

五五頁、横田天風「明治の清新詩派森春濤先生(一)〜(五)」『東洋文化』第三八号〜第四〇

号、一九二七年六月〜一九二七年一〇月、今関天彭「森春濤(下)」『雅友』第三六号 一九

五八年四月、揖斐高の二篇の論文中も、紹介している。

80 白居易著 朱金城箋注『白居易集箋校』 上海古籍出版社 二〇〇八年 卷四五 書序

(五冊目)二七九五頁

81 市野沢寅雄『滄浪詩話』 明德出版社 一九七六年 二九〜三〇頁 郭紹虞校釋『滄

浪詩話校釋』人民文学出版社 一九八三年 一頁を参考にする。

82 その書き下し文は以下の通りである。(それ学詩者、識を以て主となす。入門すべからく正

しかるべく立志すべからく高かるべし。漢魏晋盛唐を以て師となし開元天宝以下の人物となら

ず。もし自ら退屈すればすなわち下劣詩魔その肺腑の間に入るあり。立志の高からざるに由る

なり。(後略)

83 劉禹錫詩「春日書懷寄東洛白二十二楊八二庶子」にいう。

曾向空門學坐禪 如今萬事盡忘筌

眼前名利同春夢 醉裏風情敵少年

野草芳菲紅錦地 遊絲撩亂碧羅天

心知洛下聞才子 不作詩魔即酒顛

84 韓偓詩「送人兼官入道」にいう。

仙李濃陰潤 皇枝密葉敷

俊才輕折桂 捷徑取紆朱

斷繼三清路 揚鞭五達衢

側身期破的 縮手待呼盧

社稷俄如綬 雄豪詎守株

忸怩非壯志 擺脫是良圖

塵土留難住 纓綬棄若無

冥心歸大道 回首笑吾徒

酒律忘難忘 詩魔未肯徂

他年如拔宅 爲我指清都  
韓偓詩「殘春旅舍」にいう。

旅舎殘春宿雨晴 恍然心地憶咸京  
樹頭蜂抱花鬚落 池面魚吹柳絮行  
禪伏詩魔歸淨域 酒衝愁陣出奇兵  
兩梁免被塵埃汚 拂拭朝簪待眼明

85唐 馮贇撰『雲仙雜記』（四部叢刊統編子部）卷之七 「焚杜甫詩飲以膏蜜」上海書店 一九八四年

86『清廿四家詩』と『清三家絶句』に関する先行文献は以下のものを参考にした。日野俊彦『清廿四家詩』について『成蹊國文』第四三三号 一〇一〇年三月 一三二―一四〇頁。新井洋子「森春濤編『清三家絶句』について」『二松』第一九集 二〇〇五年 二五三―二七六頁。

87坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿（巻上）』日清印刷株式会社 一九二五年 八丁ウ  
88一八八二年一月の『新潟才人』第一集と 一八八五年二月の『新潟才人詩』第二集の編輯兼出版人でもある。

89入谷仙介 揖斐高 大谷雅夫 山本芳明 宮崎修多 杉下元明校注『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 八八頁  
90日野俊彦『森春濤の基礎的研究』汲古書院 『第六章 春濤と清詩』 二〇一三年 二七頁

91入谷仙介 揖斐高 大谷雅夫 山本芳明 宮崎修多 杉下元明校注『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 八九頁

92今關天彰「森春濤（下）」『雅友』第三六号 一九五八年四月 二〇頁  
93王士禎の号は阮亭・漁洋山人である。

94揖斐高「森春濤小論」『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 四三九頁。

95入谷仙介 揖斐高 大谷雅夫 山本芳明 宮崎修多 杉下元明校注『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 八九頁

96市野沢寅雄『滄浪詩話』明德出版社 一九七六年 二二―二五頁  
97近藤春雄『日本漢文学大系』明治書院 一九八五年 六五九―六六〇頁などを参考に

する。

98揖斐高「森春濤小論」『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 四三七頁 その次に、以下のように分析してある。「竹枝というのは、男女間の艶情を交えつつ、その土地の風景や風俗を詠む抒情的風俗詩とでもいうべき詩体であるが、『春濤詩鈔』巻頭に置かれる、春濤十五歳の天保四年に詠まれた「岐阜竹枝二首」以来、春濤はその生涯にわたって竹枝を詠み続けた。そもそも、医師修業の当初、春濤が男女の哀情を主題にすることが多い浄瑠璃に耽溺したという伝記的な事実と、春濤の漢詩の初作が竹枝であったということとは無縁ではない。おそらく、この両者に共通する艶治哀切な情趣への嗜好は、春濤生来の性向によるものであったと見るべきであろう。」  
99大江敬香の「明治詩家評論」（岡本黄石『明治文学全集 62 明治漢詩文集』筑摩書房 一九八

三年 三四〇頁）でも、揖斐高の「明治漢詩の出発―森春濤試論―」（『江戸文学』（特集 明治十年代の江戸）二一―二二頁）一九九九年二月 二二頁）でも、触れている。

100小野長恩著『湖山近稿』下 出版人森春濤 一八七七年 二二丁ウ  
101韓偓著 陳繼龍註『韓偓詩註』學林出版社 二〇〇一年 「前言」七頁に以下のような叙述がある。「韓偓生前寫了不少艶詩、而且行成了自己的風格。這些艶詩被人稱作「香奩體」、其內容主要是寫男女相思戀情（後略）」

102小川環樹著 吉川幸次郎 小川環樹編集・校閱『唐詩概説 中国詩人選集別巻』岩波書店 一九五八年 八七―八八頁 参照  
103孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新潮社 二〇〇〇年 一八二頁  
104孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新潮社 二〇〇〇年 三一〇頁

105鈴木虎雄『支那詩論史』第五章 性靈の説を論ずの「十、隨園の諸派に對する攻撃」の「二、附 隨園と艶詩」二二八―二二九頁に以下のような説明がある。  
「隨園が「關雎」の詩を艶詩なりといふは強辯なり。（中略）孔子は詩經中に多く情歌を存せり。（中略）詩經以後、古詩十九首中の或者、後漢及魏、並に情歌の艶なるものあり、而して謂はゆる艶詩宮體は梁の蕭綱簡文帝徐擒父子に至りて其名あり。是れ男女相思の情を誠實にうたふといふより、閨房に關する題目を設け遊戯的に綺艶なる文字を弄するに傾けり。唐には元、白、温、李、及び韓偓あり、偓に香奩集あるを以て香奩體の稱ある即ち艶詩なり。偓に至り益々遊戯となるも未だ甚しく品格を失墜するに至らず。後世之を學ぶものは往往流れて浮薄鄙褻に入る。」

106『新文詩』第八六集にある「新斥秋詞」二首  
珠簾映水蘸新涼 画簾揺秋趁夕陽 一半小橋絲柳影 落巢鳥亦箇中藏  
樓臺宛在古江涓 暮笛吹愁上柳枝 欲往從之秋色遠 芙蓉花落美人祠  
槐南日前詩清麗中带諧謔可作浮浪子弟一箴後首凄婉中見性靈可當薄命美人一哭

107森槐南に「補春天傳奇」という戯曲がある。ヒロインは陳碧城であるが、登場人物の中にこの馮小青がいる。福井辰彦「森槐南と陳碧城―槐南青少年期の清詩受容について―」『国語国文』第七二卷 二〇〇三年八月を参照。

108坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿（巻上）』日清印刷株式会社 一九二五年 一一丁ウ  
109大皿・五種の辛物を盤に盛ったもの。元日に之を食せば、五臓の氣を通じ、健康を保つという。五辛菜のこと。

110（梁）沈約撰 楊家駱主編『宋書』卷六七 列伝第二七 一七七五―一七七六頁 又、（唐）李延壽撰 楊家駱主編『南史』卷一九 列伝第九 五四〇頁には同じ叙述がある。「太守孟顛事佛精懇、而為靈運所輕、嘗謂顛曰…得道應須慧業、丈人生天當在靈運前、成佛必在靈運後。」『顛深恨此言。』

111（後晋）劉昫撰 楊家駱主編『舊唐書』中華書局 一九七五年 卷一九〇上 列伝第一四〇上 文苑上 楊炯 五〇三頁

112水津有理「明治期における清詩受容について―同時代の文学として―」『対話と深化―の次世代女性リーダーの育成―魅力ある大学院教育―イニシアティブ平成一八年度活動報告書（海外研修事業編）』二〇〇七年三月 二八六―二八九頁。また、長澤規矩也著 長澤孝三編『和

刻本漢籍分類目録 増補補正版(汲古書院 二〇〇六年)を参照。

113 神田喜一郎『神田喜一郎全集』第八巻 同朋社 一九八七年 一六三頁〜一六四頁その初出は一九六七年に集英社から発行された漢詩大系22『清詩選』の「月報」である。

114 『清廿四家詩』と『清三家絶句』に関する先行文献は以下のものを参考にした。日野俊彦『清廿四家詩』について『成蹊國文』第四三巻 二〇一〇年三月 一三二〜一四〇頁。新井洋子『森春濤編『清三家絶句』について』『二松』第一九集 二〇〇五年 一五三〜一七六頁。

115 今關天彰『森春濤(下)』『雅友』第三六号 一九五八年四月 二〇頁。

116 揖斐高「明治漢詩の出発」森春濤試論(特集 明治十年代の江戸)『江戸文学』巻二二 一九九九年二月 一五〜一六頁。また、揖斐高「森春濤小論」『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』 岩波書店 二〇〇四年 四三七頁 以下のように分析してある。「竹枝というのは、男女間の艶情を交えつつ、その土地の風景や風俗を詠む抒情的風俗詩ともいべき詩体であるが、『春濤詩鈔』巻頭に置かれる、春濤十五歳の天保四年に詠まれた「岐阜竹枝二首」以来、春濤はその生涯にわたって竹枝を詠み続けた。そもそも、医術修業の当初、春濤が男女の哀情を主題にすることが多い浄瑠璃に耽溺したという伝記的な事実と、春濤の漢詩の初作が竹枝であったということとは無縁ではない。おそらく、この両者に共通する艶治哀切な情趣への嗜好は、春濤生来の性向によるものであったと見るべきであろう。」

117 孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新潮社 二〇〇〇年 六九五頁。また、中津濱涉「劉禹錫の(竹枝詞)について」『新国語研究』第一七号 一九七三年)を参照すると、中唐の詩人である劉禹錫(七七二〜八四二)が「永貞の政変」で政争に敗れ、長い流謫の生活を余儀なくされ、僻遠の地朗州(湖南省常德県)・連州(広東省連県)・夔州(四川省奉節県)に左遷された。特に、「建平」という唐の巫山県(夔州に属する)に在った時、その地に竹枝と呼ばれる民歌を聴き、その土地の人の代わりに新しい竹枝九首を七言絶句の形式として詠んだり、白居易と唱和したりして、その作は大変有名になり、民間の人々から伝わってきた。民間歌謡が劉禹錫の手で加筆され広がり、後の文人墨客から注目されるまでに至った。

118 揖斐高『江戸詩歌論』(第二部 江戸漢詩の諸相)の「第三章 竹枝の時代——江戸後期の風俗詩——」 汲古書院 二〇〇一年 一五三〜一八二頁 参照。

119 王士禎の号は阮亭・漁洋山人である。

120 揖斐高「森春濤小論」『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 四三九頁。

121 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 二五〜二八頁。

122 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 五峰追回録「その家計・その詩」二四三頁。

123 蔣祖怡 陳志樞主編『中国詩話辞典』 北京出版社 一九九六年 七二六〜七二八頁。

124 近藤光男『漢詩選』 清詩選 集英社 一九九一年 二七頁を参照。大意は、先生がいわれた、

125 金谷治訳『論語』 岩波書店 一九九一年 二七頁を参照。大意は、先生がいわれた、

「詩経の三百篇、ただ一言で包みこめば、『心の思いに邪なし。』」

126 小林二郎編纂『新鴻才人詩』第二集 一八八五年 八丁ウ。

127 王士禎は山東省新城の出身であり、王新城と呼ばれている。

128 趙爾巽等撰『清史稿』第四四冊 中華書局 一九七六年〜一九七七年 一三三八四頁。

129 胡伝准『張問陶年譜』 巴蜀書社 二〇〇五年 三〇頁と「年譜」。

130 近藤光男『漢詩選』 清詩選 集英社 一九九七年 三二五頁。

131 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』 遼寧大学出版社 一九九八年 三〇九〜三三〇頁。

嚴迪昌『清詩史』上、下 五南圖書出版有限公司 一九九八年 「第七章 乾嘉詩人譜(下)」第四節 「性靈」後勁張問陶 九二六〜九三四頁。

張問陶『船山詩草』 中華書局 一九八六年 二〜三頁などを参照。

132 王運熙 顧易生主編『中國文學批評通史』 清代卷 上海古籍出版社 二〇〇七年 五二三頁。

133 王運熙、顧易生主編『中國文學批評通史』 清代卷 上海古籍出版社 二〇〇七年 五二三頁。

134 張問陶『船山詩草』 中華書局 一九八六年。「佛前飲酒浩然有得」は『船山詩草』巻五に収録されている。『船山詩草』の出版説明によれば、巻一を除き、巻二から巻二〇まで、編年体で編集されている。

135 『船山詩草』巻四「有感」の自注に「予殿試名居最後。」とあるのに拠る。

136 新村出『広辞苑』第五版 岩波書店 一九九八年 九〇四頁を参照。

137 『南史』列伝凡七十巻 巻七十五 列伝第六十五 隱逸上 陶潛 一八五九頁。

138 鈴木虎雄『支那詩論史』 弘文堂書房 一九二五年 二二一頁。

139 鈴木虎雄『支那詩論史』 弘文堂書房 一九二五年 二二六〜二二〇頁。

140 坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』 日清印刷株式会社 一九二五年 一五丁オウウ。

141 唐 馮贄撰『雲仙雜記』(四部叢刊續編子部)巻四 「祭詩以酒脯」 上海書店 一九八四年。

142 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』 遼寧大学出版社 一九九八年 三二五〜三一七頁。

143 森春濤編『清三家絶句』 茉莉詩店開雕 一八七八年 巻一 二丁ウ。

144 袁枚『子不語』巻五「奉行初次盤古城案」に「王曰天地無始無終。有十二萬年。便有一盤古。」とあるのを踏まえる。

145 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』 遼寧大学出版社 一九九八年 三二六〜三一七頁。

146 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 三〇〜三一頁。「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」の「田邊碧堂氏談」による。

147 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版 巻四 大修館書店 一九九六年 五八一頁を参照。庶吉士(しよきつし)は「官名。明の太祖、書經立政の庶常吉士の義に則って庶吉士を置く。

始め各署に分設したが、永樂中、翰林院に專屬した。進士の文學に優れた者、及び書を善くする者、を以て之に任ず。清、之に因つて庶常館を置き、翰林官を以て教習とし、三年間修養せしめ

た後、試験を経て職を授く。之を散館といふ。」

148 拙稿「漢詩人としての阪口五峰——「禪」に関する詩句を中心に——」『現代社会文化研究』第五五号(二〇一二年二月)では、本詩の第五、六句を取り上げたので、ここでは、より

詳細な注及び分析をしたことをお断りしておく。

149 賈島は「僧推月下門」の句を得たが、「推」を改めて「敲」にしよいかと迷って韓愈に問  
い、「敲」の字に決めたという故事で有名である。

150 唐 馮贄撰『雲仙雜記』（四部叢刊續編子部）卷四 「祭詩以酒脯」 上海書店 一九八  
四年。

151 拙稿「漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」『現代社会文化研究』  
第五五号）二〇一二年一月 二五頁。

152 坂口献吉編輯兼発行『五峰遺稿（上）』 日清印刷株式会社 一九二五年 二〇丁ウ〜二  
〇丁ウ

153 王李とは、明代の王世貞、李攀龍の併称である。

154 優孟衣冠とは、優孟の衣冠（ゆうもうのいかん）…外形をまねること。見た目はそっくり  
でも、実体は異なっていること。『史記』（列伝七〇卷 二二六卷 滑稽列伝第六十六 優孟  
に、優孟という春秋時代の楚（そ）の芸人、「楚の宰相（さいしよ）孫叔敖（そんしゆく）  
の死後、その子孫は貧困に苦しんでいた。そこでかつて孫叔敖に世話になっていた優孟は、  
孫叔敖になりすまして王に会い、孫叔敖の業績と子孫の不遇を訴えた。王は、その子孫に領地  
を与えた」という話がある。

155 趙爾巽等撰『清史稿』第四四冊 中華書局 一九七六年〜一九七七年 一三三八三頁 袁  
枚、字子才、錢塘人。幼有異稟。年十二、補縣學生。弱冠、省叔父廣西撫幕、巡撫金鉞見而異  
之、試以銅鼓賦、立就、甚瑰麗。會開博學鴻詞科、遂疏薦之。時海內舉者二百餘人、枚年最少、  
試報罷。乾隆四年、成進士、選庶吉士。改知縣江南。歷溧水、江浦、流陽、調劇江寧。時尹繼  
善爲總督、知枚才、枚亦遇事盡其能。市人至以所判事作歌曲刻行四方。枚不以吏能自喜、既而  
引疾家居。再起發陝西、丁父憂歸、遂牒請養母。卜築江寧小倉山、號隨園、崇飾池館、自是優  
游其中者五十年。時出游佳山水、終不復仕。盡其才以爲文辭詩歌、名流造請無虛日、詠諧詼蕩、  
人人意滿。後生少年一言之美、稱之不容口。篤於友誼、編修程晉芳死、舉借券五千金焚之、且  
恤其孤焉。天才穎異、論詩主抒寫性靈、他人意所欲出、不達者悉爲達之。士多效其體。著隨園  
集、凡三十餘種。上自公卿下至市井負販、皆知其名。海外琉球有來求其書者。然枚喜聲色、其  
所作亦頗以滑易獲世譏云。卒、年八十二。

156 近藤光男『漢詩選 14 清詩選』 集英社 一九九七年 二六六頁

157 坂口献吉編輯兼発行『五峰遺稿（上）』 日清印刷株式会社 一九二五年 一九丁ウ〜二  
〇丁ウ

158 阪口五峰『北越詩話』 國書刊行會 一九九〇年 上卷「北越詩話 例言」二〜三頁

159 郝樹侯選注『中国古典文学読本叢書 元好問詩選』 人民文学出版社 一九九七年 九〜  
一九頁

160 袁枚の詩は七千首近く現存する。

161 『小倉山房詩文集』卷三 上海古籍出版社 一九八八年三月 五〇頁

162 坂口献吉編輯兼発行『五峰遺稿（上）』 日清印刷株式会社 一九二五年 一五丁ウ〜一  
六丁ウ

163 『小倉山房詩集卷一五 己卯』に収録されている。乾隆二四（一七五九）年、袁枚四三歳  
の時の詩作である。三八歳の時に官を辞して以降、生涯官職に就かなかつた。乾隆二〇（一七  
五五）年に一家全員で隨園に定住する。亡くなるまでずっと隨園で書籍を集め、詩・古文など  
を作り、著述に専念することになる。

164 魏晉時代に盛行した談論。老荘の空理を談じ、琴を弾き酒に耽り、放逸を事とした風俗を  
指す。竹林の七賢はその代表である。

165 嵇康の「七不堪」について触れたい。この「與山巨源絶交書」（『文選』卷四三）で列挙し  
た「七不堪」とは、嵇康にとって、仕途に入ると、我慢できないことが七つあるというものを  
指している。

その第一は朝寝坊がでなくなること。仕官になれば、門衛が起こしに来て、朝寝坊をさせな  
いことになる。

その第二は勝手に行動できなくなること。仕官になれば、今までのように琴を抱いて、吟を歌  
つたり、野原へ狩をしに行ったり、釣りに行ったりすることが、小役人から見守られるため、  
自由に動けなくなることになる。

その第三は礼服を着て、上官に挨拶をしなければいけないこと。なぜならば、短い時間で正座  
しても、痺れがきれて動けなくなるし、また、しらみが多い体質のため、体をいつも搔いてい  
る。そのため、綺麗な礼服を着て、上司に正座をし、几帳面に挨拶することなど我慢できなく  
なる。

その第四は筆無精な人であるため、書簡や公案などに対する返事を書かなければならないこと。  
無理に努力しても、なかなか長く返事を書き続けられないということ。

その第五は弔事に出席すること。世間では弔事に出かけるのは大切なことであるが、私は好ま  
ない。それが生まれながらの性質のため、なかなか治らない。無理に世の中に調子を合せても、  
本性と全く一致しないため、結局、過失もなく、功績もなしという無難な立場に成らないとい  
うこと。

その第六は俗人と一緒に居ること。そもそも俗人が嫌いであるため、仕官になれば、毎日、一  
緒に居るし、時々大勢の客人が一緒に来て、かまびすしい声だけではなく、嘔吐を催すような  
空気の中で、人を操る手段や技巧などが自分の目の前で、次々と展開される。それが我慢でき  
ないということ。

その第七は煩わしいこと。もともと、煩わしいことが嫌いだであるため、仕官になれば、公務で  
多忙になるし、俗世間の事柄が多く心に纏い付いてしまう。それが我慢できないということ。  
166 「二不可」とは、嵇康にとつて、仕途に入ると、してはならないことを指している。

その一は、世間の道徳に批判されること。なぜならば、私はいつも殷の湯王と周の武王を非難  
しているし、周公と孔子のことを軽蔑している。仕官になれば、以上のことをしてはならない  
ことになる。

その二は、本音を率直に吐き出すこと。なぜならば、私は剛直な性格のため、悪いことを憎み、  
直言するし、何かの事に遇ったら、直ぐに口に出してしまう。仕官になれば、こういうことを  
してはならないことになる。

167 『小倉山房詩集』卷二〇に収録している。巻頭に「丙戌、丁亥」と表記してある。「丙戌」  
は乾隆三二（一七六六）年であり、「丁亥」は乾隆三三（一七六七）年である。袁枚五〇歳と  
五一歳の詩作にあたる。

168 坂口献吉編輯兼発行『五峰遺稿（下）』 日清印刷株式会社 一九二五年 八丁ウ

169 拙稿「漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」『現代社会文化研究』  
第五五号）二〇一二年一月 二九〜三〇頁を参考にしていただきたい。五峰詩「梅花入室歌」  
では道家的な表現が使われている。その一方、張船山の『船山詩草』巻二に「樽檠」と題する

七言律詩がある。この後の三首目は「蟋蟀吟秋燕飛二首」がある。その引にあたる文章の中では、『南華』に言及し、「蟋蟀吟」に「渾沌鑿死三萬秋」とある。張船山一九歳の作詩であるため、早くから道家的な影響を受けているのがうかがえる。

170 福井辰彦「宮崎晴瀾と張船山」明治漢詩における清詩受容の一斑―『国語国文』第七一巻 第四号 二〇〇二年四月 九頁。

171 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 三〇〇〜三二頁。「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」の「田邊碧堂氏談」による。

172 『五峰遺稿』上巻に収録されている詩であるが、「禪」字の表現は違うが、タイトルは前の詩と同じである。つまり、同じ題目で作詩したのである。

173 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 一八〇〜一八一頁

174 前掲『五峰餘影』 一七九頁

175 阪口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』 日清印刷株式会社 一九二五年 五丁才

176 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 二四頁

177 『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 第四冊 卷二六 二二五九〜二二六〇頁

178 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版 卷一 大修館書店 一九九九年 四〇〜四一頁

① 禪にのがれる。浮世を脱出して禪に入る。僧侶の生活をする。② 禪をのがれる。酒をのんで、佛戒にそむき離れる。③ 禪のこと。

179 黄永武博士主編『杜詩叢刊』 台湾大通書局印行 一九七四年

180 『杜詩叢刊』の『杜詩詳註』清 仇兆鰲輯註 文史哲出版社 二二二頁 (前略) 持齋而仍好飲 晋非真禪、直迷禪耳。逃禪猶云逃墨逃楊是逃而非逃而入(後略)

181 『杜詩叢刊』の『分門集註杜工部詩(二)』宋 闕名集註 上海涵芬樓借南海潘氏藏宋刊本 七六五頁

『杜詩叢刊』の『刻杜少陵先生詩分類集註(五)』明 邵寶集註 明 一五九五年 吳周子文刊本 二〇四六頁

『杜詩叢刊』の『集千家註分類杜工部詩(二)』宋 徐居仁編 黃鶴補註 九七〇頁

『杜詩叢刊』の『唐李杜詩集(三)』明 邵勳編 明 一五四二年 無錫知縣萬氏刊本 台湾大通書局印行 八二九頁

『杜詩叢刊』の『纂註杜詩澤風堂批解(一)』朝鮮 李植批解 清 一六七九年 朝鮮李氏家刊本 一一九頁

『杜詩叢刊』の『草堂詩箋(千家注杜詩)(上)』宋 魯齋編次 宋 蔡夢弼會箋 廣文書局印行 一九七一年 四〇頁

『杜詩叢刊』の『欽定四庫全書 九家集註杜詩(一)』一〇九頁

182 森槐南『杜詩講義 下卷』 文會堂書店 一九二二年 六一三〜六一四頁

183 賈島は「僧推月下門」の句を得たが、「推」を改めて「敲」にしようかと迷って韓愈に問い、「敲」の字に決めたという故事で有名。

184 唐 馮贄撰『雲仙雜記』(四部叢刊統編子部) 卷四 「祭詩以酒脯」上海書店 一九八四年

185 辛文房撰『唐才子傳』 中華書局 一九九一年 卷九 「李洞」では、以下のような話がある。洞字才江雍州人諸王之孫也家貧險極苦至廢寢食酷慕賈長江遂銅寫島像戴之巾中常持數珠念賈島佛一日千遍人有喜島者洞必手錄島詩贈之叮嚀再四曰此無異佛經歸焚香拜之其仰慕一何

如此之切也然洞詩逼眞於島

186 高楠順次郎編『大正新脩大藏經』普及版 第一四卷『維摩詰所說經』姚秦三藏鳩摩羅什譯 大正新脩大藏經刊行會 一九八八年〜一九八九年

187 心が無念無想であれば、自ら真理に到達することが出来るという喩え。

188 『莊子』(應帝王)に「南海之帝爲儵、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌、儵與忽、時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善、儵與忽謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死。」

189 由旬とは、古代インドの距離測定単位である。一由旬は七マイルまたは九マイルとする。

190 仏教の世界観で、世界の中心にそびえ立つという高山。海中にあり、高さは八万由旬。

191 人名、匡衡のこと。匡衡は前漢の政治家、生没年不詳。『漢書』(卷八)匡張孔馬傳第五(一)に「無說『詩』、匡鼎來。匡說『詩』、解人頤。」という叙述がある。「匡衡鑿壁」の話で有名。

192 大乘仏教経典の一つで、サンスクリット本、チベット語訳と三種の漢訳(支謙訳、鳩摩羅什訳、玄奘訳)が現存する。一般に用いられるのは鳩摩羅什訳『維摩詰所說經』である。内容が強く経自体を受持し説誦することの功德を説くが、維摩経ではそういう面が希薄である。中インド、バイシャリーの長者ヴィマラキールテイ(維摩詰、維摩、浄名)が病氣になったので、釈迦が菩薩や弟子達に見舞いを命じるが、以前に維摩にやりこめられているため、誰も理由を述べて行こうとしない。そこで、文殊菩薩が見舞いに行き、維摩と対等に問答を行い、最後に維摩は究極の境地を沈黙によって示した。全編戯曲的な構成の中に旧来の仏教の固定性を批判し、在家者の立場から大乘の空の思想を高揚した初期大乘仏典の傑作である。中国、日本で広く親しまれ、聖徳太子の三経義疏の一つ『維摩経義疏』を始め、注釈も多い。

193 十笏とは笏を十箇容れる程の広さを意味する。笏は束帯の時、帯に挿すもの。

194 (宋) 重顯頌古・克勤評唱『大正新脩大藏經』「維摩示疾於毘耶離城也。唐時王玄策使西域過其居。遂以手板縱橫量其室得十笏。因名方丈。」二二〇頁

195 『維摩詰所說經』卷下 姚秦三藏鳩摩羅什譯 香積佛品第十 五五二頁 (前略) 有國名衆香。佛號香積。今現在。其國香氣比於十方諸佛世界人天之香最爲第一。彼土無有聲聞辟支佛名。唯有清淨大菩薩衆。佛爲說法。其界一切皆以香作樓閣。經行香地苑園皆香。其食香氣周流十方無量世界。(後略)

(前略) 衆香という国がある。その仏は香積と号し、いまも現にまします。その国の香氣は十方の諸仏の世界における人間や天人どもの香に比べてみても、最もすぐれ第一のものである。その国土には、教えを聞くのみの修行僧や、ひとりできとりを開く修行者がいるとは聞いていない。ただ清らかな大菩薩のかたがたのみがおられ、仏はかれらのために法を説きたもう。その世界の一切のものどもは、みな香をもって樓閣を作り、香りよりなる地をそぞろ歩きし、庭園もみな香ばしい。その食物の香氣は十方の無量の世界にあまねく流れている。(後略) 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房 一九六五年 四四頁を参考に

する。

196 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 文殊師利問疾品第五 五四四頁 その時、仏が文殊菩薩に告げたもうた、「あなたが維摩詰のところへ疾の様子を問い、見舞いに行ってもらいますか。中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房 一九六五年 二四頁を参考に

する。

197 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 不思議品第六 五四六頁

198 中村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房 一九六五年 二九〇頁を参考にす。(前略) (こから東の方に、ガンジス河の砂の数の三十六倍もあるほど多くの国をすぎたところに、須弥相という名の世界があります。その仏を須弥燈王と号し、今も現にまします。かの仏の身体はたけが八万四千ヨージュナあります。その獅子座の高さは八万四千ヨージュナあり、美しく飾られていて、第一です。(文殊は答えた。)そこで長者・維摩が神通力を現じたところが、即時にかの仏は、高く広く美しく飾られ浄らかな三万二千の獅子座を送って来て、維摩の室に入らせたもうた。(後略)

199 (宋) 釋道原撰『景德傳燈録』『大正新脩大藏經』三九〇頁

200 『維摩詰所說經』卷中 姚秦三藏鳩摩羅什譯 觀衆生品第七 五四七頁〜五四八頁 (前略) そのとき維摩の室にひとりの天女がいた。もろもろの立派な人々を見て、説かれた法を聞いて、その身を現じ、天の華をもろもろの菩薩・大弟子たちの上に散じた。これらの華が、もろもろの菩薩のところに至ると、すぐに皆落ちてしまった。ところが、それらの華が大弟子たちのところに至ると、かれらに著いて、落ちなかった。一切の大弟子たちが神通力によつて華をとり去ろうとしたけれども、とり去ることができなかった。そのとき天女はシャーリプトラに問うた、「どうして華をとり去ろうとできないのですか。」シャーリプトラは答えた、「これらの華は、修行僧にはふさわしくないものです。だから、これをとり去ろうとするのです。」天女は言った、「これらの華を「修行僧にふさわしくない」とお考えになつてはいけません。なぜかと申しますと、これらの華は分別するはたらきがないのです。ところがあなたが自分で分別の想を生じておられるだけです。もしも仏法において出家したのに、しかも分別するところがあるならば、それこそ「修行僧にふさわしくない」ことなのです。もしも分別するはたらきがなければ、それはすなわち「ふさわしい」ことなのです。もろもろの菩薩がたをみますに、華がつかないのは、すでに一切の分別の想を断じておられるからです。」(後略) 村元訳者代表『世界古典文学全集 第七卷 仏典Ⅱ』筑摩書房 一九六五年 三三三〜三四頁

201 『漢語大詞典』繁体版 聯合出版集團 二〇〇二年 『道人』の項目に以下のように解釈してある。1、有極高道德的人。2、煉丹服藥、修道求仙之士。3、道教徒道士。4、佛教徒、和尚。5、佛寺中打雜的人。

202 森槐南『杜詩講義 下卷』 文會堂書店 一九二二年 八七一頁を参考にす。

203 阪口猷吉編輯『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三二年 二六六〜二六七頁

204 『莊子』「應帝王」に「南海之帝爲儺、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌、儺與忽、時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善、儺與忽謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有、嘗試鑿之、日鑿一竅、七日而渾沌死。」

205 拙稿「漢詩人としての阪口五峰——竹を題材とした詩について——」『現代社会文化研究』第五十二号 二〇一一年二月 (15) 頁

206 (漢) 司馬遷撰(宋) 裴駰集解(唐) 司馬貞索隱(唐) 張守節正義『史記』卷七九 范睢蔡澤列傳第一九 中華書局 一九八二年 二四〇一〜二四一四頁

207 前掲『五峰餘影』二二〜二三頁

208 大皿・五種の辛物を盤に盛つたもの。元日に之を食べれば、五腦の氣を通じ、健康を保つという。五辛菜のこと。

209 (梁) 沈約撰 楊家駱主編『宋書』卷六七 列伝第二七 謝靈運 荀雍 羊璿之 何長瑜・

山居賦 一七七五〜一七七六頁 また、(唐) 李延壽撰 楊家駱主編『南史』卷一九 列伝第九 謝靈運 何長瑜 孟顓 孫超宗 曾孫才卿 幾卿 五四〇頁には同じ叙述がある。「太守孟顓事佛精懇親、而爲靈運所輕、嘗謂顓曰く「得道應須慧業、丈人生天當在靈運前、成佛必在靈運後」顓深恨此言。」

210 (後晋) 劉昫撰 楊家駱主編『舊唐書』卷一九〇上 列伝第一四〇上 文苑上 楊炯 五〇〇三頁

211 前掲『五峰餘影』二六頁

212 王宝平主編『中日詩文交流集』 上海古籍出版社 二〇〇四年 四〜五頁

213 『全唐詩』中華書局 一九六〇年 第八冊 卷五二二 五九七四頁

214 松浦友久 植木久行編訳『杜牧詩選』 岩波書店 二〇〇四年 二二二〜二三頁

215 石川忠久「杜牧の詩——酒と茶と——」『斯文』 斯文会 一九六九年八月 一九〜二〇頁を参考にす。

216 劉禹錫(七七二〜八四二)「秋日過鴻舉法師寺院便送歸江陵」にいう。

看畫長廊遍 尋僧一徑幽  
小池兼鶴淨 古木帶蟬秋  
客至茶煙起 禽歸講席收  
浮杯明日去 相望水悠悠

217 白居易(七七二〜八四六)「即事」にいう。

見月連宵坐 聞風盡日眠  
室香羅藥氣 籠燠焙茶煙  
鶴啄新晴地 雞棲薄暮天  
自看淘酒米 倚杖小池前

218 蘇軾(一〇三七〜一一〇一)「安國寺尋春」にいう。近藤光男『漢詩大系 第十七卷 蘇東坡』集英社 一九八二年 一八七〜一八九頁

臥聞百舌呼春風 起尋花柳柳邨同  
城南古寺修竹合 小房曲檻敲深紅  
看花歎老憶年少 對酒思家愁老翁  
病眼不羞雲母亂 鬢絲強理茶烟中

遙知二月王城外 玉仙洪福花如海  
薄羅勻霧蓋新粧 快馬爭風鳴雜珮  
玉川先生眞可憐 一生耽酒終無錢  
病過春風九十日 獨抱添丁看花發

219 虞集(一二七二〜一三四八)詩「題蔡端明蘇東坡墨蹟後」の四首七言絶句の二首目にいう。

老却眉山長帽翁  
茶煙輕颺鬢絲風  
錦囊舊賜龍團在  
誰爲分泉落月中

220 石川忠久「杜牧の詩——酒と茶と——」『斯文』 斯文会 一九六九年八月 一九〜二〇頁

221 前田愛「前田愛著作集」第一卷(幕末・維新期の文学…成島柳北)「枕山と春濤——明治初年の漢詩壇——」 筑摩書房 一九八九年 一九一頁

<sup>222</sup>内田賢治「大沼枕山と杜牧」『国語国文』二〇一一年六月 内田論文の最後の〈資料〉の部分に参考にした。

<sup>223</sup>富士川英郎「玉池吟社の詩人たち」『江戸後期の詩人たち』 麥書房 一九二九年 三七七―三七八頁

<sup>224</sup>『春濤詩鈔』 卷一三

<sup>225</sup>杜甫詩「前出塞九首 横吹曲辭」の三首目にいう。

磨刀鳴咽水 水赤刃傷手  
欲輕腸斷聲 心緒亂已久  
丈夫誓許國 憤惋復何有  
功名圖麒麟 戰骨當速朽

<sup>226</sup>劉禹錫詩「戲贈崔千牛」にいう。

學道深山許老人  
留名萬代不關身  
勸君多買長安酒  
南陌東城占取春

<sup>227</sup>盧仝詩「走筆謝孟諫議寄新茶」

日高丈五睡正濃	軍將打門驚周公	口雲諫議送書信	白絹斜封三道印
開緘宛見諫議面	手閱月團三百片	聞道新年入山裏	蟄蟲驚動春風起
天子須嘗陽羨茶	百草不敢先開花	仁風暗結珠璣瑞	先春抽出黃金芽
摘鮮焙芳旋封裏	至精至好且不奢	至尊之餘合王公	何事便到山人家
柴門反閉無俗客	紗帽籠頭自煎喫	碧雲引風吹不斷	白花浮光凝碗面
一碗喉吻潤			
兩碗破孤悶			
三碗搜枯腸	唯有文字五千卷		
四碗發輕汗	平生不平事 盡向毛孔散		
五碗肌骨清			
六碗通仙靈			
七碗喫不得也			

唯覺兩腋習習清風生 蓬萊山 在何處  
玉川子 乘此清風欲歸去  
山上群仙司下土 地位清高隔風雨  
安得知百萬億蒼生 隨在巔崖受辛苦  
便為譏議問蒼生 到頭還得蘇息否

<sup>228</sup>松浦友久、植木久行編訳『杜牧詩選』 岩波書店 二〇〇四年を参考にした。

<sup>229</sup>石川忠久「杜牧の詩―酒と茶と―」『斯文』 斯文会 一九九九年八月 一一頁

<sup>230</sup>張鼎著『禪与唐宋詩学』 人民文学出版社 二〇〇三年 一八九頁に以下のような叙述がある。  
「白雲、一方面は隱逸の象征、一方面也是禪家常用的喻象、表現着无牽无累、不染不著、自由适意の心态。」

中村宏「詩に於ける処士の謳歌——岩溪裳川の世界——」『東洋研究』 一九七六年八月 一

四頁に「白雲に超世脱俗的な情緒が含まれていることは言うまでもない。」

藤田智章「漱石詩における「白雲」のイメージについて」『二松学舎大学院紀要』一九号 二〇〇五年三月 二七九頁「白雲」という詩語が漢詩の中で用いられる際、隱逸の象徴あるいは崇高なイメージとして描かれることが一般的である。譬えば美しい自然を詠じた王維や、天臺山に住み、隱者としての生涯を送った寒山は「白雲」を多く詠いて「白雲」を多く詠っているが、彼らはこれらのイメージのもと詩中に織り込んでいる。」というふうにとまどめている。

<sup>231</sup>『全唐詩』 中華書局 一九六〇年 第八冊 卷五二四 五九九八頁

<sup>232</sup>松浦友久、植木久行編訳『杜牧詩選』 岩波書店 二〇〇四年を参考にした。

<sup>233</sup>石川忠久「杜牧の詩―酒と茶と―」『斯文』 斯文会 一九九九年八月 一八頁

<sup>234</sup>『五山堂詩話』 卷一では、才子五山の薄倅の面影が色濃く刻印されているような律詩がある。尾聯では  
薄倅自知如小杜 薄倅自ら知る小杜の如きを  
直將此際做揚州 直ちに此際をもつて揚州と做す

と詠じている。「揚州小杜」という愛印にちなんだ律詩だと揖斐高が分析している。「江戸詩歌論」第三部 批評と結社 第一章 『五山堂詩話』論—化政期詩壇と批評家— 汲古書院 二〇〇一年九月 二五三―二五五頁

<sup>235</sup>坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(巻上)』 日清印刷株式会社、大正一四年一月二五日 三丁ウ

<sup>236</sup>内田賢治「大沼枕山と杜牧」『国語国文』八〇(六)二〇一一年六月 二七頁

<sup>237</sup>大沼枕山「歴代詠史百律」下谷吟社藏版 一八八五年

<sup>238</sup>内田賢治「大沼枕山と杜牧」『国語国文』八〇(六)二〇一一年六月 二七頁

<sup>239</sup>『明治文学全集62明治漢詩文集』筑摩書房 一九八三年 三六六頁

<sup>240</sup>坂口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(巻中)』 日清印刷株式会社 一九二五年 一二丁ウ

<sup>241</sup>「澤潞」とは、中国山西省東南部にある長治である。杜牧が宰相である李德裕が澤潞藩鎮の劉從諫の横行や朝廷に対する反乱を鎮圧する時に、用兵の術について献言し、杜牧の献言通りに戦略を立て、その反乱が速やかに無事に鎮定されたことを指すだろう。『新唐書』列伝凡 一五〇卷 卷一六六 列伝九一 五〇九七頁

<sup>242</sup>明治三六(一九〇三)年二月一五日から二四日まで、仁一郎の新津町報告会における演説筆記「解散問題と吾党の主張」が『新潟新聞』に連載される(一〇回)。ここで新潟県進歩党は地租増徴のみならず海軍拡張そのものに反対であることを宣言、日本の財政事情や過去五年間の増税率を数字で示し、日本とロシアとは国力の違いが大きすぎることを、「貧弱弱兵」に近い今の日本で更なる海軍拡張をすれば、ますます弱くなるだろうことを論理的に説明している。

<sup>243</sup>少なくとも、本詩を作詩する前年には五峰自身にとって、以下のような出来事がある。明治三六年三月六日及び七日の『新潟新聞』で、『百花欄』を讀む」と題し、聴濤山人という名義で、二回発表した。『百花欄』は野口寧齋が明治三六年一月に創刊した雑誌である。

四月一七日、一八日に、二老人名義で『新潟新聞』に「だいなし」を二回発表した。その内容は、五峰が森槐南を讀めた言葉とその詩が槐南に誤解され、『大阪毎日新聞』にも誤報が載ったことに対する弁明である。



四月二二、二三日の『新潟新聞』『詞林月旦』に五峰の七言絶句連作二二首が掲載される。評言は岩溪裳川である。

八月五日、「詩風一變の徴」聴瀟山人『百花欄』六集・七集に収録の森槐南の漢詩を評論し、その詩風の変ったことを絶賛している。

<sup>244</sup> 帆莉隆「著述家・坂口五峰（一）」「新潟県文人研究」第一五号 九九頁 二〇一二年一月  
<sup>245</sup> 坂口安吾デジタルミュージアムの資料を参考にした。

<sup>246</sup> 合山林太郎「幕末明治期の艶体漢詩―森春濤・槐南一派の詩風をめぐって―」『和漢比較文学』二〇〇六年八月

<sup>247</sup> 森春濤「禪榻茶煙」『春濤詩鈔』卷一三 合山林太郎によると、この「詩は、白髪の老境に入っても、なお艶体の詩を作り続け、色事から離れることのできない自らの境遇を慨嘆するものである」としている。

<sup>248</sup> 橋本蓉塘「無題次韻二首」『蓉塘詩鈔』卷下 合山林太郎によると、この『美人禪』を含む一句は、女性の中でも、禪を解するような高潔な人を伴侶に求めたい」と読み取っている。

<sup>249</sup> 合山林太郎「幕末明治期の艶体漢詩―森春濤・槐南一派の詩風をめぐって―」『和漢比較文学』二〇〇六年八月 一九頁

<sup>250</sup> 拙稿「漢詩人としての坂口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」『現代社会文化研究』五五号 二〇一二年一月

<sup>251</sup> 五峰年譜によると、一八九八年 鷗鷺會吟社次第に隆盛

<sup>252</sup> 明治一六（一八八三）年一月に第百集の刊行に達して打ち切りとされた。

<sup>253</sup> 森健郎編輯兼発行者『槐南集』一九一二年

<sup>254</sup> 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「略歴」四二二頁を参考。森槐南は、文久三（一八六三）年一月一七日に漢詩人森春濤の子として生まれた。

名は大來、字は公泰、通称は泰二郎（泰次郎・泰治郎）であり、詩壇以外では森泰二郎の名で呼ばれた。別号は掃雪山童、説詩軒主人などがある。詩は父から学び、漢学は名古屋在住の清人・金嘉徳から学んだ。上京後は鷗津塾・三島中洲に師事した。明治一四年に太政官出仕し、

二年に枢密院属となった後、図書寮編修官・皇室令整理委員・宮内大臣秘書官・式部官などを歴任したが、伊藤博文の知遇を得ることで、官位としては頭官についたとはいえなかった。

また、帝国大学文科大講師（中国文学）も務めている。詩人としての卓抜した技量を持っていたと言われる。唐詩を基に、蒼涼・神韻・艶麗を加味した独自の作風であった。一六歳で発表した『補春天傳奇』は世間を驚かせた。詩学に造詣が深いのみならず、字韻や明清の伝奇・小説類にも詳しく、大沼枕山・森春濤没後の詩壇で重要な地位を占めた。明治二三年に星社結成、同三二年、星社解散後「新詩綜」を創刊し、また「國民新聞」「東京日日新聞」での執筆、

同三七年、隨鷗吟社結成等、明治の漢詩壇興隆に貢献した。門下には、野口寧齋・大久保湘南・佐藤六石・宮崎晴瀾等がいる。

<sup>255</sup> 『槐南集』の本誌前後の詩作の日付を参考にすれば、四月一〇日後、五月三日前の作だと推知できる。

<sup>256</sup> 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「明治詩壇展望」三七〇頁を参考。星社は春濤が晩年に創立した吟社で、苟も詩を作る者は、老少を論ぜず加盟を許した。例会を其宅に開き、大会を星ヶ岡茶寮に催す事と定めてあったが、春濤の老病の

ため一時之を中止した。明治二三年九月、国分青厓・本田種竹・大江敬香の三人の発意で新進の同志を糾合して、星社を復興する事になり、森槐南の賛同を得て門下を率いて加わる事になり、九月二三日に星ヶ岡茶寮に第一回の詩会を開いた。

<sup>257</sup> 鍾嶸著 曹旭集注『中國古典文學叢書 詩品集注』上海古籍出版社 一九九四年 三〇六頁

<sup>258</sup> 坂口五峰『北越詩話』国書刊行会 一九九〇年 下巻 七九七頁 この次に以下のような五峰の次韻詩がある。

秋雲四散笛聲殘 皓月當空鴈影盤  
良夜誰從官長飲 當年曾在戰場看  
重來南國畫熊壯 一去大江沈鐵寒

德得荒村如亂後 漲痕黯絕在檣端

<sup>260</sup> 辻揆一「明治詩壇展望」（其二）の「新詩綜」（岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集）筑摩書房 一九八三年）三七四―三七五頁、辻揆一「明治詩壇展望」（其二）の「漢詩文雑誌」（岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集）筑摩書房 一九八三年）三六二―三六三頁を参考にした。

<sup>261</sup> 龜田鵬齋詩「航海到佐渡（佐渡に到りて航海す）」

孤島 嶺然たり 大瀛の外  
四垠積水望還空 孤島 嶺然たり 大瀛の外  
青天低處乾坤盡 青天 低處 乾坤 盡  
白日沉邊西北窮 白日 邊に沈み 西北 窮

鯨海雲腥鞞鞞雨 鯨海 雲 腥し 鞞鞞の雨  
蟹鄉月黑任那風 蟹鄉 月 黒し 任那の風  
此生不慣荒陬景 此生 荒陬の景に慣れず  
簞坐只驚濤聲雄 簞坐 只 驚き 濤聲の雄るに

<sup>262</sup> 竹田晃・黒田真美子編 佐野誠子著『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他（六朝）』明治書院 二〇〇六年 二八六頁

<sup>263</sup> 司空圖著 郭紹虞集解『詩品集解』人民文学出版社 一九九八年 三―四頁

<sup>264</sup> 司空圖著 郭紹虞集解『詩品集解』人民文学出版社 一九九八年 三―四頁

<sup>265</sup> 『五峰遺稿』に収録している詩作によると、小野湖山と関わりがある詩篇は二三首にのぼる。少なくとも、明治一一年から本誌明治三八年までである。

<sup>266</sup> 吳汝倫の字であり、一八四〇―一九〇三、清末の文学者、教育家。光緒二八（一九〇二）年五月、政府の命令により、学制に関する考察をするため来日した。この『新潟新聞』記事の前身になる。

<sup>267</sup> 『百花欄』は、明治三六（一九〇三）年一月に、野口寧齋が主宰し、上村才六の鳴翠書院から創刊された。四六判五号活字印刷、表紙朱野模様入、毎号七十頁余の瀟洒たる体裁である。

この雑誌は『新詩綜』などが廃刊した後を受けて、詩壇雑誌の圧巻を成した。終刊二十九集で明治三八（一九〇五）年五月に廃刊となった。

<sup>268</sup> 『新潟新聞』の本記事に掲載している詩文での不鮮明な漢字があったが、『槐南集』を調べ、森槐南の詩文を補足した。

269 吳辟疆は北江と号し、吳汝綸の孫ではなく、その子息である。一八七九〜一九五〇。明治三六（一九〇三）年、早稲田大学に留学している。

270 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「月報99」の「森槐南と國分青厓―明治の二大漢詩人―」三頁の上段

271 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第十五輯 汲古書院 一九七六年 三八五頁

272 高適「封丘縣」にいう。  
我本漁樵孟諸野 一生自是悠悠者  
乍可狂歌草澤中 寧堪作吏風塵下  
祇言小邑無所為 公門百事皆有期  
拜迎官長心欲碎 鞭撻黎庶令人悲  
歸來向家問妻子 舉家盡笑今如此  
生事應須南畝田 世情付與東流水  
夢想舊山安住哉 為銜君命日遲迴  
乃知梅福徒為爾 轉憶陶潛歸去來

273 中国の官名。唐の尉は県の司法・経済等をつかさどる文官。『広辞苑』第五版より

274 高適著 劉開揚箋註『高適詩集編年箋註』中國古典文學基本叢書 中華書局 一九八一年 一一〇〜一一三頁

275 簡野道明著『唐詩選詳説』明治書院 一九二九年

276 柳田聖山、椎名宏雄編『禪学典籍叢刊』第五卷 臨川書店 二〇〇〇年 七六九頁

277 東山拓志『漢詩の作詩技法と鑑賞』萌動社 二〇〇六年 一四頁

278 早稲田大学出版部編『先哲遺著 漢籍國字解全書 第一七卷 楚辭』早稲田大学出版部 一九一一年 八四〜八五頁

國民文庫刊行會編『國譯漢文大成 文学部 第一卷 楚辭』國民文庫刊行會 一九二四年 一〇三〜一〇四頁

橋本循譯『楚辭』岩波書店 一九四一年 一一三〜一二〇頁

藤野岩友『楚辭』漢詩大系第三卷 集英社 一九八二年 八四〜八五頁を参考。

279 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 六頁

280 岡村浩「印癖考」『新潟大学教育人間科学部紀要』第九卷 第一号 二〇〇六年六月この論文では、「印癖」に関する概説、五峰と市島春城との「印癖」に関する論説などを述べている。

281 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一七三〜一七五頁

282 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一七五〜一七六頁

283 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一七六頁

284 吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波文庫）岩波書店 二〇〇六年 六七〜七二頁

285 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「略歴」四二四頁を参考。

286 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 三〇〜三二頁

287 『新新文詩』は明治一八年五月〜明治二〇年一月、第三〇集を以って休刊となった。森春濤主宰。

288 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一〇八頁

289 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一〇九〜一一〇頁

290 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「略歴」四二〇〜四二二頁を参考。

291 入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』研文出版 二〇〇六年 五三〜八九頁を参考

292 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一一〇頁

293 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一一〇〜一一一頁

294 岡本黄石『明治文学全集』62 明治漢詩文集 筑摩書房 一九八三年 「略歴」四三二頁を参考。

295 賈島詩「贈圓上人」にいう。  
誦經千紙得爲僧 塵尾持行不拂蠅  
古塔月高聞咒水 新壇日午見燒燈  
一雙童子澆紅藥 百八真珠貫綵繩  
且說近來心裡事 仇讎相對似親朋

296 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社、一九三一年 一九〜二〇頁

297 小林二郎編纂 阪口五峰校閲『新潟才人詩』第一集 一八八二年 二丁ウ〜三丁オ

298 『新潟才人詩』に関する詳細は本博士學位論文の附2を「参照ください」。

299 大町桂月訳『新訳日本外史』至誠堂書店 一九二〇年 二四八頁

300 大町桂月訳『新訳日本外史』至誠堂書店 一九二〇年 二五二頁

301 大町桂月訳『新訳日本外史』至誠堂書店 一九二〇年 二七八頁

302 大町桂月訳『新訳日本外史』至誠堂書店 一九二〇年 二八四頁

303 新井白石著 村岡典嗣校訂『読史余論』岩波書店 二〇〇九年 一八四頁

304 村山真雄は坂口五峰の四女セキの夫である。明治四三（一九一〇）年八月、四女セキは松之山の村山真雄に嫁ぐ。

305 村山真雄「岳父坂口五峰の思い出」『月刊 いがた』第二卷 第五号 新潟日報社 一九四七年 二九頁

306 岡村鉄琴『阪口五峰展』始末記と今後の展望（『坂口安吾生誕百年事業実行委員会記録誌』安吾探索ノート）第七号、安吾の会 二〇〇七年一〇月二〇日 九四頁〜九五頁

307 岡村鉄琴『阪口五峰展』始末記と今後の展望（『坂口安吾生誕百年事業実行委員会記録誌』安吾探索ノート）第七号、安吾の会 二〇〇七年一〇月二〇日 九四頁に以下のような内容が解釈してある。款記に、「辛亥夏日遊新津邂逅七谷先生於新森樓酒間 先生作此図快甚予乃題一絶醉筆塗鴉不成字也 五峯醉樵恭」と記すことから、本作は明治四十四年夏、五峰五十三歳の時、地元へ帰省し割烹新森樓に酒席を張った際の作であると判明する。讀に七谷先生なるものが竹図を描いたとあるが、この絵もまた五峰の筆になるもので、謙遜してか余技たる墨画の作者を別人におきかえている点が興味深い。と岡村は説明している。

308 前掲同

309 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 卷八 大修館書店 一九九六年 三八一頁

310 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 卷八 大修館書店 一九九六年 三八〇頁 「事物異名録、樹木、竹」清異録、夏清侯傳云、曾大父碧虛郎、大父凌雲處士、父以卓立卿自名、就拜銀緑大夫、按謂竹也。

311 任昉撰『述異記』卷上 中華書局 一九九一年 四頁

312 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 大修館書店 一九九六年 卷七 一三一頁によると、湘妃とは、舜の二妃の娥皇・女英の称。舜を慕って湘水のほとりに来たが、其の崩御を聞き身を投じて死し、湘水の神となったという。

313 任昉撰『述異記』(巻上 中華書局 一九九一年 二頁)に、「鬱林郡有珊瑚市。海先市。珊瑚樹碧色。生海底。一株十枝。枝間無葉。大者高五六尺。至小者尺餘。鮫人云。海上有珊瑚宮。漢元封二年。鬱林郡獻珊瑚。」という叙述がある。韋忠物(七三五年頃)七九〇年頃)には以下のような詩——「詠珊瑚(珊瑚を詠う)」がある。「絳樹無花葉。非石亦非瓊。世人何處得。蓬萊石上生。」(『全唐詩』中華書局 一九六〇年 第三冊 卷一九三 一九八五頁)

314 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 大修館書店 一九九六年 卷五 一六六頁

315 「書道文化論」(岡村担当) 講義中、作品写真を見せた際の御判断による。

316 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 大修館書店 一九九六年 卷二 一五三頁

317 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 大修館書店 一九九六年 卷九 一二〇頁

318 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一五一頁

319 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 一五〇、一五一頁

320 阪口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(中)』日清印刷株式会社 一九二五年 二七丁ウ

321 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』一九二九年 七三六頁

322 歐陽修 宋祁撰『新唐書』(卷一九六「列傳」第一二二 隱逸)中華書局 一九七五年 五六〇八頁

323 『続仙傳』巻上 飛昇一十六人内女真三人「玄真子」に張志和について、以下のような記述がある。(前略)志和酒酣爲水戯鋪席於水上獨坐飲酌嘯詠其席來去遲速如刺舟擊復有雲鶴隨覆其上眞卿親實參佐觀者莫不驚異於水上揮手以謝眞卿上昇而去今猶有傳實其畫在於人間」また、『歴世眞仙體道通鑑』(卷之三十六 張志和)にも類似している記述がある。

松村明監修『大辞泉』(増補・新装版)小学館 一九九五年 一七三七頁に「張志和」について、以下のような叙述がある。「中国、唐代の道士。水上にむしるを敷いて座し、酒を飲み、詩を詠じ、鶴に乗って昇天したという。画題とされる。生没年未詳。」

324 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』一九二九年 七八四頁に以下のような内容が書いてある。阪口氏は明治三十五年八月執行の大選挙区制初めて実行の時に代議士に當選し中央の政治舞臺に乗出し、直接各派の名士とも交際し政府當局者とも折衝し、政治の實務に參與するに至つたが、中央に出て見ると地方に居る時とは多少勝手が違ふ様になり越後の代議士に非ずして天下の代議士なれば、新潟縣進歩黨の小黨に立て籠りては、假令憲政本黨と進退を共にするとしても分家の身分では思ふ様に働けぬから何時か之を解黨して本黨に復舊し大舞臺に入り活動するにしかずとの考へが阪口氏の胸中に往來して居つた。

325 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社 二〇〇一年 八三二頁

326 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』一九二九年 七八五頁

327 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九三一年 七、八頁

328 明治三八年六月 満州朝鮮戦地視察

明治三十九年一月七日から明治四一年一月四日まで第一次西園寺内閣。八月二四、五日に森槐南・永坂石球・本田種竹・大久保湘南の四詩伯來越。行形亭(松風亭)、鍋茶屋にて歓待する。

一〇月二〇日、五男・安吾誕生。 一二月父得七翁死去

明治四〇年 一月一日、清棲家教が新潟県知事になり、任期は明治四五三月二八日まで。三浦桐陰から名家の刻印を割愛され、謝礼に「謝三浦桐陰贈印兼寄楮藏六」書を揮毫する。

明治四一年七月一四日から明治四四年八月三〇日まで第二次桂内閣時代

明治四二年三月犬養除名事件

明治四三年二月憲政本黨を解黨し又新會成申クラブと合し国民黨を組織す

明治四四年八月三〇日から大正元年一月二二日まで、第二次西園寺内閣時代

329 岡村鉄琴『阪口五峰展』始末記と今後の展望』(『坂口安吾生誕百年事業実行委員会記録誌 安吾探索ノート』第七号、安吾の会 二〇〇七年一月二〇日) 九四頁

330 明治四五(一九二二)年五月第十一回衆議院議員當選 七月三〇日に明治天皇崩御 一二月二日から大正二(一九一三)年二月二〇日まで第三次桂内閣時代

大正二年一月同志会創立準備委員となる 二月二〇日から大正三年四月一六日まで 第一次山本内閣時代 一〇月立憲同志会成り相談役となる 一〇月一〇日同志会創立委員長桂公爵薨去

大正三年「新潟新聞」「東北日報」と合併する 四月一六日 大隈内閣成る 八月世界大戦・日独参戦

大正四年三月二五日第十二回衆議院議員總選挙當選 七月大浦内相辞職

大正五年四月勲四等瑞宝章 一〇月憲政会成り党務委員長となる 一〇月九日に大隈侯勇退 一〇月九日から寺内内閣成立

大正六年詩に就いて困分青厓に講学す 四月二〇日第十三回衆議院議員總選挙當選 八月一日より更生の新潟新聞が発行された

大正七年四月一日より二五日まで市島春城の筆による『北越詩話』紹介文が発表される 憲政会総務となる 九月二日 寺内内閣辞職 九月二九日 原内閣成立 十一月『北越詩話』上巻出る

大正八年二月勲三等旭日中綬章 三月『北越詩話』下巻出版 八月、常磐花壇に困分青厓・田辺碧堂・日下勺水等詩人を招き詩会を催す 太田知事の時代

大正九年二月普選案にて議會解散 五月一〇日 衆議院議員當選 一〇月発病

大正一〇年一月再び上腹部に頓痛を覚え、東大病院に入院、余命二カ月と診断された。二カ月経つても、悪化することがなかった。「更生道人」「蘇庵」と号を改めた。

331 『全唐詩』中華書局 一九六〇年 第四冊 卷二二六 二二五九頁

332 前野直彬注解『唐詩選』(上)岩波書店 二〇〇〇年 一二四、一二八頁

333 黒川洋一編『杜甫詩選』岩波書店 一九九一年 一四、一七頁

鈴木虎雄訳注『杜詩』(第一冊)岩波書店 一九六三年 四七、五〇頁

韓成武 張志民『杜甫詩全訳』河北人民出版社 一九九七年 二二、二四頁 以上の書籍を参考にし、まとめたもの。

334 劉昉等撰『舊唐書』卷一五四列伝一〇四 中華書局 一九七五年 四〇九五頁

335 劉昉等撰『舊唐書』卷一五四列伝一〇四 中華書局 一九七五年 四〇九五頁

336 前野直彬注解『唐詩選』(上)岩波書店 二〇〇〇年 一二四、一二八頁

337 鈴木虎雄訳注『杜詩』(第一冊)岩波書店 一九六三年 五〇頁 「その身は釣竿を弄ん

で海底の珊瑚樹を払おうとおもっている。」と。

338 『全唐詩』中華書局 一九六〇年 第二冊 卷七一 七八一頁〜七八二頁 詩の題目は「興慶池侍宴應制」である。

339 黄永武博士主編『杜詩叢刊』台湾大通書局印行 一九七四年

340 『杜詩叢刊』の『集千家注批点補遺杜詩集(一)』宋 劉辰翁批点 元 高楚芳編 二六五頁不必有所從來不必有所指玄玄衆妙門〇七字浩然以其將隱也

341 『杜詩叢刊』の『杜詩蘭(一)』清 盧元昌註 二二二頁(前略) 一似掉頭不肯住者。謝病東歸。將入海。獨把釣竿。海底珊瑚。不難拾取。但東海之處(後略)

342 『杜詩叢刊』の『草堂詩箋』卷二 宋 魯訥編次 蔡夢弼會箋 廣文書局 一九七〇年三五頁

343 『杜詩叢刊』の『集千家注分類杜工部詩(二)』宋 徐居仁編 黃鶴補註 一三五頁(前略) 趙日珊瑚樹生海底石上見晉書大秦國事以其在海底故以拂言之也言巢父歸江東之後遂乃入海有此興也

344 森槐南『杜詩講義 下卷』文會堂書店 一九二二年 六〇〇〜六〇一頁

345 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 二六一〜二六二頁

346 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 一一一頁

347 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 一一二〜一三頁

348 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 一一三〜一四頁

349 村上哲見『中國文人論』汲古書院 一九九四年 三二〜五二頁

350 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 一一〇〜一一一頁

351 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 山田毅城「懐しき第二の父」二六五頁

352 「碩学」の誤植だろう。

353 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 一一四頁

354 山際操のこゝで、「柳堤」はその号である。

355 辻揆一「明治詩壇展望」(其一)の「新文詩・新新文詩」、(略歴)『明治文学全集』62 明治漢詩文集』筑摩書房、一九八三年(以下『明治漢詩』と略記する)四〇四頁を参考にした。

356 日野俊彦「森春濤と森槐南」『新文詩』ノート(『国文学 解釈と鑑賞』「特集 古典文学の精髓としての漢詩文―中世・近世・近代」至文堂、二〇〇八年一〇月)一七三頁

357 入谷仙介 揖斐高 大谷雅夫 山本芳明 宮崎修多 杉下元明校注『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』岩波書店 二〇〇四年 八八頁

358 阪口猷吉編『五峰餘影』新瀉新聞社 一九三二年 三〇〜三一頁

359 中村宏「大須賀筠軒の生涯―附・「新文詩」とその作家」『東洋研究』26 大東文化大学東洋研究所 一九七二年三月 一〇一頁

360 中村宏「大須賀筠軒の生涯―附・「新文詩」とその作家」『東洋研究』26 大東文化大学東洋研究所 一九七二年三月 一〇三頁

361 辻揆一「明治詩壇展望」(其二)の「研練詞藻・新詩府・江湖詞華」『明治漢詩』三七頁を参考にした。

362 辻揆一「明治詩壇展望」(其二)の「雪門會」『明治漢詩』三七二頁、「略歴」『明治漢詩』四二二頁を参考にした。

363 辻揆一「明治詩壇展望」(其二)の「新詩綜」『明治漢詩』三七四〜三七五頁、辻揆一「明治詩壇展望」(其一)の「漢詩文雜誌」『明治漢詩』三六二〜三六三頁を参考にした。

364 辻揆一「明治詩壇展望」(其二)の「剪燭會・檀樂會・佩蘭會」『明治漢詩』三七五頁

365 阪口猷吉編『五峰遺稿』(卷中) 日清印刷株式会社 一九二五年 二九丁才

366 辻揆一「明治詩壇展望」(其二)の「百花欄」『明治漢詩』三七五〜三七六頁、辻揆一「明治詩壇展望」(其一)の「漢詩文雜誌」『明治漢詩』三六二〜三六三頁を参考にした。

367 『五峰遺稿』卷中「人日千秋庵次松雨韻」と題する詩作の二首目の自注の説明文では、「春濤先生游新瀉余與同人結吟社先生乃名春鷗取黃山谷五湖春水白鷗前也」と語っている。これは明治一四(一八八一)年の森春濤來越のことを指す。

368 『五峰遺稿』卷中「人日千秋庵次松雨韻」と題する詩作の二首目の自注の説明文では、「春濤先生游新瀉余與同人結吟社先生乃名春鷗取黃山谷五湖春水白鷗前也」と語っている。これは明治一四(一八八一)年の森春濤來越のことを指す。

369 阪口猷吉編輯兼發行『五峰遺稿』(卷中) 日清印刷株式会社 一九二五年 三一丁ウ

370 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 五五四頁、長澤孝三『改訂増補漢文學者總覽』 汲古書院 二〇一一年 九九頁

371 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 四四九頁

372 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 六三五頁、長澤孝三『改訂増補漢文學者總覽』 汲古書院 二〇一一年 四六一頁

373 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 八七四頁

374 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 三二九頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 五九六頁、長澤孝三『改訂増補漢文學者總覽』 汲古書院 二〇一一年 四一九頁

375 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 三〇頁

376 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 二二二頁

377 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷補正 六頁

378 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 五九九頁

379 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 三二〇頁

380 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 七四〇頁

381 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 三八〇頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 五九二頁

382 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 二〇一頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 二四八頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 三九三頁

383 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 五一二頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 一八九頁、長澤孝三『改訂増補漢文學者總覽』 汲古書院 二〇一一年 三七三頁

384 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 二〇九頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 六六七頁

385 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 九三三七頁

386 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下卷 三五七頁

- 387 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 四九六頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 一四三頁
- 388 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 三三〇頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八六五頁
- 389 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 六〇七頁
- 390 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 五九八頁
- 391 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八八四〜八八六頁
- 392 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 二二三頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 六四五頁
- 393 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 四九七頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八四七頁
- 394 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 六〇五頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 七四頁、長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覧』 汲古書院 二〇一一年 四二七頁
- 395 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 二五七頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 七二七頁
- 396 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 三六五頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八五一頁
- 397 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 一八四頁、荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 三〇九頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 五〇八〜五一頁
- 398 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 三七三頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八〇五頁
- 399 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八四一頁
- 400 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八四一頁
- 401 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 六〇六頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八九七頁
- 402 『五峰餘影』の「五峰・阪口仁一郎小傳」の「二、出生より遊学時代まで」では、「南義二郎氏（仁一郎弟）談」と題する文章が綴られている。
- 403 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 一四六頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 九二八頁、阪口五峰『北越詩話』 新潟新聞社 一九三二年 三二〜三三頁「箕浦勝人氏談」では、「私は明治十五年七月に新潟新聞出筆として行き、翌年四月歸京した。約十ヶ月新潟に居た。當時阪口君は米商會所にて詩を作るとは妙な人だと思つてゐた。それがどうして新聞社にゐる自分と親しくなつたかと言ふに、其頃新潟新聞には阪口君に極く親しい人が二人ゐた。即ち春濤門下の小崎藍川、大桃相資の二人である。阪口君は春濤翁の高弟の一人であつたから屢々これらの人々と往來して共に詩を談じ酒を呑み從つて相俱に政論を闘はしたものだ。」という証言がある。
- 404 阪口五峰『五峰餘影』 新潟新聞社 一九三一年 年譜を参考にした。
- 405 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 五一三頁
- 406 依田学海の略歴は『明治文学全集 明治漢詩文集 62』筑摩書房 一九八三年「略歴」

- 四一頁を参考にした。
- 407 本間周敬『佐渡人名辞書 全』弘文堂 一九一五年 二二頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 六八一頁
- 408 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八九頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 五〇六頁、長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覧』 汲古書院 二〇一一年 三六五頁
- 409 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八六五頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 六八七頁、長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覧』 汲古書院 二〇一一年 四八七頁、相川町史編纂委員会『佐渡相川郷土史事典』 二〇〇二年（非売品） 七一六頁
- 410 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八二五頁、村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 四九五頁
- 411 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 九二二〜九二三頁
- 412 荒木常能『越佐書画名鑑』 新潟県美術商組合 二〇〇二年 二八八頁
- 413 阪口五峰『北越詩話』 新潟新聞社 一九三二年 三三〜三三頁「箕浦勝人氏談」では、「私は明治十五年七月に新潟新聞出筆として行き、翌年四月歸京した。約十ヶ月新潟に居た。當時阪口君は米商會所にて詩を作るとは妙な人だと思つてゐた。それがどうして新聞社にゐる自分と親しくなつたかと言ふに、其頃新潟新聞には阪口君に極く親しい人が二人ゐた。即ち春濤門下の小崎藍川、大桃相資の二人である。阪口君は春濤翁の高弟の一人であつたから屢々これらの人々と往來して共に詩を談じ酒を呑み從つて相俱に政論を闘はしたものだ。」という証言がある。
- 414 その苗字についての詳しい検討は『新潟県文人研究』第一五号（二〇一二年一月）にある柴田清繼「王治本 越佐の旅 およびその間の詩文交流―明治十六、七年を中心として」の一三三頁の注釈を参考にしたい。
- 415 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 七九九頁
- 416 柴田清繼「王治本 越佐の旅 およびその間の詩文交流―明治十六、七年を中心として」『新潟県文人研究』第一五号（二〇一二年一月）一三四頁
- 417 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 五〇頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 六六五頁
- 418 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 一九七頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八三八頁
- 419 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 三八三頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 八〇六頁
- 420 阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 六六一〜六六二頁
- 421 村島靖雄『越佐人名辞書』 歴史図書社 一九七四年 六二二頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 九一八頁
- 422 新潟県立図書館『越佐名家著述目録』一九二九年、一四三頁、阪口五峰『北越詩話』 国書刊行会 一九九〇年 下巻 九二三頁、長澤孝三『改訂増補 漢文學者總覧』 汲古書院 二〇一一年 三四六頁

附3 『五峰遺稿』 目次

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、数え年）	地名	人名
1	1	卷上 一才	「出門」						1				甲戌・明治七・1874 年	落地蓬蒿十六秋	16		
2	2		「折嶺 越羽分界」						1						16	玉川（玉川（たまたがわ）は、山形県西置賜郡小国町を流れる荒川水系の河川。福島県喜多方市山都町一ノ木の飯豊山に源を發し北に流れ、山形県西置賜郡小国町大字玉川と小国町大字小国小坂町の境界で荒川に合流する。）	
3	3	卷上 一ウ	「米澤」		1										16		
4	4		「九重」					1							16		
5	5		「碓氷山中看梅花寄東京故人」						1						16	碓氷峠（うすいとうげ）は、群馬県安中市松井田町と長野県北佐久郡軽井沢町との境にある日本の峠である。標高は約960 m。信濃川水系と利根川水系とを分ける中央分水嶺である。峠の長野県側に降った雨は日本海へ、群馬県側に降った雨は太平洋へ流れる。笛吹川	
6	6		「川中島懷古」				1						乙亥・明治八・1875 年		17	川中島（かわなかじま）は、長野県長野市の犀川と千曲川に囲まれた三角地帯の地名。川中島古戦場（かわなかじまこせんじょう）は、長野県長野市小島田町にある、越後：上杉政虎対甲斐：武田晴信軍による川中島の戦い・第四次合戦（八幡原の戦い）に於いて、武田軍が本陣をこの付近に置いたと伝えられる。）、春日之山	越公
7	7		「舟中聽歌」						1			『新文詩』第六十 集明治13・3 題名 「江樓聽歌」			17	潯陽	白家歌
8	8		「夜坐有懷次山中耕雲見寄韻 時予病後止酒」					1							17		
9	9		「過山中耕雲舊寓」						1				丙子・明治9・1876年 『北越詩話』下卷五 九八頁「丙子秋、東 京より歸る。年甫め て十八。」		18		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教える年）	地名	人名
10	10-1		「墨水春興和諸橋漸庵韻」（二首）						1						18	墨水（隅田川の異称。東京都市街地東部を流れて東京湾に注ぐ川。東岸の堤を隅田堤（墨堤）といい、古来桜の名所。）白鬚祠（東京都墨田区にある白鬚神社のこと）	
11	10-2		同上						1						18		
12	11		「清水嶺」						1				八月		18	清水峠（群馬・新潟県境、三国山脈の笠ヶ岳と七ッ小屋山の鞍部にある峠。標高1448m。中世末期、直越の峠と呼ばれ上野と越後を結ぶ清水街道が通じ、上杉氏の上野侵攻に用いられたと伝えているが、険路のため近世は衰微。）越山	
13	12		「舟下魚野川」	1											18	魚野川（新潟県と群馬県の県境の谷川岳西麓一帯に源を発し、新潟県の魚沼地方を南から北へ向かって貫流。長岡市東川口付近で信濃川と合流する。「魚沼を流れる川」が訛って魚野川となったという説がある。かつては別名として上田川とも称した。1495年には、上杉家が魚野川の舟運の許可を出すなど、かなり古い時代から舟運が行われてきた。南魚沼郡誌によれば、1637年の記録に六日町に48艘、浦佐に50艘、小出島に24艘の胴高船があったという。江戸時代を通じて三国街道を行く旅行者や魚沼の年貢米、特産品の輸送に用いられてきた。この頃の遡上上流点は、六日町宿であり、いったん下流に下った船は、川岸に沿って一週間以上かけて上流まで引き上げていた。明治時代に入ると信越本線や上越北線（上越線）の開通に伴い貨客が激減。大正年間うちに姿を消している）川口村（川口町（かわぐちまち）は、かつて新潟県北魚沼郡に存在していた町である。2010年3月31日に、長岡市へ編入。合併前まで、長岡市と境を接してはいなかったため、飛び地合併となった。）	
14	13		「讀方外交幽月新潟詩依韻和之予弱冠已見二毛故七八及之」					1							20	揚州・八千八水	幽月、樊川
15	14		「幽月再寄竹枝乃又和之」						1	1					20		幽月
16	15		「雨後驟涼」						1						18		
17	16		「対酒」	1									西南戦争の話に触れ、明治10・1877年		19		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
18	17		「梅花丈室歌」				1					『新文詩』九三集に「新正三日書懷 <small>是日子生辰也</small> 」の詩句に「梅花丈室 <small>書齋名修齋久</small> 」があるため、五峰の書齋の名前は「梅花丈室」だと推知できる。			19		維摩居士
19	18		「同僧鏡雨過永明寺看花」						1				戊寅・明治11・1878年		20	揚州	
20	19-1		「偶題」（二首）						1						20		
21	19-2		同上						1						20		蘇晋
22	20		「贈大庭松齋 并引」					1							20	風月吟社、松風亭	
23	21		「茶園 并引」	1											20		玉川翁
24	22		「次鷗水別後見寄韻」					1				『新文詩』第六十四集明治13・7	己卯・明治12・1879年		21		鷗水
25	23-1		「新潟秋詞」（二首）						1	1		『新文詩』第八十六集明治15・8～9			24		
26	23-2		同上						1	1		同上			24		
27	24		「送丸岡南陔歸佐渡 風月吟社席上作」					1							21	舟江	
28	25		「讀野村鶯溪遺稿」						1			『新文詩』第六十一集明治13・4	庚辰・明治13・1880年		22		
29	26		「古街樓與同人飲」					1				『新文詩』第六十五集明治13・9			22		
30	27		「建部小椽佐佐木圖南讀予古街酒樓詩次韻見示乃疊韻卻寄」					1							22		



通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
31	28		「江樓秋夜同鷗水賦」					1				『新文詩』第六十七集明治13・12			22		
32	29		「贈尾崎琴泉 行雄 琴泉著尚武論」					1					辛巳・明治14・1881年		23		
33	30		「春濤先生見過招同社友小集書樓山際柳堤有詩乃次其韻時辛巳立秋前一夕也」					1					時辛巳立秋前一夕也		23		山際柳堤
34	31-1		「松風亭酒間戲賦呈春濤先生」（三首）						1						23		放翁、春道人
35	31-2		同上						1						23		白香山、詩魔
36	31-3		同上						1						23		張郎、杜陵詩
37	32		「送春濤先生東歸」					1							23	越城	白傅（白居易）
38	33-1		「歲暮雜感」（四首）					1							24		
39	33-2		同上					1				『新潟才人詩』第一集明治15・11に「歲晚雜感 原五」という題する七言二首収録されているが、一首目は本詩との字句が大分違っている。その二首目は『五峰遺稿』に未収している。			24		
40	33-3		同上					1							24		范叔、維摩
41	33-4		同上					1							24		孟東野（孟郊）

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
42	34-1		「散帙得郷友詩文披覽之後乃題 五律」（五首）					1				『新文詩』第八十 集明治15・5詩題 「案上有郷友詩文 數種披覽之間偶得 五律乃書其後」	壬午・明治15・1882 年		24		石黒北涯
43	34-2		同上					1				同上			24		堀鶴陰
44	34-3		同上					1				同上			24	扶桑	石黒一青
45	34-4		同上					1				同上			24		赤塚適軒
46	34-5		同上					1				同上			24		赤塚朴堂
47	35		「緑陰清書」					1				『新文詩』第八十 五集明治15・7			24		
48	36		「寄呈恥堂大野先生 并引」					1							24		程門立雪
49	37		「古曆十月十三夜泛舟信濃川」					1					旧曆十月十三日の夜		24	信濃川	東坡
50	38		「贈山際柳堤」					1				『新文詩』第八十 九集明治15・12			24		范蠡、相如
51	39-1		「去秋春濤先生見贈新刻詩鈔近 日又獲湖山樓詩集枕山詩鈔率題 七律四首」（四首）					1				『新文詩』第八十 八集「案上有春濤 先生及枕湖二翁詩 集率題四律亦瓣香 私淑之意也」明治 15・11			24		杜韓、雞林
52	39-2		同上					1				同上			24		三分國
53	39-3		同上					1				同上			24		七子、三家
54	39-4		同上					1				同上			24		髯師、三季
55	40		「新正三日書懷」					1				『新文詩』第九十 三集明治16・4	癸未・明治16・1883 年	落地匆匆廿五年	25		謝後、盧前
56	41-1		「題舟江嬉春圖」（四首）					1							25	新斥	李嶠
57	41-2		同上					1							25		三生香火客
58	41-3		同上					1							25	鍋茶屋	春翁

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
59	41-4		同上					1							25	舟江	柏翁（柏如亭）
60	42		「小病無聊和小崎藍川見贈韻 時移居寄居村」					1				『新文詩』第九十 七集明治16・9			25		
61	43-1		「寄居村舎雜詠次藍川養病詩屋 原韻」（四首）					1				明治16・7『新文 詩』第九十五集槐 南から絳雲楼主人 みたい。錢謙益の こと。語彙の違い が多少ある。			25		
62	43-2		同上					1				同上			25		
63	43-3		同上					1				同上			25		廣文、省臺
64	43-4		同上					1				『新文詩』に未収 録			25		
65	44-1		「消夏六詠用蔭山晚香韻」（六 首）読書	1											25		
66	44-2		同上 臨池	1											25		
67	44-3		同上 圍棋	1											25		
68	44-4		同上 彈琴	1											25		
69	44-5		同上 焚香	1											25		
70	44-6		同上 煎茶	1											25		玉川子（盧仝）、五千卷撐腸
71	45-1		「信州道中」（二首）						1				此路重來又十年		25	妙香山（妙高山の誤植）	
72	45-2		同上						1						25	佛都	
73	46-1		「題玉峰小稿後四首 折二」（二 首）						1						25		
74	46-2		同上						1						25		
75	47		「贈日下部鳴鶴仙史」					1							25		梅直講（梅堯臣）、柳公權（唐 代政治家、書家）
76	48		「古重陽招飲鳴鶴及彌岳藍川于 公園旗亭」					1							25		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
77	49-1		「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」（三首）					1							25		謫仙、賀監知
78	49-2		同上					1							25		蘇晋、長江（賈島）
79	49-3		同上					1							25		
80	50-1	卷上 十五 丁ウ ～十 六丁	「和武者城川寒燈夜讀書屋原韻」（六首）			1									25		賈佛
81	50-2	同上	同上			1									25		僧
82	50-3	同上	同上			1									25		袁子才、嵇稽叔夜（稽康のこと）
83	50-4	同上	同上			1									25		
84	50-5	同上	同上			1									25		少陵叟
85	50-6		同上			1									25		
86	51		「甲申新年口號」						1				甲申・明治17・1884年		26		王漆園諸人
87	52		「秋山弟東行 折一」					1							26		
88	53		「春濤先生鳴門觀濤小照」				1								26		
89	54		「長松寺修外祖墓感賦一絶」						1						26		
90	55		「猪苗代湖」	1											26	磐梯	
91	56		「舟下阿雅峽自白崎村登岸遂過巖谷村謁餘五將軍墓」				1								26	津川磯、老杉樹	李廣
92	57		「畫蘭」			1									26		
93	58		「畫竹」			1									26		
94	59		「畫菊」			1									26		陶元亮
95	60		「源頼政墓 并引」				1								26	天神山	源三位、諸葛、八郎、

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
96	61		「鎮西八郎義戦圖」				1								26	女真鞅鞞地	源為朝を指す、八郎、
97	62		「借忙吟 并引」						1						26		隨園
98	63-1		「治園」（二首）	1								『新潟才人詩』第 二集明治18・5			27		郭橐駝
99	63-2		同上	1								同上			27		
100	64-1		「贈岡本黄石翁」（二首）						1						27		舊大夫
101	64-2		同上						1						27	詩城	岳家軍
102	65		「哭橋本蓉塘」		1								橋本蓉塘は明治17年8 月亡くなった		26	韓門弟子、秦地	伯牙
103	66		「林園月令稿本歌」				1					『新新文詩』第二 集明治18・6「林園 月令藁本歌」			27		郭景純、巻菱湖、雪城
104	67		「王漆園將歸招同諸友于松風亭 次留別韻」					1					王漆園は光緒甲申・ 明治17年秋東京に 帰った		26	松風亭、舟江雜詞	王漆園
105	68		「秋夜訪梨洲叔話舊賦呈」					1							26		梨洲叔
106	69-1		「謝荅小野湖山翁惠賜硯樓詩次 記恩原韻」（三首）					1							26		雲林
107	69-2		同上					1							26		
108	69-3		同上					1							26		
109	70-1	二十 二丁 ウ～ 二十三 丁 ウ	「狹門雜詩九首 節五」（五 首）					1				『新詩綜』六集明 治32・9			41	狹門	亀田鵬齋
110	70-2		同上					1				同上			41		
111	70-3		同上					1				同上			41		
112	70-4		同上					1				同上			41		
113	70-5		同上					1				同上			41		順徳帝陵

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、数え年）	地名	人名
114	71-1		「鴨湖權歌」（九首）						1						41	両津	
115	71-2		同上						1						41	天女祠	
116	71-3		同上						1						41	河崎村一宮祭順徳帝女	
117	71-4		同上						1						41	羽黒山一名梅雨山	
118	71-5		同上						1						41		
119	71-6		同上						1						41	浦口有老松名凍雨松	
120	71-7		同上						1						41	近歳浚作鑿湖口海水逆流湖水皆鹹	
121	71-8		同上						1						41	湖中故多鯉魚淡水鹹化後隻尾不存	
122	71-9		同上						1						41	北海風濤冬時尤險賈船多避難繁華倍常故一名曰山茶港	
123	72		「乙酉元旦早起折梅」	1									乙酉・明治18・1885年		27		
124	73-1		「赴京途中作」（六首）					1				『新新文詩』七集 明治18・12「上京 途中作録五」 『五峰余影』田邊 碧堂に「彼の上京 途中の七律で詩界 を驚かした」と関 連ある作。			27	越国、鯨波村	九郎（源為仲）
125	73-2		同上					1							27		
126	73-3		同上					1							27	大澗、小澗	神禹
127	73-4		同上					1							27		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
128	73-5		同上					1							27	碓氷嶺新道大野梅花先生爲長野縣令時所關 工未成而先生卒然其功不可没	
129	73-6		同上					1				『新新文詩』十二 集明治19・5「上州 途上」			28	鐵路	詩氣
130	74		「訪大倉硯齋遂過通心寺看櫻 花」						1						27	通心寺	大倉硯齋
131	75-1		「讀史」（二三首）神武定中州	1									『五峰餘影』109頁に よれば、大正八年頃 の作。		61		神武
132	75-2		同上 神后征三韓	1											61		神后、紀氏、應神廟
133	75-3		同上 鹿戸撰憲法	1											61		鹿戸、馬子、聖徳
134	75-4		同上 皇極垂統日	1											61		皇極、天智
135	75-5		同上 道鏡窺神器	1											61	宇佐（八幡）	道鏡、宇佐、孝謙朝、吉備氏
136	75-6		同上 女主仁柔政	1											61		坂上田村麻呂、霍嬖姚
137	75-7		同上 廢立萬乘尊	1											61		藤氏
138	75-8		同上 宇多英明主	1											61		宇多、藤氏
139	75-9		同上 寛平延喜際	1											61		菅公
140	75-10		同上 一門攝籙威	1											61		賢右府（藤原実資）
141	75-11		同上 紫氏巾幗秀	1											61		紫氏・清氏・風流
142	75-12		同上 王綱久弛廢	1											61	阪東	八幡公・貞任
143	75-13		同上 維昔保元亂	1											61		保元亂・藤氏・董卓
144	75-14		同上 重盛希世賢	1											61		重盛
145	75-15		同上 頼朝將將才	1											61		頼朝

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢 (詩句)	年齢 (『五峰餘影』 に沿って、教え年)	地名	人名
146	75-16		同上 天爲民立君	1											61		北条氏
147	75-17		同上 宰府逐前使	1											61		義満・義持
148	75-18		同上 陪臣執國命	1											61	北山	藤房
149	75-19		同上 古者文與武	1											61		後醍醐・中興
150	75-20		同上 堂堂大塔王	1											61		大塔王 (護良親王)
151	75-21		同上 國亂思良相	1											61		楠公・楠氏
152	75-22		同上 新田族強盛	1											61	北越	新田族
153	75-23		同上 名門北畠氏	1											61		北畠
154	76	卷中 一	「食筭戲次白香山韻」	1											不明		白香山・白居易
155	77		「七月七日擧兒」						1						不明		
156	78		「招飲鱸松塘詩翁于灣月樓 折一」					1				『新新文詩』八集 明治19・1題名： 「呈鱸松塘先生」 二首中の二首目			28		鱸松塘・紅粉・風流
157	79		「有人以筆頭菜圖索詩戲題一絶」						1			『新詩府』初集明 治22・1889年2月題 名：「戲詠筆頭 菜」			31		
158	80-1		「武者城川示近世四名家墨蹟乃題各首」 (四首) 峨峨柴栗山	1									武者城川(明治23・ 1、三〇歳で没し た。)		31		柴栗山 (柴野栗山・「寛政の三博士」の一人を詠じる詩) 蘇長公 (蘇東坡)
159	80-2		同上 夙追范陸調	1											31		(市河寛齋を詠じる詩) 范陸調・五山 (菊池五山)・天民 (大窪詩仏)



通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢 (詩句)	年齢 (『五峰餘影』 に沿って、教え年)	地名	人名	
160	80-3		同上 垂帷黄葉村	1												31	黄葉村 (菅茶山の塾名：黄葉夕陽村舎 (こ うようせきようそんしゃ) のこと) (菅茶 山を詠じる詩)	
161	80-4		同上 議論何英爽	1												31		西游詩 (頼山陽を詠じる詩)
162	81		「賀夢詩贈鱸松塘」				1					『新新文詩』十三 集明治19・6「賀夢 詩呈鱸松塘先生」	丙戌・明治19・1886 年			28		鱸松塘
163	82-1		「讀秋山弟修善寺雜詩次韻寄 懷」 (二首)					1				『新新文詩』十一 集明治19・4「遥和 家弟秋山詩韻寄 懷」二首				28		秋山弟
164	82-2		同上					1				同上				28		
165	83		「讀湖山樓十種集」				1					『新新文詩』十集 明治19・3				28		子美詩・詩品
166	84		「贈立阿師」		1											28		
167	85		「古川傾陽書堂觀堀部武庸鐵 槍」				1									28		堀部氏
168	86-1		「哭兒槐三」 (三首)						1							28		
169	86-2		同上						1							28		
170	86-3		同上						1							28		
171	87		「日下部鳴鶴重游新斥招飲松風 亭同賦」	1												28	新斥・松風亭	日下部鳴鶴
172	88-1		「過大澤嶺途中作 并引」 (二 首)					1					丙戌・明治19・1886 年秋			28		近藤縣佐・鈴木昌司
173	88-2		同上					1								28		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
174	89		「小窓」						1						28		
175	90-1		「還郷即事」（九首）						1						32		
176	90-2		同上						1						32		
177	90-3		同上						1						32		
178	90-4		同上						1						32		
179	90-5		同上						1						32		
180	90-6		同上						1						32		
181	90-7		同上						1						32		『笛漁小稿』とは、朱彝尊（一六二九～一七〇九）の子・朱昆田の詩集である。その詩集は全部で十巻があり、通覧すると、「還家絶句」と題する詩が見つからなかった。しかし、第五巻古今詩七十一首に「察禹尚基画月波吹笛圖三首」と題する七言絶句三首がある。朱三十五住吾州 也戀蓴鱸買釣舟 我亦還家作漁夫 夜凉吹笛月波樓 蓴鱸とは蓴羹鱸膾のこと。結句の「夜凉吹笛月波樓」とは、五峰の自注にある詩句だと考えられる。
182	90-8		同上						1				「去年妹子下世」という自注・明治22年11月夫人逝去、なので、明治23年の作詩だと		32		
183	90-9		同上						1						32		朱家老釣師・朱朴堂
184	91-1		「杉雨樓詩鈔題詞安田泰堂屬折二」（二首）						1						32		
185	91-2		同上						1						32		
186	92		「大久保湘南至 折一」						1						32		
187	93		「和韻湘南見似 折一」					1							32		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
188	94		「秋山弟植松沙邱賦詩記事乃次 其韻」						1						32		
189	95		「海樓口占」						1						32		
190	96		「南樓春望用許渾韻」		1										32		許渾
191	97		「題梅莊圖仍用前韻」		1										32		
192	98		「題歌川秋南藏水雲亭圖」						1						32		歌川秋南
193	99-1		「外城湖」（三首）						1						38～39		
194	99-2		同上						1						38～39		
195	99-3		同上						1				不住家江十六年・ 『北越詩話』下巻五 九八頁：「庚辰八 月、予新潟に徙る」 (明治13年8月)『五 峰餘影』の年譜： 「明治14年新潟市に 一家を構ふ」その以 来、16年間だとすれ ば、これは明治29～ 30年の詩作だ		38～39		
196	100		「村上琴舎七十雙壽」						1						33		
197	101-1		「重尋春鷗吟社之盟率賦四律索 同人和兼送湘南東歸 折三」 (三首)					1							33		
198	101-2		同上					1							33		老森名・載酒行
199	101-3		同上					1							33		
200	102		「松風亭雅集得佳」		1										33		
201	103		「出門壬辰時生辰後二日」					1					壬辰・明治25・1892 年	卅五年前墮地初	34		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
202	104		「鬢絲禪榻小影」					1						愁鬢相欺卅五年	35		牧之
203	105		「送關黃薇休官之東京」					1							35	東京	關黃薇
204	106		「與湘南飲」					1							35		湘南・嫦娥
205	107-1		「聞客談雞林近事有作 折四 (四首)」						1						35		
206	107-2		同上						1						35		
207	107-3		同上						1						35		
208	107-4		同上						1						35		
209	108		「蝦夷錦歌」					1					『新詩綜』の森槐南 の注釈による。明治 27・1894年		36		源九郎
210	109		「瑞鷹詩并引」					1							36	鳳凰城	
211	110		「飲松風亭次蝶夢勝間田太守 韻」						1				『北越詩話』下巻七 九七～八〇〇：「丁 酉春、宮城より新潟 に轉ず。」明治30 年・1897の4月から3 年間勝間田稔（蝶 夢）は新潟県知事と して来越している。 詩会「鷗鷺會」を創 る。		39		蝶夢勝間田
212	111		「陸玉田將游佐州有詩次韻志 別」					1							39		杜甫・陸玉田
213	112		「玉田舟中再賦附郵見似次韻卻 寄」					1							39	八千八水	
214	113		「鷗鷺會席上次鈴木菊坡韻是日 渡邊東民子爵至自東京説劍井原 天游與菊坡圍棋」					1					勝間田知事は漢詩結 社「鷗鷺會」を結成 し、詩会を催した。		40		
215	114		「鷗鷺會醺集次松野洪洲判事 韻」					1							40		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教える年）	地名	人名
216	115		「同蝶夢太守丸山龍川本間香浦 飲于松風亭席上次蝶守韻」		1										41		
217	116		「蝶夢太守招同龍川香浦飲于松 風亭席上次蝶守議事堂題壁韻」					1							41		
218	117-1		「酒間蝶守有詩次韻賦呈」（二 首）					1							41		陳遵・羊續
219	117-2		同上						1						41		
220	118		「同洪洲天游龍川赴飲松風亭途 中口占次洪洲韻」						1						41		
221	119		「次蝶夢太守對月有感韻賦呈」					1							41		
222	120		「寄懷秋山弟疊韻」					1							41		秋山弟
223	121		「疎庵席上次韻北條鷗所見贈」					1							41		北條鷗所
224	122		「六六廬集次韻」		1										41		
225	123		「寄題三岳莊次湖山老人韻」		1										41		香山
226	124		「訪鷗所次見示原韻」					1							41		
227	125		「六六廬小集用倪文正韻」		1										41		孫登・阮籍（倪文正倪元璐のこ と1593～1644、明の書家『倪文 貞集』がある）
228	126-1		「越佐新聞訛傳蝶夢太守休官太 守有詩乃次韻卻贈」（二首）						1						41	杭州、西湖	白傳（白居易）
229	126-2		同上						1						41	水郷	
230	127		「似蝶夢太守」					1							41	杭州	白傳（白居易）
231	128		「送蝶夢罷官歸東京 折一」					1				『新詩綜』八集明 治33・9			42		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
232	129		「過外城湖憶亡友田自笑」						1				羽田野自笑のこと、 明治22年5月38歳で亡 くなった。『新潟才 人詩』第一集に「入 吉客舎中秋」と題す る七言律詩がある		42		
233	130		「新年天颺詩屋小集次主人韻」						1				辛丑・明治34・1901 年		43		天颺（柏田）
234	131-1		「是夜松野洪洲携二律至次韻率 成」（二首）					1							43	蘇州	贈天颺
235	131-2		同上					1									贈洪洲
236	132		「招同天颺洪洲易水中洲桐陰天 池飲于松風亭次韻天颺見似」					1							43		易水（湯原『五峰餘影』一八八 頁）中洲（青木『五峰餘影』一 九三頁）桐陰（三浦）天池（富 山）
237	133		「青木中洲小青吟廬醜集次主人 韻」					1							43		
238	134		「酒旗 席上韻課」							1					43		
239	135		「巖谷一六至自東京邀飲南邊樓 用前年唱和韻」					1							43	旗亭韻事・覺夢揚州	
240	136		「一六遊佐渡賦此寄懷疊韻」					1		唱 竹 枝					43	旗亭酒	
241	137		「寄懷佐渡舊知再疊韻」					1							43		
242	138		「秋夜被酒偶然有作三疊韻」					1							43		
243	139		「一六歸自佐渡同人邀飲松風亭 一六詩先成乃次韻率賦時九月十 三夜也」					1							43		東坡老
244	140		「贈小野湖山詩翁」					1							43		先師

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、数え年）	地名	人名
245	141		「天麿詩屋招飲次主人韻 折一」						1						43		天麿
246	142		「冬晴出遊天麿詩屋韻課」		1										43		
247	143		「歳晚天真閣小集次主人韻 折一」						1						43		
248	144-1		「新年招同天麿洪洲中洲山陰易水諸子過飲松風亭用白樂天正月三日開行韵」（二首）					1					壬寅・明治35・1902年		44		
249	144-2		同上					1						年行四十又加四	44		
250	145-1		「寄岩溪裳川」（二首）						1						44		
251	145-2		同上						1						44		劉郎補竹枝
252	146		「小青吟廬席上次主人韻」						1						44	詩客揚州	
253	147		「梅莊夜月 小青吟廬韵課」		1										44		
254	148		「五月恭迎東宮駕賦此記盛事」					1							44	狹門	
255	149-1		「鳳趾閣詩 并引」（十二首）						1						44		野老
256	149-2		同上						1						44	八千八水	
257	149-3		同上						1						44		
258	149-4		同上						1						44		
259	149-5		同上						1						44		
260	149-6		同上						1						44		
261	149-7		同上						1						44		
262	149-8		同上						1						44		
263	149-9		同上						1						44		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢 (詩句)	年齢 (『五峰餘影』 に沿って、教え年)	地名	人名
264	149-10		同上						1						44		菅相公
265	149-11		同上						1						44		
266	149-12		同上						1						44		
267	150		「天真閣次主人韵」						1						44	隠士廬	
268	151		「冢日松風亭小集賦示同人 甲辰是日予生辰」					1					甲辰・明37・1904	今朝四十六春風	46		
269	152		「自嘲 并引」		1										46		元微之
270	153		「分韻得庚」						1						46	澤路・揚州	杜牧
271	154		「三月記事」					1							46	渤海・韓山	
272	155		「寄懷青木中洲在廣島次其留別韻」					1							46		
273	156		「寄懷須藤鮭川兼呈岡崎將軍」					1							46	滿洲	
274	157-1		「新居有盜舉室蕩然戲賦二絶」 (二首)						1						46		梁上君
275	157-2		同上						1						46		
276	158		「越日偷兒就捕衣物皆還唯無貨幣又得一絶」						1						46		
277	159-1		「東台三亘亭次大久保湘南韻」 (二首)		1										46		
278	159-2		同上		1										46		
279	160		「寄谷山大佐兼懷須藤鮭川」						1						46	遼東	李愬・昌黎
280	161	卷中 二四 才	「寄懷松田學鷗在滿洲軍」						1			『百花欄』二五集 明治38・1	明治38・1905年		47		
281	162		「遼陽」					1							47		
282	163		「奉天」					1							47		



通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
283	164		「鐵嶺途上書感」					1							47		韓彭
284	165		「大紗臺兵站司令部夜飲 在開原 即遼時黃龍府」						1						47	黃龍府	
285	166		「高歌」						1						47	長城	
286	167-1		「沙濤陳中作 第二師団司令 部」（四首）						1						47		王榮・陳琳
287	167-2		同上						1						47	海龍城	
288	167-3		同上						1						47	柳條	
289	167-4		同上						1						47		鄭公
290	168		「金家屯陳中謁黒木大將」					1							47		
291	169-1		「清河陳中即事 第十六聯隊本 部」（五首）						1						47		
292	169-2		同上						1						47		
293	169-3		同上						1						47		
294	169-4		同上						1						47		
295	169-5		同上						1						47		
296	170-1		「舟自大同門溯江上壯丹臺又謁 箕子陵」（四首）						1						47		
297	170-2		同上						1						47		
298	170-3		同上						1						47		
299	170-4		同上						1						47	箕子陵・雞林	
300	171		「悼沖禎介」		1								乙巳・明治38・1905 年		47		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
301	172		「訪鐵琴祕書病次韻見似」		1										47		
302	173-1		「訪三浦桐陰壁挂巖谷一六詩幅 次韻以贈」（二首）						1						47		
303	173-2		同上						1						47		
304	174-1		「畫竹」（二首）（竹）						1						47		
305	174-2		同上						1						47		
306	175		「卷石贈畫竹」			1									47		
307	176		「過丸田初齋居壁間有頼山陽詩 幅乃次韻」			1									47		
308	177		「富嶽圖」			1									47		
309	178-1		「雙龍園詩次小野湖山翁韻 并 引」（四首）		1										47	余雖廢詩久	杜工部・何水曹
310	178-2		同上		1										47		
311	178-3		同上		1										47		香山・小杜
312	178-4		同上		1										47		
313	179		「輕井澤讀檀樂集次遠近山莊唱 和韻寄呈江木冷灰吟壇」				1						丙午・明治39・1906 年		48		
314	180		「壽丸田櫻隱」	1											48		
315	181		「石腦油歌壽中野貫一翁古稀」				1								48		
316	182		「謝三浦桐陰贈印兼寄橘藏六」				1						丁未・明治40・1907 年		49		菱湖・鳩村・東坡・山谷
317	183-1		「新正志感」（二首）						1				戊申・明治41・1908 年		50		
318	183-2		同上						1					回頭四十九年非	50		達夫詩
319	184-1		「人日千秋庵次松雨韻」（二 首）						1						50		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
320	184-2		同上						1						50		森夫子逝二十載
321	185		「天真閣酒間次洪州韻贈桐陰」						1						50		王郎劍
322	186-1		「哭大久保湘南」（二首）						1				大久保湘南は明治41 年2月9日に亡くなっ た		50		
323	186-2		同上						1						50		
324	187		「發直江津」						1						50		曹植（詩注「苦寒行」と言及し ているが、実は「昇天行」）
325	188		「絲魚川途上風雪大作」					1							50		
326	189		「絲魚川寓樓即目」						1						50		
327	190		「藤卷松堂華甲」			1									50		
328	191-1		「上早川村」（二首）						1						50	燒山	
329	191-2		同上						1						50		大禹
330	192		「能生驛海樓即目」						1						50	銀山	
331	193		「自笑」						1						50		李杜・昌黎・香山
332	194		「自題小照二首 節一」								1				50		張儀
333	195	卷下 二	「墨竹」			1									50		
334	196		「耕傳寺贈川合吟風」						1						50		
335	197		「森茂林亭主人七十七」						1						50		
336	198-1		「入澤雲莊招飲席上賦贈」（二 首）			1									50		
337	198-2		同上			1									50		劉氏・韓公
338	199		「雞血石歌贈市島春城」					1							50	襄陽	松雪・長吉
339	200		「贈吉田震卿」					1							50	洛陽	劉伶・『山海經』・『太平寰宇 記』・鄭虔

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
340	201		「贈國棋田村保壽」						1						50		杜牧詩「送國棋王逢」「重送絶句」
341	202-1		「三浦桐陰片原坊新居以拙存二字爲韻」（二首）		1								己酉・明治42・1909年		51		杜陵
342	202-2		同上		1										51		
343	203		「題川合吟風七松居」					1							51		鄭處士
344	204-1		「松野洪洲天真閣小集以閣名爲韻」（二首）						1						51		白樂天
345	204-2		同上						1						51		
346	205-1		「長澤松雨千秋庵小集以庵名爲韻」（二首）						1						51		唐人
347	205-2		同上						1						51		唐人
348	206		「閒放樓席上贈洪洲」						1						51		
349	207-1		「竹山香山七十」（二首）						1						51		竹山香山『北越詩話』下卷補遺五九頁
350	207-2		同上						1						51		小蠻・香山
351	208		「題藤井致堂鹽溪詩記後 折一」						1						51		
352	209-1		「庚戌秋游魚沼諸郡途中雜詩 折三」（三首）						1				庚戌秋・明治43・1910年		52	古高麗	
353	209-2		同上						1						52		
354	209-3		同上						1						52		
355	210		「過古田島氏水亭 折一」						1						52		
356	211		「夢登富嶽」						1				丙辰・大正5・1916年		58		
357	212-1		「石塚松籟爲予治齒疾詩以謝之」（三首）						1						58		
358	212-2		同上						1						58		韓愈昌黎詩「落齒」

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
359	212-3		同上						1						58		羅振玉（1866～1940）
360	213		「過齋藤氏開水園賦似主人」				1								58	麟趾閣	
361	214		「榮園詩爲齋藤氏」	1											58		淵明
362	215		「榮園桐樹歌」				1								58		
363	216-1		「贈田邊碧堂」（五首）						1				己未・大正8・1919年		61		
364	216-2		同上						1						61		山陽
365	216-3		同上						1						61		太白山人（国分青崖の別号）
366	216-4		同上						1						61	阿賀溪山	
367	216-5		同上						1						61	舟江	髯師・新竹枝
368	217-1		「北越詩話成作五絶句」（五首）						1				大正7年11月『北越詩話』上巻出版、大正8年3月『北越詩話』下巻出版		61		鄭方坤『全閩詩話』
369	217-2		同上						1						61		五山詩僧雪村友梅『岷峨集』
370	217-3		同上						1						61		
371	217-4		同上						1						61		
372	217-5		同上						1						61		袁子才「借病」
373	218		「久須美雪堂古稀雙壽」				1								61		
374	219-1		「題歐洲大戰終始圖志賀剗川屬」（二首）				1								61		志賀剗川・重昂『槐南集』巻二〇33、志賀にかかわりがある詩がある
375	219-2		同上				1								61		
376	220-1		「富山保天樓戲作索二水外川二君和」（二首）						1						61		
377	220-2		同上						1						61		

通し 番号	詩番 号	頁数	タイトル	五 古	五 律	五 絶	七 古	七 律	七 絶	竹 枝	六 言 絶 句	初出	時間	年齢（詩句）	年齢（『五峰餘影』 に沿って、教え年）	地名	人名
378	221		「己未杪冬嫁女詣香山廟行禮」						1				己未杪冬		61	香山廟	
379	222		「納北越詩話於香山神庫腰以一絶」						1				三十年		61	劍峯	
380	223		「歳晩作」					1							61		
381	224		「庚申新年」					1					庚申・大正9・1920年		62		
382	225		「小金華石歌」				1								62	金華・東海・松島・嶗山	太白山人・謫仙・襄陽・李杜・青蓮
383	226		「五月十二日荅人」						1						62		
384	227		「送福田檢事赴任長野」		1										62	信陽	
385	228		「贈長井天然四首 折一」						1						62		米家書畫船
386	229		「送田邊碧堂游禹域」	1								『壯行集』大正10・9	辛酉・大正10・1921年		63	長城・岱宗・曲阜・岳陽・飛雲洞・雨花臺・	杜少陵・李青蓮・子昂・退之
387	230		「隠龕 并引」						1						63		七松處士・鄭薰
388	231		「謁先考墓」					1							63		
389	232		「水野香堂以古曆十月望紅葉館雅集詩徵和乃次原韻以贈 折一」						1				壬戌・大正11・1922年		64		玉局仙人・詩成
390	233-1		「題大隈侯一言一行録市島春城屬」（三首）						1				癸亥・大正12・1923年		65		
391	233-2		同上						1						65		
392	233-3		同上						1						65		朱晦翁・朱熹